

# 学園黙示録×瀕死のライオン

oden50

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

学園黙示録と麻生幾著『瀕死のライオン』のクロスです。

陸上自衛隊が有するポリテイカルオペレーションユニット『特殊作戦群』に所属する清田武三等陸曹は、ある少女を救出する為に殺人病の蔓延する藤美学園にへりで強襲降下した。しかし救出作戦は難航し、その最中で清田は孤立してしまう。だが、その最悪の状況下で、清田は己の使命を果たそうと孤軍奮闘する。

麻生幾先生以外にも、自分の好きな作家の作品からキャラクターが複数登場します。

また、自分の体験に基づいた内容も多分に含まれますので、ご了承下さい。

#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#
2	2	2	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
n	n	n	n	n	n	s	s	s	s	s	s	s	s	s	s	s	s
d	d	d	d	d	d	t	t	t	t	t	t	t	t	t	t	t	t
d	d	d	d	d	d	d	d	d	d	d	d	d	d	d	d	d	d
a	a	a	a	a	a	a	a	a	a	a	a	a	a	a	a	a	a
y	y	y	y	y	y	y	y	y	y	y	y	y	y	y	y	y	y
⑥	⑤	④	③	②	①	⑫	⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①
380	363	354	335	313	294	269	243	225	198	172	143	119	87	60	42	26	1

目次

## #1st day①

清田武(きよたたけし)三等陸曹は、長い足を胸の前で抱え、何とかして操縦席のすぐ後ろの機体両側面の窓に据え付けてある、それぞれのMINIMI軽機関銃に取り付いている二名の機上整備員の間収まろうとして懸命に縮こまっていた。

整備員達が窮屈そうに身動きする度に、清田はばつが悪かった。

清田の他には十名の隊員がUH-60JAの兵員室(キャビン)に乗り込んでおり、全員が重装備に身を包んでいた。

清田も例外ではなく、積層セラミックの装甲板を身体の前後に挿入した防弾ベストの上に、武器弾薬を可能な限り収納したタクティカルベストを着込んでいた。

ごてごてと大量の装備を身に付けているので、縮こまろうとしても、ただでさえ大柄な清田が閉める容積は大して変わらなかったが、他の全員も同様なので少しでもそうしないと狭いに兵員室には収まり切りそうになかった。

頭に被った空挺仕様の八八式鉄帽と自衛隊迷彩の防暑戦闘服を除けば、清田の格好は一般的な陸上自衛官からすれば考えられないようなものだった。

暗視装置を取り付ける為のアタッチメントが前額部に追加された鉄帽を被り、後頭部には赤外線ストロボライトがベルクローマジックテープのことで固定され、両側頭部にはIRライトとフラッシュライイトが取り付けてあった。

顔は十二番径のダブルオーバーバックまでなら完全に防弾可能な曇り止め防止のターボファン付きタクティカルゴーグルと、耐火繊維のフェイスマスクで隙間なく覆われ、その素顔は少しも窺い知れない。

プレート挿入式の防弾ベストの上に大量の武器弾薬と装備を収納したタクティカルベストを着込み、腰に巻いた弾帯にもマガジンポーチを兼ねる四個の大容量ポーチ、ダンブポーチ、二個のキャンティーンポーチ、バットパックを装着していた。

ズボンのBDUベルトからはUSPタクティカルを収納して

あるレッグホルスターと、数種類のポーチを装着したレッグパネルを吊り下げており、それぞれの大腿部にファスティックベルトで固定してある。

骨伝導ヘッドセットと咽喉マイクのコードは左脇腹のポケットに収納してある個人携帯無線機と繋がっている。

あまり必要となる機会はないかもしれないが、右脇腹のポーチにはガスマスクも携行していた。

肘から前腕、膝から脛は防弾素材の防具に覆われ、予備の装備や武器弾薬類を可能な限り詰め込んでパンパンに膨らんだデイパックを背負っていた。

これは清田がチームの中では一番体格が良く、強靱な足腰を備えているという理由によるものと、主にバックアップを担当しているからであった。

人並み以上の大柄なガタイでは前衛(ポイントマン)には向かない。閉所に突入する際、でかい図体が邪魔になる事があるからだ。

携行している火器も自衛隊正式採用の八九式小銃ではなく、H&K HK416にサウンドサプレッサー、グレネードランチャー、室内戦にも対応する為に上部にダットサイトを追加されたACOGサイト、レーザーサイト、フラッシュライトを装備した代物であり、弾倉は通常の三十連箱型弾倉ではなく、百発も装填可能なCマガと呼ばれるドラム型弾倉を装着していた。

小銃に装着したサプレッサーは銃声に慣れていない民間人をいたずらに驚かさない為だ。派手な銃声によって混乱した素人が何を仕出かすか予測がつかないという理由による。

穩便に済ませられるのであればそれに越したことはない。

右大腿部のレッグホルスターにはサイレンサーを装着可能なように銃口に捻子を切つてある、9mmパラベラム弾仕様のUSPタクティカルを収納してある。左大腿部には数種類のポーチを装着したレッグパネルをファスティックベルトで括り付けてある。

その他にはドアブリーチングと制圧火器としての目的を兼ねた、フラッシュライトを装着したケルテックCNC製の散弾銃、KSGも携

行っていた。

清田は一人で戦争をしに行くような格好で、まさに重武装（ヘヴィメタル）の復讐者、一人軍隊（ワンマンアーミー）のようだった。

彼の物々しい姿は今回の標準作戦手順（SOP）に則ったものだ。尤も、これほどの武装と装備ですら今起こっている緊急事態に対応出来るか如何かは清田には解らなかった。

手榴弾と弾薬を棘のように身に纏い、分厚い防弾ベストを着込み、灼熱の鉛弾を吐き出す銃火器を握り締め、任務に心臓を高鳴らせる士気の高い隊員が揃っていても、この事態は人の手に余るものがあった。

ドアが開け放たれた兵員室からは、機体の後方に早送り映像の様に高速で過ぎ去っていく床主市の街並みを眺める事が出来た。

穏やかな春の日だった。

陽は既に高く、柔らかな陽光が機内に射し込んでいた。装備を重ね着した隊員達にとっては汗ばむ程の陽気だが、臭いを除けば排気ガス混じりの吹き込む強い風が心地良い。

UH-60JAの幾らか後方を、大型輸送ヘリのCH-47JAが飛行していた。

清田は、これがよくある春の日の午後の訓練風景としか思えなかった。兵員室を見渡せば、そこにいるのは見慣れた同僚達がいる。

皆一様に重装備に身を固め、まるでロボットのようで誰一人として人間じみではない。

全員が程良く緊張し、程良くリラックスした最高の精神状態にある。それは既に一つの実任務を遂行させたからだろう。

長年、表舞台に出る事の無かった特殊作戦群が、その存在意義を証明できたという事実は大きい。

防弾繊維の皮膚に隠された五感研ぎ澄まされ、肉体と精神には充分に爆発的なエネルギーを溜め込み、自信に満ち溢れている。疲労は感じているが、コンディションは悪くない。全員がプロフェッショナルであるという矜持を備え、どのような状態の任務でもやり遂げる、という強い意志を宿した瞳がスモークレンズの下できらついている

だろう。

それは清田にとっては見慣れたものだった。

しかし、眼下に広がる市街地の様子を見れば、それが間違いである事に気がつく。街の至る所では黒煙が立ち上り、交通量の多い道路では事故を起こした車で溢れ返っている。

人々は逃げ惑い、戦慄し、暴動が起こり、打ち捨てられた死体が散見された。街のそこかしこが阿鼻叫喚の地獄絵図へと変わり果て、春風に乗って人々の悲鳴が聞こえてくるのではないかと思えた。

一体、日本は、いや、世界はどうなつてしまったんだ―不意にこれからの不安が胸中に芽生えたが、清田はすぐにそれを握り潰し、頭を任務へと切り替えた。

まずは目の前の事だけに集中するんだ。それから世界の行く末を案じればいい―尤も、自分一人が世界の今後を憂いた所で、この破滅的な出来事を如何にか出来る訳ではない。

考えるだけ、心配するだけ無駄だ。

左手首の内側に巻いた、カシオ製プロトレックに目を遣った。もうそろそろだろう。否応なく高まる緊張を緩めるように少しだけ大きく息を吸い、ゆっくりと時間を掛けて吐き出した。

「DOP（降下地点）を目視した。あと三分だ」

背後から不意に声を掛けられた。

班長の須崎輝美（すぎきてるみ）陸曹長だ。須崎は清田の更に後ろにおり、二つの操縦席のやや後方から首だけを前に突き出し、パイロットの操縦の邪魔をしないように、操縦席からの状況を観察していたのだ。

清田は指を三本立てて兵員室の隊員達に合図した。合図をしなくとも、全員が既に承知していた。

一斉に機内で小銃の槓桿が引かれ、遊底が弾倉上端の第一弾をくわえ込み、薬室へと送り込んで閉鎖される。精密な機構が奏でる小気味良い金属音が唱和した。

小銃は眠りから目覚め、安全装置を外せば何時でも撃てる状態だ。銃身下部に装着してある擲弾発射器、右脇腹にワンポイントスリング

で吊してある散弾銃、レッグホルスターの拳銃は既に薬室に弾薬が装填されており、安全装置を掛けてあった。

清田が前進に身につけている戦争機械がその時を待ち詫びていた。そして、彼自身もまた、一個の戦争機械として再び息つく瞬間を望んでいた。

また、あの瞬間が来る。あの瞬間が来るんだ―清田は最後の精神統一として目を閉じ、鼻から息をすつと吐き、そして再び目を開いた。

兵員室の開け放たれたドアから望めたのは、学校のただっ広いグラウンドだった。そこでは高校生と思しき生徒達が逃げ回っており、そして逃げ遅れた何人かは―清田は思わずその惨劇から目を逸らした。

数時間前に目の当たりにした光景だが、直ぐに慣れる訳ではない。精神衛生上、よろしくないものを見ずに済むのであればそれに越した事はない。

唐突に機体が右に傾いた。清田は機体の進行方向に背を向けて座っているの、正確には機体は左に傾いていた。そしてそのまま降下せず、左に緩やかに旋回して学校上空を飛行し、着陸地点(ランディングポイント)の選定に入った。

校舎の屋上には両端に出入り口の建物が大小二つあり、その間はかなり広い空間となっている。大型の双発ヘリコプターである、後続のCH-47JAでも何とか着陸可能だろう。

尤も、接触するほどの高さがないとはいえ、転落防止用のフェンスがローターの回転範囲内にあり、普通、接触の危険性があれば少しでもあればその時点で着陸するべきではないが、今はそのような悠長な事は言っていない。加えて、特定建築物に指定されている学校建築物は耐震性の面からかなり頑丈に設計されているものだが、流石に屋上に軍用ヘリコプターの着陸を想定している訳ではない。

十トンを優に越える機体そのまま着陸すれば、その重さに耐えきれずに屋上が崩落する可能性は充分にある。故に着陸は、屋上に完全に重量を掛けず、ローターを回転させたまま抜重した状態である必要があるだろう。無論、そうやって留まっているだけで燃料を大量に消費し、神経を擦り減らしながら機体を操るパイロットの負担は倍加す



る。

小さな建物はその上部構造にドーム状の屋根を持つ小さな施設が建てられており、階段で昇る事が出来るようだった。

ブリーフィングにあった通り、あれが天文台なのだろう。有名私立校らしく、施設は充実しているようだ。だが、その階段には今は長机のバリケードが設置されており、天文台への出入りは封鎖されている。

須崎もそのバリケードの存在には気付いている様子で、兵員室の左側の出入り口にいる隊員によく観察するように命じた。隊員はユーティリティポーチから小型双眼鏡を取り出し、封鎖された天文台に向けた。そして直ぐに三名の生存者の姿を発見し、須崎に報告した。

須崎はパイロットと何やらやり取りをし始めたが、頭上で連続出力一六六二馬力のT700-IH1-401Cエンジンが二基も唸りを上げていれば聞き耳を立てても聞く事は出来ない。

やがて骨伝導ヘッドセットを通じて全員に須崎の声が聞こえてきた。

「DOPに複数の脅威が確認された。それを排除しない限り、着陸は出来ない」

須崎は兵員室後部の左側にドアガンとして据え付けられている、ブローニングM2重機関銃の傍にいた隊員に目配せをした。

隊員は重機関銃の重い槓桿を一度引いて半装填、二度と引いて全装填し、金属弾帯（ベルトリンク）式の一二・七mm×九九徹甲炸裂焼夷弾を薬室に送り込んだ。小銃のそれとは比べものにならないほど重厚な金属がぶつかり合う。

「校舎の傍まで高度を下げ、ドアガンで屋上を掃射し、脅威を排除した後に着陸する」

須崎がパイロットに高度を下げるように指示すると、UH-60JAのローターが軋むような音を立てて高度が緩やかに下がり始めた。緩やかとはいえ、それはエレベーターよりもずっと早く乱暴に降下したので、清田は臓腑が落ち込むような感覚を味わった。

やがて機体は機体は左側面を校舎に晒して横付けするようにして

ホヴアリング飛行に移った。

兵員室からは屋上を若干見下ろす形となっていた。そこで漸く、清田は屋上で徘徊する脅威の姿を仔細に見て取れた。

既に数時間前に床主空港で目の当たりにしていたが、その惨たらしい異形の姿に思わず息を呑み、瞳孔が広がるのを感じた。

彼らはこの学校の生徒だった。彼らの誰もが、身体の何処かを大型の肉食獣に喰い千切られたかのように酷い重賞を負っていた。中には破れた腹腔から内臓が零れ落ちている生徒もいたが、まるで気にした様子もなく、虚ろな表情のまま臓物を引きずり歩き、地面に血糊をべったりと付着させていた。

点々と落ちている赤黒い肉片は、恐らくその生徒の落とし物だろう。かつては自分の生命を駆動させた重要な部品だが、今となっては必要ないので全く気にしている様子はなかった。

彼らは人間ではなかった。それどころか既に死亡している。しかし、現実には彼らは歩き回っていた。生命の永久不変の真理を超越して、死者が動き、更に彼らは死んでいてそうする必要が皆無であるというのに、生者の血肉を求めて彷徨していた。

清田には性質の悪い冗談としか思えなかったが、これが紛れもない現実なのだ。世界は、今日という日を境に全く別のおぞましい何かへと変貌を遂げていたのだ。

だが、世の中を人喰いゾンビが闊歩しようとも自分達のやる事に変わりはない。それだけは間違いなく確信に足り得る事実だ——清田を含めたこの場にいる全員がそう心得ていた。

だからこそ、恐慌をきたすことなく、冷静に己の職務を果たそうと全力を尽くせた。やるべき事を心得ていれば、訓練と同じよう出来る。たとえ家族や友人の事が気掛かりでも、自分達は自衛官であるという自覚を忘れる事はない。

「よし…制圧しろ」

須崎が射撃命令を下した。

重機関銃を操作する隊員は、既に安全装置を切り、手近な生徒に照準を合わせていた。

その命令と同時に、隊員はM2重機関銃のバタフライトリガーを両手の親指で押し込んだ。直後、曇針の如く太く頑丈な撃針が、薬室に収まる重機関銃弾の雷管を叩いた。

間近で聞けば砲声と何ら遜色のない、腹の奥底を震わせる鈍い響きと共に、重い銃声が咆哮した。その発砲音は削岩機のように重く、ずしりとくるものだった。

音速の約四倍という初速で撃ち出された大口徑重機関銃弾は、文字通り人体を真っ二つに引き裂き、そして瞬時に炸裂した。

脆弱な有機質の塊を粉碎するには途方もない運動エネルギーだけで充分すぎたが、弾頭に僅かながら充填された炸薬が更に拍車を掛けられる。ホヴァリング射撃については、三十発撃つて三発当たれば充分とされるが、たつた一発でも殺し過ぎ（オーバーキル）な威力の徹甲焼夷榴弾が数発、“元生徒”を一瞬で原型を留めぬほど破壊し尽くした。

清田は“元生徒”の肉体が挽き肉と血飛沫に変わる一部始終を見て、絶対にこの猛獣のような重機関銃に、対装甲用の銃弾を撃たれたくはないと思った。

次々と短連射を放つと、反動で銃身が小刻みに前後退し、マジックペンほどもある巨大な空薬莖が幾つもの硝煙を燻らせながら兵員室の床に転がった。排莖孔から焼け付いた薬莖が弾き出される度に、屋上に挽き肉と血飛沫が、コンクリートを砕きながら飛散する。

絶対的な破壊に彼らは無頓着で――そもそも既に死んでいるので自身の肉体が滅茶苦茶に破壊されるのに関心がないのかもしれない――、むしろエンジンとローターが撒き散らす爆音に引き寄せられるようにして屋上の縁に近付いてくるので、操作の難しいM2重機関銃でも簡単に命中弾を送り込む事が出来た。

あつという間に屋上の脅威は全て排除され、代わりに目に見えない巨大なミキサ―で粉碎されたかのような肉塊がそこいらに散らばっているだけだ。肉片の焦げ付いた臭いに思わず清田の胃が窄まった。

須崎がパイロットに脅威が完全に排除された事を伝えると、機体はそのままホヴァリングしながら横滑りし、やがて屋上へと着陸しよう

とする。

ファストロープによる懸垂降下は実施しなかった。その方法による展開は確かに迅速だが、機外に垂らしたロープを切り離すか引つ張り込む必要がある為、どうしても機体の離脱に多少の時間が掛かってしまう。また、ロープを切り離した場合、後続のCH-47JAが屋上に着陸する際にそれが邪魔となる可能性があり、無用な事故を引き起こすかもしれない。また、ファストロープを使い捨てるには勿体無い器材であり、この状況下ではいつ補給されるかも分からないし、切り捨てたロープを回収する暇があるとも限らない。

それら諸々の理由を鑑みて、清田達は機体が屋上から一メートル程の高さで静止すると次々と飛び降りた。その方法が最も簡便なものだった。

最後に班長の須崎が機内に誰も忘れ物をしていないのを確認してから飛び降りた。UH-60JAは屋上に完全に着陸する事なく、隊員達を降ろすと直ぐに甲高い唸り声を上げて急上昇し、上空を旋回し始めた。

屋上に降り立った隊員達は直ぐに放射状に展開し、全周を警戒した。清田は屋上にある二つの出入り口のうち、上部構造にドーム状の屋根のある建物の方に展開し、片膝を着いて周囲に目を走らせた。

まだ作戦は始まったばかりだが、清田は不思議とすつかり落ち着いている自分に少し驚いていた。数時間前とはいえ、既に実戦を経験しているからだろうか。

だからだろうか。目の前に転がる、胸から上だけになっても動き続ける「元生徒」の肉塊に心が碎ける事はなかった。その肉塊は、虚ろな目で清田を見つめ、口をパクパクとさせていた。声を絞り出そうとしても、横隔膜と呼吸器系の全てがズタズタに引き裂かれ、身体の裂け目からは肉の切れ端がビラビラとはみ出していた。

血と糞尿、人間の体内に詰まっているあらゆる有機質が混ざり合った臭いに、思わず熱い塊が食道までせり上がってきたがなんとか堪え、飲み干した。胃液の苦さと食道の焼けるような感覚と、これから先、何度も吐き気を堪えなければ場面遭遇するのかなと思うと気が滅

入った。

「当初の予定通り、清田、浜本の両名はDOPの確保及びヘリの誘導。残りは二個強襲班に別れて対象の捜索を行う」

全員が素早く、且つ統制された動きで行動した。清田は吐き気を堪えながら、マンパック型の携帯無線機を背負った通信担当の浜本勝昭（はまもとかつあき）二等陸曹と共に屋上に残り、その他の隊員は須崎に率いられて四名編成の二個班に別れ、屋上の二つの出入り口からそれぞれ屋内に突入した。

「清田、お前は天文台の生存者の様子を調べてこい。俺はヘリの誘導をする」

浜本は清田に指示を下すと、背負った携帯無線機に繋がったインターコムに向かって上空で待機するCH-47JAのパイロットと連絡を取り始めた。

「了解」

清田は片膝から立ち上がるとローレデイの銃姿勢で天文台へと駆け寄り、階段を一気に駆け上がった。動く度に胃が悶え、胃液臭いげっぷが出そうになった。だから清田は、終始歯を食い縛らなければならなかった。

バリケードの長机の表面は、血が付着し、引つ掻き傷も刻まれている。ヘリで上空を旋回中、人喰い死体と化した生徒達が立て籠もる生存者の血肉にありつこうと群がっていたのは清田も確認していた。

清田は小銃を水平に据銃し、しっかりと銃床（ショルダーストック）を肩付けしてダットサイトを通して照準し、バリケードの隙間から覗か中の様子を窺ったが、生存者達の姿は見えない。直ぐに右に折れた通路の先、天文台の陰にいるのだろう。

だが、何やら言い争う声は聞こえた。それは切迫した声音であり、生存者達が急を要する事態にある事は察せられた。

「自衛隊です！ 救助に来ました！ 今すぐバリケードを退かして下さいー」

そう怒鳴ったが、彼らは清田に構わず、言い争いを止める気配はない。強硬手段を取らざるを得ない、と清田は逡巡する事なく決断し

た。

「こちらからバリケードを破ります」

清田はそう警告を発してから、渾身の力を込めて長机に前蹴りを放った。この程度の障害を破るのに、右脇腹に吊り下げている散弾銃を使う必要はなかった。

体格に恵まれた隊員の多い特殊作戦群の中でも特に大柄な清田が放つ、頑丈なタクティカルブーツの一撃は、脆い合板の机板に大穴を穿ち、アルミ材の骨組を何本もへし折った。しかし一撃では壊れず、何度か蹴り、最終的には強烈な体当たりをぶちかました。それでもバリケードの粉碎には至らなかった。

注意深く観察すると、長机の足と手摺りがセロテープでがっちり固定されていた。清田は刀身が分厚く長い、ストライダーナイフをレッグパネルに固定されている鞘から抜き、テープを切ると再度体当たりをしてバリケードを吹っ飛ばした。

派手な音と共にバリケードとなっていた机や椅子が吹っ飛び、清田は天文台へと足を踏み入れ、油断なく小銃を構えたまま通路を右に曲がり、生存者達の言い争いの場に踏み込んだ。

男子生徒が一名、血の気の失せた顔で力無く手足を投げ出して仰向けになって横たわっていた。顔を横に向け、顔面の穴という穴から血が流れ出ており、それが顔の傍でどす黒い血溜まりを作っていた。

既に手遅れだ―男子生徒の様子を一目見るなり、清田はそう判断した。

その特有の症状から、彼は発見するよりも前に感染者に噛まれており、屋上に降下する間に死亡したとみて間違いないだろう。程なくして彼は生者の血肉を求めて彷徨う亡者となって蘇る。今すぐにでも処置しなければならぬ。

他には、手に金属バットを持った男子生徒と、彼に縋り付きながら何事かを必死に訴える女子生徒がいた。

最初に清田の存在に気付いたのは男子生徒だった。顔を上げ、清田の姿を認めると少し戸惑ったような表情を浮かべていた。

自衛隊が救助に来て、安堵しているという訳では無さそうだ。少し

遅れて、女子生徒も振り返り、清田の存在を認識した。

「自衛隊です！ 救助にきました！ 直ぐにその彼から離れなさい！」

清田は声を張り上げて警告し、既に死亡している男子生徒の頭部に狙いを定め、引き金に指を掛けていた。

ぐっと指に力を込める際、清田の脳裏には、数時間前に経験した光景がフラッシュバックしていた。

初めて撃った感染者はもつと年嵩の中年男性だった。それに比べると、ホロサイトの中心に捉えている生徒の、まだあどけなさの残る顔に少なからず衝撃はあった。

しかし、撃たなければならぬのだ。個人的な感情など今は足手纏い以外の何物でもない。

「だめえっ！ そんな事しちや駄目っ！」

引き金を引き切ろうとした瞬間、何を思ったのか、突然、女子生徒が身を翻して清田に駆け寄り、死亡した男子生徒との間に立ち塞がって射線を遮りつつ、発砲させまいと彼に飛びついてきた。

余りにも突拍子のないその行動に、流石の清田も即座に反応出来なかった。

「ならないわ！ 永はへ奴ら〜なんかにならない！ だからやめてえええええ!!」

小銃に縋り付き、女子生徒は金切り声でそう訴えた。

恐らく、死亡した男子生徒とは仲が良かったのだろう。それ故に、彼女は銃口の前に立ちはだかり、暴発の危険も辞さない覚悟で小銃に抱きつくという狂行に及んだのだ。清田は暴発させないように咄嗟に親指で安全装置を掛けるので精一杯だった。

「君！ 離れなさい！ 危ないから今すぐ離れるんだ！」

清田は何とかして女子生徒を引き剥がそうとするが、その細い身体の何処にあるのか、彼女は恐ろしいほどの力で小銃に必死にしがみついていた。いやいやと頭（かぶり）を振り、泣きながら清田に抵抗していた。

一般の想像と違い、こういった事態が生起すれば特殊部隊員は優し

く抱きしめるなどという事はしない。銃器に組み付かれる前に突き放せと教えられており、清田もそう教わっていたが、これが男であるならば遠慮なく殴り飛ばしている所だが、相手は清田よりもずっと小柄な女の子である。

身長差は三〇cm程もあるだろうか。

清田が本気で突き飛ばしたり殴り飛ばしたりすれば怪我は免れないし、か弱い女性に暴力を振るう意思はなかった。

それを今は後悔していた。

「麗！ 止めろ！ 止めるんだ！」

金属バットを手にしていた男子生徒が駆け寄り、麗と呼んだ女子生徒を背後から羽交い締めにし、清田の手助けをする。男二人掛かりでもなかなか引き剥がせず、彼女は滅茶苦茶に手足を振り回して抵抗した。

途中、清田は何度も脛を爪先で思い切り蹴られたが、脚に装着している防弾レガースのお陰で痛みはなかった。

しかし多勢に無勢であり、臂力と体格で劣る男二人には勝てず、やがて女子生徒―麗―は引き剥がされ、男子生徒に羽交い締めにされたまま隅に強引に引っ張られていった。

男子生徒は清田と目を合わせ、頷いた。清田は無言で頷き返し、小銃に異常がない事を確かめてから据銃し、男子生徒の死体に狙いを定めた。

それとほぼ同時に、今までぴくりとも動かなかった男子生徒の死体が、油の切れた機械のようなぎこちなさで、むくりと起き上がった。

蘇生したのではない。男子生徒は依然として死んだままだ。完全に血の気の失せた顔は青白く、白目を剥いた目はあらゆる方向を見ている。だらんと垂れ下がった腕を力無く持ち上げ、夢遊病者の如く覚束ない足取りで歩む。だらしなく開かれた口からは血と唾液の混じった液体を垂れ流し、喉からは呻き声ともつかぬ異音を発していた。

ACOGサイトの照準十字線（レティクル）の中心に、男子生徒の顔を真正面から捉える。サイトの中心で交差した十字線は、男子生徒の唇と鼻の間に重なった。



そこを撃てば、回転する弾丸が貫通する際に肉と神経を巻き込んでいき、頭蓋骨内に空洞が生じる。脳は堅牢な頭蓋骨に保護されているが、目の下の奥に突如空洞が出現すると、脳幹や運動中枢がそこへ落ち込んで破壊され、一瞬にして無力化できる。

尤も、音速を遙かに超える小銃弾を頭部に撃ち込まれれば、密閉された頭蓋骨で空洞現象が生じ、瞬時に生じた強大な圧力を解放するには「爆裂」するより他に方法はない。つまり頭の何処を撃とうとも即死や重傷は確実だ。

男子生徒の白目を剥いた目からは血が流れていた。清田にはそれが、おぞましい己の死後の姿に涙を流しているようにも見えた。

唯一自分でできるのは、これ以上彼の肉体を物理的に破壊し、その死を冒読させない事だけだった。

清田は引き金を優しく、朝霜が降りるが如く柔らかく引いた。引き金を引く力を誤れば、その瞬間に照準が狂い、標的を撃ち漏らす可能性がある。だから、清田は引き金を優しく引くように心掛けていた。

耳を聳する派手な銃声はサウンドサプレッサーによつて聞こえなかった。代わりに、僅かに空気が漏れ出る音と遊底の作動音がしただけだ。

そして音速を超える小銃弾で男子生徒の頭部の爆ぜる様子がサイトを通して鮮明に、まるでスローモーション映像のように見て取れた。

それはほんの一瞬の出来事だった。

だから、隅にいた二人は顔を背ける事も出来ず、親しい人物の頭が爆裂する瞬間を目の当たりにしてしまった。

二人とも何が起こったのか理解出来ないでいたが、グズグズに崩れた頭の残骸を乗せただけの男子生徒の身体が、やがて糸の切れた操り人形のように頹れ、重く湿った音と共にコンクリートに叩き付けられてから初めて、彼らの時間は動き出した。

「いやあああああっ!!」

麗が、魂が引き裂かれたかのような、悲痛な叫び声を上げた。

男子生徒はもう彼女を羽交い締めにしていなかった。彼もまた、目

の前の衝撃的な出来事に茫然としていたのだ。恐らく、映画やドラマのように、人間の頭は撃たれても綺麗に原型を留めるものとはばかり思っていたのだろう。

清田は銃口から硝煙を燻らせる小銃をゆっくりと下ろし、足元に転がる、少しの顔の皮膚と下顎を残しただけの男子生徒の死体を眺めた。血と肉と骨と脳漿と、幾らかの歯が散らばっている。

殺したのではない。清田はあくまでも「動く死体」を撃つたに過ぎない。数時間前に同様の事を経験しているとはいえ、いい気分がするものではない。そして、人間の遺体を損壊してしまった事に罪悪感を抱いていた。

だからだろう。男子生徒の拘束を解かれた麗が、恐ろしい形相で殴り掛かってきたのに対して全く反応できなかった。

「なんで、なんで!! 止めてって言ったのに!!! どうして撃つたの!?!」

何度も何度も、麗は握り締めた拳を振りかぶって清田の胸に叩き付けた。麗の殴打は全く清田に痛みを与えなかった。

装備を詰め込んだタクティカルベストと、防弾ベストの分厚い装甲板が彼女の小さな拳の全てを受け止めていた。

清田は暫く、されるがままでいた。麗は涙を流しながら彼を罵り、拳に血が滲んでも殴打を止めなかった。

「私は……私は助けてなんか欲しくなかった!! 永のこんな姿なんて見たくなかった!! こんな風にして生き残るぐらいなら私も永に噛まれて、私もへ奴ら〜になりたかったのに!!!」

いつの間にか、麗の背後に男子生徒が立っていた。

「止めるんだ、麗」

男子生徒は振りかぶられた麗の細腕を掴んだ。そうして漸く、彼女は清田に拳を叩き付けるのを止め、嗚咽を漏らしながら肩で荒い息をついた。しかし、涙に濡れたその瞳は依然として清田を厳しく睨み付けていた。

「この人が撃たなければ麗が喰われていた……それに、奴がそれを望んだとは思えない」

そう諭すように男子生徒は静かに言い、彼女の肩に手を置いた。

「孝に…孝に何が分かるっていうの？」

しかし、麗は肩に置かれたその手を乱暴に振り払い、静かに、だが、強い怒りを含めた声で言い、やがて再び感情を爆発させた。清田の次に、今度は彼を睨みつけるその瞳には憎悪の炎が燃えていた。

まるでこうなった原因の全ては彼の所為とでも言うかのように。

今の麗は、悲しみで何ら分別のつかない状態にあった。

「そうだわ、そうだったのね！ 孝は、本当は永の事を嫌っていたのね！！」

そして、全てを見透かしたと勘違いし、一人で勝手に納得し、侮蔑を表わにした表情で言った。

「私と付き合っていたから!!」

直後、乾いた音が響いた。男子生徒―孝が、振りかぶった手で麗の頬を平手打ちしたのだ。

麗は、打たれて赤くなつた頬を押さえ、暫し茫然と立ち尽くしていた。

そして見た。

孝は無言で涙を流していた。

双眸から止め処なく溢れる涙を拭う事なく、流れるままに任せ、唇を強く噛みしめている。

彼もまた、二人にとつて掛け替えのない人を目の前で亡くし、その如何する事も出来ない深い悲しみとやり場のない怒りを、誰に向けるでもなく、ただひたすらに堪えていたのだ。

麗はそうして初めて気付いた。周囲を顧みずに当たり散らした自分の身勝手さと、目の前で親友を失ったばかりの孝に浴びせた心ない言葉がどれだけ残酷な仕打ちだったのかを。

「ああ…私、なんて…ごめんなさい、ごめんなさい……」

か細い肩を震わせ、涙と嗚咽混じりで、自分が犯した過ちの重大さと残酷さに対して、麗は謝る事しか出来なかった。

孝は、何も言わず、震える彼女の肩に腕を回し、無言で強く抱きし

めた。

暫くそうやってなされるがままだったが、やがて麗もそれに応え、彼の腰に腕を回して抱き締め返した。

少年と少女は、そうしてお互いの体温を共有する事で、慰め合うしかなかった。でなければ、余りにも残酷過ぎる現実二人は忽ちの内に打ちのめされ、もう二度と立ち上がる事が出来ないだろうから。

生き残ったからには彼らは死んだ者達の間も生きなければならぬ。それは苛酷な運命だが、今はその現実を暫し忘れる必要があった。

清田は声を掛けようと思ったが、思い止まり、やがて背を向けて天文台を後にした。

彼らはまだ子供なのだ。

肉体は大人と遜色ないかもしれないが、精神までもが成熟しきっている訳ではない。あれこれと部外者の、それも仕方がなかったとはいえ彼らの目の前で清田は親しい人の頭を清田は吹っ飛ばしたのだ。何も言わずにそつとしておいた方がいいだろうし、彼らもそう望んでいるだろう。

階段を下りた所で、頭上から爆音が降り注いできた。見上げれば、CH-47JAのずんぐりとした巨体が陽光を遮って降下している真つ最中だった。

やがてエンジンとローターの轟音が一際大きくなり、吹き降ろし(ダウンウォッシュ)の風が強まった。ほぼ開かれた状態の、機体後部の斜路扉(ランプドア)に腹這いになって、着陸する屋上の様子をパイロットに伝えている機上輸送員(ロードマスター)の姿が見えた。

機体は、浜本の誘導と、よく訓練された乗員一同の高い技量により、その巨体からすれば充分とはいえない広さの屋上に、何事もなく着陸する事が出来た。

直ぐに斜路扉が完全に開かれ、特殊作戦群の衛生担当を務める正岡智於(まさおかともひろ)二等陸曹と村田秀久(むらたひでひさ)二等陸曹が降りてきた。衛生担当とはいえ彼らは他の者と変わらぬ重装備を身に付け、スリングベルトで身体の前にカスタムメイドのHK

416をぶら下げていた。

正岡は足早に清田の方へ駆け寄り、彼の耳の真横で怒鳴った。そうしなければエンジンとローターを稼働させたままの機体の傍では会話が成り立たないからだ。

「生存者は!?!」

「生存者は二名! うち一名は既に死亡していたので処置しました!」

清田も負けじと声を張り上げた。

「噛まれているのか!?!」

「自分が確認した限りでは見当たりませんでした!」

「何処にいる!?!」

「天文台に! しかし二名とも心的ショック状態にあります!!」

「解った!」

正岡は、背中に大量の医療器材を詰め込んだメデイカルバッグを背負ったまま、天文台の方に駆けていった。経験豊富な正岡に任せれば何も問題は無いだろう。

「清田! 配置につけ!  $\alpha$ 1(強襲第一班)がお前の方の出入り口から生存者を連れて来る!」

一息つく隙もなく、浜本が傍にやって来て耳元で怒鳴った。

「誰が来るんです!?!」

「イシさんが女の子を二人連れて来る! 感染の有無は既に確認されている! いけ!」

浜本は清田にそう伝えると、機上輸送係のところに行つて同様の事を伝えた。

機上輸送員の一人がCH-47JAの機体左側の窓にドアガンとして据え付けられている74式車載機関銃に取り付いた。清田は、いざとなったら強力な弾幕で援護してくれるドアガンの射線に入らないようにして屋上への出入り口を狙い易い場所に移動し、防弾レガースに覆われている右膝を地面につけ、右足の上に尻を置き、立てた左膝の上に左肘を載せ、左手で擲弾発射筒を装着した小銃を支え、

握把を右手の親指と人差し指以外の指で握り締め、肩に引き付けるようにして固定した。この体勢ならば何時間でも照準をつけられる。

『タケ、タケ。こちらロック。もう出入り口に到着する。撃つなよ！』  
骨伝導ヘッドセットから白石鉄男（しらいしてつお）二等陸曹の声が直接、頭蓋骨内に響いた。

個人のコールサインは二音か三音と決められ、殆どの隊員は自分の姓名の一部を取っていた。但し、聞き取り易い事と、通信に使われる符丁やアルファベットや数字などと紛らわしくない事が優先される。清田は名前である武のタケ、白石は苗字の石を英訳のロックで呼んでいた。

『こちらタケ。了』

清田がそう応えてから暫くすると、清田並みかそれ以上に立派な体格を持つ白石が、二人の女子生徒を先導するようにして出入り口に現れた。二人とも顔面蒼白で、お互いの肩を抱いてガタガタと酷く震えている。

歩くのもやつとといった状態で、つい先程まで想像を絶する惨劇の渦中にいた事は容易に察せられた。屋上に到着すると二人は腰から碎けるようにしてその場に座り込んでしまった。白石は直ぐに二人の異変に気付き、引き返して抱き起こそうとしたが流石に一人では無理だった。

「清田！ 手伝ってくれ！」

白石が言うよりも早く清田は駆け出していた。そこで漸く、清田は装備と武器と弾薬を身に帯びているのに速く走れる事に気が付き、驚いた。

様々なオプシオンを装着したHK416は嵩張るし、ただでさえ普段よりも重装備なのだ。完全武装と装備を身に付けると、幾ら鍛え込んでいるとはいえ重力が倍になったように感じる。だが、女子生徒に駆け寄った時、両足がほんの少し痺れた程度で、後は何とも無かったので清田はおやつと思った。興奮と恐怖で脳内麻薬が過剰分泌されているせいだろうと思い、今の自分を超然とした気持ちで受け止める事にした。

未だに腰を抜かしている女子生徒に駆け寄ると、清田を見て明らかに困惑と恐怖の表情を浮かべていた。小柄な彼女達からすれば清田と白石は恐ろしいほどの巨漢で、しかも重装備を身に付けているので殊更に大きく見える。

鉄帽とスモークレンズのタクティカルゴーグル、フェイスマスクで表情は一切窺えず、まるでロボットのようで欠片も人間らしきがないのだ。そんな厳つい野郎どもに囲まれて平静でいられる女子高生は、日本の何処を探してもいないだろう。

しかし清田はいちいちそのような反応に取り合う事もなく、片手で女子生徒を軽々と抱き抱えると白石と共に機体の後部へ走った。普段から重量物に慣れ親しんでいる彼からすれば、小柄な女の子など子猫とさほど変わらないぐらいに軽く感じられた。

後部の斜路扉から機内に入ると、既に先程救出した孝と麗が乗り込んでおり、正岡が二人の面倒を見ていた。一瞬、清田は孝と目が合い、気まずい思いをしたが、直ぐに抱えていた女子生徒を降ろすと自分のやるべき仕事に戻った。

恐らく、この先何度もそういった事態に直面する事があるだろう。今のうちから慣れておくべきだ。慣れれば、何事も上手くいくよう出来る事は様々な訓練で嫌という程学んでいる。

「イシさん！」

清田は機体の外に出ると白石に声を掛けた。

「中の状況はどうなんですか?!」

「酷いもんだ！　そこら中が動く死体と肉片と血溜まりで足の踏み場も無い：本当にクソな事態だ!!」

タフで狂った野郎どもの中でも、一際タフでイカれている白石が疲労を滲ませた声で言った。彼も相当堪えている様子だ。

「見てみる！　靴底にこんなのが挟まっていやがった！」

白石は足を上げて靴底に挟まっていた物を清田に見せた。

それは紛れもなく、人間の指だった。大きさと形からして小指だろう。白魚のようなその小指の爪は綺麗に整えられ、可愛いネイルアートが施されているので女子生徒のものと知れた。

「何かしら人間の部品を踏むといった有様だ！ 安っぽいスプラッター映画じゃねえんだぞ畜生が!!!」

忌ま忌ましそうに吐き捨てる、白石は挟まっていた小指を剥がして投げ捨てた。

「こんな有様で〈目標〉が生きているとは思えないぜ！ 一体今回の任務は何の目的があるんだ!？」

任務に不平を零すとは、普段の白石らしくはなかった。

事の始まりが何であるのかは知らない。いや、知る必要がないというべきでもあるし、清田はそんな事に興味は無かった。重要なのは、求められた時に、求められる能力(ポテンシャル)を最大限に発揮し、課せられた任務を完璧にこなす事だけだ。そして今はその求められた時がほんの数時間前に発生し、今に至ったに過ぎない。

全国的に発生した殺人病の蔓延による混乱を收拾する為に、自衛隊は内閣総理大臣の出勤要請が下されるよりも前に超法規的措置により行動を開始していた。特にその中でも真っ先に行動したのが、清田が所属する自衛隊創隊以来、史上初となる特殊作戦部隊である、特殊作戦群(SFGP)だった。

唯一、自衛隊内で卓越したミリタリーの知識と技能を使う事の出来る政治的作戦部隊《ポリティカルオペレーションユニット》である特殊作戦群は、単に戦術的に事態に対処するのではなく、政治の求めに応じて「情勢」に対応する柔軟な運用思想によって設立された戦略部隊である。

初動対処として国内の特に重要な拠点―港湾施設、発電所、上下水道等の近代都市の生活基盤を支えるのに必要不可欠なインフラ―の確保の任務を予め与えられており、部隊は迅速に展開しこの任務を遂行し、確保した拠点の維持を一般部隊に任せて次の拠点に向かうという事を繰り返していた。

それは此処、床主市でも同様の任務が行われていた。床主市の電力の大半が、市より北の山中にある奥名湖の水力発電所で作られており、また、その電力は首都圏へと送電されている。この水力発電所が機能しなくなれば、首都圏のライフラインが受けるダメージは馬鹿に



ならない。

その施設の維持の為に特殊作戦群の一部が投入されていたが、清田が所属する班は別の任務を与えられていた。それは特殊作戦部隊にとっては当たり前と言っても過言ではない、人質救出作戦だった。尤も、こんな全世界的な非常事態に於いて人質を取って立て籠もる暢気なテロリストがいる筈もなく、仮にいたとしても警察や自衛隊は蔓延する殺人病の感染者とそれらから逃げ惑う市民或いは暴徒の対処で忙しいので、無視されるのがオチだろう。人質救出というよりも、殺人病感染者という暴徒の中から対象を助け出さなければいけないので、人命救助というべきだろうか。しかも特定の人物を怪物で溢れ返った街から救助しなければいけないので、困難な任務である事は容易に想像出来たが、そういった無理難題とも思える任務を遂行するのが特殊作戦群である。

何故なら、政治からのオーダーによって出動する事を望む特殊作戦群には、常に様々なコンディションが与えられるからだ。例えば、海外で人質となった邦人を敵を殺さずに救出せよ、国際紛争に於いて軍事力を一切行使せずに政治的混乱を引き起こす事によって解決せよ、国内に潜む重武装した秘密工作員を発見し隠密裏に制圧せよ、第三国のミサイル計画そのものを根底から排除せよ―いずれも外交、警察の能力を超え、しかも自衛隊の一般部隊の出動は政治的に不可能だが、それでも解決しなければいけない―等といったように、命じられるコンディションとその任務は複雑怪奇である。そして特殊作戦群はその困難なミッションを完遂する能力を求められており、実際にその能力を備えている。

清田はズボンのポケットから一枚の写真を取り出した。写っているのは一人の少女だった。整った顔立ちは美少女といっても過言ではなく、長い髪をツインテールにしている。洒落たデザインの眼鏡のレンズ越しの瞳に宿る意思は気が強そうで、ツンと澄ました様子が似合っていた。

写真を見なくても清田は、ファルコン・ビューと呼ばれる特殊作戦部隊として必要な技能によって写真の少女を記憶に完全に刻み込ん

でいたが、特殊作戦群の群長である剣崎巖（けんぎきいわお）一等陸佐が念の為に持って行けと言うので清田は黙って写真をポケットに滑り込ませた。

今思えば、作戦室でのブリーフィング時の剣崎の様子は何時もと違うように思えた。殆ど迷彩ズボンの上に質素な速乾性生地の特シャツ―しかも数人の厳つい野郎どもの集合写真がプリントされた信じ難いデザインの―という格好の剣崎は、年齢よりも若く見え、広い肩幅、発達した上腕、適度に刈り込んだ短い髪、そして全てを見透かすような瞳の持ち主であり、常に表情を変える事もなく、恐ろしいまでに静かな男だ。

米陸軍『JFK・スペシャルフォースセンター&スクール（特殊作戦部隊養成学校）』で長期間に及ぶ厳しい訓練を積み、韓国、オーストラリア、ドイツ、イギリスの特殊作戦部隊（SOF）に於いて特殊作戦戦術の深淵をどっぷりと体験し、トップレベルの特殊作戦のイメージまでも全て頭に叩き込んでいるという“狂った”男でもある。その、いつ何時も動じぬ狂った鋼の男である剣崎は、全世界的な異常事態に対しても冷静に淡々と行動し、初動対処行動を命令していた。その剣崎がプロジェクターからスクリーンに映し出された少女を前にして、その鉄面皮が少しばかり焦っているように見えたのは決して気のせいではなかった筈だ。

―この少女は床主市の藤美学園に通う高校生だ。

名前は高城沙耶。年齢は十六歳。

お前らに与える任務はこの少女の救出だ。

ミリタリーの使用？ 存分に使いえ。

任務の完遂に必要と思われるものは躊躇わず使いえ。

しかし最低限の隠密性（サイレント）は維持しろ。

忘れるな。

お前達は影の部隊（シャドウズ）だ。

その存在は今もなんら変わる事はない―

清田は写真をポケットに仕舞い、暫し物思いに耽った。

この任務は明らかに異常だ。重要な人物とも思えない、一人の少女を救出する為に航空機を含む完全装備の特殊作戦群一個分隊が投入されるなんて。

誰かの私情が挟まれているのは明白だ。それが剣崎のものであるのか、それともそれ以外の誰かのものであるのかは分からないが、特殊作戦群が動くという事は政治のトップが直接オーダーを寄越したという事でもある。

しかし任務の内容に疑問を感じる事があってもプロフェッショナルである以上、清田やその他の隊員がその程度で任務を疎かにする訳ではない。任務遂行の為であるならば死さえも厭わないのが俺達だ、と清田は自負していた。

「イシさん！ 清田！ 今度は強襲第二班（ $\alpha 2$ ）が団体を連れて来る！ 強襲第一班（ $\alpha 1$ ）も一度引き揚げて来るぞ！」

浜本がそう叫ぶように言った直後、白石が女子生徒達を連れて来た出入り口から黒木順次（くろきじゅんじ）一等陸曹を先頭に、 $\alpha 2$ の隊員達に周囲を守られた生存者の一団が現れた。十人以上はいるだろう。CH-47JAの兵員室にまだ余裕はあるが、この調子で目標以外の救助を続けなければいずれば満員になる。尤も、満員になるほどの生存者がいるかは分からないが。

少し遅れて須崎を先頭にして $\alpha 1$ も到着した。

清田と白石は生存者の一団に駆け寄り、命からがら逃げ延び、疲労困憊している者へは肩を貸したり、励ましたりして機体まで連れていった。

「貴方達が来てくれなければ今頃どうなっていたか…生徒の命を助けて頂き、有り難うございます」

清田が肩を貸した、眼鏡を掛けた線の細い若い男性教師はそう礼を述べた。彼は仕立ての良い高価そうなスーツを着ていた。知性と教養のありそうな男だった。年齢も清田とそれほど変わらないだろう。

「我々は義務を全うしているだけです。お気になさらないで下さい」

生存者の一団を機体まで連れて行くと、須崎が分隊の全員を一度集めた。

α1の一員として校舎内に突入した羽沢彰人（はざわあきと）一等陸曹が村田の肩を借りて、片足を引き摺りながらやってきた。その右太腿にはどす黒い血の染みが広がっていた。

「羽沢さん、一体どうしたんですか？ まさか…」

清田は心配そうに声を掛けたが、羽沢は心底機嫌が悪そうに応じた。

「馬鹿野郎。そんな事になったら手前で自分の頭をぶち抜いてる。こいつはヘマをやらかしまったのさ」

羽沢は傷に負担をかけないよう、右脚を伸ばしてその場にゆつくりと腰を下ろした。

「拳銃が暴発したんだ。安全装置を掛けてはいたが、それでも事故は起こり得るって事だな…畜生め！」

羽沢が毒づいている間、村田はバックから取り出した圧迫止血包帯で彼の右太腿の止血に取り掛かっていた。

弾丸は重要な血管を逸れているらしく、見た目の出血ほど酷い怪我ではなさそうだ。しかし、これ以上の任務の続行は不可能だろう。

「羽沢は見ての通り連れて行けない。清田、お前を代わりに連れて行く。α1、α2はもう一度、校舎内に突入し、〈目標〉の搜索を続ける。武器と装備の確認をしろ」

清田はレッグホルスターに収めてある拳銃の点検を特に念入りにやった。

携行する火器は常日頃から何度も点検を繰り返しているが、実際に暴発した結果を目の当たりにすると、幾ら点検しても安心できるものではなかった。

「準備はいいな？ 行くぞ！」

須崎を先頭に、清田は天文台のある出入り口から校舎内に突入した。

心は不思議と落ち着いている。

俺はやるべき事を心得ている。

清田の耳に聞こえるのは、自身の落ち着き払った鼓動のみだった。

## #1st day②

校舎内に足を踏み入れた途端、フェイスマスク越しに濃密な死の臭いが鼻腔を刺激した。

それは血肉と臓腑、屎尿の混じった悪臭だった。先程嗅いだものよりも濃密なそれは、鼻の粘膜を通して脳髓に絡みつくように思えた。

改めて嗅ぐその臭いに胃が激しく身悶えし、胃の内容物が食道まで競りあがってくる。何とか堪えようとしたが、清田の胃袋は何度も暴れ馬のように跳ね回り、その都度彼は寸前のところで我慢していた。

しかし、とうとう堪らず、フェイスマスクを口許からずらすとその場で身を二つに折って吐瀉物を盛大に撒き散らした。足元で飛び跳ねる、朝食べた白米と味噌汁の若布、焼き鮭がタクティカルブーツに付着した。自分で吐き出したドロドロの未消化物と胃液の酸っぱい味と臭いで、清田は更に吐き続けた。

一頻り吐いて漸く気分が落ち着くと、清田は直ぐに立ち上がった。小銃を構え直した。まだ口中には胃液の不快感が残っている。出来れば口を水筒の水で漱ぎたかったが、今はそれどころではない。

他の隊員は嘔吐していた清田の前に出て、入り口から直ぐにある階段の下に向かって狙いを定めていた。死臭を嗅いだぐらいで吐いてしまった自分が情けなかった。

清田は気を取り直して列に加わり、隊伍（スタック）を組んで慎重に階段を降りていった。先頭を白石、その左右を須崎と沢村凌（さわむらりよう）二等陸曹が固め、バックアップを担当する清田が最後尾を進む。

校舎内は不気味なほどにまで静まり返っていた。時折、何処からか哀れな犠牲者の声ならぬ断末魔が響いてくるぐらいだが、人間の本当に苦しみに喘ぐ声というものは、正常な神経の持ち主であるならば心を凍りつかせるような錯覚に陥る。

清田もその声を聞き、思わず身が竦んだ。数時間前に初めての实战を経験しているとはいえ、早々に慣れる訳ではない。

過酷な訓練をこなしてきたとはいえ、所詮、それら訓練は訓練でし

かない。実戦とは違うのだ。

それは些細な違いかもしれないが、現に清田が五感で感じたものは彼に重大な影響を与え始めていた。

何とか折れ掛けた心を奮い起こして一步を踏み出したが、足元はまるで綿飴のようにふわふわと頼りなく、身体には気だるさにも似た停滞感が纏わり付き、動悸は早まり、ストレス性の手足の震えが現われ始めていた。

防弾ベストの下の衣服はじつとりと湿り気を帯び、顔に被っている汗に濡れたフェイスマスクの着け心地の悪さは最悪だった。夢の中の出来事のように、今見ている光景は現実的ではなく、肉体から精神が遊離しそうだった。

それを繋ぎ止めようと清田は躍起になった。現実逃避をするなこの野郎。目を開けて前を見る。これが現実だ。これが現実なんだ。もう諦めて受け入れろーサイト越しに見る校舎内の様子は白石の言った通りだった。

銃床を肩胛骨に押し当ててしっかりと固定し、ACOGサイトを首を傾けずに真正面から覗き、銃口は目線と水平に構え上半身を曲げて猫背の姿勢となりながら一歩一歩を踏み締めていく。

覗き込んだサイトに映るのは、其処彼処に血飛沫や肉片がこびり付いた非日常的な校内だ。数時間前まで、此処で大勢の生徒達が平穏な学園生活を送っていたとは思えない。

窓から差し込む穏やかな春の陽光を浴びて、てらてらと光る血糊はまだ真新しい。今や校内は、強く死を連想させる、地下納骨堂（カタコンベ）じみた不穏な空間に変貌していた。ただ違うのは、そこに葬られるべき死者が闊歩しているという事ぐらいだろうか。

現在、清田達がいるのが管理棟だ。藤美学園の校舎は体育館やその他の施設を囲むL字型のような構造となっており、縦棒が生徒達の主な学び舎である教室棟、横棒が職員室や特別教室や学校機能の管理と維持を行う施設等のある管理棟であり、それぞれの棟は四階と二階が連絡橋で繋がっている。

丁度、天文台のある出入り口はL字の縦棒と横棒を繋ぐ場所にある

ので、階段を降りれば直ぐに連絡橋へと辿り着ける。

此処は生徒の数が教室棟に比べて集中していないので犠牲者の数が少なく、そして感染者の数も少ない。恐らく、混乱発生当初は使われている教室がそれほど多くは無かったのだろう。故に生徒の数も少ないのだ。

最上階には特に犠牲者の姿は見当たらなかった。混乱発生当初、生徒達は逃げようとして真っ先に階段を駆け下りたのだから当然だ。こうした非常事態を想定した訓練をしているのであれば、混乱を避ける為に統制して計画的な避難が行われる筈だが、今時は何処の学校も偏差値を上げるのに忙しく、本格的な防災訓練は御座なりになっているのが現状だ。

廊下に転がる幾人かの犠牲者の死体の様子から察するに、殺人病感染者に食われて死んだのではなく、パニックを起こして我先にと逃げる生徒達によって踏み殺されたと見做すのが妥当だった。

それらは無残に食い散らかされた形跡も無く、比較的綺麗な状態を保っていた。そうやって死ねた生徒はまだ幸運だろう。生きながら肉を貪り食われて絶命し、その後で別の生者を求めて彷徨う死者となるよりも。それは考えられる人生の幕切れの中では最悪の部類に属するだろう。清田達は、圧死した生徒の中に高城沙耶の姿を探したが見つからなかった。

廊下に感染者の姿はなかった。ただ、その存在を知らしめる血痕や人体の一部、肉片等が其処彼処に点在しているだけだ。

耳を澄ませば、長い廊下の突き当たりの曲がり角から感染者の微かな呻き声が聞こえ、ゆらゆらと夢遊病者の様に揺れる影法師が見える。

前衛の白石を先頭に進む一行は、四階の連絡橋を渡り、教室棟の長い廊下を進んで一番端の階段を目指した。高城沙耶のクラスがあるのは教室棟の二階だ。彼女は既にそこにいないかもしれないが、まだその近辺にいる可能性は高い。若しくは、生ける亡者の一員となって徘徊しているかもしれない。

それを発見したのならば、速やかに頭をぶち抜いてその死体の写真

を撮影し、証拠として頬の粘膜を綿棒で削ぎ落としてDNAサンプルを回収する。そうすれば煩わしい任務から解放される。後は生存者を出来る限り救出して離脱するだけだ。

元々、人気のない教室棟の四階という事もあり、廊下を通って下の階へ行くまで何の障害に遭遇する事なく到達できた。

問題は此処からだ。しかも残された時間はそれほど多くはない。大型輸送ヘリのチヌークが、屋上でローターを回したまま直ぐにでも飛び立てる状態で待機しているから燃料はそれほど持ちあはしない。加えて、生存者を乗せて脱出する為来た時よりも積載重量は増加するのだから、余計に燃料を消費するだろう。

死角の多い階段を相互に援護しつつ、慎重にクリアリングしながら降りて行った。階段の踊り場にはパニックを起こした生徒達に踏まれて死んだ何人もの死体が折り重なるようになってあった。

二階の踊り場をさっと通過し、白石が壁際に身を寄せて腰のユニティリティーポーチから取り出した鏡付きアンテナで廊下の様子を探る。

何人もの感染者が廊下のずっと向こうの突き当たりまでふらふらと覚束無い足取りで彷徨っていた。窓から差し込む春の陽光にぎらぎらと脂っこい光を反射する廊下の血溜まりや、壁にこびり付いた肉片と人脂の真新しい生々しさに清田は思わず顔を顰めた。

白石が鏡付きアンテナで廊下の様子を窺っている間、清田や他の隊員は周辺を警戒していた。踊り場には何人もの圧死した生徒の死体が無造作に転がっている。余りにも痛ましい光景に清田は憂鬱だった。

今時の高校生は総じて大人びているものだが、やはり子供である事に変わりはない。彼らがそんな目に遭って心を痛めない大人はいないだろう。

ふと、清田はある女子生徒の死体に目を留めた。今時の大人びた女子高生にしては珍しく、化粧気も少なく、髪は脱色せずに綺麗に切り整えられていた。

その女子生徒は、何処と無く少し歳の離れた、中学生の従妹に似て



いた。だからだろう。この非常事態が始まって以来、なるべく考えないようにしていた家族や身内の事が思い起こされたのは。

青森の両親や親戚の安否が今になって気になりだしたが、それらは任務の最中では邪念でしかない。古里への郷愁を振り払おうとしたが、一度芽生えた肉親への思いはそう簡単に収まるものではない。鋼鉄のような男であっても所詮は人の子に過ぎないのだ。生まれ育った故郷や家族を愛しているのは清田とて同じだ。

状況が許すのであれば、その女子生徒とは言わず、犠牲者の遺体はなるべく回収して手厚く葬ってやりたい。だがそれは出来ない。優先すべきは、高城沙耶の捜索とその身柄の保護である。

生死不明の、ただの一人の女子高生の命が今は何よりも優先すべき事項だった。

それほど長い時間ではなかった。ほんの数瞬しか、清田はその女子生徒の遺体を観察していなかったのだが、それで充分だった。ぐったりとうつ伏せに倒れていた女子生徒の指先が動くのを清田は見逃さなかった。

「班長」

「何だ？」

清田は須崎を小声で呼んだ。直ぐ傍にいた須崎は、音も無く傍までやってきた。

「今、あの女子生徒の死体が動きました。確認しますか？」

「…よし。確認しろ」

清田は頷くと、取り回しにくい小銃の代わりに右太腿のレッグホルスターから9mm口径のUSPタクティカルを抜き、振を切つてある銃口にサウンドサプレッサーを挿込み、油断無く構えたまま女子生徒に忍び寄り、そつと屈み込んで様子を窺った。

右手で拳銃を握り、狙いを頭部に定めたまま、左手を伸ばして女子生徒の首筋に触れる。死者として蘇っても直ぐに頭部に銃弾を撃ち込めるようにと抜いた拳銃の出番は無かった。タクティカルグロブ越しの指先に人肌の温もりが感じられたのだ。

死亡して間もないという訳ではない。それが証拠に、注意深く観察

を続けると、確かに脈拍を感じ取る事が出来た。

「生きてます。班長。生きてます」

清田は消音器を手早く外して拳銃を収めると、左手で後頭部を抱えるようにして女子生徒を慎重に抱き起こし、耳元で囁くようにして呼び掛けた。

「大丈夫ですか。しっかりと下さい。大丈夫ですか？」

本来ならば大声で呼び掛けるのだが、周囲を感染者が徘徊しているとなれば大きな音を立てるのは自殺行為だろう。そもそも、声量を抑えているとはいえ、こうして声を出すのもなるべく避けるべきだ。今にでも感染者に気付かれるのではないかと焦燥感を募らせつつ、清田は辛抱強く呼びかけ続けた。

「ん…」

意識を取り戻したのか、女子生徒は小さな呻きを漏らすと僅かに身動きし、やがて瞼をゆっくりと開いた。

「此処は…」

朦朧としているのか、開かれた瞳の光は虚ろだったが、確かに意識はあり、頭から少し出血をしていたが様子から察するに感染者に噛まれている訳でもなさそうだった。

「大丈夫ですか？ 何処か痛みますか？」

清田は相手を驚かさないように穏やかな声音で訊ねた。

「ひっ…」

しかし、目覚めて直ぐ、目の前にヘルメットとタクティカルゴーグル、フェイスマスクという出で立ちの男がいて、驚かない女子高生はいないだろう。

女子生徒は小さく悲鳴を漏らすと、暫く清田に抱きかかえられたまま身を竦ませていた。清田の腕の中で、臆病な小動物のように固まっている。

「自衛隊です。救助に来ました。どうか落ち着いて下さい」

暫く女子生徒は今の状況を飲み込もうと、清田に抱きかかえられたまま、首だけを巡らせて周囲の様子を窺っていた。自分を抱きかかえている男と同様に、人間らしさの欠片もない重武装の男達が周辺にお

り、踏み倒され圧死した何人もの生徒の死体が転がっている。時折、貪り食われる憐れな犠牲者の悲鳴や、人ならざる者と化した感染者の声ならぬ声が聞こえる度に、女子生徒は小さく悲鳴を漏らすと清田の腕の中で震えた。

清田は、気の毒なぐらい怯えている女子生徒が可哀相でいたたまれなかった。

「大丈夫ですか？」

「…はい。何とか」

漸くある程度の状況が飲み込めたのだろう。女子生徒は弱々しいが、落ち着いた声で答えた。

「班長。これからどうしますか？」

「一度引くぞ。救助者を連れたまま搜索は出来ない」

須崎は廊下の様子を窺っていた白石と、沢村に同様の旨を伝え、来た道に戻るべく階段を登りつつクリアリングした。

「立てますか？」

取り敢えず、移動しなければならぬ。清田は女子生徒に手を差し出した。

「多分…やってみます」

女子生徒は清田の手を借りて立ち上がろうとした。

「……!? 痛いっ!」

しかし、唐突に足に走る激痛に女子生徒は大きな悲鳴を上げ、バランスを崩してその場に尻餅を付きそうになったが、寸でのところで清田が支えた。

「何処が痛みますか？」

「足が…足がもの凄く…痛いです……」

そう震える声で応える女子生徒の顔面は蒼白で額には珠のような汗が滲んでいた。見れば、女子生徒の右膝の辺りが紫色に変色し、大きく腫れ上がっていたように見えた。

怪我の軽重をこの場で判断するのは難しいが、取り敢えず、これでは自力で歩く事など不可能だろう。

異変に気付いた沢村が戻ってきて、女子生徒を軽やかに抱きかかえ

た。沢村が引き返して女子生徒を抱えたのは、強靱な足腰を備える清田でも、大量の予備弾薬を背負っている状態では、小柄とはいえ女の子を抱えて階段を登るのは相当堪えるだろうという配慮からであった。

「さあ行くぞ。今の悲鳴で感染者に気付かれた」

背後から白石に促され、清田が警戒しながら階段を登ろうとしたその時だった。

「キヤアアアアア!!!」

階下から布を裂く様な悲鳴が響き、反響した。清田は思わず、先頭を進む須崎の表情を窺った。

その素顔は少しも窺えないが、恐らくうんざりしているに違いない。これでは何時まで経っても目標の高城沙耶の搜索すら出来そうにない。そもそも、このような状況下では無理もないのだろうか。

「白石、清田は階下の様子を見てこい。可能であれば生存者を救出しろ。俺と沢村は先行する」

しかし須崎は逡巡する素振りすら見せず、命令を下した。須崎として、この命令に少なからぬ疑問を抱いているのだろう。

なるべく生存者を救出したいのは彼も同じの様だ。清田は内心ではそう命令を下してくれた須崎にほつとしていた。

「了解。清田、行くぞ」

白石の先導に従って清田は階段を駆け下り、声の方へと急いだ。悲鳴の主は階段を降りて直ぐの場所にいた。

男子生徒が三人、女子生徒が二人、感染者達に囲まれていた。

男子生徒達は刺又や金属バットなどを手に携え、目前に迫った感染者の群れの前に立ちはだかつて女子生徒達を守ろうとしている。一刻の猶予もない状況だった。

「清田！ お前は左をやれ！ 俺は右のをやる！」

清田と白石は、二階と一階の間の踊り場にいた。そこからならば射線は確保し易く、撃ち下ろす形となるので射撃は容易だった。

清田は左側面から迫る感染者の頭部にホロサイトの照準点に素早く重ね、引き金を絞った。空気の漏れ出る微かな音、遊底の作動音と

ほぼ同時にサイト内に捕捉していた感染者の頭部が爆ぜる。

左側面からは三体の感染者が迫っていたが、三体とも全てが頭部を撃ち抜かれ、その場に次々と頽れた。右側面から迫る感染者はコンクリートの手摺が遮蔽物となって上手く射線が確保できないので、白石は階段を飛び降りるようにして駆け下りると、生存者達と感染者の間に割って入り、猛然とした射撃を行って一挙に周辺を制圧した。

清田も直ぐに階段を駆け下り、生存者達の周りを固めた。

「クリア！」

「クリア！」

お互いに異常がない事を報告しあい、周囲に油断なく銃口を巡らす。

疾風迅雷の如き早業に生存者達は呆気に取られていた。が、清田と白石は彼らに構わず、据銃したまま警戒する。

今の一連の行動でかなりの物音を立ててしまった。獲物の気配を感じた感染者の群れに退路を塞がれる前に移動をしなければならぬ。距離はまだ離れているとはいえ廊下には何体もの感染者が犇いており、清田達の方へ向きを変えてふらふらと歩みだしていた。

「あ、あの……」

生存者の一人が若干躊躇いがちに話しかけようとした。

「この中で噛まれた方はいませんか!？」

が、白石はそれを強く遮り、感染者による負傷者がいないかどうかを問うた。

「え……いません、いません！」

女子生徒の一人が答え、直ぐに清田がそれを確かめる。ぎつと見た感じでは誰も噛まれたりなどされていなそうだった。どちらにせよ発症すれば直ぐに分かる。その場合は鉛玉を頭に一発ぶち込むしかないが、そうするより他に手段はない。

兎に角、今は何よりも時間が惜しかった。

「大丈夫のようですよ！」

「よし！ 清田、さっさと移動するぞ！」

白石は迫り来る何体かの感染者を撃ち斃すとクリアリングしつつ

階段を駆け登った。

「我々の指示に従って行動して下さい。屋上にヘリが待機していますので、そこまで先導します。落ち着いて行動して下さい。そうすれば全員、無事に脱出できますから」

清田は生存者達にそう念を押すと移動するように促した。

その落ち着き払った態度に幾らか安心したのか、生存者達は指示に従って慌てる事無く白石の後に続いた。男子生徒は体力に劣る女子生徒を気遣っていたり、重武装の自衛隊員に守られているからといって油断する事無く手にした得物を構えていたり、自分に来る事を冷静にやろうとしているのが非常に有り難かった。

早くも階段には感染者達が集まりだしていた。前衛を務める白石は、感染者を掃討しながら確実に進路を切り拓いていた。飛び散る脳漿、銃弾が肉を打つ湿り気を帯びた重い音、火薬の燃える酸っぱい匂い――立ち塞がる障害は何であろうと容赦はしなかった。

足を食われた為に這いずって迫る感染者には、鋼板を仕込んだ強烈な爪先で蹴り込み、首の骨を容易く折った。格闘徽章を持つ白石の肉体はそれ自体が凶器であり、やろうと思えば素手でも動きの鈍い感染者を葬る事など朝飯前だった。

「もう直ぐだ！頑張れ！」

最後尾を追従する清田が生徒達を鼓舞する。重装備で階段を駆け上ってはいるが、清田の鍛え抜かれた心肺機能は少しも堪えてはいない。対して、標準的な高校生の体力しか備えていない五名の生存者達は早くも息を切らし始めていた。生き残る為には少々の肉体的な辛さは我慢してもらわねばならない。

「ああ!？」

女子生徒の一人が階段に蹴躓いた。が、清田は素早くその腕を掴み、乱暴に引き起こした。女子生徒は、強過ぎる清田の握力に顔を強張らせた。しかし、そんな些細な事を気にする清田ではなかった。

しの遅れが今は命取りとなる。急がなければ全員の命が危険に晒されるのだ。女子生徒は躓いた拍子に膝を強かに打ったようだが、そんなのは後で睡でも塗っておけばいい。後ろから急かして先を急が

せる。

その矢先だった。女子生徒を急がせ、自分も後に続こうとした清田は、ふと、靴底を通して踵に硬質な感触を覚えた。

その正体が何であるのかを確かめる前に、清田の視界が急変する。妙な浮遊間を感じ、身体から重力が唐突に喪失した。まるで見えない手によって後方に引っ張られるようだった。

そして、踊り場の窓から差し込む陽光を背に受けて、影のように立ち竦む女子生徒と目が合った。まるで信じられない、とでも言いたげにその目は驚愕に大きく見開かれていた。

次いで、僅かに潰れた空葉夾が目の前を、蠅が止まれるほどの速度で通過していく。葉夾の底部に打刻された記号と数字が一つ一つ具に見て取れた。

自分を取り巻く全てが重く、気怠く感じられた。時間はどろりとした重い粘質性の液体のようにゆっくりと流れ、蜷局を巻いて堆く積み上がっていく。全てが遅く感じられた。

全てが遅延した世界の中で、清田は、辛うじてだが左手を後頭部に添える事が出来た。その僅かな動きが、いずれやってくるであろう加速した時間の中ではその後の行動を決定付けるものとなった。

鈍い衝撃を感じると同時に、全てが元通りとなった。階段を昇っていた筈の清田は、いつの間にか床に仰向けになっていた。少し遅れて、顔の直ぐ横に先程の空葉夾が硬質な金属音を響かせて転がった。

頭に被っている鉄帽と背負っているデイパック、そして後頭部に添えた左手のお陰で身体に大した痛みは感じなかった。清田は、顔の直ぐ傍に転がる葉夾を見て、事の経緯を直ぐに察した。

自分は、不覚にも、白石が発砲した際に生じた空葉夾を踏み、階下まで転落したのだ。手を添えて行った頭部の保護は訓練で培った防御反応だった。

「俺に構うな！先に行くんだ！」

清田は硬直したまま踊り場に立ち竦む女子生徒を叱咤した。俺は、エスの一員なんだ。女子高生に心配されるような野郎じゃない——しかし、現に空葉夾を踏んで階段を転がり落ちるといふ無様な失態を犯

していた。思わず焦燥感が募る。

焦るな、落ち着け——呪文のようにその言葉を心の中で繰り返す。だが、清田のその平常心を取り戻す為に行うささやかな儀式は中断された。

何者かの気配を感じた時には黒い影が覆い被さってきた。それは体中の至る所を無惨に食い散らかされた感染者だった。

口を大きくだらしなく開け、清田の柔らかい首筋に今にもむしやぶりつこうとしていた。

彼らは、生命活動を維持する上で必要不可欠な栄養分を摂取しようとする為でも、耐え難い飢餓感によつて衝き動かされているという訳でもなく、ただ何かに命じられているかのように機械的に生者の血肉を貪ろうとしているのだ。

死後から数時間も経過していないと思われるのに、その瞳は早くもどんよりと曇り始めていた。清田は考えるよりも早く、覆い被さってきた感染者の襟首を掴み、腿の付け根に右足を押し当て、そのままの勢いに乗せて押し上げるようにして頭越しに投げ飛ばした。

巴投げの要領で投げ飛ばされた感染者は、ろくに受け身を取る事が出来ず、壁に叩き付けられた後に頭から落下して頸骨を折って果てた。

最悪な状況だった。

清田は直ぐに起き上がって先行する白石に追いつこうとしたが、見上げると、三階と二階の間の踊り場には既に感染者達がたむろしており、危うげな足取りで階段を下ろうとしていた。

背後を振り返れば、二階と一階の踊り場にも、一階から上ってきた感染者が何体かいた。白目を剥いた、生気の無い目が清田を見上げていた。

完全に前後を挟まれていた。一刻の猶予も無い。強引に進むべきか、迂回して別の道を探すべきか。迷っている暇など無いのだが、清田は逡巡していた。

前から感染者達が階段を転がり落ちて来て、後からも感染者達が二階に辿り着いた瞬間、その間を擦り抜けるようにして清田は二階の通



路に飛び出していった。

引く事も進む事も出来ない、というよりもあつた筈の選択肢はもう無くなつてしまつただけだ。故にそうするより他に無かつたのだ。それが最良か最悪かは分からないが。

二階は、何体もの感染者が廊下のずっと向こうの突き当たりまで彷徨つていた。感染者の何人かは手に腕や脚、内臓といった人体の部品を持ち、熱心というよりも単に機械的に貪り食つていた。

教室棟の二階は犠牲者の数が集中しているようで、廊下にいる感染者だけでも確認するだけでぎつと十体はいるだろう。耳を澄ませば、幾つもの教室から人ならざる者達の食事の気配が感じられる。

— 下手な発砲は命取りだ—

清田は本能でそう直感していた。感染者は如何いう訳か、音に反応するらしい。らしい、というのはあくまでまだ確証がないからだ。あくまでも直感でしかない。

ひよつとしたら聴覚ではなく、嗅覚やその他の五感に頼っているのかもしれない。しかし、今は迷っている時間すら惜しかった。

清田は小銃は水平に据銃したまま、しかしまるで生気の抜けた屍のように廊下を緩やかに進む。

ブーツの靴底を覆う特殊ゴムに清田は感謝していた。それによつて足音は一切立たなかつたが、ステルスエントリーの基本技術であるストーキングを駆使し、踏み出した足とは反対の足に体重をかけ、下ろすと爪先から踵にゆつくりと体重を移動して泳ぐように前に進む。

身に付けた武器弾薬類や装備品の全てはガチャガチャと音を立てない様にしっかりと固定してあり、金具類にはガムテープを巻いて擦れて音が出ないように工夫していた。気を付けるのは足の運びと自らの呼吸だけだ。

廊下で屯する感染者の眼前を通過する時、その容貌の惨たらしさに思わず息を呑んだ。特に酷かつたのは、眼球の抉り取られた空っぽの眼窩で虚空を見つめる感染者だった。声にならない呻き声を食い破られた咽喉から漏らしていた。

出来る限り距離を取り、清田は感染者達の傍を通過した。なるべく

前方を見るように努めた。校舎内に踏み込んだ際に嘔吐しておいて良かったと思えた。

今の清田の胃袋には何も入っていなかったから、吐き気に襲われる事も無かった。どの教室も数十体以上の感染者が屯している。そんな教室が廊下の突き当りまでずらっと並んでいるのだ。たとえサイレンサーを装着しているとはいえ、これだけ静寂だとその押し殺された銃声すらよく響くだろう。もしも一度でも引き金を引けば、蟻に集られるようにして忽ち食い殺されてしまう。

―何も考えるな。じつくりと沈むんだ―

清田は過酷な水路潜入の訓練を思い出していた。

人間という生物は陸上で生き、活動する為に適した身体の構造を持ち、外部の環境条件が変化しても活動が阻害されないように自動的及び意図的に調整する優れた能力を備えている。

しかし、高圧下の潜水では地上の何倍もの高い圧力に遭遇し、そうになると人間のシステムは余りにも脆弱だ。しかも単に圧力の直接的な作用ばかりでなく、間接的な様々な医学的作用を受け、人体に対する負担は大きく、それだけに常に生命の危機と隣り合わせであり、致命的な高圧障害を起こす危険性も高い。

そうなった場合、陸上ではターミネーターのようにタフな野郎でも、水中ではまさに藁を掴むように溺れて死ぬ。だから此処で重要となってくるのは、どんな状況に遭遇しても先ずは慌てない糞度胸と、ゆっくりと壊死するかのように自己を客観的に観察する冷静さだ。

これがなければ水路潜入が必要となる特殊作戦では使い物にならない。

清田は何度も水路潜入訓練で溺れ死ぬ直前まで追い込まれた。手足を縛られた状態でプールに投げ込まれた事もある。もがいても決して水面に浮かび上がる事は無い。

水は口や鼻から容赦なく浸入してくる。肺は酸素の供給がままならないというのに二酸化炭素を交換しようと躍起になって焼け付く。やがてもがく気力と体力を失い、身体は水底に沈んでいく。徐々に意識が闇に閉ざされていく中、明るい水面がやけに網膜にこびり付い

た。

生命の危機に瀕したとしても、取り乱さない精神力を養うという目的のある訓練だが、自己保存の法則に従って人間は生きていく限り、死に直面すればその精神状態は普通ではなくなるのが当然だ。だが、己を殺して生き延びる、という矛盾を達成できなければ、とてもではないが狂気に満たされた特殊作戦の世界では生きていけない。

清田は、特殊作戦群の正式な一員となれるレベルにまで己を殺す方法を身に付けている。今が、それを発揮する時だった。

まるで水が流れるが如く淀みのない動きで、感染者の合間を縫う様にして進んだ。熱し過ぎず、冷め過ぎず、そして心は限りなく無に近く、だが、いざとなればダイナミックなアクションを起こせる精神状態に保つ。

屋内戦闘では、敵と不意に遭遇した際に怯む事無く、相手に弾丸を叩きこめる状態でなければならない。精神と連動した肉体は、爆発的なエネルギーを秘めつつも、しんと静まり返っていた。無駄な動きは一切しない。必要な時、最低限の力を発揮すればいい。それが一番、効率が良くて効果的なのだ。

長い廊下の突き当たりに差し掛かり、ふと、清田は今来た道を振り返った。十体以上、教室にいるのも含めれば数えるのも嫌になるほどの感染者の群れの中を突っ切ったという事実には、清田は少しだけ腰が砕けそうになった。今思えば、なんと無謀な事をしたのだろう。失敗する確立の方が圧倒的に高かった筈だ。

もっと良い方法は他にもあった筈だ――しかし、事後評価は、此処から無事に脱出してからだ。

今は後で思いつく最善策よりも、現状で咄嗟に思いつく危なっかしい最善策の方が大事だ。

改めて小銃を据銃し、突き当たりを左に曲がって連絡橋に差し掛かったその時だった。何名かが背後の階段を駆け上る足音が聞こえた。

生存者だろうか。しかし、あんなに音を立てては犇く感染者を徒に引き寄せるだけだ。

清田は咄嗟に傍にあつた柱の陰に隠れ、身を低くした。其処からならば階段を上つて現われる生存者を監視し易く、且つ生存者からは自分の姿は発見され難い。それにまだ生存者と確定した訳ではないのだ。ひよつとしたら感染者かもしれない。

サイトを覗き込み、引き金にそつと指を掛ける。不意に現われた複数の目標の頭部に何時でも銃弾を叩き込める用意を終え、清田はじつと待った。

## #1st day③

階段を上って現われたのは二人の女性だった。

一人は手に血塗れの木刀を携えた、墨を流したかのように流麗な黒髪を持つ女子生徒で、凜とした雰囲気を漂わせていた。

もう一人は白いブラウスに黒いタイトスカートといった格好の、教師らしき大人の女性だ。

この惨状にあっても女子生徒は冷静そのもので、教師らしき女性を先導している様子だ。その手に握る、血や肉片の付着した木刀を見れば、それ一本でこの修羅場を潜り抜けてきたのが容易に想像出来た。

息切れ一つしていない女子生徒とは対照的に、教師らしき女性は既に息も絶え絶えの様子だ。しかし、それも仕方が無い事かもしれない。

服の上からでも分かるほど豊満な乳房に肉付きの良い充実した腰回りは、確かに運動には向かないだろう。

制服姿の女子生徒はすらりと背が高く、運動力もありそうな健康的な肢体だ。平均的な女子高生以上の体力がありそうだった。

清田はタイミングを見計らって柱の陰からゆっくりと、相手にわざと視認させるようにして現われた。

二人は、清田の姿を一目見るなり、硬直した。それもそうだろう。まるで戦争映画から抜け出して来たかのような重武装・重装備の男が突然物陰から現われて驚かない人間がいる筈が無い。

一瞬にして空気が張り詰めた。

「誰だ!？」

しかし女子生徒は直ぐに硬直から立ち直り、今までの感染者と全く毛色の異なる存在である清田に対し、毅然とした態度で誰何を行うと同時に、油断無く木刀を中段に構え、その切っ先を彼に擬していた。教師らしき女性は慌てて女子生徒の背後に隠れた。

心身を健全に鍛え上げる為の競技としての武道ではなく、相手の息の根を容赦なく止める為の武道に慣れ親しんでいる清田だが、その無駄のない動作を見ればある程度の技量は推し量れる。

あの少女は、その外見と年齢以上の戦闘能力を充分に有していると思ふべきだろう。近接距離での白兵戦ならば、例え清田といえども不覚を取るかもしれない。真の達人というものは、体格や膂力などに頼らずとも殺傷に到る充分な技を身につけている者を指す。

特殊作戦群で冷酷無比な零距离格闘術を教えている、あるインストラクターは、見た目は華奢で小柄な中年男性だが、黒縁眼鏡の奥の瞳は尋常ならざる凄みを帯びており、それが彼の壮絶な経験を十二分に物語っていた。あの格闘徽章を持つ白石でさえ、その彼には頭が上がない。

清田はその少女の瞳にあの達人の深淵を覗き込んだものを見出し、その末恐ろしさに思わず背筋が震えた。この少女は一体全体何をやったんだ？

「自衛隊です。救助に来ました」

清田は落ち着いた声音と手振りで、相手を諭すように言った。

手は小銃から離し、スリングベルトで身体の前に吊り下げている。

本来ならばこの時、清田は小銃の狙いを向けたまままでいるべきだが、人質救出作戦の要領をそのまま実行すれば相手がどんな行動に出るか分からない。ましてや相手はまだ子供なのだ。実弾を装填した銃を向けられた事など一度もない筈だし、そんなものを向けられた時の精神的なショックは計り知れない。

尤も、木刀で感染者を藁のように撲殺してきたと思われる少女が、銃を向けられたぐらいで怯むとは到底思えないが。

「…そのようですね。すみません、取り乱して」

女子生徒は木刀の切っ先を下ろすと清田に対して深々と一礼し、己の所作を謝罪した。その一つ一つの動作は日本舞踊のように美しく洗練されており、熟練した武道者特有の普段から自己を律した生活から来るものだというのが見て取れた。

そして恐るべき事に、この異常な状況下でも冷静な判断力を失っていない。普通であれば、この地獄に自衛隊員が助けに来た事実を、夢か現の出来事に捉えて当惑した表情を浮かべるものなのだが。

やはり、「普通的女子高生」と見做すべきではないだろう。

「いや、こんな有様では仕方が無いでしょう。取り敢えず移動しながらお話を」

清田は先程、女子生徒が張り上げた誰何の声に感染者が集まってくる前に移動を促した。二人は素直に指示に従い、清田の後を付いてきた。

「救助に来たというのは？」

清田に前方を任せてはいるが、女子生徒は木刀を手に油断無く周囲を警戒しながら訊ねた。

「管理棟の屋上にヘリが待機しています。既に何名か収容しています。時間があまり残されていません」

正直、清田は焦りを感じ始めていた。

白石と逸れ、本来の任務の完遂どころか、一体どれだけの生存者を救えるのかも分からない。未だに、目標である高城沙耶との接触すらままならないのだ。

清田としては、高城沙耶の生存確認もそうだが、先ずはこの二人の安全を最優先にするべきだろうと考えていた。

当初、この二人を屋上まで連れていき、分隊と合流し態勢を立て直してから再度捜索に取り掛かる方が良いだろう。お荷物を抱えたままでは自由に動ける筈がない。

経路としては、感染者の多い教室棟の階段を上るのではなく、連絡橋を渡って感染者の少ない管理棟の階段を上って屋上へ到達するというのを考えていた。

連絡橋を渡り切り、管理棟に差し掛かったその時だ。

「ひゃんっ」

素っ頓狂な声を上げて、一行の最後尾を進む女性が派手に転んだ。

「やーん！ なんなのよもー！」

転んだ際に打ち付けた腰を擦りながら、女性は尻をぺたんと地面に着いたまま零した。女子生徒はそんな女性の様子に呆れたのか、溜息を吐いていた。

「走るには向かないファッションだからだ」

清田が駆け寄って助け起こすよりも早く、女子生徒は女性の前に

しやがみ込み、手を伸ばすとあつという間にそのぴっちりとした黒いタイトスカートのスリットを大胆に引き裂いた。

女性が小さく悲鳴を上げるが、小さかったスリットが今では身に着けている紫色の下着が見えるほどに広がっていた。

清田は、思わず目に飛び込んできた女性の色っぽい下着に顔を赤らめ、彼女が転んだ事で生じた隙に襲い掛かってくる感染者がいらないか周辺を警戒する振りをした。

しかし、脅威は見当たらず、頭頂部を搗ち割られた男性教師の死体が転がっているだけだった。

「あーっ！ これプラダなのにいー!!」

女性は下着が見えるほど破かれた事よりも、先ずブランド物のスカートが破かれた事に対して抗議していた。

この生死の掛かった非常時にそんな詰まらない事を気にする余裕があるという事は、少なくともこの女性はそれほど精神的に追い詰められている訳ではないな、と周囲に銃口を向けながら清田は冷静に分析していた。女性も女子生徒と同様に、意外と落ち着いているのだろう。

「ブランドと命……どちらが大切だ？」

「~~~~っ、両方っ!!」

女子生徒の呆れた様子への物言いに対し、女性はむきになっていた。

一体、どちらが大人で子供なのだろうか——清田は背後の遣り取りに辟易すると同時に、美人の下着を見れた事を心の片隅ではちよつとばかり幸運に思っていた。

「時間が余り無いという事を忘れないで下さい」

清田はまだ何か言い足りない様子の女性をさっさと助け起こし、移動を再開しようとした。それと同時に、ヘッドセットから須崎の声が聞こえてきた。

「タケ、タケ。こちらザキ。送れ」

「こちらタケ」

「ロックと一緒にではないのか？」

どうやら白石は生存者達を連れて無事に屋上に辿り着き、先行して



いた須崎と合流したようだ。そこで漸く、清田がない事に気が付いたのだ。

まさか、空薬莖を踏んで階段を踏み外したとは予想だにしていなかったに違いない。てつきり、最後尾について来るものとばかり思っていたのだろうか。

手短かに、清田はこれまでの経緯を説明した。

「燃料が残り少ない。弾薬も大分消耗した。これ以上は持ち堪えられない。目標の搜索を打ち切る。送れ」

「タケ、了。確保した二名と共に屋上へ向かう。おわり」

「いよいよ、目標の確保を諦めるしかないようだ。清田は直ぐに管理棟の屋上へと続く階段へ向きを変えた。

「これから屋上へ向かいます。自分の前に出ないようにして下さい」

二人は無言で頷いた。二人とも表情にこそ出しはしなかったが、少しだけ安堵しているように見えた。しかし、まだ安心するには早いという事も分かっているのだろう。

小銃を据銃し直し、管理棟の階段へと向かおうとする。が、別の方向から聞き慣れた乾いた音にはっと身構えた。

あの乾いた音は銃声だろうか。いや、学校にそんなものがある筈が無い。しかし、誰かが何かしている、と考えてしかるべきだろう。

それが生存者か、それともそれ以外の何かであるのかは分からないが。

「職員室の方みたいね……生存者かしら？」

最後尾を進む女性が、一行が抱いた懸念を口にする。

「そうだとしたら……助けにいかねばなりませんね。よろしいですか？」

清田は一応、二人に了解を得る事にした。他の生存者を助けに行つて窮地に陥る可能性もある。そうなった際の覚悟を決めて貰うのと、後で泣き言を言われては堪らないという考えからだ。

「私は構いません。助けられるのであれば一人でも多く助けましょう」

「でも、危なくなったら逃げましょうね」

二人の賛同の言葉を得て、清田は銃声らしき音の聞こえた方向へ進む。二人の言葉は素直に心から出たものなのか、それとも銃火器で武装している自衛官にこの場の主導権があるからこそ出た言葉なのかは分からなかった。

願わくは前者であつて欲しいと清田は思った。

こういう状況になつてしまったからこそ、独りよがりになるべきではないのだ。そうすれば、自己の生存を優先するのは生物としては正しいかもしれないが、人間としては疑問を投げ掛けたくなくなる。

清田はより一層警戒を強めた。生存者が抵抗する騒ぎを聞きつけて、感染者が集まってくるからだ。

現に、清田達一行のずっと後方を感染者がのろのろと追いかけていた。数はそれほど集まつてはいないが、何れは廊下を埋め尽くす勢いで膨れ上がるかもしれない。

「ぎゃああああああつ!!!」

女子生徒のものと思しき悲鳴が職員室の方から聞こえてきた。

自然と清田は進む速度を上げ、遂には走り出していた。

ずしりと重い小銃を抱え、重装備を身に纏つていながらも清田はものともせずに軽やかな身のこなしで疾駆した。彼に追隨できるのは女子生徒ぐらいなもので、女性は二人に引き離されないように息を切らして追いかけるのが精一杯だった。

廊下の角を曲がった所で清田はその光景を目の当たりにした。

廊下に轟く感染者の群れ。そしてそれらに対して必死に抗う二名の生徒。

一人は眼鏡を掛けた小太りの男子生徒で、片膝立ち―自衛隊風に言うならば膝撃ちの姿勢―で手には銃らしきものを構え、それを感染者に向けて発砲していた。

もう一人は女子生徒で、間近に迫つた感染者に対して腰を抜かしたのか、床に尻をぺたんと着いて必死になつて後退つていた。

―高城沙耶か!―

その女子生徒の姿を一目見るなり、清田の脳裏に、網膜に焼き付けた写真の少女の姿が鮮やかに浮かび上がり、現実の彼女と二重写しに

なった。

清田の身体は脳が命じるよりも早く、行動していた。それは最早肉体自身に刻まれた直接的な反応だった。

殆ど条件反射的に据銃し、サイト内に高城沙耶に迫った感染者の頭部を捉え、レチクル（照準十字線）が重なると同時に引き金は優しく、朝霜が降りるが如く柔らかに引いた。

清田は重装備で走っても息切れ一つ起こしておらず、且つその精神も平静そのものであり、小銃を構えても決してその狙いはぶれてはいなかった。

音速を超えるライフル弾で感染者の頭部の爆ぜる様子がサイトを通して鮮明に見て取れた。

それはほんの一瞬の出来事だったが、清田は腰の回転だけで瞬時に方向転換し、すぐ次の目標に照準を合わせて必殺の一撃を見舞っていた。

清田以外の人間からすれば、何が起きているのか全く解らなかつただろう。それは機械の様な正確さと速度で行われた精緻を極めた射撃だった。

だが、確実に引き金は五回引き絞られており、放たれた五発の5.56mm完全被甲弾（フルメタルジャケット）は寸分の狂いも無く、感染者の頭部―解剖学的に人間を確実な死に至らしめる、両目と鼻の線を結んで出来る「死のT字」―を貫き、音速を優に超える速度とそれに伴う衝撃で爆裂させていた。

硝烟を燻らせる五個の空薬莖がほぼ同時に金属音を響かせて床に転がった。

そして数瞬遅れて、本当の意味での死を迎えた感染者達の、頭部を失った身体が糸の切れた操り人形のように次々と頽れていく。湿った砂袋が叩き付けられるような重い音が響き渡った。

清田は職員室へと続く廊下に他の感染者の姿が無い事を確認すると、そこで漸く安堵の息を吐いた。

感染者を排除し終えてから僅かに遅れて女子生徒が到着したが、床に転がる頭部の爆ぜた五体の屍を一瞥し、自分が手に携えている木刀

の出番が無い事を察した。更に遅れて女性も到着した。

「私の出番はないという訳か…まあ、それはそれで何よりだ」

「ちよ…一人…と…も…走るの、はや、過ぎ…特に…自衛隊の…  
なんで…そ、んな…格好…で…」

女子生徒は軽く呼吸が乱れている程度だが、女性は手に膝を付いて身体を折り曲げて荒い息を整えるので精一杯の様子だった。

走るには向かないフアッションと、そして走るには向かない肉付きの良い艶かしい姿態であれば仕方が無いのかもしれない。日頃から運動をせず、それも社会人ともなれば体力の低下は学生時代に比べれば激しいものがあるだろう。

「自衛隊です。救助に来ました。安心して下さい」

小銃を下ろし、スリングベルトで身体の前に吊り下げると清田は歩み寄り、力無く床に座り込んだままの高城沙耶の前に屈み込んだ。

沙耶は清田が先程撃ち倒した感染者の脳漿と肉片に塗れた顔で呆然と虚空を見つめていた。清田が視界に入っても一切の反応を示す事は無かった。

余りにも多くの凄惨な光景を目の当たりにして、まだ十代半ばの少女の精神が耐え切れる筈が無かった。

ほんの数秒前までは歩く死体に貪り食われる寸前だったのだ。沙耶は精神の崩壊を防ぐ為、本能的に精神と肉体を現実から切り離れたのだろう。

不意に難燃繊維のフェイスマスク越しにアンモニア臭が鼻を衝いた。

沙耶の顔から目を下方に転じると、彼女がぺたんこ座り込んだ場所を中心に透明な液体が輪となってさあつと広がっていった。

清田がそうしようと考えてるよりも早く、床に着いていた片膝に液体の輪が触れた。濡れてしまったのは仕方がないし、何よりも避けようとするのは失礼な行為に思え、清田は敢えてそのままにする事にした。防弾レガースが沙耶の失禁で湿る。

恐怖のあまり自律神経の平衡が失われ、結果として膀胱の収縮を引き起こしての失禁は訓練された兵士にもある。ましてや何の訓練も

受けた事がなく、生命の危機を強く感じた事のない十代の少女ともなれば尚更だ。

如何したものと清田が考えあぐねていると、女子生徒が傍に立ち、彼の肩に手を置いて、自分に任せて欲しい、と目で合図した。清田は黙って頷くと場所を変った。

「もう大丈夫だ……安心していい。何も怖いものなんてないよ。誰も君を傷つけたりなんかしないよ」

女子生徒は沙耶の震える細い肩に手を置き、優しく微笑んで見せた。清田には、その微笑みは不思議と人を落ち着ける魅力があるように思えた。

同時に、歩く人喰い死体が徘徊するこの状況下で、そのように安らかに微笑む事の出来る、彼女は普通の女子高生ではないという確信に至った。武芸者としての厳しい鍛錬だけで、年端もいかぬ少女を老成させるとは到底思えない。

人間の根幹を揺るがすほどの強烈な体験をしなければそうはならないものだからだ。彼女は、過去に悍ましい何かに遭遇したのだろう。それが何であるのかは想像がつかないが、人間のどす黒い内面に関連しているに違いない。

肉体的、精神的に何度も追い込まれた経験のある清田だが、人間の剥き出しとなった邪悪な一面にはまだ遭遇した事はないし、自身が発揮した事もない。それは死と隣り合わせの訓練でも体験する事の出るものではないだろう。

それが功を奏したのだろうか。今まで無反応だった沙耶の瞳に生氣が宿ったかと思うと、次の瞬間にはぽろぽろと大粒の涙が零れ出していた。

「う、ううっ……ああ、ああああ……うわああーん」

やがて沙耶は女子生徒に縋り付いて泣きじやくり始めた。まるで幼子のように胸に顔を埋めて泣きべそをかく沙耶を、女子生徒はその頭を撫ぜ、背中をぼんぼんと優しく叩いて宥め賺した。

暫くの間、沙耶が落ち着くまでは女子生徒に任せの方が良さそう  
だ。

清田はそう判断すると他の生存者に声を掛けて回った。

「その君、大丈夫かい？」

沙耶を女子生徒に任せ、清田は眼鏡を掛けた小太りの男子生徒に声を掛けた。

手に持っている銃らしきものはどうやらガス圧式の釘打ち機のよう  
うで、照準をつけ易くする為のストック代わりの木製の定規がガム  
テープで固定されていた。

釘打ち機は普通、密着させた状態でなければ釘を打ち出させないよ  
うに安全装置がついているものだが、彼はそれに細工を施して飛び道  
具として使用しているのだろう。

一見した所、外傷も無く、精神状態もそれほど悪そうには見えな  
かった。

「は、はい。僕は何ともありません」

「そうか。それなら良かった。何かあれば遠慮なく言ってくれ」

次は未だに荒い呼吸を整え続けている女性の傍に寄った。

「大丈夫ですか？」

今では女性はその場にしゃがみ込み、非常に具合が悪そうだ。顔色  
も優れない。

清田も傍に屈み込み、様子を窺った。

「いえ…あの…息、切…れ…ですから…そんなに…気に  
……………」

長い髪が汗でぺたりと張り付いた顔を上げて女性は清田を見遣っ  
た。

白い頬がほんのりと朱に上気した様と荒い呼吸、そして仄かに香る  
女特有の甘い体臭に、清田は場違いな興奮を覚え、思わず目を逸らし  
た。

フェイスマスクとタクティカルゴーグルを身に付けていて良かつ  
た、と思った。恐らく、今の自分は顔を真っ赤にしているに違いない  
から。

同時に、この非常時に何を悠長な事を考えているんだ、と自身を戒  
めずにはいられなかった。

「…よろしければこれを」

清田は弾帯に括り付けている、四発の四〇mmグレネード弾を携行可能なようにデザインされている、SOE社製のキャンティーン・カバーから2クォートの水筒を取り出し、蓋を開けて女性に差し出した。

「あ…すみません…」

女性は息も絶え絶えのまま礼を述べ、受け取った水筒に口を付けて喉を潤した。

あまりにも辛そうな様子なので、清田は背中を摩ってあげようかと思ったが、じんわりと汗によって湿り気を帯びたその薄い背にはブラジャーのラインがくつきりと浮かび上がっており、流石に躊躇われた。

清田は警戒する振りをして、生存者達から少し離れてから咽頭マイクのスイッチを押し、なるべく聞こえないように小さな声で吹き込んだ。

少しばかり声音が興奮していたが、それは不可能と思われた目標との接触が達成出来たからだろう。

「ザキ、ザキ。こちらタケ。目標の高城沙耶と接触、確保した。これから大至急屋上へ向かう。まだ燃料と弾薬に余裕はあるか？ 送れ」

しかし暫く待っても応答はなかった。清田は不意に胸中に芽生えた不安に苛まれた。

「ザキ、応答せよ。聞こえているなら応答せよ。送れ」

清田は語気を強めて再度応答を求めた。それはほんの数秒という短い時間だったかもしれないが、清田にとっては針の筵の上で永遠の時を過ごしているかのように居心地が悪かった。

あのタフで狂った野郎どもがたかが動きの鈍い死体なんかには食われる筈がない、と思いたかった。

へタケ、タケ。こちらザキ。感染者の大群と交戦中の為、交信出来なかった。感染者は更に増えつつある。燃料も弾薬も底を尽きかけている。こちらからの迎えは寄越せない。送れ

清田の心配は杞憂に終わったが、骨伝導ヘッドフォン越しに怒号と

爆発音が聞こえ、どうやら向こうは余り喜ばしい状況という訳ではなさそうだった。

手が離せないほど忙しいという事は、管理棟の屋上に殺到している感染者の数は恐ろしい数という事になる。つまり、屋上のへりを目指して進めば、それは自ら進んで感染者の餌になりに行くという事を意味していた。

清田は、振り返って生存者達の様子を確かめた。

女子生徒はまだ泣きじやくっている沙耶を宥めすかしており、女性は漸く呼吸が落ち着いた様子だが疲れきっていて、男子生徒は無線であり取りをする清田に不安げな視線を投げ掛けていた。

清田一人ならばまだ何とかなるかもしれないが、この陣容で感染者の群れを強引に突破しようというのは無謀以外の何ものでもなかった。確実に何名かが犠牲になるのは避けられない。

それが、今回の救出目標である高城沙耶となる可能性は充分にある。救助すべき対象をむぎむぎ危険に晒すべきではないだろう。

「こちらからも無理だと思われる。四名の生存者を単独でのエスコートは不可能。送れ」

その後は暫く沈黙が続いた。このまま確保した生存者をへりで後送して撤退するか、それとも救助班の何名かで感染者の犇めく校内を強行突破するか。現場指揮官である須崎は、恐らく剣崎に指示を仰いでいるのだろう。実行部隊にはかなりの裁量権を与えられているとはいえ、政治のトップクラスからのオーダーともなればやはり後方で控える群長自身の考えを聞かなければならない。

ややあつて、須崎から返答があった。

「タケ、タケ。こちらザキ。我々は撤退する」

予想していた通りの答えだった。だが、このまますんなりと従う訳にもいかない。

「再ピックアップは不可能なのか？ 送れ」

たとえどんな命令であろうと遂行する覚悟と能力を備えているという自信が清田にはあり、またそれを誇りとしていた。ただ、疑問に答えてもらいたいだけだ。



一旦、へりは救助班と生存者達を安全地帯まで運び、そこで給油と補給を済ませて迎えに来てくれるのかどうか、そうすれば校内の何処かに身を隠して少し留まるだけで済む。

〈燃料の補給が難しいらしい。LST(Landing ship, Tank:戦車揚陸艦。ここではおおすみ型輸送艦の事を指す)の航空燃料が底を尽く寸前だ。燃料の確保が出来ない限り、再度へりを迎えるに寄越す事は出来ない〉

「どれくらいで確保できる?」

〈現在、補給艦が佐世保を出港した。数日中に邂逅すると予測されるが、状況が状況だけに断言は出来ない〉

本来であれば、急遽この事態に対処する為に編成された統合任務部隊(タスクフォース)の作戦遂行能力を最大限に発揮する為に必要不可欠な兵站は確保されていて然るべきなのだが、過去に幾度も発生した自然災害と異なり、今回の“歩く人食い死体”による社会秩序の混乱及び甚大な被害は全く以って別次元の問題である。

各駐屯地、各基地も被害を受けており、統合任務部隊の活動は最初から円滑というのは望むべくもなく、必要最低限の編成で可及的速やかな対応を余儀なくされていた。その為に安定した兵站の確保は後回しにされ、統合任務部隊には初動分の物資しか手元になかった。

海上自衛隊佐世保基地に停泊する、第一海上補給隊の補給艦が統合任務部隊への同行が遅れたのはこういった事情からだ。そもそも、米軍と違い、自衛隊にはこのように初動対処能力と兵站到大きな問題を抱えており、依然として続く低迷した景気の煽りを受けて予算は年々縮小され、必要な装備や物資が各部隊に行き渡らないという深刻な状況はいつまでたっても改善される見通しが立たないのが現状だ。

2011年の東北の大地震の際、派遣現部隊は兵站が確保されるまでかんばんのみで過ごさなければいけない日々もあった。これで何処か安全な場所に籠城し、補給を済ませた突入班の救助を待つという選択肢は消えた。

回収が一体何時になるのかも分からないのでは、安全な場所に籠城

したとしても限界があり、またそこが本当に安全であるかどうかも確証が持てないだろう。

数日か、それとも数週間か。長期間に渡って籠城するには相応の物資が必要不可欠だ。学校が避難所に指定されていたとしてもその殆どが名ばかりで、この藤美学園もその一つである。

ここに十分な物資の備蓄があるとは思えないし、また、感染者の溢れ返る校内を探すとなると現実的ではない。

へタケに付与する以後の命令については、救助者の人命、特に高城沙耶の生存を最優先とする。新たなLZ (Landing Zone: 着陸地点) は新床第三小学校。五日後の一七〇〇までに到着せよ。以上で了解か？ 送れ

清田は軽く深呼吸してから、短く応答した。

「タケ、了」

「……清田、絶対に死ぬな。生きて帰って来い。終わり」

たったそれだけの短いやり取りだったが、それで充分だった。

清田は直ぐに思考を切り替えた。

取り敢えず、これからの行動を出会った生存者達に話すべきだろう。この地獄に助けに来た自衛隊員から脱出が不可能である旨を伝えられた生存者達の士気が如何なるのかが予想出来ない清田ではない。

伝えるのは気が重かったが、それでも自分がやらねばならぬ事である。それに先送りしても仕方が無い。

清田は一行の元に戻り、先程の内容を伝えた。

「計画が変更されました。へりでの脱出は困難と判断され、別の方法での脱出を模索します」

生存者達の反応は様々だったが、如何いう事なのか説明を求めようと清田に食って掛かる者がいないのが幸이었다。概ね、落ち着いた様子なのが遣りやすかった。

それとも、最初からこの地獄から簡単に生還できるという甘い考えを持っていなかっただけなのかもしれないし、清田の今の言葉で諦めただけなのかもしれない。

「取り敢えずその職員室で休憩しましょう。何名かは息を整える必要があるようですし：…ついでに今後の事について話します」

清田は小銃から拳銃に持ち替え、サプレッサーを銃口にねじ込んでから職員室の引き戸を音を立てないように開き、足を踏み入れた。

拳銃に切り替えた理由は、扉を開ける際に片手で小銃を保持しなければならず、そのような状態では満足に狙いを付ける事も出来ないからだ。拳銃ならば取り回しやすく、小銃よりも素早い照準が出来る。何より、軽量の拳銃ならばクリアリングをする際に疲労が少ないという利点もあった。

拳銃の照星、照門には放射性物質のトリチウムが埋め込まれており、暗所では微量に発光する。照準をつける際、この白い点を横に三つ並べれば済むので、非常に便利だった。握把（グリップ）を握るとスイッチが作動し、銃身下部に装着されたフラッシュライトが点灯した。

柱の陰、ロッカーの中、机の下を一つずつ慎重にクリアリングしていく。職員室は雑然と散らかっており、血溜まりや血痕がそこいらにあるのが見て取れた。

いずれもその痕跡はまだ生々しく、この惨劇が発生してから数時間しか経過していない事実を改めて思い知らされた。感染した教師や学園職員の姿が無いのは、生者の血肉を求めて外に出ていった為だろう。

血溜まりを踏まないように気を付けながら通路を歩き、最後となる机の下を覗き込もうとする。机上札には「林京子」と書かれていた。その机を覗き込んだ瞬間、清田は身を強ばらせた。握把を握る手には力が込められ、あわや指先は引き金を引き落とす寸前だった。

机の下には女性が隠れていた。服装からするに、この学園の教師だろう。抱えた膝に顔を埋め、ガタガタと震えている。

清田は一息置いてから拳銃を床に置き、震える女性の肩にそっと手を触れた。その瞬間、女性の身体がびくりと殊更に大きく震えた。

「安心してください。自分は人間です」

精一杯、穏やかな声を掛ける。清田自身も、生存者の接し方には慎重になつていた。

女性は恐る恐る、顔を上げ、清田を見た。

年齢は清田よりも十歳ほど上だろうか。三十代と思われるが肌の色艶の良い女性だ。少し険のある顔立ちの美女だが、今はその美貌は恐怖と不安に苛まれており、濡れた瞳が清田を力無く見詰める。

「立てますか?」

女性はこくりと頷いた。清田はしやがんだまま少し後ろに下がり、彼女が机の下から這い出るスペースを空けてやった。

もそもそと女性は机の下から這い出た。清田は手を差し出し、彼女が立ち上がるのを助けてやろうとする。

差し出された清田の、タクティカルグローブに包まれたごつい手を握る彼女のたおやかな手は震えていた。清田は力を入れすぎないように彼女の手を包み込むように握り、もう片方の手はその細い肩に添え、一緒に立ち上がった。

「あつ…」

立ち上がる際、女性はバランスを崩し、清田の胸にもたれ掛かった。咄嗟に清田は彼女を受け止めた。刹那、ふわりと甘い香りがフェイスマスク越しに鼻腔を擽る。

それは香水とは違う。何処か懐かしい、甘くて心の安らぐ匂いだ。脳裏に、子供の頃に母に負われた記憶が蘇る。母の白い項から香る、甘くしつとりした芳香に似ていた。

不覚にも清田は、この女性の良い匂いを思い切り胸一杯嗅ぎたいと思つてしまった。戦闘によるストレスで神経が、無意識のうちに安らぎを求めているのだろうか。

—俺はなにを馬鹿な事を考えているんだ—

そんな変態的な欲望が芽生えた事に対して不甲斐なさと腹立たしさを覚え、清田は胸中で己を叱咤した。

「あの…大丈夫ですか?」

自分の胸に顔を埋める女性に声を掛けるが何ら反応はない。応える代わりに、彼女は清田の腰に細腕を絡め回し、より強く密着してき

た。

清田はその行動に鼓動が跳ね上がるのを感じた。おいおいちよつと待ってくれ―彼女の突拍子もない行動に戸惑い、反面、こんな年上の美人から抱擁されるのも悪くはないと思つてしまった。

しかし、何時までもそうしている訳にはいかない。恐らくこの女性は、他の生存者と遭遇して安堵の余りこのような行動にでたのだろう。

「取り敢えず、何処か怪我はありませんか？」

名残惜しいが、清田は乱暴にならないように絡みついた女性の手を優しく解き、両肩に手を添えて身体を離した。

「あつ…はい、大丈夫………です」

自分よりもずつと背の高い清田の顔を見上げた彼女は、漸く正気に戻り、ぽそぽそと小声で答えた。

着ぐるみのように装備で着膨れした清田の厳つい姿に、多少たじろいでいる様子だった。

「見ての通り、自分は自衛官です。安心してください」

女性の様子を確認してから、清田は床に置いていた拳銃を拾い上げ、銃口からサプレッサーを外してレッグホルスターに収めた。

「此処にはあなた一人だけですか？」

清田は職員室内をほぼ調べ終わっていたが、念の為に訊ねた。

「はい。私が此処へ逃げてきた時には、もう誰もいませんでした…」

女性は俯き、力無く答えた。生存者の例に漏れず、相当の惨劇を目の当たりにしたのだろう。心身ともに疲れ切っている。

「わかりました」

清田はもう一度、危険がない事を確認してから生存者達を招き入れた。

「林先生！ 無事だったんですか!？」

職員室に入り、女性の姿を一目見るなり、小太りな男子生徒が驚きを露わにした声で言った。

「まあ、平野君、貴男こそ」

女性は、教師として長年身についた習慣故か、生徒の前では指導者

らしくあろうと悄然としていた状態から少し持ち直した振る舞いを見せた。

「毒島さんに高城さん、それに鞠川先生も」

男子生徒に続いて入ってきた他の生存者の顔を認めるなり、清田以外の、それも顔見知りの生徒や同僚と再会したからか、幾らか落ち着いた様子だ。生存者達が互いの無事を喜び合うのを横目に、清田は全員が職員室に入ったのを確認してから戸の鍵を閉めた。

不意に爆音が鳴り響き、職員室の窓ガラスが震えた。窓ガラス越しに空を仰ぎ見れば、二機のヘリコプターが飛来した時と同様の飛行経路を通って遠ざかっていく。

あのヘリの中では、生き延びた数少ない生存者達が地獄からの生還に安堵しているのだろう。

あのヘリの中にいる生存者達と自分達とでは何が違い、何に差があったのだろうか。

それは考えたところで答えが出るものではないし、仮に導き出されたとしても自分達が脱出できなかつたという事実が変わりはない。

あの機体を見送る生存者達の心境は如何程のものだろうか。

全員が全員、あのヘリに乗ってこの地獄から脱出したかつた筈だ。それは清田とて同じだったが、今更過ぎ去つた事をとやかく言つても事態が好転する訳ではないのは誰もが承知していた。生存者達は、ヘリが見えなくなるまでその姿を目で追っていた。

## #1st day④

「こんなものでいいだろう。ありがとう。助かったよ」

「いえ、お役に立てて良かったです」

清田は男子生徒と協力して、職員室にあった机やダンボールなどの雑多なものを戸口の前に積み重ね、即席のバリケードをこしらえていた。

これで感染者達が押し寄せてもある程度の時間は稼げるだろう。清田はそれらを一度、纏めて吹き飛ばせる程の武器と爆薬も携行している。悪あがき程度ならば充分に可能だ。

生存者達は概ね落ち着いている様子で、給湯室の冷蔵庫に入っていた飲料を飲んだり、乱れた呼吸を整えていたり、各人が思い思いに過ごしている。

沙耶はひとしきり泣いた後、漸く平静を取り戻したらしく、職員室に併設されている給湯室で浴びた返り血や肉片を洗い落としていた。女子生徒は涼しげな顔で椅子に腰掛け、寛いでいる。女性はこの中で最も疲弊しているらしく、自分の教員机に突っ伏したままぐったりとしていた。教諭らしき女性は、自分の机で呆けたように頬杖をついていた。

清田も少しだけ疲労を感じていた。肉体的よりも精神的なものによるのが大きかった。

五人の民間人を、誰の助けも無しに安全地帯まで連れていかなければならないのだ。

流星にこれからの事を考えると疲れを覚えずにはいられないが、下手に顔に出す訳にはいかない。救助すべき対象の前で、救助に来た自衛隊員がそんな顔をすれば余計な不安を与えるだけだ。

何事にも動じない、糞度胸を備えた鋼鐵の兵士を演じなければならぬのだ。

清田はフェイスマスクを僅かにずらして口元を少しだけ露出させると、水筒に口を付けた。

口を付けた途端に清田はその水筒が先程、女性に渡したものである

事を思い出し、急に恥ずかしさが込み上げて来た。

思わず、女性の様子を見遣る。彼女は突つ伏したままで清田には気が付いてはいなかったが、彼の脳裏には先程の情景が生々しく否応もなしに再生されていた。

自分が今、手にしている水筒の口を、あの女性の、瑞々しくぽってりとした魅力的な唇が触れていた。

飲み口の縁を注意深く観察すると、無味乾燥な暗緑色のプラスチックに薄つすらと口紅が付着していた。清田が口を付けた時、水の量は半分減っていたから、あの女性は貪る様に飲んだのだろう。

水にはあの女性の唾液が多く含まれている。意識していなかったとはいえ、清田は女性の“体液”を水と一緒に飲んでいた。

だからだろうか。代わり映えのしない水道水が、妙に甘美な飲み物のように感じられたのは。

他人の粘膜からの分泌物を自身の身体に取り込むという行為は、少なからぬ性的な妄想を惹起させるには充分だった。

それも、あれ程の美人ともなれば殊更に妄想を掻き立てられるのも仕方がない。清田は健全な青年なのだから。

女性は、大柄な清田からすれば一回りも小柄だが、女としては充分に背が高く、恐らく一七〇半ばほどもあるだろう。

しかし、ただ背が高いばかりではない。大人の女として充分に成熟しており、たつぷりとした乳房に充実した腰周り、と豊艶な肉付きをしている。

柔和な顔立ちの美人で、穏やかな雰囲気を漂わせているのも彼女の魅力の一つだろう。先程、彼女の体臭を嗅いだ際に消毒液の微かな匂いも嗅ぎ取れたので、この学園の保険医なのかもしれない。

優しそうな容姿の美人で、肉体的に充分に成熟し、尚且つ学校の保険の先生という三つの要素に清田は強く心を動かされるものがあった。

自衛官は、看護師や保育士といった職業に従事する女性と結婚する傾向が高い。

両者に共通するのは職場に同性ばかりという事もあり、異性との出



会いが少ないので自然と出会いを求めて、既知のつてを頼つての合コンが開かれたりする事が多く、更に自衛隊では未婚の曹を主な対象とした「ふれあいパーティー」なる、約二五万人もの人員を擁する日本最大の組織力を背景に開催される所謂お見合いパーティーがあり、独身隊員はここで将来の伴侶を見付ける事が多い。

また、それらの職業に従事する女性のイメージに、包容力があり、命を扱う仕事である以上しつかりとしている、というのがあり、自ずと演習などで家を留守にする事の多い自衛官は、安心して家庭を任せられる女性に惹かれるのだろう。

或いは、有事の際には戦場に赴く兵士という職業柄なのか、癒しを与える存在を無意識のうちに求めているのだろうか。

彼女ほどの容姿の持ち主を、世の中の男は黙って放って置く道理がない。

引く手数多な彼女は、今までの人生で恋人に不自由した事が無いのだろう。それもやはり、彼女の魅力に見合う男達が、熱烈にアタックしていたのだろう。

一体、今まで何人の男と寝てきたのだろうか。そして彼女は、その男達とどのようにしてベッドの上で乱れるのだろうか。

母性的ですらあるあの優しい目が淫靡に輝き、男を悦ばす為だけに口は食物以外のものを咥え、豊艶な肉付きの姿態で奉仕し、綺麗な指先が無骨な身体の上を妖しく這い回る様子を思い浮かべ、清田は場違いな興奮を覚えると同時に、そんな自分がとてつもなく恥知らずな人間に思えた。

糞。こんな時に俺は何を考えているんだ。そんな事を考えている余裕がお前にあるのか清田武一己を激しく罵ると同時に、そのような妄想に耽る事が出来るのであれば、今の自分はそれほど切羽詰まってはならず、余裕があると見做すべきだろうか。

余裕がなくなると、くだらない妄想を抱く事すら出来ないものだ。思考に余裕があれば、それだけミスを犯す確率も減る。

それが済むとフェイスマスクを直ぐに戻し、心の隅ではその水が金と同価値であるように想いながら、水筒の口を閉めてケースに乱暴に

突っ込むと、改めて生存者達一人一人の様子を見て回って声を掛けていった。

「大丈夫かい？」

最初に、床に腰を下ろして手にした武器―ガス圧式の釘打ち機―の簡単な点検と手入れを行っている小肥りの男子生徒に声を掛けた。

「は、はい」

男子生徒は清田に声を掛けられると驚いた様子で顔を上げ、戸惑いの表情を浮かべていた。

男子生徒と目線を合わせる為に清田は片膝を付いた。足に装着した防弾レガースが硬質な音を立てる。タクティカルゴーグルを鉄帽の前額部まで上げた。

「何処か怪我はしていないかい？ 何かあれば遠慮なく言ってくれ」

「僕は何ともありませんけど…その、高城さんが…」

「高城さん？」

男子生徒は給湯室の方を心配そうに見遣った。

清田は高城沙耶の事を知ってはいたが、当然の如く敢えて知らない振りをした。

「ツインテールの女の子です。何時もは強気なんですけど…さつきみたいに泣いているのなんて初めて見ました。何とも無ければいいんですが」

驚いた事に、彼はこの状況下で自分よりも他人である高城沙耶を心配していた。

そう言えば、この男子生徒は、バリケードの構築を手伝って貰う前に給湯室にいる沙耶の様子を見に行つて、彼女に何やら当たり散らされていた。

その頼りない外見とは裏腹に、このような非常時に他者を気遣える優しさを備えているとは存外に人間が出来ているらしい。

清田は彼が少しばかり頼もしく思えた。

「こんな時に他人を心配するなんてそうそう出来る事じゃない。君は凄いな」

清田は拳を握り、男子生徒の胸を軽く叩いた。

「いや、別に僕は…」

「謙遜しなくてもいい。これから暫くは行動を伴にするんだ。俺の名前は…田中だ。どうか俺を助けてくれよ」

心苦しさを覚えつつも、清田は本名を名乗る事はしなかった。

彼は右手のタクティカルグローブを外すと、その手を男子生徒に差し出した。

「平野耕太です。宜しくお願ひします」

耕太が怖ず怖ずと清田の手を握ると、少し強めにそのぷくぷくと肉付きの良い手を握り締めた。

耕太は痛みに顔をしかめたが、負けじと清田のごつい手を握り返した。

「いい返事だ。男だったら女を守らなくちゃいけないからな」

出会ったばかりで間もなく、素性も世代も異なるとはいえ、清田は耕太との間に確かな信頼を感じた。

「宜しく頼むよ」

清田は立ち上がり、次は給湯室にいる沙耶の様子を見に行つた。

「調子はどうかな？」

給湯室の出入り口を潜りながらそう声を掛けた清田だったが、直ぐに彼は石像のように固まってしまった。

先ず最初に目に飛び込んできたのは、真っ白なヒップから脚にかけての流麗なラインだった。

白桃を彷彿とさせる小振りなヒップは十代の健康的な少女らしく、染みや弛みとは一切無縁で、張りがあつて瑞々しい。

小鹿のようにすらりと伸びた脚は、清田の鍛え上腕と同じぐらいの太さしかなかった。

沙耶は、先程の自身の失禁の後始末をする為に、スカートとショーツを脱ぎ、下半身に何も身に付けていない状態で、給湯室の流し台に向かつてそれらを洗っていた。

彼女も、清田と同様に微動だにせず、厳つい闖入者を凝視していた。

「……」

先に動いたのは清田だった。

男を魅了して止まない、女子高生の剥き出しの白いヒップから視線をそつと外し、そのまま、まるで凶暴な獣を刺激しないように細心の注意を払いながら、そろりそろりと後ずさった。

「……最低っ！…この変態！…変態！…変態！」

だが、直後、沙耶は火が着いたかのように激昂し、声を張り上げて清田に罵声を浴びせ、顔を羞恥に染めながら思わず手にしていた自身のショーツを握り締めて彼に投げつけていた。

清田の視界が、白一色で覆い隠される。

丸まったまま投げ付けたショーツは、放物線を描いて丁度彼の顔に直撃し、その視界の殆どを隠すように被さっていた。清田は、頭に布を被せられた犬のように、そのままじっとしていた。

顔に被さっているショーツは、今時の女子高生らしく、シンプルな意匠ながらも自身のスタイルをより良く見せたい為か股上の浅いスキャンテイーで、手触りの良い高級そうな生地のもだった。

湿り気を帯びた生地からは水の匂い以外に、微かなアンモニア臭とその他の排泄物の臭いが嗅ぎ取れ、そういつた趣味の人間には堪らないアイテムかもしれないが、清田は思わず他人の排泄物の残滓の臭いにも臭いものになるのを堪えると同時に、どんな美少女の下着でも臭いものは臭いものなのかと少しばかり驚愕した。

美少女も、出すものは出すという訳だ。

ショーツを投げつけてから沙耶は、はっと冷静になって気が付いた。清田が硬直している理由が、自身の下着の発する臭気にある事を察し、己の迂闊さと、他人には知られたくはない個人的な実情を暴露してしまつた恥ずかしさに、更に顔を赤く染めた。

そして、今の自分が下半身に何も身につけていない事実を今更のよう思い出し、慌てて上着の裾を引っ張って前を隠そうとしたが、清田の完全に隠れていない視界には、沙耶の萌え始めた下腹部の草原がちらりと映った。

「か、返しなさいよっ！…この変態！」

腰が引けたまま沙耶はそう言った。

確かに、下着を投げつけるきつかけを作ったのは清田だが、実際に

そうしたのは自分自身であり、彼が彼女の手から奪った訳ではないので、いまいち説得力に欠けた。

今の彼女には学園史上類を見ない才媛と謳われた面影はなかった。目尻に涙を浮かべ、必死になって前を隠そうと上着の裾を引っ張りながら縮こまる沙耶は、追い詰められた小動物のようにしか見えなかった。

清田は、顔に覆い被さっている沙耶の下着を指で摘んで引き剥がすと、彼女を見ないように視線を背けながらずっと一歩前に出て、その手を差し出した。

沙耶は清田の手から自身が投げ付けたショーツを引たくるようにならんと、急いでスカートと共に身に付けた。

濡れた衣服が肌に触れる感触は不快だが、何時までも下半身を外気に晒している方がよほど不快で心許ない。無論、沙耶が衣服を身につける間、清田は彼女を視界に入れられないように背を向けていた。

本来ならばこの時、清田は気を利かせて給湯室から出ていくべきであったが、当初の目的は沙耶の様子を確認する事であり、それを果たさずに出ていったのであれば覗きに来たと思われても仕方がない。

「何処か怪我や、具合が悪いというのはあるかな？」

訓練などの小休止の際に健康状態を具に把握するのはもはや習慣と化していた。

我慢する事も時には大事だが、体調が優れないのに無理して訓練をしても普段通りの効果は得られないし、事故を起こしてしまつては元も子もない。

それに、指揮下の隊員の状況を把握するというのは非常に重要であり、これを疎かにする者は何処の国の軍隊でもないだろう。

この事はそっくりそのまま今のこの状況にも当て嵌まる。

今は、生存者達の状態をよく把握しなければその後の行動に支障をきたす恐れがある。

仮に誰かが足を怪我しているのであれば、自ずと集団の移動速度は低下する。

それを事前に把握していれば対策や意識をする事が出来、全く知らないというよりも行動は円滑に行えるだろう。

知っているとは知らないのでは大きな差があるのだ。

そういう事を踏まえて清田は沙耶にそう窺ったのだが、彼女は黙しただけだった。

やはり、早々と退散するべきだったか。

これぐらいの年頃の女の子は、自分の父親ですらに嫌悪感を抱くものである。それが、見ず知らずの男に自分の裸の下半身を見られて平気な筈がない。

怒りよりも羞恥でどうしていいか解らなくなっているのだろうか。

尤も、今時の大多数の女子高生は早熟でまかせていて、何人もの男との性交渉を持っているというのも珍しくはない。

そういった手合いならばそれほど羞恥を抱く事も無かつただろうが、沙耶に限って性に対して墮落した少女という訳ではないだろう。

あの苛烈な両親の血を引き、それ相応の教育を受けている彼女がそんな好奇心からのセックスなど自ら進んでやる筈がない。

自身の価値を承知しているからこそ、自身を安売りする真似など絶対に有り得ない。恐らく、今時にしては珍しい、貞淑な美少女というのが、清田の沙耶に対する見解であった。

長々と清田は思索に耽っていたが、結果として導き出されたのは、やはり沙耶も恥ずかしいので、早く目の前から消えて欲しいと思っているが、言葉に出せずにいるだけなのだろう。

こんな簡単な事を察してやれない自分の朴念仁振りに清田を辟易としつつ、給湯室を後にしようとした。

しかし、一步を踏み出した所で、清田の足は止まった。

不意に右腕を掴まれ、僅かにくいつと後方に引つ張られる。

ゆっくりと肩越しに振り返ると、沙耶が俯きながら、防弾素材のアームガードに覆われた清田の右腕を掴んでいた。

これはいよいよ怒らせてしまったのか、と清田は内心では身構えた。

沙耶の気性はお世辞にも穏やかとは言い難い、というのは何となく

だが察しがついている。

元々、良家のお嬢様なのだ。一般的な庶民よりも自尊心は高く、我也強いだろう。家柄に見合う為にはそれ相応の人格を身につけなければならぬのだ。

「……………」

小さく、ぽつり、と沙耶の口から言葉が漏れた。

声量が小さく、不明瞭であった為、何を伝えたいのか解らなかった。沙耶が怖ず怖ずと見上げると、清田は小首を傾げ、何を伝えたいのか理解しかねる、という感情を瞳に表していたので、意を決して再び口を開いた。

「助けてくれて、ありがとうって言ってるのよ…あと、私の名前は高城沙耶」

それだけ言うと、沙耶は耳まで赤くして目を伏せてしまった。

今の彼女は、コンタクトレンズではなく、シンプルで洗練されたデザインの眼鏡を掛けていた。

人によつてはきつい印象を与えるアーモンド形のぱつちりとした釣り目が、オーバル型の眼鏡フレームの御蔭か、幾分和らいだものを感じられた。

先程とは打って変わって、今の沙耶は随分としおらしく、そして可憐（いじら）しかった。

これが、この少女の本当の姿なのかもしれないな、と清田は思った。データでしか知らないが、高城沙耶という少女が背負うものは余りにも大きすぎるのかもしれない。

偉大な両親を誇りに思うからこそ、それに見合う娘として振る舞わなければならず、相応の能力と人格を身につけようがむしゃらで、それが知らず知らずの内に尊大な態度となって顕れているのだろう。父親が右翼団体の首領ともなれば周囲からは畏怖の入り混じった目で見られるものだろうから、それに屈さない強力な防壁を自分で築き上げねばならなかったに違いない。

人を寄せつけなくなってしまうのには、それなりの理由があったという訳だ。

先程の沙耶は全身の毛を逆立たせて威嚇する猫のようだったが、今は頭を垂れる従順な子犬のようだった。

清田はそんな沙耶を微笑ましく思った。

「いや、それが俺の務めだからね。気にしないで。それと俺のことは田中と呼んでくれ。今後ともよろしく」

控え目に言った言葉だが、我ながら臭い台詞だな、と清田は思った。「何処か具合が悪い、怪我等があれば遠慮なくいつて欲しい。応急処置程度ならば出来るから」

沙耶はこくりと頷いた。

取り敢えず、今の彼女は落ち着いているから、それほど心配しなくても良さそうだ。

他の生存者の様子を見に行こうとした清田だったが、沙耶は依然として彼の腕を掴んだまま離そうとはしなかった。

どうしたものかと沙耶を見遣ったが、彼女は暫く黙って清田の腕を掴んでいた。

ややあつて、顔を上げ、清田の目を真正面から見据えた。

その瞳には、先程の弱々しい少女のものではなく、明確な強い意志の輝きが見て取れた。

「聞きたい事があるんだけど、ちよつといいかしら？」

「…答えられる範囲であれば構わないよ」

嫌だとは言わせない、という強固な意志を言外に滲ませた沙耶の声音に、清田は内心で身構え、彼女のあまりの変貌ぶりに困惑していた。「分かったわ。じゃあ、ちよつとこつちに来て」

沙耶に手を引かれるまま、清田は給湯室の奥まった所まで連れてこられた。

こういう場所に引き込んだの話というからには、他人には聞かれない内容なのだろうか。沙耶は彼の手を離すと、真正面から向き直った。

「あなたの素性と、目的と、〈奴ら〉についてよ」

「…〈奴ら〉？」

素性と目的を聞かれ、一瞬表情が険しくなりそうな清田だったが、



何とか表には出さず、話を若干逸らす為に最後の質問だけをおうむ返しに言った。

清田は察した。

沙耶が他人に話を聞かれないのではなく、わざわざ自分に配慮してくれたのだ。

仮に清田が自身に纏わる事を白状したとしても、それは二人だけの秘密に留めておくという意志の表明なのだろう。

だが、迂闊に口を滑らす清田ではない。常日頃から機密情報に接する機会の多い特殊部隊の兵士が、己の秘密を軽々と口にするようでは務まらない。

「歩く人喰い死体の事よ。映画やゲームじゃあるまいし、ゾンビと呼ぶ訳にもいかないでしょ。あんたは自衛隊員なんだから、私達一般市民よりは何か知っているんでしょ？」

正直、生ける亡者に関して現段階では何も分かっていない。

判明しているのは、彼等に噛まれれば必ず死亡し、やがて同じ血肉を求めてさまよう獰猛な化け物となるぐらいだ。完全にその行動を停止させるには頭部の破壊及び首の切断、肉体を行動不能になるまで損壊させるしかない。

つまり、清田も沙耶と同じで大した知識は持ち合わせていなかった。

「現段階では感染者…いや、〈奴ら〉に関しては何も分かってはいない。分かっているのは、まあ、噛まれると同じようになるという事ぐらいかな。あと、感染者と呼んでいるのもあくまでその病理現象が感染症のようであるからであって、この症状を発現させる細菌やウイルスが具体的に発見された訳ではない」

「つまり〈奴ら〉に関して知っている事は、あんたも私達も大差がないってことね。ま、いいわ。〈奴ら〉の発生の原因を知ったところで私達にはどうする事も出来ないし…それで最初の質問に戻るけど、あんたの素性と目的を教えなさいよ」

先程の可憐しい少女の面影は消え失せ、今の沙耶は射るような厳しい眼差しで清田を睨みつけていた。

フェイスマスクに隠された清田の表情は少しも窺い知れない。

唯一露出しているその瞳にすら、爬虫類のように何の感情も浮かんではいなかった。

沙耶にはそれが気に食わなかった。

幼少の頃から、屋敷に出入りする両親の部下などの身の回りにいる大人は自分に傅き、類い稀なる才媛故に同世代は言うに及ばず、教師からも一目置かれていた。

決して自惚れている訳ではないが、沙耶は自身を客観的に評価した上で根拠のある傲慢さを誇示していた。

自慢の両親とその娘である自分は生まれながらの才能に恵まれ、またそれを伸ばす為の努力も怠ってはいない。

私は凄い。

私は偉い。

自慢じゃないが、それが純然たる事実なのだ――なのに目の前の男は、これっぽっちも自分の事を歯牙に掛けてすらいらないのだ。

沙耶にとつては面白い筈がない。

自身の能力に纏わる事に関して清田は知りようがないのでそれは譲ったとしても、この美少女といっても差し支えない容貌にこれといった興味を示さないのが、沙耶の女としての自尊心に傷を付けられたというのもあった。

見るからに堅物な兵士、というのは分かるが、こんなに美少女な女子高生を見て、目尻の一つも垂らさないのはどういう事か。

おまけに、失禁する姿を見られ、尚且つその後始末の現場まで見られている。他の異性である耕太にもそれは失禁は目撃されているのだが、沙耶にとつて彼は男としてカウントされていないので論外だった。

確かに、彼は命の恩人だが、だからといってその行為が気分を害さないという訳でもない。

それとこれは全くの別問題だった。

沙耶は些か自分自身が感情的になっているのを、己の冷静な部分で自覚していたが、心の一部分が理性の制御から外れていた。

理由などどうでも良かった。

泰然としている目の前の男の、多少なりとも狼狽した姿を見たいという嗜虐心が鎌首を擡げていた。

ジョン・ウエインに代表される、銃を身に帯びた姿こそが男らしいという欧米的な男根主義思想の実体であるかのような清田を、言葉で虐めてみたかったのだ。

沙耶自身も気付かぬ内に、その深層心理では、目の前に現れた、この場にあつては市民を守るのを当然の義務とする自衛官である清田に鬱憤のはけ口を求めてしまつていた。

普段の彼女からすれば、他人に当たり散らすという行為は唾棄すべきものだが、やはりこの生死の掛かった極限状況下では無意識の内にそういった対象を求めてしまつたのだろう。

どういった形であれ、人は何よりも自身の平穏を優先する。

幼稚なストレスの矛先を向ける適当な相手がいれば多少なりとも安らかになれるものだ。

「…俺は自衛官だ。ここには生存者の救出に」

「それが嘘だつていう事が分からないほどこっちは馬鹿じゃないわよ」

氷のように冷たい声音で、淡々と沙耶は遮るように言った。

先程まで従順な子犬のようだった少女の口から発せられた言葉とは到底思えなかった。

「平野…あのデブチンが言つてたわ。あんたが百歩譲つて自衛官だとしても、恐らく、普通の自衛官じゃないって。あんたのその過剰な装備が何よりの証明じゃないの？ 確か、あんたの部隊は、特殊作戦群つていう極秘の秘密部隊なんですよ」

あくまで沙耶は淡々としていたが、その胸中は鼠を遊び殺す猫そのものだった。

追及して下さいと言わんばかりに様々な材料をぶら下げている清田は幾らでも料理の仕方がある。

先程、自分の様子を見に来た耕太から齎された情報と推測は、彼のその膨大且つ深遠な軍事知識に基づいているだけあつて無駄なく合

理的なものであり、軍事に疎い沙耶ですら納得のいくものであった。想定していた事態が生じた、と清田は冷静に受け止めていた。

過剰ともいえる重武装と重装備で全身を固めた清田の物々しい姿が与える印象は、確かに素人にも彼が一目でただ者ではないということが解るだろう。

自身の正体が露見するという可能性が全くのゼロだとは思っていなかったが、まさか、たかが高校生にその正体がばれるとは思ってもしなかったし、同時に己の今後を危ぶんだ。

見えないテロやゲリラとの戦いでは、正体が明らかになったらその時点で戦わずして勝負は決している。

相手を先に探知した方が圧倒的に優位に立つのは常識だ。

テロリストやゲリラを、隙あらば寝首を搔いてでも容赦なく殺す特殊部隊の兵士は、その存在自体が彼等にとっては天敵である。エリートフォースの男達は、絶えず不穏分子を監視し、追跡し、不正規戦を仕掛けるテロリストを、不正規戦によって制するのだ。

故に彼らがテロリストのブラックリストに載るのは避けられない。彼ら自身は元より、その家族や親交のある者にすらテロリスト達は容赦しない。少しでも報復できるのであれば、一般市民を巻き込むのも辞さない、だから彼らはテロリズムに走るのだ。

そういった事態を避ける為に、特殊作戦に携わる男達はその存在を必要以上に秘匿する。

それらが彼らを銃弾以外から身を守る唯一の手段だからだ。

たどえ話したとしてもそういった可能性が全くの皆無であろうと、自身の正体についてべらべらと喋る奴はいない。そういった者は高い秘匿性を求められる特殊作戦では使い物にならないと見做されるからだ。

故に清田は先程、耕太に名前を偽って告げていた。

高校生に正体を言い当てられるようでは、いざ対テロ作戦に従事する際に自分は使い物にならないのでは、と清田は思わずにはいられなかった。

「何処も彼処もへ奴ら」だらけで、この学校と同じような状況となって

いる場所は幾つもあるのに、敢えて此処にやってきたのにはそれなりの理由があつて然るべき。ただの人命救助だなんて嘘っぱちでしょ」この状況と、特殊部隊の性質を知っていれば、自ずと答えは導き出される。

但しそれには、耕太のような軍事オタクがこの場においてこそだろう。そして彼は清田の正体に感づいていたとしてもわざわざそれについて言及しなかつただろう。

特殊部隊の男達が最も嫌っている事が、自身の正体が露顕するという事を知らぬ筈がない。

どうしても清田にはそれが理解出来なかつた。耕太はそれを承知している筈なのに、わざわざ沙耶にその事を話した。

今は余計な疑念を抱かせるべきではない。それが団結を阻害する可能性が十分にあるというのだ。

ただ単に、耕太の考えがそれほど回らなかつただけなのだろうか。所詮は高校生という訳か。誰かに自分の推論を話したかつたに違いない。

いよいよ清田は居心地が悪くなってきた。

このような思いは、特殊作戦群の選考検査の最終試験である口頭試問以来だつた。

清田はその試験に於いて、剣崎群長を始めとした本部幕僚達が勢揃いした目の前で罵倒され、精神的に痛め付けられた。自分がこれまでこなしてきた全てを否定され、究極の自己否定の波が押し寄せる中で、それをまた自ら口にする事を要求された。

今の状況はまさにそれだつた。

決して公にしてはならない己の存在を、自ら口にする事を要求されている。口が裂けてもそんな事は言えない。言つてしまえば、今まで積み重ねてきた全てを、自分から殴り捨てるようなものなのだ。

それは、特殊作戦群の一員となる為に人生を彩る多くものと決別してきた自分を裏切る行為であり、清田の魂は血の叫びを上げて拒否している。

そもそも、女子高生に自白を強要されているという状況には軽い眩

暈を覚えずにはいられなかった。

何処の世界に、女子高生に詰問される特殊部隊の兵士がいるのだ。そのような兵士は、恐らく、自分が世界で初めてだろう。

そもそも、文字通り小便臭い餓鬼の戯言などに生真面目に付き合う必要はない。

適当にはぐらかせばそれで済む筈なのに、清田は上手いカバーストーリーが思い付かなかった。

理由は解らなかった。

この少女に見詰められると、何故か洗いざらい吐き出してしまった衝動に駆られ、胸に得体の知れない甘い疼きを覚えるのだ。

俺は、マゾだともいうのか―苦痛に親しんできたからこそ、清田はある意味では真性のマゾヒストと言えなくもなかった。

己の命を投げ出すのも辞さない覚悟を求められるエスの一員は、どんな無理難題な命令にも従い、その遂行を求められている。

苦痛と困難を「愛している」からこそ出来る芸当である。特殊部隊の兵士は、皆自覚がないだけのマゾヒストであり、命令され支配される喜びを無意識の内に感じているのだ。

一回りも年下の美少女に問い詰められているという、倒錯的ですからあるこの状況に、本人の心が与り知らぬ所で少なからぬ興奮を覚えていたのだ。

「さて、反論の余地があるのならばどうぞ御自由に…まあ、あんたの口から何も言える訳がないわよね」

しかし、この問題はあつさり沙耶が引き下がる事で決着した。

厳しい顔から一転して、彼女は表情を和らげ、肩を竦めて見せた。「平野から色々聞いたけど、そういった部隊の兵士は自分の事や部隊の事なんて決して明かす事は出来ないものなんですよ？ 端からあんなの口から語られるだなんて期待してないわよ。私も意地悪くあなたに言っただけど、無理に言う必要はないわ。今、大切なのはあんたの素性や目的よりも、協力して脱出する事だもの。但し…」

不意を突いて伸ばされた沙耶の手が襟を掴め捕り、体重を掛けて体勢を崩されが、清田はすんでのとこで堪え、若干前のめりになった。

真正面から沙耶に眼を覗き込まれていた。

触れそうになるほど間近に迫った沙耶の、凄みを帯びた瞳に、思わず気圧される。

「根っからあんたを信頼している訳じゃないからね。それを、忘れな  
いで」

沙耶の慎ましやかな口許から、一言一言が囁かれる度に彼女の吐息がフェイスマスク越しに感じられた。

甘い痺れにも似た悪寒が背筋を走り、腰骨の辺りがざわついた。

清田は自分の心のその反応が信じられなかった。

十代半ばの、それも一回り以上も小柄な少女に、凄まれて「喜んで  
いる」なんて！

「これで私の話はおしまい。とつとと他の人の面倒でも見てきなさい  
よ」

沙耶は手を離し、身を引いてそう言った。

先程の雰囲気から打って変わって、今度は何処にでもいる、普通の  
女子高生のものであった。

清田は暫し、狐に摘まれたような顔で沙耶をじっと見た。

ころころと表情と雰囲気を一変させる彼女が、いまいちよく解らな  
かった。

「…なによ。私の顔に何かついてるっていうの？」

沙耶が、無言で立ち尽くす清田に怪訝そうな表情を浮かべたので、  
彼は慌てて給湯室から退散した。

これ以上、豹変しやすい沙耶を刺激するのは得策とは言えない。

やはり、彼女は精神的に不安定と見做すのが妥当だろう。一行の中  
では注意深く目を配ってやる必要があると胸に刻んだ。

「何処か、具合が悪いというのありますか？」

清田は、次に職員室で保護した女性教諭の様子を窺った。

彼女は、救助した一行の中では最年長と見られた。

年齢は三十代前半だろうか。しかし、年齢にはそぐわない滑らかな  
肌と成熟した色香が組み合わさった、とても魅力的な年上の女性だ。  
保険医と思われる女性ほどではないが、肉付きは豊満で、ページュの

ブラウスの乱れた胸元から覗くむっちりとした谷間が白く眩しい。

険のある顔立ちは少しきつい印象を与え、先程机の下から保護した時と変わって、リムレスタイプの眼鏡を掛けており、更にそれを強めている。

座っている机の位置からして、それなりの地位と役職にあるのだろう。だが、頬杖をついている左手の薬指には何もない。それは右手も同様だった。

「あっ…いえ、大丈夫です」

女性は少し、心ここにあらずと行つた表情で応えたが、タクティカルゴーグルの下から現れた清田の目と合うと、ほんのりと頬を赤らめた。

「…先程はすいませんでした。いきなり抱きついたりして…御迷惑をお掛けしました」

暫し間を置いてから女性は席から立ち上がり、恥じらいながら一礼した。

険のある美人のしおらしい姿が、思わず胸を焦がした。

「いえ、お気になさらないで下さい」

内心では先程の出来事は満更ではなかったので、逆に清田の方が恥ずかしかつた。邪な欲望を一瞬でも抱いてしまったので、彼女を正視できなかつた。

机の上に置かれたネームプレートに目を遣つてから口を開いた。

「林…京子さんでよろしいんですよね？ 私は田中といたします。これからの道中を御一緒させて頂きますが、どうかよろしく願ひします」

「はい。こちらこそ、よろしく願ひします」

恙無く自己紹介と挨拶を済ませ、次は女子生徒の様子を窺った。

この生存者達の中で、その静謐な美貌とは裏腹に、肉体的にも精神的にも最も頑健なのは彼女であると思做して間違いないだろう。凛々しい顔立ちは涼しげで、大して疲労した様子もなく、教職員の椅子に座って清涼飲料水で喉を潤していた。

「何処か具合は悪くない？」



「いえ、私は大丈夫です。それよりも、鞠川校医の体調があまり優れない様子ですが…」

女子生徒の言葉通り、その隣で机に突っ伏している女性―机の隅にあるネームプレートには「校医：鞠川静香」と書かれていた―は、確かに、先程よりも具合が悪そうだ。

「君も何かあれば言ってくれ。その為に俺はいるんだからな…それと俺の事は田中と呼んでくれ」

そのような自己紹介を済ませてから清田は念を押し、静香の傍による。

「具合はどうですか？」

そう呼びかけてみたが、先程の妄想の残り香の為か、清田は己の内面に深い羞恥を抱いた。

思わず、顔を俯かせ、視線が足元を彷徨う。

それが、タイトスカートが大きく破かれて露わとなった静香の白い太腿と、高級そうな紫紺のレースの下着を目にする結果となり、純朴な青年の心を責め苛んだ。

「…どうして、私達はへりに乗れなかったのですか？」

少しの間を置いてから、静香は、突っ伏したまま清田に尋ねた。

心なしか、その声にはやるせなさど憤りが感じられた。

事情を知らない彼らからすればその質問をぶつけたくなるのは当然だろう。

清田は暫し、これから告げる内容を躊躇ったが、どの道納得しようがしなからうが、動かぬ事実である事に変わりはない。

「この陣容で、感染者…ではなく、〈奴ら〉の集まる屋上を目指すのは危険と判断したからです。その数は膨大で、武装した一個分隊でも苦戦するほどのものでした。そこへ非武装の民間人を連れていけばどうなるか…：簡単に想像はつくと思います。まあ、何名かはこの修羅場を自力で潜り抜けられたようですが…」

ちらり、と清田は女子生徒を見遣った。

「毒島冴子です。剣道部で主将を務めております」

その視線に気付き、簡単な自己紹介をして軽く会釈をする女子生徒

―冴子の、毒島という珍しい苗字に清田は思い当たる節があった。

以前に、特殊作戦群に講演の為に招いた、海外でも高名なある剣術師範の苗字が毒島といい、その一人娘は高校生でありながらかの千葉佐那子にも勝るとも劣らぬ剣の腕前と記憶していた。

成る程。それならばこの修羅場を木刀一本で潜り抜けられたのも納得がいく。そして同時に、世間の狭さに驚きを隠せなかった。

「全員が全員、毒島さんのような実力を持っている訳でもなければ、自分のように銃火器で武装している訳でもありません。そして何よりも…」

沙耶のいる給湯室を見遣り、そして机に突っ伏す静香の薄い背中に告げた。

「先程の高城さんの精神状態と、著しく体力を消耗した鞆川先生を連れていくのは余りにも危険と判断したからです」

清田の率直な物言いに静香は、突っ伏したままぴくりと身体を震わせた。

「…へりに乗れなかったのは、私と高城さんの所為なの？」

腕に埋めていた顔を僅かに擡げ、静香はどんよりとした瞳で清田を見上げた。

それは光の消え失せた、絶望に染まり諦観した眼(まなこ)だった。学園から脱出できず、更にその原因が自分にあるような事を言われ、おっとりとした人柄である静香の胸中も流石に穏やかという訳にはいかなかった。

「それも一つの要因である、と考えるはいますが、必ずしもそれが全てではありません。数々の要因が重なった末に、現在の状況下に置かれていると思っして下さい。貴女方二人だけの所為では決してありません。自分が単独ではなく、仲間と此処に来ていれば、へりを目指す事も可能でした。そして…」

未熟な自分ではなく、経験豊富な先輩隊員なら、もっとまじな言葉をかけてやれただろう。

清田は言葉を紡ぐ中で、ただひたすら自分の不甲斐なさを悔やんでいた。

「今、重要なのは、過去を悔やむよりも次に向けて思考を切り替えていく事です。その為には全員が冷静になり、落ち着いて行動しなければなりません。それが、集団の生存率を高めめます」

規律と統率を失った集団が、砂上の楼閣よりも崩壊しやすいのは歴史で何度も証明されている。十分に訓練された軍隊ですらそうなるのだから、素人ともなれば言わずもがなである。

自分が先ず最初にやらなければいけないのは、化け物を吹き飛ばす事ではなく、生存者達を落ち着かせ、冷静な判断をさせられるようにする事だと清田は自覚していた。

「それに…自分は、貴女達を無事に安全地帯まで送り届ける為に残りました。どうか、自分を信じてください」

清田は膝を着き、静香に目線を合わせてそう言った。

その言葉に偽りは無い。

当初の目的は高城沙耶の身柄の確保であったが、可能であれば他の生存者の救出も念頭に置いて行動していた。

今は、この五人を必ず守り抜き、無事にこの地獄から脱出させる事を固く心に誓っていた。でなければ、今まで血反吐に塗れて行ってきた訓練の全てが無駄になってしまう。

任務の完遂は、単に己の義務を果たす為だけではなく、自分が自分である為に必要な証明に他ならなかった。

清田の真摯な想いが通じたのか、静香は突っ伏していた机から半身を起こすと、ゆっくりと頷いた。

今、この場で清田を責め立てても全くの無意味であり、自身の鬱憤を晴らしたとしても特に有意義な事ではない。

それに間近で接して解ったのだが、目出し帽から僅かに露出する清田の目元が思った以上に若く、その瞳は大人しい獣のような、大きなジャーマンシエパードのような可愛さがあると感じていたので、静香は彼に当たり散らす気にもなれなかった。

清田という男の素性は不明だが、その人となりは責任感の強い若者である事が察せられた。

「それで、あんたの気持ちは解ったけど、これからどうするの？勿論、

何か考えがあるんでしようね」

不意に背後から掛けられた声に立ち上がって振り向くと、沙耶が腕組みをして佇んでいた。

写真通りの強気な瞳を見て、精神状態は安定していると見做して問題ないだろう。

「新床第三小学校を目指します。現在、床主市全域で大規模な避難計画が立案されています。指定された避難場所からへりで民間人を順次脱出させ、安全な地域へ空輸するというものです。その指定避難場所の一つに新床第三小学校があり、そこが此処から一番近い避難場所でもあります」

「それでどうやってそこまで行くつもり？ 歩くのは嫌よ」

歩かせるつもりなど毛頭なかった。

清田は、冴子を除いた全員に強靱な体力など期待してはいない。

「車を使いたいと考えていますが…」

職員室ならば、教職員の誰かしらが通勤で使う車の鍵があるだろうと考えたが、仮に鍵があつたとしてもどの車のものなのかまでを判別する方法は、いちいち車に鍵を刺して確かめる以外にない事に気がつき、些か現実的ではないという結論に至った。

行き当たりばったりな自分に清田は愕然とした。

「車なら私を使いましょう」

静香がそう申し出た。

その言葉に清田は幾らか救われた気持ちになった。

「それならば歩くよりも安全で速く移動できるものね」

体調も回復し、新たな脱出の可能性がある事を清田から告げられたからか、静香は先程よりも気を取り直した様子だ。

プラダのハンドバッグの中から鍵を探し出そうとごそごそとやりだした。

「ところで鞆川校医、それは全員を乗せられる車なのか？」

「うっ…」

冴子の指摘に対し、静香はバッグを漁る手を止める事で答えた。

静香が所有するコペンでこの人数を乗せるのは難しく、特に清田の

ような大柄な人物には相当窮屈だ。

「無理…かも」

「それならば部活遠征用のマイクロバスはどうだ？ 壁の鍵掛けにキイがあるようだが…」

冴子は職員室内を見回し、学園が所有する二台のマイクロバスのキイがまだ壁の鍵掛けにある事を確認してから、そう提案した。

剣道部の遠征で幾度も使用した経験があったからこそその閃きだった。

「まだ、あります」

耕太が窓辺に寄り、駐車場にマイクロバスがあるのを確認した。

「よし。それでは、移動にはバスを使いましょう」

清田は鍵掛けからマイクロバスのキイを一つ取り、キーホルダーとして付いているタグに書かれた数字を確認した。

それはマイクロバスのナンバープレートの数字で、清田は窓辺に寄り、並んで駐車してあるバスの後部に双眼鏡を向けた。手に取ったキイは、手前に駐車してあるバスのものであった。

「鞠川先生、運転をお願いします。車番は42-39です」

「車番？」

「あ…車のナンバーの事です。手前に停まっている車両です」

うっかり口に出してしまった自衛隊用語に静香は不思議そうな表情を浮かべたので、清田はすっかり骨の髄まで染まりきった自分に嫌気が差しつつ、彼女にキイを渡した。

「あの、一ついいですか？」

手を挙げ、耕太が怖ず怖ずと申し出た。

「避難所に向かう前に、家族の無事を確かめませんか？ 僕の両親は外国にいたのでその必要はありませんけど、やっぱり家族の事が気になる人もいると思うので」

ちらり、と耕太は清田の顔色を窺った。

清田はその提案を了承するべきかどうか迷った。

耕太の、他人を気遣える優しさを無下にしたいくはないが、それが全員の命を危険に晒す可能性が無いとも言い切れない。

家族の安否を確かめようとして自分達が危機に陥っては本末転倒であり、また確認しに行っても出会えるとは限らない。

家族は家族で別の場所に避難しているかもしれないので、この行動が全くの無駄となる恐れがあった。

それかもしくは既に犠牲となり、歩く亡者と化して血肉を求めているのかもしれない。

暫く考えた末に清田は、黙って頷いた。

血も涙もない野郎と思われたくはない。それに自分の安全を優先すべきという選択も間違つてはいないが、家族を助けたいと思う人間として当たり前前の感情こそ、この状況下では大切にするべきだろう。

「決まりのようですね。しかし私も平野君と同様にその必要はありません。家族は父一人で、今は国外の道場にいます。心配ですが確かめようがありません」

「私も大丈夫。もう両親はいないし、親戚も遠くだから」

「私もです。父と母は田舎で、長いこと一人暮らしなので…」

冴子と静香、京子の申し出を受けてから、清田は沙耶に目を遣つた。「私の家は御別橋の向こうよ。多分、パパもママも無事だと思う。そう簡単に死ぬような人たちじゃないし」

両親の事は多少なりとも心配だが、沙耶はそれほど不安に思つてはいない口ぶりで言った。

沙耶の両親の素性については、事前に剣崎から知らされていた。

父親はこの県の国粋右翼団体の首領、母親は若い頃からウォール街では有名なトレーダーとして活躍していたらしい。

そんな両親を持つ沙耶の出自には驚きを通り越して何処か別世界に住まう天上人のようで、青森の片田舎で育った庶民の清田は思わず呆れてしまいそうだった。

「それでは、当初は高城さんの家に向かい、その後に避難所を目指すという事でよろしいですね？」

清田の言葉に一同は頷いた。

当面の計画はこれでいいだろう。具体的な目標があればそれに対して全員が一丸となって行動する事が出来る。

危険なのは、抽象的な目標を設定する事だ。闇雲に動き回ってしまい、状況を悪化させる可能性がある。

いつまで経っても目に見える結果が出せないと息詰まってしまう、それが士気を下げてしまう原因となる。

「ところで、またへりで迎えに来て貰うっていう選択肢はないの？」

無線機ぐらい持つてるでしょ」

沙耶が、疑問を差し挟んだ。

事情を知らない彼等からすれば、その方が安全だと考えるだろう。清田が先程の無線のやり取りを話すと、沙耶はそれで納得したようだ。

「それと蛇足ですが、自分が装備している無線機は交信距離が非常に短いものです。流星に遠方の司令部と連絡を取り合う事は出来ません」

清田が左脇腹のポーチに携行している個人用無線機はあくまでも隊員間同士での交信が目的であり、遠方の司令部と交信するならば浜岡が背負っていたマンパック型のように高出力でなければならぬ。もしくは、米軍のように衛星電話を持っていれば良かったのだが、生憎と特殊作戦群も防衛予算縮小の煽りを受けており、なかなか便利な装備を調達できないでいた。

「へえ…意外と役に立たないのね」

それを聞いて沙耶は残念そうに呟いた。

もしも清田ではなく、この場に通信担当の浜岡がいれば状況は少し違ったかもしれない。逐一、推移する状況を知る事が出来れば、わざわざ新床第三小学校を目指す事なく、もつと単純簡便な方法が見付かるのかもしれないが、仮定の話をして意味がない。

それに清田は、浜岡の大型無線機とは違い、大量の武器弾薬と爆薬を満載したデイパックを背負っていた。

無駄撃ちをしなければ充分過ぎる量だ。そして極め付けが、パックの横に括り付けてある、長大なポーチの中に収めてあるアルミニウムとグラスファイバー製の筒だった。

清田の装備はその気になれば戦車すらも撃破可能といっても過言

ではない。

それが二本、左側のポーチに収まっている。正直、この任務でこれは過剰な装備だと考えていたが、いざとなったらこれ以上に頼れる火力はなかった。

「概ね、今後の行動については纏まりましたね」

清田がそう締め括ると、一行は何時でも行動できるようにと身支度を始めた。

清田も、槓棹を引き、排莢口から弾き出された銃弾を手で受け止め、小銃から弾倉を取り外して異常の有無を確かめた。

装填してあるCマガにはまだたっぷりと弾薬が込められている。弾き出した弾薬を込め直してから、弾倉を小銃に叩き込んだ。

「行動する前に何点か。先頭は自分が進みます。左側面は平野君、右側面は毒島さん。自分の後方を鞆川先生、高城さん、林先生の順番で行きます」

〈奴ら〉を退けられる武器を持っている者が前面に出て、その後には非力な者が続くという陣形は当然だろう。

そして、耕太に左側面の警戒を担当させたのは、清田は右利きである為、自ずと左の脅威に対して銃を向ける場合は僅かに遅れるからだ。

実銃と比べるまでもないが、曲がりなりに飛び道具を有している耕太ならば左から接近する脅威を比較的速やか且つ安全に排除できるだろう。

右側面に配した冴子には、撃ち漏らした脅威を白兵戦で排除して貰う為だ。

清田は左よりも右の脅威に対して強いので、そうなる可能性は低いが、万が一という事を考えての保険だった。

「あと、可能な限りエンゲージ：交戦は避けて下さい。今は、スピードが命ですから」

それが済むと清田は封鎖された引き戸の前までやってきてバリケードを退かし始めた。

生存者達も彼を手伝おうとして加わる。あっという間にバリケー



ドは撤去され、鍵を解き、清田は音を立てないように戸をそろそろと開いた。

廊下にはへ奴らゝが二体いるだけだった。

清田は据銃し、サイトを通して狙いを定め、引き金を引いた。

押し殺された銃声が二度響き、蹴り出された藁藁が床を跳ね転がる。肉の叩き付けられる音が職員室まで聞こえてきた。

それが有無を言わさぬ、行動の合図だった。

## #1st day⑤

踏み出した一步は粘り着くようで、腕に抱えるフルカスタムのHK416がとてつもなく重い代物に思えた。

実際、清田が使用するHK416は様々な装備を追加されている為  
に通常のものよりも重量がある。

だがそれは、日々の訓練と自己の絶え間無い錬成のお陰で、しっかりと保持する事が可能な筋力を身につけていたのでさほど苦にはならない筈なのに、今は腕に力が入らない気がした。

恐らく、原因は、五人の民間人を無事に守り切らなければいけないという精神的な重圧によるものだろう。

今まで様々な訓練を経験し、あらゆる事態に対応可能なように能力を身につけた筈だったが、このような状況は全く異質だった。

どんなに危険な訓練でも常に傍にいたのはエスの仲間達だ。

彼等の技量は高く、肉体的にも精神的にも自分より優れている隊員は大勢おり、たとえ死と隣り合わせとなっても全幅の信頼を寄せる事ができた。

それが今では、清田は孤立無援の状態で凶暴な人喰い死体が闊歩する中を横断しなければならないのだ。

勿論、様々な想定に基づいた訓練の中に、敵中に於ける単独での破壊工作活動や戦闘行動等があったが、民間人の護衛は未経験だ。

だが、やらねばならない。

泣き言など言っても仕方がないし、言うつもりも毛頭なかった。

先程、二体の〈奴ら〉を撃ち倒したきりで、何ら障害に遭遇せず  
に階段を下りて正面玄関まで到達できた。

清田を先頭に、生存者達はなるべく音を立てないようにして靴箱の陰に隠れた。

清田は重装備を纏っているのです、敷いてある簀の子をうっかり踏んで音を立てないように気をつけた。

普段よりも重くなっている清田が踏めば、簀の子の板材が音を立てて軋んでしまうからだ。

正面玄関には、数えるのも嫌になる程の〈奴ら〉が犇めいていた。無論、視界に収められる範囲ばかりにいるとは限らない。

目に見えない場所にも、もつと多くの〈奴ら〉がいると想定して行動すべきだろう。

一発撃てば、忽ち群がられて喰い殺されるのが目に見えていた。交戦を避けて通り抜けなければならぬ。

それは不可能な事にも思えたが、そうしなければ生き残れないのであれば、そうするより他にないのだ。

「見えてないから、隠れる必要なんてないのに」

沙耶がぼつりとそう言ったが、自身も靴箱に隠れながらの発言を見る限りでは、彼女も己の推論に確証が持てないのだろう。

しかし、〈奴ら〉の群れの中を一切の音を立てずに突破した清田は、身を以ってそれが正しい事を知っていた。

〈奴ら〉に視覚が無いとはいえ、やはり身体を不必要に曝すのは心情的に抵抗があるし、必要以上に動けば物音を立てる可能性が高くなると考慮しての行動だった。

腰のユーティリティポーチから伸縮ロッド付きの鏡を取り出し、下駄箱の陰から様子を窺う。正面に両開きのガラス戸が見えたが、その通路上には数体の〈奴ら〉がたむろしていた。

銃にせよ刃物にせよ素手にせよ、排除しようとするれば少なからず音を立ててしまう。

完全なるサイレントキリングは不可能である。

現状では正面玄関を通り抜けるのが最良の選択だ。

校舎内を移動し、別の出入口から外に出るという方法もあったが、それは清田だけならまだしも、生存者を連れているとなると厳しい。

空間の限られた建物内では〈奴ら〉に囲まれた際に退路を絶たれる可能性が高く、人数が多ければ尚更だ。

だからこそ機動の制限を受けにくい屋外ならば仮にそうだったとしても切り抜けられる可能性がある。

そして駐車場に停まっているマイクロバスを目指すとすると、やはり正面玄関を抜けた方が近いというのもあった。

「私が先に行きましようか？」

冴子がそう申し出たが、それをあつさり承諾する清田ではない。確かに、元々大柄な身体が重装備によって更に動きが鈍っており、しなやかで身軽な冴子の方が機動力に優れているだろう。

だが、彼女が若くして剣に熟達していたとしても、「非力」な女子高生に一番危険な前衛（ポイントマン）をやらせる事など出来る筈が無かった。

こういう時だからこそ、自分が役に立たねばなるまい。その為の特殊作戦群なのだから。

でなければ諸々の手当が付いて、一般隊員よりも多く支払われている給料の意味がない。

「いや、自分が行きます。貴女はいざという時の為に控えていて下さい」

清田の言葉に冴子は無言で頷いた。

冴子は、決して自惚れではないが、剣術に関する腕には自信があった。しかし、「戦闘」に関しては、少なくともこの中の誰よりもプロフェッショナルである清田の言葉とあつては素直に従う他ない。

冴子は彼の事を、「人を効率よく殺す方法」を骨の髄まで叩き込まれている戦士と見做していた。

行動を起こす前に、清田は「戦術的呼吸法」を実施した。

人体は、体性神経系と自律神経系を通じて脳が動かしており、前者は腕を上げたり小石を蹴ったり、後者は人が意識的に動かす事の出来ない心拍数や発汗などを担当している。

しかし、呼吸と瞬きだけは何時でも体性神経系と自律神経系の制御を簡単に切り替える事が可能であり、それは人が眠る際に呼吸を意識的に行わなくても窒息せずに済む事で証明されている。

つまり、呼吸は体性神経系と自律神経系の懸け橋であり、呼吸の制御を身に付けければ完全とはいかないがある程度まで自律神経系の動きを自らの意志でコントロール可能となる。

そして自律神経系には交感神経系と副交感神経系の二つがあり、適切な呼吸法を行えば交感神経系による反応、いわゆる恐怖と怒りの手

綱を握る事が出来る。

それはほんの少しの心構え程度のものかもしれないが、あるのとな  
いのとでは雲泥の差がある。

清田はフォーカウント法を好んでいたのでそれを実施した。

まず、ゆっくり四つ数えながら鼻から息を吸い、腹を風船のように  
膨らませる。

そこで息を止めて四つ数え、またゆっくり四つ数える。

今度は口から息を吐き、空気の抜けた風船のように腹をへこませ  
る。

息を吐ききったところで、息を止めてまた四つ数えたら、この手順  
をまた最初から繰り返し返す。これを三度繰り返し返すと、緊張が解れ、精  
神状態が落ち着いてくるのが分かった。

古典的なオペラント条件付けにより、その効果はより高められてい  
た。呼吸という一つの動作に集中する事で、無駄な雑念が消え失せる  
ようだった。

そうだ。何事も先ずは落ち着け。そうすれば上手くやれる―重装  
備を身に纏い、決して身軽とはいえない状態でも、流水の如く淀みの  
ない”動きで、清田は音もなく下駄箱の陰から進み出た。

通路上には数体の「奴ら」が、声にならぬ呻きを上げ、ゆらゆらと  
海草のように揺れながらぼんやりと佇んでいた。

どれもこれもが無惨な最期を遂げてもなお、安らかな死を迎えられ  
なかつた生徒だった。

心が今にも悲鳴を上げそうだった。彼らの事や、その家族の事など  
を思うと痛ましい想いで胸が張り裂けそうだった。

だが、今はそんな事を気にかける事すら許されない。感情を押し殺  
し、清田は「奴ら」の眼前をそよ風のように過ぎった。

平静を装っているが、清田とて恐怖は感じていた。しかし、それら  
は事前に行った戦術的呼吸法のお陰で抑制されていた。

「奴ら」は、鼻先にいた清田に気付く素振りさえ見せず、ただ呆然と  
虚空に視線を漂わすだけだった。

足元に落ちていた、誰かの脱ぎ捨てられた靴を手に取り、奥の壁際

の傘立て目掛けて投げると、命中し、盛大に音を発した。

今まで無反応だったへ奴らは、一斉にそちらを気怠げに振り返り、覚束ない足取りで歩み出した。

清田は隅に寄り、へ奴らが通り過ぎるのを待った。

玄関内のへ奴らが音が立てた傘立て周辺に集まったのを確認し、蝶番が軋まないように慎重にガラス戸を開いた。

そこからでも、外には遥かに多くのへ奴らがいるのが確認されたが、今はそれについて考えるべきではない。

思考を分散させると集中力の低下に繋がる。  
重要なのは、取り敢えず生存者を校舎の外へ連れ出す事だ。

清田は冴子に合図を送り、周辺の警戒に取り掛かった。

生存者達は極力音を立てないようにゆっくりと慎重に進み、清田の先導で正面玄関から外へ出た。

外にうごめく途方もない数のへ奴らは壮観でさえあり、絶望するには充分過ぎた。

生存者達の反応は様々だったが、年相応以上の冷静さを身に付けているだろうと見做していた冴子でさえ、思わず息を呑むのを清田は見逃さなかった。

清田は手招きし、生存者達を自分の背後で固まらせてその場にしがみ込むように指示した。

「耕太君」

清田は小声で耕太を呼んだ。

耕太は中腰でその背後までやってきた。

「何ででしょうか？」

「デイパックの背面にグレネードポーチが沢山括り付けられているだろう？ 最上段のポーチから手榴弾を二個、取り出して俺に渡してくれ」

清田の指示通り、耕太はデイパックに括り付けられたグレネードポーチから二個の円筒形の手榴弾を取り出し、彼に手渡した。

耕太は缶コーヒー程もある、その特殊な形状の手榴弾がどのようなものであるのかを察した。

「これから大きな音を出してへ奴ら」を誘導します。全員、その場にしやがんだまま耳を抑え、爆発を見ないようにしてください」

生存者達は素直に清田の言葉に従い、手で耳を抑えてその時を待った。

全員が指示に従ったのを確認してから、清田は右手で保持している手榴弾の、何かに引つ掛けたりして抜けないようになっていている安全ピンの割りを戻してから、左手の人差し指を安全ピンのリングに通し、引き抜いた。

映画のように手榴弾の安全ピンを口に咥えて引き抜こうとすれば、歯が何本か抜けるだろう。それ程までに手榴弾の安全ピンは固く抜け難くなっているのだ。

今、手榴弾は右手で弾殻ごと握り締めている安全レバーにより遅発信管が撃発されない状態でいた。

清田は渾身の力を込めて手榴弾を投擲した。

思わず雄叫びを上げそうになったが、それは学生の頃やっていた陸上競技で染み付いた習慣だからだろうか。

回転しながら放物線を描く手榴弾から安全レバーが弾け飛び、解放された撃針によって遅発信管が点火された。

手榴弾は清田の狙い通り、進行方向上にたむろするへ奴ら」から離れた場所に落下した。

手榴弾の爆発に備え、距離があるとはいえ、清田もその閃光と音響から目と耳を庇った。

直後、昼間の最中にあっても網膜を焼く240万カンデラの超新星のような煌めきと、ジェットエンジンが間近で発する轟音よりも大きな180デシベルという爆音が轟いた。

特殊音響閃光手榴弾(スタングレネード)と呼ばれるこの手榴弾は、爆発時の凄まじい爆音と閃光により、付近の人間に一時的な失明、眩暈、難聴、耳鳴り等の症状と、それらに伴うパニックや見当識失調を発生させての無力化を狙って設計されている。

威力の逃げにくい閉鎖空間内で使用した場合、どんなに鍛え込んだタフガイでも思わず顔を覆ってうずくまる程の代物だ。

たとえ空間の開けた屋外で尚且つ距離があつたとしても、その閃光と爆音は少しも減衰する訳ではない。

離れた場所で耳を覆っていたのに、痛む鼓膜に清田は思わず顔をしかめた。

その目論見通り、マイクロバスへと至る進路上にいた〈奴ら〉はスタングレネードの発した轟音に釣られて歩き出していた。

〈奴ら〉のどれもが、その威力に怯んだ様子はない。ただの大きな音としか捉えていないようだ。

進路上の〈奴ら〉の姿が疎らになり、且つ大音響に引き寄せられた新たな〈奴ら〉が集まるより前に、清田は生存者達に移動を促した。

「さあ、行きましよう。今が一番、障害が少ない」

清田を先頭に一行は移動を開始した。

清田は予備のもう一つのスタングレネードをポケットに挿込み、〈奴ら〉の間隙を縫って生存者達を先導した。

途中、清田らの存在に気が付いた〈奴ら〉が数体いたが、近付いてこようとする〈奴ら〉にはその頭に灼熱の弾丸を撃ち込んで清田が尽く無力化していった。

清田はハリウッド映画のアクションヒーローのように曲芸じみた射撃は出来ないが、戦闘で生き残ったプロの兵士達が実践していた堅実な射撃術を身につけており、少しも撃ち漏らす事は無かった。

しっかりと左手で銃身下部に装備された擲弾発射器を支え、右手で小指から順に握把を握り締めながら肩付けを行い、右腕を引き締め、真正面からACOGサイトの上部に据え付けられたホログラフィックサイトを覗き込み、引き金は優しく真つ直ぐに引き、呼吸は静かに吐き出した。

少しでも身体のぶれを軽減する事が命中率を向上させるのだ。

自身が移動しながらで、尚且つ標的も緩慢とはいえ動いているとなれば近距離でも外す可能性は高い。

だから清田は、生存者達に被害が及ばないと思われる距離にまで接近してきた〈奴ら〉のみに的を絞り、最小の銃撃で迎え撃っていた。

冴子と耕太の出番は無かった。



勿論、清田は彼らを最初からあてになどしていなかった。

確かに、二人はへ奴らへに対する有効な武器を保有し、事実それを用いて今まで生存してきた。だが、民間人を救出に來た現役の特殊部隊の兵士が、専門的な訓練を受けていない彼らの戦力をあてにしろという事自体がありえなかった。

スペシャルフォースの男達は、同じ苦しみと困難を分かち合った仲間にはか背中を預けない。

むしろ、預けられないというべきだろう。

特に、咄嗟の判断力を要求される屋内近接戦闘に於いてはそれが顕著である。

部屋をクリアリングする際、チームの各人には役割が付与され、それは絶対に遂行しなければならない事とされている。

例えば、部屋の右隅の安全の確保という役割を与えられれば、ルームエントリーの際には絶対にその方向以外に銃口を向けてはならない。

重武装のテロリストが自分の左側にいたとしても振り向いてはならないのだ。

相手の銃口がこちらの無防備な脇腹に照準されていて、引き金を引けば確実に致命傷となる箇所命中するのが明白だとしても、強烈な自己保存の本能に逆らっても愚直に任務を全うしなければならぬ。

だが、それは、諦観にも似た冷静さだけの御蔭ではなく、傍にいる仲間が自分の担当以外の方向にいる敵を絶対に制圧してくれるに違いないという信頼に裏打ちされているからこそである。

お互いに、それをやってのけるだけの訓練をこなし、高度な技術を身につけているのを知っている。自分の役割が疎かになれば仲間には死に、それによって自分も死ぬという事も嫌というほど叩き込まれている。

どちらか一方が欠ければ生存率が大幅に低下し、そして任務が失敗する確率も跳ね上がる。つまり、一蓮托生の運命であるならば自ずと強く結び付くものであり、また、過酷な体験を共有しているからこそ

肉親よりも深く強固な絆が育まれるのである。

それがいざ戦闘となれば、これほど強力な武器となりえるものは他にはなかった。

マイクロバスに辿り着くと、清田は銃口を擬しながら車体の周囲や下を素早く見回し、〈奴ら〉の危険が無い事を確認した。

「鞠川先生、鍵をお願いします」

静香からバスの鍵を受け取り、乗降扉を開けて車内をクリアリングしてから存者達を招き入れた。

「エンジンを何時でもかけられる状態にしておいて下さい」

静香に鍵を渡す際にそう指示し、ポケットに挿込んだ予備のスタングレネードを取り出す。

エンジンを始動させる前に〈奴ら〉を遠ざけなければ、エンジン音に引き寄せられて集まった〈奴ら〉に忽ち進路を塞がれる恐れがあった。

マイクロバスが普通の乗用車よりも車体と車輪が大きいとはいえ、何体もの〈奴ら〉を轢いて乗り上げれば横転する可能性がある。その為には再度、〈奴ら〉の注意を逸らして引き離す必要があった。

安全ピンを抜き、スタングレネードを校舎の方へと投擲した。

数秒の後に、あの大音響が響き渡り、マイクロバスへ向かつてのろのろと歩いていた〈奴ら〉の進路が反転した。周囲に群がり始めていた〈奴ら〉もバスから離れていく。

生存者達は既に清田の意図を察していた。

物音を一切立てる事なく、じつと息を殺して〈奴ら〉の動向に目を懲らしている。

清田は、〈奴ら〉の一体と目が合ったが、幽鬼のごとく虚ろな表情で通り過ぎるだけだった。

視覚はなく、聴覚にのみ頼っているという事を頭で理解していても、薄い窓ガラス越しに遠ざかる先程のその一体が、今にも振り返るのではないかという不安に駆られ、清田もその動向から目を離す事が出来なかった。

マイクロバスの進路上と周囲から完全に〈奴ら〉の姿が消えた時点

で、清田は極力音を立てないように乗降扉を閉めて助手席に移動し、背負っていたデイパックと散弾銃を助手席の足元に降ろして静香の傍に寄った。

「それではエンジンをかけて下さい」

「は、はい」

清田は静香にエンジンを始動させるように指示したが、上擦った声で応じた彼女の表情は固く強張り、ハンドルを握る手には力が入りすぎていて、白魚の如き指が尚更白かった。

その様子を見れば、静香が酷く緊張しているのが手に取るように解った。

「…鞆川先生、マイクロバスの運転は初めてですか？」

清田の問いに、静香は緊張した面持ちのままこくりと頷く事で答えた。

極度の緊張状態では事故を誘発する恐れがあるが、初めて運転する種車ともなれば尚更に危なっかしい。

それに加えて、ハンドルを握るといふ事は、同乗者達の命をも握るといふ事でもある。

今、この切迫した場面で、何人もの人間の命を一時的にとはいえ預からなければいけないという事実は、思った以上に静香にとって重荷だったようだ。

生存者の中では大人である静香に、己の専門とする戦闘以外で車両の運転程度ならば任せても問題はないと考えていた清田だったが、どうやらそうも言っではいられなさそうだ。

事故を起こせばそれは即、乗っている全員の生命に直結してくる。折角ここまで生き延びたのに、不慣れな静香に運転を任せただけに全員が死んでしまったら元も子もない。

少しばかり張り詰めた神経を休めたかったが、ここは自分が運転するしかなさそうさだ。

「バスは自分が運転しますが、その代わり道案内をお願いしても宜しいですか？」

「は、はい」

清田は運転する際に邪魔になるのでスリングベルトで身体に括り付けている小銃を外し、安全装置をしつかりと掛けて助手席に置き、静香と交替して運転席に座った。

腰周りに付けている装具が邪魔で座席に座りづらい上に、重装備で着膨れした姿では思った以上に運転が難しそうだ。

半長靴を履いたままの運転を前提とした自衛隊車両と仕様が異なるので、タクティカルブーツを履いた足だとうっかりペダルを踏み間違えてしまうだろう。

だが、少なくとも、不慣れな静香よりはマシだ。

清田は視界を少しでも広く確保する為にタクティカルゴーグルを押し上げた。

キイを捻ると、咳き込むようなセルモーターの回転音の後にエンジンが始動する。

清田は全員が席に座っているのを確認してからクラッチを踏んでギアを換え、サイドブレーキを引いた。

「それでは発車します」

ゆっくりとアクセルを踏み、バスが発車する。

エンジン音に釣られて「奴ら」が再度こちらに向かってきたが、その鈍足ではもはや安全な移動手段を得た生存者達に追い付く事は叶わかった。

バスは混乱の最中に開け放たれた校門を抜け、高台に立てられた学園から降る道路を走る。

フロントウィンドウ越しに差し込む陽光に思わず清田は目を細めたが、視界に広がる、至る所で黒煙を吹き上げる市街地の惨たらしい惨状まで和らげる事は出来ず、暗澹たる想いが胸中を支配するばかりであった。

†

長閑な田園風景に囲まれた郊外の県道を、マイクロバスは生存者達を乗せて市街地を目指しひた走った。

車内では誰もが口をつぐんでおり、重苦しい雰囲気だった。

学園を脱出した当初は、全員が歩く人喰い死体の巣窟から生還した

という事実にあ堵しており、その喜びを噛み締めるように実感していたが、清田が少しでも現在の最新情報を得ようとスイッチを入れたカーラジオから流れる音声に、次第に生存者達の気力は奪われていった。

情報が錯綜するばかりで事実を伝える事は無く、ひたすらに混乱だけが広がっている。

そもそも、被害や犠牲者の正確な全容など誰も分かりはしない。ただ判明しているのは、歩く人喰い死体が生者を襲うという事だけである。

内容のない曖昧な情報だけが繰り返されるばかりで、縋り付く事さえ出来なかった。

ただ一つ、ラジオから得られた有益な情報は、現在、床主大橋・御別橋方面は対岸の床主市東部に避難する市民で大変混雑しており、これ以上の無用な混乱を避ける為に避難するのであればなるべく車両ではなく徒歩でいくようにという呼び掛けであった。

このままマイクロバスで進んでも、いずれ交通渋滞に巻き込まれて停滞を余儀なくされる。身動きが取れない状態でもしも〈奴ら〉に囲まれたらと想像するだけで恐ろしい。

小回りの利かない凶体のかいバスを何処かで放棄し、徒歩で当初の目的地である高城邸を指す事を視野に入れるべきだろう。

そうなった場合、清田の負担はより重くなるだろうが。

あれこれと考えていると、前方の道路上を農家らしき格好をした男性がふらふらと覚束ない足取りで歩いていった。

生存者かと思つて一旦アクセルを緩めた清田だったが、距離が近付くにつれてその容貌が明らかとなる。体中を獣に食られたようにして血塗れとなつている時点で、彼が既に〈奴ら〉の仲間入りを果たしていると思ふに違いない。

清田は再びアクセルを踏み込んだ。

接近するマイクロバスの存在に気が付いたその一体の〈奴ら〉は、瞳なき目を向けたが、既に大きな車体は猛然とその脇を擦り抜けていった。清田がわざわざぶつけて車体を破損させてまで無力化する必要

性もないと判断しての事だった。

今のさまよい歩くへ奴らへの一体を見て、清田は改めて危機感を募らせていた。

人口がそれほど密集していない郊外とあって、田園風景が広がる景色ばかりで学園を脱出してからというもの、あの一体を見るまでは遭遇してこなかった。しかし、市街地に近付くという事は、へ奴らへが蠢き仲間を増やし続けているその渦中へ飛び込む事と同義であり、風景に建物が増えていくにつれて事故を起こして放棄されている車両なども見られるようになってきた。

「！」

清田は慌ててブレーキを床に接するほどまで深く踏み込み、車体に急制動を掛けた。

前方に事故を起こしてフロントバンパーのひしゃげたダンプカーと、逆さまにひっくり返っている乗用車を認めたので予め徐行してはいたが、ダンプカーの大きな車体の影から新たな乗用車が猛スピードで現れた為だった。

ダンプカーの影から現れた黒塗りのセダンも急ブレーキを掛けて止まった。

あわや正面衝突するところであった。

「何してんだっ、殺すぞこらあつ！」

全面スモークガラスのセダンに乗っていたのは、やはりガラの悪そうな男だった。

男はホーンを鳴らしながら運転席から身を乗り出して怒鳴り付けてきた。が、清田は全く相手にする事なく、車体をバックさせてセダンに道を譲った。

暫く男は何かしら喚いていたが、やがて気が済んだのかそれともこれ以上喚くのは貴重な時間を浪費するばかりであるという事実に気が付いたのか、郊外へ向けて走り去っていた。

運転席に座るのが普通の運転手ではなく、厳つい重装備の兵士であるのに気付いた様子はなかったが、それは恐らくバスのフロントに書かれた『私立藤美学園高校』の文字と、運転手まで観察する余裕が男

にはなかった為だろう。

バスのフロントの文字だけを見て男は、運転席に座るのも学校職員  
のオヤジだろうという先入観を持って決め付けていた。しかし仮に、  
清田の存在に気が付いたとしても保護を求めるといった発想に到る  
事は無かつただろう。

まさか、自衛隊員が部活遠征用のマイクロバスを運転してこの場に  
いるとは思うまい。戦闘服姿の清田を一目見た所で、頭のいかれた軍  
事オタクと見做し、わざわざ関わりを持つとはしないだろう。

再びバスを走らせながら、清田は暫し物思いに耽った。

先程の、自分達以外の〈生きている〉人間に出会ったからこそ思い  
起こされた。

何も障害となるのは〈奴ら〉ばかりではないという可能性だ。

〈奴ら〉の危険性については既に嫌というほど思い知らされている。  
だが、死の危機に瀕して自暴自棄になった人間や、生き残る為であれ  
ば躊躇なく犯罪に手を染める人間もまた危険である。

政府機能が麻痺するほどの混乱ともなれば警察の治安維持能力を  
許容量をあつという間に超えてしまい、どさくさに紛れての暴動や掠  
奪が横行するかもしれない。

幾度となく大災害に見舞われた経験のある日本では、表立って大規  
模な暴動が発生したと報じられた事例は少ない。

その理由が、日本人という全体の和を優先する島国民族の特有の精  
神的社会主義によるものだと言われるが、最も重要なのは昔から天  
災に慣れ親しんできたからこそその高い災害対策能力があるからだ。

一般的な先進国の、普通の市民として自ら進んで積極的に法を犯そう  
とは思わないだろう。そうせざるをえないのは、安定した食料と水の  
配給がなされず、生きていくにはやむを得ないと判断するからだ。

中には火事場泥棒目的の不心得者もいるだろうが、大多数の善良な  
市民はこうだ。

自分達の命が政府によって保証されているのであれば、犯罪を犯す  
必要などある筈がない。全国的にほぼ同時に発生した殺人病の蔓延  
は、日本の災害対策能力や治安維持能力の上限を一気に超えてしまっ

ているから、ここまでの騒動に発展しているのだ。

もしも初期段階で押さえ込まれていれば、自衛隊が出動する必要性など絶対に無かっただろう。

市街地に行けばまだ逃げる事の叶わない大勢の市民がいる。彼等の誰もが生き残る為に必死の筈だ。

その彼等と出会い、清田の存在と身分に気がつけば、善悪に関わらずその意志の矛先が向けられるだろう。

その時、一体どうすればいいのか。

任務は高城沙耶の安全が第一だ。

しかし、果たしてそういった状況に直面すれば任務どころの話ではなくなるかもしれない。

清田はそつとレックホルスターに収めてある拳銃に触れた。

守るべき国民に対して銃を向けざるを得ない状況が生起するかもしれない可能性は充分にあるだろう。

だが、その時、自分は非情に徹する事が出来るのだろうか。

今、この場で答えを出すのは躊躇われた。

物思いに耽りながら運転していた為か、いつの間にか頭上より降り注ぐ爆音に気が付いたのは、視界の隅を低空で掠め飛ぶヘリコプターの機影を認識してからだだった。

残念ながら自衛隊のものではなく、民間の報道ヘリだった。もしも自衛隊機であれば、携行しているTACBE戦術ビーコン発信機兼無線機で連絡する事が出来ただろう。

TACBEは、上空なら付近まで飛んできた搜索機や救助ヘリと、地上ならごく近距離であれば無線通信で会話もできる。

その報道ヘリは不安定な飛行を行っていた。理由は直ぐに分かった。

ヘリのスキッドに、数体の〈奴ら〉が鈴なりになってぶら下がっていた。恐らく、取材する最中、押し寄せる〈奴ら〉の群れに飲み込まれる直前になんとか離陸したのだろう。

相当焦っていたらしく、レポーターらしき女性はキャビンに乗り込めなかったようで、乗降扉に懸命にしがみつくと堪えていた。



「……………!!」

その瞬間を目撃したのは、フロントウインドウ越しに広い視界を得られる、運転席と助手席に座る清田と静香のみであった。

〈奴ら〉の一体が、女性の足に食らい付いた。

それからはあつという間の出来事であった。

相当の激痛に、思わず扉を掴む手が緩んでしまったのだろう。女性は、〈奴ら〉と共にへりから落下した。

低空を飛んでいるとはいえ、あの高さから落下すればまず助からないだろう。仮に助かったとしても重傷は免れず、また、その状態で僅かばかり生き長らえてもそれは地獄でしかない。

静香はその衝撃的な光景に、反射的に手で顔を覆って遮ったが、一部始終は網膜を通して深く脳裏に刻み込まれていた。

遠目だからこそ細部は不鮮明だが、それを補うかのように女性の恐怖と絶望に歪んでいたであろう表情を想像してしまい、ただただ細い肩を震わせて戦慄するばかりであった。

清田も、流石に心地好いものではなかった。

ちらり、と清田は横目で助手席に座る静香を見遣った。

傍から見ても気の毒と思えるほど彼女は怯え、憔悴しきっていた。車を何処かに停め、少しでもいいから休ませるべきだろう。

でなければいずれ、積み重なった心労で床主市からの脱出を待たずに彼女は駄目になってしまう。

前方に、新たに衝突事故を起こしてそのまま放棄されている二台の乗用車が見えた。丁度、右側車線の路肩部にも砂利敷きの駐車場が確認できた。

清田はそこへバスを乗り入れ、エンジンを切って停車させた。

エンジンを切ったのは、音を少しでも抑えて〈奴ら〉に捕捉されないようにという創意であった。

「ここで暫く休憩します。何かあれば、遠慮なく自分に言ってください」

そう言ってから席を立ち、傍らの静香に寄る。

彼女は俯いており、その表情は垂れる下がる長い髪に隠れてしまっ

て見えない。

「大丈夫ですか?」

なるべく優しく、穏やかな声で伺うが、静香は反応を示さなかった。暫し、根気強く反応を待っていると、彼女は顔を上げ、今にも泣き出しそうな潤んだ瞳で清田を見た。

「…辛いのは解りますが、今は耐えてください」

気の利いた優しい言葉を掛けてやれない自分に腹が立った。

辛いのは全員同じだ。

そんな簡単な事ぐらい、静香は百も承知だろう。

しかし、だからといって、折り合いをつけて向き合えるかどうかは別だ。

心の強度には個人差がある。

それを無視する訳にはいかないだろう。

「自分が、全力で皆さんをお守りしますから、どうか信じてください」

静香は弱々しく、こくり、と頷いた。

その様子があまりにも痛ましくて、清田は胸を締め付けられるような想いに駆られた。

同時に己の無力さを思い知らされた。

重装備で固めた自分の厳つい姿が、少しも安心感を齎さない事に。

「トイレは大丈夫ですか? 我慢しないでくださいね」

「……………少し」

沈黙の後に静香はぼつりと答えた。

気分が酷く落ち込んでいても、人体の生理的欲求に変化はない様子だ。

「解りました。少し、待っていて下さい」

清田はデイパックを背負い、散弾銃を身に付け、小銃を掴むと、他の生存者達に用を足したい者がいるかどうかを念入りに尋ねて回った。

「田中さん。少し、宜しいですか?」

京子の席へ行くと、彼女は顔を寄せ小声で囁いた。

その表情は何故か、心配そうな様子だ。

「何でしようか？」

ふわり、と香る大人の女の薫りに少しくらりとしながら、清田もつられて声量を抑えて応じる。

「田中さんは男性ですから、女性の…その、デリケートな面倒を見るのは大変ではないですか？　もし、宜しければ、私もご一緒しましょうか？」

京子のその控え目な申し出に、清田は心の底から救われるような思っていた。

今の彼女は、発見当初からすれば別人のように落ち着いている。

生存者の中では最年長であり、親元から離れた生徒を預かる教育者を纏める責任者としての誇りと自覚が、京子に冷静な思考と行動力を齎しているのだろう。バスの運転中、清田に代わって甲斐甲斐しく生存者達の面倒を見てくれており、それも密かに有り難かった。

「ありがとうございます。そうですね…：…お願いします」

清田は逡巡してから、その申し出を承諾した。

車外に出る事が危険なのは、京子は百も承知だろう。それを踏まえ、彼女は清田の手助けがしたいと申し出てくれた。

清田としてはその好意は素直に嬉しく、助かるものだが、護衛対象が増えればそれだけ負担も大きくなり、彼を含めた全員の命が危険に晒される可能性が高まる。

少しでもその可能性を低減させるには、やはり多少のプライバシーを侵害するべきだろう。一時の恥辱で命が助かるものなら安いものだ。

しかし、今回の事態は回避可能な致命的リスクとは言い過ぎかもしれない。これから行動を共にするのであれば、相手の私的な部分の場合によっては優先してやる事も必要だろう。

それが後の重大的場面で決定的な要素となり得るかもしれない。

つまりは、良い関係を築きたければ、労を惜しまず、泣き言など言っていないという事だ。

自分が、二人に危害が及ばないよう、最大限の努力を払えばいいだけの話だ。正論的なりスクコントロールやリスクマネジメントばかり

りでは人心までもも掌握する事は出来ないだろう―清田はそう結論を下した。

清田は静香に、京子も同伴する旨を伝えた。女性のデリケートな問題を扱うのであれば、やはり同性が一緒にいる方がいいだろうと。

静香はこれを素直に了承した。

「先ず自分が外に出て安全を確認しますので、合図があるまで車内で待機して下さい」

静香はハンドバックから取り出したポケットティッシュを手に、清田の言葉に頷いた。

そうして清田は慎重に乗降扉を開け、先に車外に降り立った。

少なからぬ安全が確保されていた車内と違い、外は〈奴ら〉の蠢く世界である事を意識せざるを得ず、否応なく緊張が高まった。

油断なく周囲に視線を巡らせ、警戒しながら県道まで進む。フェイスマスクの下ではじわりと汗が吹き出た。

近辺に〈奴ら〉の姿がない事を充分に確認してから、次に放棄されたままの二台の事故車両の傍まで歩いていく。

二台とも車内に人影はなく、周辺の道路に血痕があるだけだ。

〈奴ら〉の姿は完全に見当たらないと判断し、車内から様子を窺っていた二人に合図を送った。

静香は恐る恐る車外に降り立つと、おっかなびつくりしながら小走りで清田の傍まで駆け寄り、その大きな背に隠れるようにしてぴたりと寄り添った。京子は、必要以上に怯える静香を気遣うように、その後ろに付き従った。

抗弾ベストの背中には、焼結加工された分厚い積層セラミックの装甲と、装備で膨らんだデイパックを背負っていたが、清田には身体を寄せる静香の鼓動と体温を感じ取れるような気がした。

今の彼女は、大人の女の魅力をたつぷり漂わせる保健の先生というよりも、父親の力強い庇護を求めるか弱い少女のようであった。

自然と清田の胸中には、この小鳥のように小さく弱々しい鼓動を絶対に守らねばなるまい、という気概を沸き起こらせた。

ふと、背後を振り返ると、京子と視線がかち合った。

彼女は己の不安を清田に感じさせまいと、自然に微笑んだつもりなのだろうが、少し表情がぎこちなかった。やはり、ああ言ったものの、〈奴ら〉が跋扈する外の世界に出るのは怖かったのだろう。

だが、精一杯の勇気を振り絞って、同伴を申し出てくれた京子には感謝の念で胸が詰まりそうだった。

絶対にこの二人は守らねばなるまい。でなければ俺に生きている価値はない―かつてないほどの強い使命感に、清田は燃えていた。

「鞠川先生。自分は少し離れた場所で周囲を見張っていますので、その間に奥の乗用車の陰で用を足して頂けませんか？」

殆ど周囲から遮蔽されていないから用を足す静香にとっては恥ずかしい事この上ないだろうが、周辺の見晴らしを確保するには殆ど道路のど真ん中とする以外に方法はない。

駐車場の直ぐ傍は雑木林となっており、用を足すのであれば生い茂る草木で十分なプライバシーを保てるが、それと引き換えに視界を犠牲にしてしまうので接近する脅威の発見が遅れてしまう。

しかし、開けた道路上であればその心配はない。

今更、恥ずかしいだの何だの言ってはいられない。

一時の羞恥を我慢するのと、ほんの僅かとはいえ命の危険を高めるのではどちらがマシか。

改めて尋ねるまでもないだろう。

清田とて心苦しさを感じているが、今は個人のプライバシー保護よりも優先すべき事があるというのを理解してもらわねばなるまい。しかし、その中でも、最低限の配慮として同性の京子にきて貰ったのだ。

一瞬、躊躇った静香だが、即座に清田の言わんとする事を察し、そくさと乗用車の陰に隠れた。

「…あの、すみません」

しかし隠れたと思った静香は用を足さず、直ぐに小声で清田を呼んだ。

「どうしました？」

静香に呼ばれた清田は、若干怪訝に思いながら傍までやってきた。

まさか、流石に恥ずかしいので用を足すのは躊躇われた、という訳ではあるまい。

たとえそうだとしても、一切の譲歩をするつもりは清田には無かった。

静香はばつが悪そうに、というよりも、親の顔色を伺う子供のようにはにかんだ表情を浮かべていた。

何かを伝えたいが、言いづらいといったところだろうか。

しかし、何時までもそうして躊躇っている事は叶わず、静香は太股をぴっちり擦り合わせるようにもじもじとさせ、迫り来る尿意に堪えながら言った。

「自分の目の届く所にいてくれませんか？」

気恥ずかしそうに、か細く搾り出された静香の言葉を、清田はきよとんとした様子で受け止めていた。

何故、という疑問が彼の瞳に浮かんでいるので、静香はぼそぼそと呟いた。

「二人でいると…不安で堪らなくて……その……」

最後の方は聞き取れなかった。

静香は、用を足す僅かな間でも、視界内に清田の姿を収めていないと不安で仕方がないというのだ。

大の大人が何を言っているんだ、と清田は思わなかった。いや、思える筈が無かった。

静香は女性で、自分のように体格と体力にも恵まれてもいなければ、特別な訓練など何も受けていない素人なのだ。

立て続けに起こる惨劇が齎す恐怖で、その精神の自律性が退行を起こすのも仕方がない事だろう。

「それについては安心して下さい。林先生が傍にいてくれますので…流石に男の自分では、女性の用足しを妨げてしまうかもしれませんので、離れた場所にいます」

「鞠川先生。私が近くで見張ってるから安心して。何かあれば田中さんを直ぐ呼んであげるから」

二人の献身的な心遣いに、静香は安堵したように頷いた。

清田は周囲一体を隈なく見渡し、市街地方面へ伸びる道路上にへ奴らゝの姿がない事を確認し、静香の視界から外れた場所でバスを今まで走らせてきた道路の方角を向いた。

流石に、静香にそう頼まれたからといって彼女が用を足す場面を直視する訳にもいかなしいし、その視界内に入っているのも心苦しい。

清田は静香から大分離れた位置で、道路の一方を監視しながらその行為が済むのを待つ事にした。

静香からほんの数メートル離れた場所では、同性の京子が背を向けて佇んでいる。

視界内に他人を収める事で孤独感を紛らわせた為か、それで漸く安心感を得られたからだろうか。

今まで堪えてきた尿意が一気に噴出するように押し寄せてきたので、静香は慌てた。

お気に入りだった、プラダの膝丈の黒いタイトスカートは下着が露出する程まで冴子によって引き裂かれており、捲り上げるのに大した苦労はいらなかった。

これが普段であれば、スカートが腰のくびれからふつくらと突き出た円やかなヒップに支えてしまうのだが、今は腰に纏わり付くだけの布切れとなっているのですんなりといった。

ふくよかなくびれに食い込んでいる、パンティのウエスト・バンドに指を滑り込ませ、豊かな曲線に沿って下ろすと、今まで薄布によって隠されていた秘めやかな場所が外気に晒される。

そうしてその場にしゃがんでから、静香は今更になつて自分がとてつもなく恥ずかしい行為をしているという事実が付き、顔を赤らめた。

視線の先には、京子が背を向けて静かに佇んでいる。表情は窺えないが、緊張した様子で周囲を不安げに見張っていた。

非常勤の養護教諭である静香は、他の教師と仕事を一緒にする事が少ない。

大学病院で研修医として勤務する傍ら、産休で不在している元々の養護教諭に替わって、今は臨時に藤美学園に派遣されているのだ。

時々、保健体育の授業を受け持つ以外は、保健室を訪れる生徒の心と体のケアが主な仕事である為、他の一般科目を担当する教師達とは接点も少ない。

唯一あるとすれば、女性教諭を纏める立場にある京子ぐらいなものだろう。直属の上司という訳ではないが、何かと面倒を見てくれる。もしも京子がこちらを振り向いたりでもしたら、惜し気もなく晒されている自分の秘所を真正面から見られる形となる。

同性とはいえ、そうなたらたとえようのない羞恥に苛まれるかもしれないが、今更その程度の事を恥と感じたからなんだというのだ。今は生き死にが掛かっている状況だ。

だからこそ、用を足す無防備な瞬間が堪らなく怖くて、恥を忍んで清田や京子に頼みを聞いて貰っていた。

しかし、やはりそれとこれとは別問題であり、恥ずかしい事に変わりはないのだが、もしも京子に今の恰好を見られたとしても、静香は大した嫌悪感を抱かないつもりだった。

何かと世話を焼いてくれる京子を、一回り年上の姉のように思っていた。

自分が、年齢の割にぼやんとしている性格だというのは自覚している。その為か、京子からは度々注意された。

職場では口うるさいお局様とされている京子だが、彼女はヒステリックに後輩に当たり散らすという事は無かった。生徒に対する指導と同様に後輩の事も細やかに見ており、その内容は相手を思いやったものであり、理不尽な事は決して言わない。

時には厳しい事も言うが、それを含めての指導だ。でなければ人間的な成長は望めないだろう。

重武装している清田はともかくとして、丸腰の京子はいつへ奴らに襲われるか不安で堪らない筈だ。出来るのなら、一緒についてきたくはなかっただろう。

だが、彼女は優しく献身的で、勇敢な女性である。護衛は清田一人で充分かもしれないが、後輩に心細い思いをさせるのも僥びなく、こうして耐え難い恐怖を押し殺して同伴してくれた。



それについては言葉に表せないほどの感謝があった。

清田は関してもそれは同様だ。

彼は全てにおいて自分達を優先してくれている。

幾らそういつた訓練を受けているからといって、このような状況下で他者を気遣って行動するのは大変だろう。それを少しも雰囲気に出さない清田の強さには頭が下がるばかりだ。感謝こそすれ、彼の存在を疎ましく思える筈が無かった。

あれやこれやと思案に耽っていた静香であったが、ほんの束の間、忘却していた生理的欲求によって直ぐにそれまでの全てが吹き飛んでしまった。

気付いた時には既に始まっていた。

まさに防波堤が決壊するが如くの勢いであった。

ちよろちよろと綺麗な弧を描いて放射されるその透き通った淡黄色の飛沫は、医学用語ではハルンと呼ばれており、その成分は殆どが水分で、タンパク質の代謝で生じた尿素を僅かに含み、その他には微量の塩素、ナトリウム、カリウム、マグネシウム、リン酸などのイオン、クレアチニン、尿酸、アンモニア、ホルモンを含有している。

〈奴ら〉から逃れる為に学園内を走り回るといふ激しい運動を行った為に蛋白質を普段よりも多く含んでいるから、目の前のアスファルトを小さなせせらぎとなって流れていくその液体の色は普段よりも黄色味が強く、臭いも少しきつい。

勢いよく放出される為にアスファルトに打ち付けられる水音がやけに大きく聞こえ、恐らく、それは少し離れた場所で見張りに立っている京子の耳にもしつかりと届いているだろう。

静香は顔を俯かせて耳を真っ赤に染め、なんとかして勢いを制御しようとして下腹部に力を込めたが、弱める事は出来なかった。

膀胱を制御する二つの括約筋はそれぞれが随意筋と不随意筋であり、ある程度までなら我慢が可能だが、膀胱の内圧が許容値を超えているのであれば最早人の意志ではどうやっても抗う事は不可能である。

人によつては女性でも男性と同様に膀胱の制御が可能であるが、残

念ながら静香はそうではない。

黄褐色の小さなせせらぎは、彼女の努力も虚しく、その目の前を緩やかに流れていった。

止まらぬ自身の小水の流れを茫然と見詰める静香は、羞恥の余り頭の中が真っ白になっていくのが分かった。

しかし、その一方で、心の片隅では邪な妄想が鎌首を擡げ始めている。

もし、今のこの恥ずかしくあられもない姿を京子が振り向いて見たら、一体彼女はどのような反応を示すのだろうか。

普段のように厳格な教育者然とした表情を見せるのか、それとも時折見せる、少女のようにはにかむのか。

もしそうなったら、後者のような反応であればいいのに、と静香は密かに願った。

いつもは抜け目のない京子の、慌てふためく姿を見てみたいと思っ

た。その姿を見たらきつと、彼女も何かしら弱みを持った人間であると思え、今まで以上にもつとその存在を身近に感じられるだろう。

出来の良い完璧な姉を困らせてやりたい、悪戯好きの妹のような心情とでも言えばいいのだろうか。

だからだろうか、物思いに捕われていた静香は、依然として自身から流れ出ている液体の存在をすっかりと忘れていた。

静香が用を足している場所は若干傾斜しており、それは警戒を行っている京子に向かって低くなっていた。

液体は、高所から低所へと流れていくものである。

その事象はこの宇宙に於ける永久不変の物理法則であり、それは此処、日本国は床主市でも同様である。

静香がそれに気付いた時には既に手遅れであり、京子の背後に迫っていた。

京子は京子で警戒に集中しようとしていたが、数メートルも離れていない場所で静香が用を足している水音がやはり気になってしまい、そわそわしながら見張っていた。

集中しなさい、と自らに言い聞かせても意識が散ってしまう。

後輩の静香が、自分を信じて用を足しているのだ。

ならば先輩として、可愛い後輩の力にならねばなるまい。

止むに止まれぬ状況が生起しない限り、何があっても絶対に静香が用を足し終えるまで振り向いてはならないと心に固く誓った。

同性同士とはいえ、用足しを見られるのは気分が良いものではない。

そう決意してから何気なく足元に一瞬だけ目を落とすと、いつの間にか地面には何処からか液体が流れてきており、靴底を濡らしていた。

一体何の液体かしら、と脳裏に疑問を浮かべた直後、それから立ち上る微かな刺激臭が鼻腔を衝いた。

その瞬間、京子は全てを察した。

恐らく、背後の静香は、気の毒なほど羞恥に身を焦がしているだろう。

ならば先輩として取る行動はただ一つだけだ。

何も見なかった、何も感じなかったかのように振る舞うのみだ。

そう京子が心に決めて顔を上げた直後だった。

猛スピードで走る一台の大型バスが目飛び込んできた。

その大型バスは、県道を遡ってこちらに向かつて来る。難を逃れた生存者かと思っただが、それにしてもどうも様子がおかしい。

バスは蛇行を繰り返し、危なっかしい走行で唸りを上げて道路を遡上して来る。

「田中さんー！」

これはただ事ではないと思い、京子は慌てて、清田を呼んだ。

清田は車を挟んで反対側で見張っていたが、京子の切迫した声を耳にするや否や、身を翻し、すぐさま車のボンネットに飛び乗った。

重装備を纏った巨体が着地すると、ボンネットは大きく凹んだ。それに構わず、一気に車体後部までドカドカと走り、勢いそのまま再び跳躍した。

その途中で、京子が自分を呼んだ原因を確認した。

丁度、静香は車の直ぐ傍で用を足していたので、清田は彼女の頭上を飛び越えて道路に降り立つ形となった。

静香からすれば、突然、目の前に巨壁が出現したように見えたが、清田はそれに構わず、小銃に据え付けられている低倍率のACOGサイトをバスに向けた。

既にバスの中は地獄絵図だった。

〈奴ら〉に噛まれた者が乗り込んでいたのだろう。

瞬く間に発症し、〈奴ら〉となつて他の乗客に襲い掛かったのだ。

逃げ場のない狭いバスの車内が凄惨な殺戮場へと変貌するのにその時間は掛からなかつただろう。

とうとう、運転席に辿り着いた〈奴ら〉の一体が、懸命にハンドルを操作する運転手の柔らかい首筋にむしゃぶりつくと同時に、清田は行動していた。

振り返れば静香と目がばったり合った。

清田が振り返ると静香が用は足し終えるのはほぼ同時であり、彼女はまだしゃがんだ体勢のままだった。

一拍遅れて、静香が驚きと羞恥の余り、咄嗟に清田に自身の恥ずかしい場所を見られまいと手で隠していた。

しかし清田は大腿で駆け寄り、静香のその手を少し乱暴に掴んで強引に立ち上がらせた。

「な、何を…」

驚愕と羞恥と、そして突然の清田の行動に混乱と少しばかりの恐怖を感じていた静香は辛うじて口を開いたが、今の彼には彼女の相手をする余裕が無かつた。

静香の手を強引に掴んで立ち上がらせると、清田は駆け出した。

しかし、彼女はもたつくばかりで遅々として前に進まなかつた。

それは仕方が無い事だった。

有無を言わさず、清田に腕を掴まれて立ち上がらされた静香には、滑り下ろしたパンティを穿き直す余裕など無かつたのだから。

用を足す際に膝まで滑り下ろしたパンティは、今となつては足首近くまでずり落ちて柵になっている。これでは走るのは元より、歩くの

もままならない。

最早、清田はなりふり構っていられなかった。

静香を強引に抱き寄せると素早く肩に抱え上げ、脱兎の如く駆け出した。

既に猛然と走るバスが迫っていた。

「きゃあっ!」

京子も静香と同様に、走りながら掠めとるように肩に担ぎ上げた。重装備と女性二人は、かなり大柄な清田にとっても流石に軽いわけではない。しかし、今は不思議と軽々と持ち運べた。

火事場の糞力、とでもいうのだろうか。

本能が、ここで踏ん張らなければ死ぬというのを察知しているのだろう。

二人を抱え上げて数メートル程走ると、直後、バスは停まっていた二台の乗用車を乗り上げるようにして木の葉の如く蹴散らし、盛大に横転した。

それとほぼ同時に、清田は二人に覆い被さって地面に臥せていた。

巨大な鉄の塊同士が衝突する、金属の大絶叫の最中を蹴散らされた乗用車の一台が勢いよく宙を舞い、臥せる直前まで清田の上半身があった空間を通過していく。

もしも清田が臥せるのがあと少し遅ければ、飛来する乗用車が三人を直撃して物言わぬ肉塊にしていただろう。

そのまま乗用車は吹っ飛び、着地しても尚転がっていった。そうして止めとばかりに、横転したバスのエンジンから一気に炎が吹き上がり、瞬く間にガソリンに引火して大爆発を起こした。

爆風と熱風が、二人に覆い被さる清田の背を掠めるようにして広がる。

間近で起こった爆発により、清田の頭の中ではまるで鐘が鳴り響いているようだった。

三半器官が上手く機能していない。

耳もよく聞こえなかったが、なんとか手足を踏ん張って起き上がるうとしたが、産まれたばかりの子馬のように力が入らなくて、何度か

失敗しながら漸く上半身を起こし、二人の上から退いた。

彼女らは気を失っているのか、目を閉じていた。

「大丈夫ですか?!」

そう確かに叫んだ筈だが、自分の声がまるで聞こえなかった。

それは彼女らも同様なのだろう。

二人の肩を掴み、何度も呼び掛けを続けていると自分の声が戻ってきた。聴覚が回復してきたのだ。

「う…」

か細い呻きを漏らして、まず静香が瞼をゆつくりと開いた。

焦点の定まらぬぼんやりとした目で清田の顔を暫し見詰める。

一体何が起こったのか全く理解していない様子だ。

「バスが事故を起こしたんです。あのまま逃げるのが遅れていれば、今頃我々はあそこで丸焦げでした」

抱き起こした静香に、先程まで乗用車が停まっていた場所を見せる。

そこは既に黒煙を吹き上げながら燃え盛る紅蓮の業火に包まれていた。

「大丈夫ですか？ 何処か怪我はしていませんか？」

静香の肩を抱きながら一緒に立ち上がる。

まだ足元が覚束ないらしく、清田にしがみついていると立てない様子だが、ぎつと確認した所、彼女は細かい擦り傷程度しか負っていないかった。

不幸中の幸いといえいいのか。

とにかく、静香が無事な事に清田は胸を撫で下ろした。

「んんん…」

続いて、京子も目を覚ました様子だ。

清田は静香から身体を離すと慌てて屈み込み、京子の肩をかき抱いて、その半身を抱き起こした。

「林先生！ しっかりしてください！」

京子の視線は暫し中空を彷徨していたが、やがて清田に気がつくのと、腕が伸ばされ、その太い首を絡め取った。

「大丈夫。大丈夫ですから…」

清田は京子の背中に手を回してさすってやり、抱き止めながら一緒に立ち上がった。

胸に顔を埋める京子の肩は震えていた。

そしていつの間にか、空いている片方の手は、静香がぎゅつと握っていた。

まるで、二人のか弱い少女に頼られる心境だった。

「でも…これじゃ…」

目の前で赤黒く燃える炎を見て、清田の手を握る静香が力無くぽつりと呟いた。

暴走したバスは、丁度、三人とマイクロバスに残った生徒達を分断するように横転して爆発し、広範囲に渡って火の手を上げていた。

これでは合流するのは難しいだろう。

「田中さん！ 林先生！ 鞆川校医！ 大事ありませんか!？」

今まで様子を窺っていた冴子が、状況が落ち着いたと判断するや否やマイクロバスを降り、炎から垣間見える三人に向かって声を張り上げた。

「自分達は無事です！ 何も心配はありません！」

呼び掛けに答えた清田の声に冴子は安堵した。が、それも束の間の事であった。

紅蓮の炎の中で人影が揺らめいたかと思えば、バスの残骸の中から元々は乗客だったへ奴らゝが、その身を灼熱に焼かれながらも貪欲に生者の血肉を求めて這い擦り出て来た。

それはさながら、地獄の業火からこの世に出でる亡者そのものであった。

初めて間近で嗅ぐ、人肉の焼ける臭いに流石の冴子も気圧された。それはポリエルテルなどの化学繊維と一緒に焼かれる豚肉のような臭いだった。

しかし一流の武術者としての鍛練の賜物ゆえか、直ぐに冴子は立ち直ると、火達磨になりながら迫ってきたへ奴らゝの一体の胸を木刀で突き、体勢を崩してから一旦退いた。

状況に最早予断は許されない。

早急にこの場から離脱しなければならなかった。

目の前の、火達磨になったへ奴らへだけではなく、爆発音によって他のへ奴らへもいずれ招き寄せられて来るだろう。

「……床主城付近で落ち合いまししょう！」

清田は咄嗟に床主城の名を口に声を張り上げた。

床主市の地理に疎い清田ではあったが、バスを走らせる道の途中に床主城の看板を見付けており、それならば著名な地形地物（ランドマーク）であるから、目印にしやすくと見越しての事だった。

もつと他に、集合場所を消防署や警察署を指定するべきだったかもしれないが、どちらも助けを求める市民が殺到しているだろうから、その混乱の渦中に飛び込むのは危険と判断したからだ。

「時間はない！」

了解の言葉の代わりに、冴子はそう応えた。

「今日の午後五時に！ 今日が駄目ならまた明日の同じ時間に！」

それ以上の会話を続けるのは不可能であった。

飛び散った火が、蹴散らした乗用車の燃料タンクを燃え上がらせ、再度大きな爆発を生じさせたからだ。

火勢が増し、熱波に思わず顔を背けた。

「林先生！ 鞆川先生！ もう駄目だ！ 移動します！」

茫然自失としていた静香と京子の腕を掴み、清田は駆け出した。

清田に腕を引かれる静香はもう足をもつらせる事は無かった。

辛うじて足首に引つ掛かっていたパンティは、この混乱の中でいつの間にか脱げ落ち、何処かにいつてしまったからだ。だが今は、そんな事にも気が付かず、静香は夢中になって走った。最早スカートのを成していない布切れを充実した腰周りに纏わり付かせて走る彼女の姿は煽情的ですらあった。

両脚を忙しく交互に動かす度に、クリーム色のむっちりとした太股の肉が跳ねる。

ボタンの幾つか外れたブラウスが、胸元の見事な膨らみにぴったりと張り付いて踊り、それと競争するかのようには、腰のくびれからふっ



くらくと突き出た白いヒップの丸みが、破れたスカートから時折あらわになりながら悩ましく揺れ動いた。

熟れた肉体を持って余す京子も、静香と同じくらい魅力的だ。

三十路を超えてなお張りのある肌、珠の汗を浮かべ、雌鹿のような健脚で清田に追いつがる。

大きく開いたブラウスからは今にも乳房が零れ落ちそうで、汗の混じった濃密な女の芳香が立ち上っていた。

上気させた肌も艶めかしくすらある。彼女達の乱れた姿はとても素晴らしい眺めだったかもしれないが、その手を引く清田はこれからの事で頭が一杯だった。

## #1st day⑥

踏み出す一步は重く、履き慣れたタクティカルブーツが鉛のように感じられた。

だが、疲労を顔に出したり、気取られるような事があってはならないと、清田は何度目になるかも分からない自戒を心の中で繰り返した。

先を進む清田は、時折肩越しに振り返ってはとぼとぼと歩く静香の様子を気にかけていた。

今の彼女は酷い有様だった。

長い髪は千々と乱れ、服も所々が破けたり裂けたりで殆どボロ切れ同然だ。剥き出しの脚も至る所が擦り傷や打ち身だらけである。

まるで強姦された後のようだ。

そんな静香を気遣うように、京子が寄り添って歩く。

彼女も静香と同様に酷い状態だが、自分がそんな状況にあっても他者を思いやる姿には頭が下がる思いだった。

視線を空に転じれば、遙か後方に過ぎ去ったバスの残骸が噴き上げる黒煙が見えた。

炎上したバスによって冴子らと分断されてから約二時間ほど、三人は徒歩で市街地を目指していた。

分断された地点はまだ田園地帯の途中であり、市街地まではかなりの距離を歩かねばならなかった。

途中、清田はヘルメットを被ったライダーズスーツ姿のへ奴らが一体いたので、それに銃弾を撃ち込んで沈黙させてから周辺を探した。もしかしたら、乗り捨てられたバイクがあるのではないかと。

元々、清田は第一空挺団の普通科大隊の情報小隊―偵察を主な任務とする小隊―に所属しており、偵察用オートバイの操縦に関しては自信があった。

軽装備では勿論、動きづらい重装備を身に付けての操縦も訓練している。今のこの状態でも何ら問題はないだろう。

しかし、清田は多くの事を見落としていたのに気が付いた。

自身がどんな状態だろうとバイクの運転に支障はないが、他に二人の人間がいるのだ。

二人を乗せる事は出来ないし、かといって一人だけ乗せてもう一人は置いていくなんて事が出来る筈がない。

考えれば考えるほど、自分の考えが甘かった事に気がつかされる。

それは先刻の学園でも味わった経験だ。

車両を移動手段としようとするも、その入手方法を全く考慮せず、もしも静香や冴子の機転が無ければどうなっていた事か。

つくづく、己の考えの足りなさに絶望しそうだ。

結果としてバイクは発見したが、それは電柱に衝突して大破しており、とてもではないが乗れそうな状態ではなかった。

しかし、逆に清田は安堵していた。

考えれば考えるほど危険な試みだった。

それをどうやっても実行可能な状況でない事は、危うい選択肢を選ばなくて済むという事なのだから。

重装備を身につけ、重い背嚢を背負つての峻険な山道の登攀に慣れている清田には、市街地までの道程など苦にはならなかった。

舗装されている道を歩く程度など、彼がこなしてきた訓練内容からすれば散歩にすらならない。

しかも幸運な事に、先程のライダー姿のものに出会ったきりで、道中でほぼ〈奴ら〉を見かける事も無かった。

たとえ見かけたとしても遠目から様子を窺い、静かに歩いて移動すれば気付かれる事もなかった。

しかし、消耗している静香と京子からすればこの二時間以上の徒步行軍は大変な労働であり、彼女達から更に気力を奪っていた。傍から見ても二人は気の毒なほど落ち込んでいる。

†

静香は今の自分の状態があまりにも惨め過ぎて、出来れば泣き出したかった。

シルクのブラウスは薄汚れ、スカートは大きく破けて腰に纏わり付くだけの布切れとなっている。

どちらもブランド物でお気に入りだった。

パンティも必死になって逃げる際についての間にか脱げ落ち、今の静香は歩くだけで大事な所が露出しそうになってしまおうという有様だ。更に、逃げ出す際、あまりにも急だったので用を足した後の処置を行っていない。

清田に気付かれないうようにティッシュで軽く拭き取りたかったが、手に握っていた筈のそれも混乱の最中に失われていた。

ブラウスの袖で拭き取るのも考えたが、薄汚れた布地で自身の特別にデリケートな部分を擦るのも躊躇われた。

ボロボロの見てくれに、後始末を出来なかった為の不快感は最悪以外の何物でもない。

しかし泣いた所で状況が好転する訳でもない。

もう二十代後半に差し掛かり、あと数年も過ぎれば三十路の大台に乗る妙齢なのだ。

所謂いい歳の大人が愚図るのも恥ずかしい。

やはり、ここは我慢するしかないのだ。

静香は力無く溜息を吐く事で堪えた。

†

先頭を歩く清田は、背後から静香の溜息が聞こえる度に心が痛かった。

何とかしてやらなければ、と清田はあれこれ考えるが、現状で大した事はしてやれない。

殆ど代わり映えない内容の励ましの言葉を掛けてやるしか出来ない自分に苛立った。

同時に、残してきた他の生存者達も気掛かりで、どうする事も出来なかった自分に嫌気が差す。

あの場は燃え盛る爆炎とへ奴らから逃げるのが精一杯だったが、今となっては他にやりようがあったのではないかと、暫く逃げ延びた後に落ち着いた際、清田は自身を責めた。

生徒達の学園での凄絶な生存闘争の顛末を知らぬ清田にとって、残してきた彼らの能力は未知数だが、簡単に死ぬ事はないだろうという

感慨を茫洋とだが抱いていた。

しかし、それは自身の希望的な観測に過ぎない。

今更何を言っても意味はない。

改めて現実を受け入れるしかない。

彼らを、目的である高城沙耶を見捨てて逃げ出したという現実を。

糞。思考を切り替える。何時までも引き擦るな―考えの纏まらない自身の鈍い脳髓を叱咤する。

今、優先すべきは、静香と京子を連れて集合場所である床主城に向かう事だ。

分断された彼らも、自分の言葉を信じてそこへ向かおうとしている筈だ。

ならば、その発案者である自分がそこへ到達できないというのは本末転倒だ。

自ら結んだ約束を破るのは格好もつかない。

†

先頭を歩く清田は、時々立ち止まっては此方を振り返る。

鉄帽、フェイスマスク、ゴーグルで顔を隠しており、表情は少しも窺い知る事は出来ない。

巨軀に重装備を施し、ロボットのようは無機質な兵士に一瞥されると、内心では少しどきりとする。

彼は無力な自分達を全力で守ろうとしてくれてはいるが、頼もしく思う反面、日常生活では接する機会のない自衛官―それはほぼ兵士のようなものだ。京子は考えている―という異質な存在を、心の何処かでは畏れていた。

京子は元より、藤美学園の教師陣は日教組とは縁も因（ゆかり）もない。多分に偏執された政治問題を教育しようとする人間は、まずこの学園に採用されないだろう。

京子は思想的に右翼でもなければ左翼でもない。そもそも、京子に限らず殆どの国民は政治にそれほど関心はないだろう。

自衛隊という組織は、警察や消防以上に馴染みが無い。一般市民にとって後者二人の世話になるのは、出来ればない方がいいに決まっ

いる。

自衛隊についてもそれと同じだろう。

出来れば関わる事が無いのが一番いい組織だ。

一般市民が自衛隊に関わるという事は、大災害が発生するか、戦争が勃発するといった、起こるべきではない事態に直面するという事に他ならない。

京子が心の何処かで、清田という存在を忌避しているのは、自衛隊という日本最大にして得体の知れない『軍事組織』に潜在的な畏れを感じていたからだろう。

知らない、分からないというのは、即ち異質であり、それは未知への恐怖となる。

出会ってから数時間が経過しているが、京子は清田の素顔を一目も見えていない。

唯一目にしたのは、学園で休憩時にゴーグルを押し上げて垣間見えた目元、手袋を取った右手の素肌のみだ。

澄んだ優しそうな目をしており、従順な大型犬のような印象を受けた。露出した素肌は、男性にしては驚くほど白いというのを覚えている。

それ以外は、迷彩服と防弾繊維、武器弾薬類に隠されてしまっているの、いまいち人間らしさを感じなかった。

ただ、此方がどう思おうと、彼は自らの命を省みずに自分達二人を優先するのだらうという、確信にも似た説得力を持って行動しているのは伝わった。

それが証拠に清田は、黙々と歩き、油断なく周囲を警戒しては、此方の身を案じるように後方も確認する。

†

強行軍の末、三人は市街地に到着した。

普段ならば多くの人々が生活する息遣いを感じられる町並みはひっそりと静まり返り、ゴーストタウンさながらの様相を呈していた。

そこかしこに人間同士か、はたまた人間とへ奴ら〜が争った形跡が

散見され、血溜まりや血痕が見られる。

市街地では、学園で繰り広げられていた惨劇が今も進行しているのだ。

「誰も……いない……」

静香がぼつりと呟くと、春にしては珍しく冷たい風が閑散とした通りを吹き抜け、彼女の長い髪がたなびいた。

思わず背筋を駆け抜ける寒気に、静香は薄着の肩を自ら掻き抱いた。

「逃げたか、死んだか……死んでへ奴ら〜になった者は生きている人間を追い掛けていったのでしよう」

人気のない通りに注意の目を向けながら清田は言った。

血溜まりの中に沈む幼稚園児の鞆と、そのすぐ傍に幼児用の小さな靴が片方だけ脱げ落ちているのを見つけ、思わず顔をしかめた。

あの持ち主だったであろうと子供と、その親の安全を祈らずにはいられなかった。

暫く三人は市街地をざつと探索したが、迂闊に建物や狭い路地には入り込まなかった。

もしも狭い空間でへ奴ら〜に囲まれて退路を断たれでもしたら厄介だ。

清田が重武装しているからといってその力は絶対ではないのだ。

交戦はなるべく避け、自ら危険に飛び込む必要は無い。

「田中さん、あれ……交差点の右側」

京子に袖を引かれ、指差された先に清田は目を遣った。

交差点に停車するパトカーのフロント部分が確認できた。

清田も思わず、組織は違えど国民の生命と財産を守る為に働く同志の姿を見付け、安堵に胸を撫で下ろした。

職務質問をこの際されても仕方がないが、一応自衛官の身分証明書は携帯している。

といっても、本物だが実際に清田自身を証明するものではない。

公にする事の出来ない部隊に所属している以上、自衛隊の中ですら偽装した身分を与えられるのは当然だ。

「！」

だが、安堵したのも束の間の出来事だった。

三人は交差点を曲がってから絶句した。

確かにそこにはパトカーが停まっており、運転席と助手席には警官が二名座っていた。

しかし、パトカーの車体後部は横合いからきたであろうダンプカーによって完全に押し潰されており、二名の警察官はダッシュボードと座席の間で圧死していた。

「酷い…」

いまだ惨たらしい末路の死体に慣れぬ静香が、口許を手で押さえながらぼつりと漏らした。

そう簡単にこの状況は好転しないらしい。

清田も頭を抱えなくなつたが、ふと、ある事に気が付き、一か八か調べてみる事にした。

衝突の衝撃で前席のドアは両方とも歪み、開いたままだった。

今更、死体に手を触れるのに抵抗感が無くなつていた自分の変化を、清田は当然のように受け入れた。

人間も死ねばただの有機質の塊に過ぎないのかもしれない。

生き残る為であれば躊躇っても仕方がないのだ。

静香と京子は、黙って彼の行動を見守っていた。

清田が運転席で絶命している警察官の死体を調べると、目当てのものを所持したままだった。

もう一人の死体も調べるが、こちらは破損していて使えそうにないが、込められていたものに異常はなさそうだ。

それも一応、回収しておいた。

「役立つかどうかは分かりませんが、どちらかが持っていてください」警官の死体を調べ終えた清田は、手に入れたものを二人に差し出した。

米国S & W社製のリヴォルバー式拳銃、M37エアウエイトだ。

原型となつたM36にアルミ合金を多用しており、大幅に軽量化されたモデルである。元々、M36は小型で携帯性に優れており、米国



の一般市場では女性の護身用としても売れている。

「これを私達に？」

京子は、清田の手で鈍い光沢を放つ、黒塗りの拳銃と彼の顔を交互に見比べた。

明らかに困惑している様子だ。

「この先、何かあるか分かりません。自分がもしも『そうだった』場合、自身の身を守る手段を備えておいた方がいいでしょう」

死ぬつもりなど毛頭なかったが、物事に絶対はない。

「奴ら」か、それとも別の原因によつて清田が命を落とす可能性は充分にある。

そして銃器という最も手軽な方法があるのならばその操作方法を簡単でもいいから教えておくべきだ。

二人は、暫しの間、差し出された拳銃をじつと見詰めていた。そして、互いに顔を見合わせると、京子が頷き、やがて覚悟を決めたのか、それを手に取った。

「…意外と重いんですね」

初めて手にする、小さいながらも人を殺せる力を充分に秘めた道具に対する京子の眩きが漏れた。

握把は手の小さな女性にも握りやすくデザインされており、小柄な京子でも何ら問題はなかった。

少しの間、京子は手に感じる重みを感慨深げに眺めていたが、取り敢えずタイトスカートのウエストバンドに差し込み、流星に見せびらかすようにするのも気が引けたから、その上からブラウスの裾をたくしこんで隠した。

そしてひんやりとした金属の感触を素肌を感じ、思わず怖気が走る。

しかもそれが殺傷能力を備えた道具ともなれば尚更だった。

簡単に暴発する事はないと思うが、もしもそうだった際に誤って発射された銃弾が腰椎を砕くのではないかと恐くなったが、携行するの他に適当な箇所がない。

警察官のホルスターを入手するというのも考えたが、死体の凝固し

掛けた血液が付着している物を肌に触れさせるのは躊躇われた。

自分ならば人並み以上にポリウームのあるバストの間に収納する事も可能だが、銃器を女性にとつての大切なシンボルに触れさせるのは以つての外だ。

そうなるとスカートやウエストバンド以外に選択肢はない。

ついでに手渡された五発の銃弾は、お尻の右付近にあるポケットに振込んだ。

「取り敢えず、何処か休憩出来そうな場所を探しましょう。そこで拳銃の扱い方を説明しますから……あとこれは、鞆川先生が使つて下さい」

更に清田は伸縮式の特種警棒を静香に渡し、彼女も警棒を京子と同様にウエストバンドに挟んで携行した。

清田が先頭に立ち、移動を再開する。

拳銃という簡易且つ強力な護身の手段を手に入れて、京子は少しだけ気分を持ち直していた。

確かに、初めて手にする銃器には少なからず畏怖を覚えたが、同時に心強くもあつたのは事実だ。

〈奴ら〉と遭遇しても、京子が手に入れた小さな拳銃よりもずっと大きくて強力な銃で清田が薙ぎ倒すので、恐らく彼と一緒にいる限り使う機会は滅多に訪れる事は無いだろう。

勿論、それが最良だ。

しかし、彼の庇護を得られない状況に陥れば、たとえ〈奴ら〉に対してあまり役に立たなかつたとしてもお守り程度には感じられる。

気力を奮い立たせられるのであれば無いよりはマシだろう。

また、〈奴ら〉に効果が無くても、生きている人間に襲われそうになつたら脅しぐらいにはなる。

これからは〈奴ら〉と同様に、理性を失つた人間に対してある程度の心構えを備えておくべきだ。

自惚れている訳ではないが、京子は年増だが自身の豊艶な姿態が一体男をどれだけ魅了するかを自覚していた。

追い詰められ、種を残そうとする牡としての本能が暴走した男性が

現れないとも限らない。

そういった輩は、暴力によつてこちらをその意に従えようとするだろうから。

また、そのような対象となるのは自分だけではなく、静香も同様である。

自分よりも若く、ボリユームのある肉感的な身体は、自分以上に狙われるだろう。加えて、優しく穏やかな雰囲気を持つから、その隙をつけ込まれるかもしれない。

心の傷ついた後輩を、これ以上辛い目にあわせてなるものか、と京子は密かに誓った。

そうして銃を手に入れてそれに対する興味が芽生えたからだろうか。

自然と、京子は前を歩く清田の動きを注視するようになった。

彼は小銃を両手で抱え、銃口を下に向けている以外は普通に歩いているだけだった。

映画のように、市街地を歩く兵士が、常に銃床を肩付けしていつでも発砲できるようにしているのとは異なっていた。

映画と本物とではやはり違うのだろうか。

素人である京子には、清田が随分と悠長に構えていると思えたが、俳優の演じる兵士と違って、彼は本当に鍛え上げられた兵士なのだ。

その動作の一つ一つに理由があり、洗練され合理的なものなのだろう。

実際のところ、清田は肉体をリラックスさせていた。常に小銃を油断なく構える体勢は結構疲れる。

突発的な遭遇戦が生起しやすい屋内などであれば、油断なく構えるのは当然だが、現在のようになだっ広い道路の真ん中を歩いている分には、たとえ〈へ奴ら〉が現れても早期に発見できるので余裕を以って構える事が出来る。

本来の市街地戦闘行動（MOUT）であればそのように道路のど真ん中を歩くのは撃つてくれと言わんばかりの行動だが、〈へ奴ら〉は別に銃を持った兵士ではない。

重要なのは如何にして早期に発見し、回避するかという点だ。そうなれば自ずと道の端よりも中央を歩く方がいい。

抜く時は抜く、集中する時は集中する。めり張りを以って事に臨むのが一番効率がいい。まだ、先は長いのだから、あまり気を張り詰めでも仕方が無い。

しかし、かといって精神まで緩めている訳ではない。

むしろ、市街地に入ってから清田はこれまで以上に周辺を注意深く観察していた。

市街地は構造物が複雑に入り組んでいるので標的が発見しづらく、また、へ奴らよりも生きている人間の対処を常に念頭に入れなければならなかった。

へ奴らには問答無用で武器を以ってして制圧しても問題はない。

しかし、生きている人間はその脅威の度合いを冷静に見極めて対処しなければならぬ。

こちらに助けを求めているのか、それとも見境が無くなって襲い掛かろうとしているのか。

人質が、間近で炸裂するスタングレネードや発砲音で混乱し、救出部隊の兵士に思わず掴み掛かろうとして射殺されたという事例もある。

民間人を誤射する等といった事態を引き起してはなるまい。

こんな世の中だが、清田は日本国憲法を遵守する義務を負った自衛官である。必要最低限、守るべき法律を守らねばならない。

創隊以来、高度経済成長の繁栄を享受する傍ら、国家として何処か歪んでしまった日本の姿を写し出すかのように、強力な近代兵器を保有しているのに軍隊として認められない自衛隊だからこそ、守るべき規範を破れば防人たりえないのだ。

櫛の冠の上で、大鷲の翼を広げて今にも羽ばたかんとする布都御魂剣を象った特殊作戦群の徽章を着けていても、たとえエリートフォースとはいえ任務の為であれば好き勝手にしていいという訳ではない。

むしろ一般部隊よりも高い規範を求められるからこそ、敵地で孤立無援の状態での任務遂行を成し遂げられるのだ。

通りを道なりに歩くと、やがてガソリンスタンドが見えてきた。休息するにはあそこが適当だろう。

事務所と休憩所を兼ねる建物には軽食や飲料の自販機を備えているだろうし、何よりも広い給油場は見通しが良く、〈奴ら〉が押し寄せ来ても上手く立ち回れば切り抜けられるだろう。

「ここで少し待っていて下さい。自分が様子を見てきますので」

給油場に到着すると、清田は二人に待機を促した。

しかし、拳銃や警棒を身に帯びているとは、女二人では心細い。

特に静香は、縄付きのような眼差しを清田に向けた。

「何かあれば呼んで下さい。すぐ駆け付けますから」

不安なのを察しているが、二人の安全を考えると連れていく訳にはいかない。

それに少しの辛抱だ。

一見したところ、周辺に〈奴ら〉の脅威はなさそうだ。

クリアリングも直ぐ終わるだろう。

清田は不安げな二人を残し、建物へ向かった。

予想通り、建物内に脅威は皆無だった。

争った形跡や血痕は見当たらず、常駐している筈の店員の姿もない。全くの蛻の殻だった。ここなら、作戦開始以来初めてとなる休息を得る事が出来そうだ。

流石の清田も、緊張状態に置かれ続けて神経が疲弊してきた。

ストレスと疲労が限度を超えて蓄積されれば、やがて集中力の欠如へと繋がり、簡単なミスを犯すようになる。その小さなミスが取り返しのつかないほど大きなミスを誘発するとも限らない。

そうなる前に予防をした方が良い。可能な限り快適な環境の追求が確実な任務の遂行へと繋がる。

タフな事が男らしいとしても、そうする必要がないのに自ら進んで悲惨な状況に自己を陥れるのは愚か者のする事だ。

人間は、自分が思っている以上に脆弱な存在である。

濡れた衣服を着続けているだけでも闘志は衰え、肉体は弱っていく。

靴の中が蒸れ、ふやけた足の裏の皮膚が擦り剥けるだけで機動力は低下する。

所詮はその程度でしかない。その程度の自身の弱さを受け入れ、如何にしてそれを和らげられるかが重要だ。

清田が、張り詰めた神経が続いていた神経を緩め掛けた時、それは起こった。「きゃああああああつ!」

静香の悲痛な叫びが耳朶を打った瞬間、清田は深い後悔と強い自責の念に駆られた。

残された静香と京子の、不安げな表情が脳裏を掠める。

二人を連れて来なかったのは、その身を危険に晒さない為ではない。

素人である二人を連れてのクリアリングに不安があつたからである。

つまりは、心の何処かで己の技量に自信が持てなかったからこそ、それらしい理由を付けて彼女をあのような目に逢わせてしまった。

全ては、自分の不甲斐なさが招いた結果だった。

だが、神経に刻み込まれた反応故か、心の動きよりも先に肉体が駆動していた。

左足を軸にしてその場で回転するように身を翻し、ローレディの銃姿勢で全速力で外に出た。

「……」

目に飛び込んできた光景に清田は絶句した。

〈奴ら〉に無惨にも食い殺された二人の死体を目の当たりにしたからではない。

静香が、見知らぬ大柄な男によって背後から羽交い締めにされていたからだ。

身長が一七〇半ばほどもありそうな静香より、男は更に背が高く肩幅も広い。

清田と比べても遜色ない堂々たる体躯だ。静香の括れた腰に回された腕は太く発達しており、あれでは非力な女性では身動きなど取れないだろう。

京子は、静香を羽交い締めにする男の後ろで倒れていた。

気を失っている様子だが、傷がどの程度かも分からない。一刻も早く、詳細を確かめねばなるまい。

清田が恐れていた事態が最悪の形となって目の前に現れた。

「奴ら」よりも、生きている人間の、しかも暴漢ともなれば尚更だ。

男は、何処かに潜んでいて、自分達の動向を観察していたのだろう。助けを求めているのであれば静香に対してそのような行動を取る必要はない。

気が酷く動転していたとしてもそのような行動を取るとも思えなかった。

明らかに、自分が彼女達の傍を離れたのを見計らっていたのだ。

そして男の要求は、少なくとも平和的な手段によるものではなかった。

それは、静香の白い首筋に突き付けられたナイフが雄弁に物語っていた。

「ひゃーっはっはっはっ！ 自衛隊サンよお、随分とエロい姉ちゃん連れてるじゃねーか。一人は年増だから俺の趣味に合わなくてな。ちよつとぶん殴ってネンネしてもらってるが、なに、後でたっぷり可愛がってやるぜ」

男はあみだに被ったキャップの下で目を血走らせ、邪悪な笑みを浮かべていた。

剥き出した歯には歯列矯正の器具が嵌められており、それが殊更に男を醜悪に印象付けていた。

清田には、男が人間に見えなかった。

訓練でひたすら額を撃ち抜いてきた、人質を盾にして拳銃を構える覆面姿の凶悪犯の標的としか思えなかった。

初めて、生きている人間に銃を向けるといふ事実に躊躇う暇さえなかった。

肉体に刻み込まれた行動がごく自然に出る。

銃口が流水の如く淀みなく持ち上げられ、ホログラフィックサイトの光点が男の額に重なる。

既に引き金に指が掛かっていた。

「おーっと、下手な真似は止せよ。武器を捨てな。でなけりや姉ちゃんが死ぬぜ？」

しかし男が口を開くのが紙一重の差で早く、ナイフを握る手にこれみよがしに力を込める。

鋭い切っ先が、ぷつり、と薄皮を裂き、静香の首筋に血が滲むのが見えた。

静香は身がすくんでしまい、出血しても恐怖が勝っていた為に痛みを感じていない様子だった。

顔面は蒼白で、完全に血の気が失せていた。

涙の潤む瞳が、助けて、と切実に訴えかけていた。

清田は引き金に掛かった指の力を緩め、銃口をゆっくりと下げた。相手を下手に刺激するべきではない。悔しいが今は従うしかないだろう。

男のナイフは静香の動脈を捉えている。

清田は、男から目を逸らさず、時間を掛けて身を屈めて足元に小銃を丁寧に置き、屈んだのと同じくらいのスローな動きで真っ直ぐ立った。

「脚に付けてるのはピストルだろ？ そいつも足元に置け」

レグホルスターから拳銃を抜き、小銃の傍に置く。

武器を一つずつ手放していくと、まるで服を一枚ずつ脱がされる心許ない気分となった。

しかし、武装を解かれたからといって闘志の萎える清田ではない。

レグホルスターから拳銃を抜く時に手を下げる際、手を尻ポケットの上を這わせるようにしてそこから小型のマルチツールを取り出し、掌に隠していた。

寸鉄程度のもので身に帯びているとまだやれるという気になれた。

何事も諦めてはいけない。

「へへへ…映画だったらここでヒーローが助けしてくれるのにな。残念だなあ、え、姉ちゃんよお？」



男は清田が言葉通りに従ったのに満足したのか、余裕のある表情でナイフを弄び、その腹で静香の頬を撫でた。

すっかり怯えきっている静香は、冷たい金属の硬質な触感に小さく悲鳴を漏らして震える事しか出来なかった。

「た、たな、田中、さん…」

懸命に絞り出した声はか細く、震えている。

静香は今にも恐怖で崩れ落ちそうな足腰をなんとかして支えている。た。

急にその場に座り込んでしまえば、極度の興奮状態にある男が一体何をするか予測がつかない。

自分の命が、他人の邪悪な気まぐれによって生かされているという事実に気が遠くなる思いだった。

「…ひぐっ!?!」

静香は声にならぬ悲鳴を漏らした。男が、不意に彼女の豊満な胸を驚掴みにしたのだ。

欲望の赴くままに行われるその行為は愛撫とは程遠く、力任せに遊ぶだけで苦痛しか感じなかった。

同時に、静香は、自分の身体を望んでもいない相手に好き勝手にされるという恥辱に震えたが、結局抗う事も出来ず、ぎゅつと目を閉じて耐えるしかなかった。

「あ…声も胸も最高だあ。こんなにでけえ乳した女なんて初めて見たぜ!」

男は、掌から零れそうになるほど大きく柔らかな乳肉の感触を愉しんでいた。

静香の、大きく、そして形の良い乳房は男の揉む力に合わせて柔軟に姿を変え、その劣情を殊更に煽った。

「……………」

静香はびくりと身体を大きく震わせた。

尻に、硬いものが押し当てられるのを感じたからだ。布地越しにもそれは熱く脈動しているのが分かった。

「ケツもでかくて柔らかけえ…姉ちゃん、あんた最高にエロい身体して

やがるぜ！」

男は己の醜く高ぶった劣情を隠そうともせず、静香の肉付きの良い臀部に腰を密着させ、小刻みに動かし快感を得ようとしていた。

直接肌を合わせず衣服の上からとはいえ、男の興奮は頂点に達しようとしていた。

それはこの異常な状況下というのもあるのだろう。

これからの未来は絶望でしかない。

それが、男の種の保存本能を燃え上がらせていた。加えて、非力な女性を刃物で脅し、その命と肉体を自由にするという、かつての平穏な日々では想像すらしなかった背徳的な行為もまた一因だった。

静香はただ、恐怖と屈辱の混ざった感情を胸の奥底で押し殺し、耳元で獣のように息を荒くする男の行為に耐えていた。

吐き掛けられる生臭い吐息と、尻に感じる高ぶった劣情の感触に嫌悪感が募った。

「ああくそー！ 我慢できねえー！」

男は急に嚙猛に吠えると、静香の乳房を弄んでいた手を彼女のブラウスの襟元に掛けた。

「……………!!!」

襟元に掛けた手を一気に引き下ろし、静香のブラウスとブラジャーを力任せに引き裂いた。

今まで衣服に押さえ込められていた乳房が、弾けるようにまろび出した。

静香の乳房は、たつぷりとボリュームがありながらも美しい紡錘形を保っており、色素の薄い珊瑚色の乳首がツンと上を向いていた。

男の乱暴な手つきによるものだろう、新雪のような肌はほんのりと朱く色付き、谷間にはうっすらと汗の露が光った。

「ひゃわはははは！ 本当にたまんねえぜ！」

美術品もかくやという素晴らしい乳房を目の当たりにして下品に笑う男を背後に、静香は恥辱に顔を俯かせて赤らめ、ぐっと唇を噛んで堪えた。

これ以上ない辱めに、出来るならば今にもその場に座り込んでしま

いたかった。

そして、早く清田が助けしてくれるよう祈った。

「へへへ…姉ちゃんよお、アンタいい匂いするなあ」

「うっ…いやあ、やだあ」

べろり、と男の舌が静香の頬をいやらしく舐め上げる。

ざらざらとした舌の感触とヤニ臭い唾液から逃れようと、静香は咄嗟に顔を背けようと男の腕の中でもがいた。

最早、耐えられなかった。これ以上の辱めは我慢できなかった。

そうやってささやかな抵抗を試みた静香だったが、それも直ぐに潰えた。

「暴れるんじゃねえ！」

「あうっ…！」

完全に従順となったとばかり思い込んでいた男は、静香の思わぬ反抗に苛立ち、左前腕で彼女の首を締め上げ、ナイフを握った右手でその頬をしたたかに殴った。

それで静香に一時沸き起こった反抗心は瞬時に萎えた。

改めて現実と、自身の無力さを突き付けられ、静香から抵抗する気が失われた。

「次暴れてみる。ただじゃ済まねえぞ」

男は、低くドスの利いた声で囁きながら、すつかり打ちのめされた静香の眼前にナイフを翳した。

そして、その刃をゆるゆると下方へ下げていく。

静香はその行方を目で追い、やがて男のやろうとしている事を察し、顔から血の気が引き、足元が遠退くような錯覚に陥った。

「姉ちゃんの大事な所にコイツを突っ込んでしまおうぞ」

鋭い切っ先が、スカートの薄い布地越しに柔らかな下腹部から秘所に掛けてすうつとなぞった。

女体の中で一際敏感な器官に金属の硬さを感じた瞬間、それが引き金となった。

「ひゃーはっはっはー！ こいつはいい！ 傑作だぜ！」

堪えきれないとてつもなく大きな恐怖が、目に見える形となって現

れた。

静香は、恐怖の余り、堪える間もなく失禁してしまった。

心が麻痺していた為に、排尿を堪える理性が働かなかったのだ。

足を伝い落ちる生温い液体の感覚とアンモニアの微かな刺激臭など最早気にする余裕など無かった。

今まで自分が積み重ねてきた人生の全てが、液体となって滑り落ちて足元に溜まるような感覚を、静香は心の何処かでぼんやりと他人事のように感じていた。

心が空白となっていくのが解った。

男の嘲笑など耳に届いていなかった。

目の前に佇んでいる筈の清田の姿もぼんやりとした人影にしか見えなかった。

全てがもうどうでも良かった。

臨界点を越えた恐怖が、彼女の心に諦観を齎していた。

その刹那、滲んだ視界の中で黒い人影が微かに動いた。

何かが耳の直ぐ傍を唸り上げて過ぎった気がしたが、静香にとっては預かり知らぬ現実だ。

視界の中を、やがて黒い人影が占領していく。

そして静香が感じたのは、人影によつて横に突き飛ばされ、糸の切れた傀儡のように力無く倒れ込む自分の身体だった。

一体どれだけの間、そうやって地面に倒れていたのだろうか。

気が付くと、誰かが自分を抱き起こして顔を覗き込んでいた。

自分を覗くその人物の顔は解らなかった。

何故なら、ヘルメットを目深に被り、スモークレンズのゴーグルを掛け、目出し帽で顔を完全に隠していたからだ。

これでは人相など解る筈がない。

ただ、その覆い隠された口許が、言葉を紡ぐ形となつて開いたり閉じたりしているのは理解できた。

一体、何を叫んでいるのだろうか―静香が意識を向けた瞬間、全てが戻った。

「鞠川先生！ 鞠川先生！ 自分の声が聞こえますか!？」

搔き消されていた音が一気に戻った気分だった。

耳元で怒鳴る清田の声の大きさに反射的に固く身を強張らせ、ぎゅっと目を閉じた。

恐る恐る目を開くと、やはり清田が変わらず自分の顔を覗き込んでいた。

どんな表情をしているのか解らないが、恐らくほっとしているような気がした。

直ぐ傍で、京子も此方を覗き込んでいた。

彼女は額に血の滲んだ包帯を巻かれていたが、静香が無事であることを確認して安堵した表情を見せた。

「私……一体……」

寝起きのようにぼんやりとしているが、静香に異常はなさそうだった。

清田は一先ず安堵に胸を撫で下ろした。

「立てますか？ 無理なら自分に掴まって下さい」

労るように優しい声音で何うと、腕の中の静香はこくりと頷き、首に両腕を回して絡めてきた。

清田も、静香をそのまま抱き上げるようにしてそっと立ち上がった。

そうして暫く静香は、清田の太い首に抱き着いたまま顔を埋め、その感触と匂いを確かめるように何度も深呼吸した。

彼の汗と、真新しい化学繊維の匂いを嗅いでいると、次第に心が落ち着いてきた。

グローブを嵌めた彼の大きな手が、後頭部を抱き、背中を優しく摩ってくれている。

父親に抱きしめられたように心地好い安堵感が心に広がっていく。

「本当に大丈夫ですか？」

やがて落ち着きを取り戻した静香は、再三にわたる清田の気遣いの言葉にはっとなり、急に気恥ずかしくなって身体を慌てて離れた。

その際、バランスを崩しそうになったので、伸ばされた清田の手が彼女を繋ぎ止め、改めてしっかりと立たせた。

「はい…なんとか」

破かれた衣服の前を両腕で隠し、静香は顔を俯かせながら答えた。急に見当識が正常に戻り、自分が服を着ている意味が殆どない事を思い出し、忘れていた羞恥心が込み上げてきたのだ。

「鞠川先生…ごめんなさい。私、貴女のことを守ってあげられなかった」

ファーストエイドキットの圧縮包帯を額に巻かれた京子は、瞳の端に涙を溜めながら己の不甲斐なさを静香に詫び、そして自分が着ていたクリーム色のジャケットを彼女の肩に掛けてやった。

全てはあの暴漢が悪いのに、京子は何も出来なかった自分を悔いていた。それは恐らく、清田以上に。

怪我まで負わされたのに、自分の事より他者を気遣う京子の優しさに、清田ばかりでなく静香も、何だか居たたまれない思いになった。そして、決して思い出したくはないが、ほんの数瞬間前に繰り広げられていた凌辱劇が脳裏に蘇る。

ふと、あの暴漢の姿が見えないので不安になり、静香は清田に問うた。

「一体、何があったんですか？ 私、あの…あれから何が起きたか覚えてないんです」

静香は失禁してからの記憶が曖昧だった。

同時に、今まで自分が失禁していた事実も忘れていたのだが、我に返ってみると己の股の間から靴の中まで感じるアンモニア臭のする液体の不快感と、更なる羞恥心が込み上げてきて、静香は清田の顔を直視できなかつた。

「先程の男は自分が無力化しましたので安心してください」

清田が指し示す方を見遣ると、男が俯せになって倒れていた。

背中に回された両腕には手錠が嵌められており、あれでは何も出来はしないだろう。

男の顔の周囲には血溜まりが広がっており、ぴくりとも動かなかつた。

清田は、男が隙を見せるまでじっと耐え忍んでいた。

目の前で守るべき者が凌辱される様を見せ付けられ、己の不甲斐なさや歯痒さを堪えながら頭脳を冷静に保つのは相当な精神力が必要だった。

転機は、恐怖で失禁する静香を男が嘲笑った瞬間だった。

男は静香の心を征服した事に満足していた。それが大きな隙を生み、結果として清田によって地面に沈められたのだが。

清田は手に隠し持っていたマルチツールを、男の無防備な眉間目掛けて投げ付けた。

小さいながらも強度と耐久性を保つ為に強固な合金が使われており、様々な工具がぎっしりと詰まっているマルチツールはずしりと重く、そんなものが唸りを上げて飛来すれば相当な威力を持つ。

それを眉間に受けた男は、突然の予期せぬ衝撃と激痛に反射的に頭を抱えて庇った。

その間に清田は距離を詰め、少々乱暴な方法だが茫然自失となっている静香を凶刃から遠ざける為に突き飛ばし、ナイフを握る男の右手をその背後に回って手加減無しに捻り上げた。

男は右腕の関節を恐ろしい力で極められ、激痛に喘いで思わず膝を地面に着いたが、そこへ清田の防弾レガースに覆われたごつい膝が顔面に襲い掛かる。

男に逃れる術もなく、鈍い音と共に鼻と前歯の殆どが砕け、そこで意識は完全に断ち切られて今に至る。

男の両腕の自由を奪う手錠は、先程の警察官の死体から拳銃と一緒に入手したものだ。

清田は手早く小銃と拳銃、散弾銃を回収した。

最早身体を休める所ではなかった。早急に移動しなければならぬ状況となっていた。

「二人とも一息付きたいとは思いますが、此処から移動しなければなりません…周囲を見てください」

清田は声のトーンを落とし、囁くように二人に言った。

「…！」

静香が周囲を見渡すと、いつの間にか「奴ら」が集まりだしていた。

男の下卑た高笑いが思った以上に閑散とした市街地に響いたのだろう。

既に何体かは給油場に侵入していた。

「…解りました。ところで」

ちらり、と静香は倒れ伏している男に視線を遣った。

あの男には肉体と精神の両方を散々踏みにじられた静香だったが、それでもなお少しだけ憐れみを感じていた。

もしも世界がこんな事にならなければ、男もあのような振る舞いをする必要は無かったかもしれない。

その行いは決して赦されはしないだろうが、ある意味では男も人生を狂わされた犠牲者といえた。

そう考えると静香には憎み切れなかった。

「……あの男はそのままにしていきます。連れていく訳にもいきませないので」

清田はポケットから手錠の鍵を取り出すと、男の目の前の地面に放った。

ちりん、と小さな金属音に釣られて〈奴ら〉が男の方へ誘導されていく。

「運が良ければ生き残れるでしょう。今はそれしか言えません」  
用は済んだ、と言わんばかりに清田はガソリンスタンドに背を向けて歩きだした。

静香は胸元を押さええながら慌ててその後続いた。京子も彼女を気遣うように追従する。

果たして、あの男の生存率はどれ程だろうか。

目を覚まし、〈奴ら〉の様子を窺いながら音を立てずに手錠を外し、逃げ延びる事が出来るだろうか。

それは限りなく不可能だが、生存の可能性を与えられただけマシだろう。

清田は直ぐに、一人の人間を死に追いやった事実を頭から締め出した。

こういう事はこれからもあるのだから、いちいち取り合っている



肉体と精神がもたない。

己の行いを振り返るのは、無事に任務を遂行してからで充分だ。  
三人は、〈奴ら〉を避けてガソリンスタンドを後にした。

## #1st day ⑦

ショーウィンドウのガラス越しに差し込む陽光は傾き、弱くなっていった。

昼間は汗ばむ程の陽気だったが、今では少し涼しく感じるほどにまで落ち着いている。

防弾ベストの下に着込んだ戦闘服は汗でじっとりと濡れ、不快指数は高かったが、コンディションは万全だ。それなりに疲労も蓄積しているが、問題となるほどではない

清田は、洋品店の店内から油断なく、通りに視線を巡らしていた。裏通りに面している為か、都合がいい事に人気は全くなかった。

視線を転じ、今度は店内を注意深く観察する。

店内に荒らされた形跡はなく、商品は正しく陳列され、レジ周辺も売上金を持ち出されたという訳ではない。血痕や肉片、“動く死体”も無かった。

どういった理由にせよ、店員がいないのは幸いだった。

今は非常事態とはいえ、勝手に国民の財産を“徴用”するのは気が引ける。

尤も、徴用した物品は清田が使うのではないが、結果的にそれの手伝いをしているのだから、言い逃れができる訳ではない。

再度通りの様子を観察してから、店内の奥まった所にある更衣室の前まで移動する。

無意識の内に足音を殺して移動する、ステルス・エントリーの技術を駆使していたのは身に付いた習性だからだろうか。

カーテン越しに、中から衣擦れの音が聞こえた。

するり、はらり、ぱざりと音がする度に、清田は何となく落ち着かず、そわそわと小銃を撫でた。

今、この薄い布を隔てた空間の中で、静香と京子は服を着替えている。た。

とてもではないが平穩無事とは言えなかった道中で、二人の衣服は檻樓切れ寸前となり、特に静香に至ってはガソリンスタンドでの暴漢

による陵辱劇で服の大部分を切り裂かれ、衣服は最早その体裁を成していなかった。

この状態では行動するのもままならない。

そこで、なるべく人通りの少ない、充分な道幅のある裏通りを選んで歩き、タイミングよく洋品店を見つけたのだ。

悄然とした様子でとぼとぼと歩く二人の女性を見るのは辛かった。

大勢の人間の凄絶な最後、命辛々と死地からの脱出、邪悪でおぞましい陵辱劇―彼女達の精神と肉体の両方は擦り減らされていた。

そんな弱り果てた二人を見て、清田は何度も己の無力さを味わっていた。

物理的に彼女達の命を守る事は出来ても、精神までもがそうという訳ではない。

特殊部隊の兵士とはいえ、所詮は只の軍事労働者（グリーンカラー）にしか過ぎない。しかも、特別な訓練を多く受けているだけで、根本は公務員である。

心の安寧の処方をする、精神科医とは違うのだ。

俺に出来るのは、何かを吹っ飛ばしたりする事だけだ―汗と血と苦痛を伴う訓練の成果が、たったの二人の人間を安心させてやれない事実を目の当たりにして、積み重ねてきた苦難を否定されるような思いだった。

そんな清田が一人で悶々と悩んでいると、中からカーテンが控え目に関けられた。

カーテンの擦れる音に我に返り、清田は顔を上げた。

着替え終えた京子が、其処には佇んでいた。

襪襦切れ同然のベージュのブラウスとスカートは足元に畳まれ、今は動きやすいカジュアルな服装に着替えていた。

シンプルなデザインのボディシャツ、スキニータイプの七分丈コーデュロイパンツといった出で立ちは、今までのオフィスカジュアルな服装からするとより軽快だろう。

タイトなデザインの衣服によって、京子のしなやかで美しいボディラインが強調されていた。

「もう、大丈夫ですか？」

清田は念を押すように訊ねた。

「はい。服も着替えられたし、大分落ち着きました」

そう言つて、京子は幾分和らいだ表情を見せた。

京子の青痣（あおあざ）をうつすらと浮かべた右頬と、新しくまき直した額の包帯が余りにも痛ましくて、清田は思わず目を伏せてしまった。

京子に続き、静香も着替え終えたようで、カーテンが開けられた。涼やかな薄地のノースリーブタートルネックセーター、すつきりとした膝丈のデニムパンツという格好で、こちらも動きやすさを重視していた。

静香の子供の頭ほどもある巨乳は、セーターの縦縞によつて陰影がより強く描き出され、誇らしげにその大きさを主張していた。ぴっちりとしたデニムも、彼女の充実した腰回りをさり気なく際立たせていて、控え目ながらセクシーさを演出している。

静香も、先程の白昼の陵辱劇から幾らか立ち直っている様子だが、まだ表情は硬く強ばっている。

清田が見張りに立っている間、二人は着替える前に店のバックヤードを兼ねる事務室で身体の汚れを拭っていた。まだ、ライフラインが機能しているのが幸いだった。

お互いに協力して水で濡らしたタオルで身体を拭き清め、血や汗、埃、そして静香は未処理のままだったデリケートな部分の排泄物の残渣を取り、髪も簡単だが水で濯いだ。

髪についてはドライヤーが無いのでタオルで水気を吸い取る事しか出来なかったが、身体を清潔にするだけでも気分は大分良くなった。

二人は無断で借用しているには心苦しさを感じたが、衣類も一通り新しいものへと替えられた。下着はもとより、静香は失禁の際に濡れた靴も歩きやすいパンプスに交換していた。

当面の間の行動着としては充分だろう。清田の、戦闘を前提とした格好には到底及びもつかないが。

清田は頭の前から爪先まで、二人を視線で改めると、納得したように頷いた。が、静香の身体のある部分に目を戻し、思わず注視してしまった。

静香の人並み以上の巨乳に合う下着が、此処には無かったのだらう。

今の彼女はブラジャーを着用していないので、肌にぴたりと吸い付くようなセーター生地に、乳首の陰影がうつすらと浮かび上がっていた。

それを見て、思わず清田は顔を赤らめ、恥ずかしそうに拳を握り締めた。

「…大丈夫そうですね」

清田は気取られないよう、平静を装って言った。

だが、幾らか異性の反応に対して過敏になつている静香は、それを具に感じ取っており、慌てて胸元を手で隠した。

「やっぱり…気になります?」

静香は、少し怯えた表情で窺うように言った。

必要以上に男性の注目を集めてしまう自分の身体を、彼女はこの時ばかりは煩わしく思った。

歩く人喰い死体が齎した、極度の社会的混乱によつて秩序が崩壊しかけている今、道徳規範を失った野獣のような連中からすれば、静香のような美女は真つ先にそういう対象となるのが充分に証明された。理性の籠（たが）が外れた人間ほど恐ろしいものはない。それは先刻の出来事で嫌というほど身に染みている。

清田も同様に人間のおぞましい部分を肌で感じ取っていたが、非力な女性が屈強な男性によつて一方的に肉体と精神を犯されそうになるという耐え難い屈辱は、男である彼には想像が難しい。

清田が静香と同様の事態に陥るには、少なくとも二メートルを優に超す巨漢でなければ無理だろう。清田からして、二メートルとまではいかないが、かなりの長身である。

おまけに彼は相当鍛え込んでいるから、並みの男が数人掛かりでも組み伏せるのは難しいだろう。

静香は胸元を押さえたまま清田の脇をすり抜けると、新たに衣服を二、三ほど見繕って更衣室に戻り、カーテンを閉めた。

壁で仕切られていたので、京子は今の二人のやり取りを知る術はなく、訝しげな視線を清田に投げかけた。

清田はその視線が無言の抗議に思えて、心苦しかった。

たとえ高い規範を備えた特殊部隊の兵士といえども、それ以前に健全な男子である。

つつい、目を向けてしまうのは仕方がない事だが、自分の何気ないちよつとした行動が静香に不必要な恐怖を与えたり、その心を傷付けたのであれば、なんと弁明して良いのか解らない。

己の迂闊さや配慮の足りなさを悔いると同時に、呆れていた。

そういつたケアは、やはり同性である京子に頼むべきだろう。

「林先生、少しいいですか？」

清田は、静香が着替えている更衣室から幾らか離れた所で京子を呼んだ。

「鞠川先生についてなんです…」

清田の深刻そうな声音から、彼が言わんとしている事を京子は察した。

「ええ。分かっています」

彼女も声を潜めて応えた。

その表情は以前にも増して硬い。

「今まで以上に面倒を見てあげて下さい。男の自分では、恐がらせてしまうばかりですから…」

清田はフェイスマスクの下で歯噛みし、拳を握り締めた。

こればかりはどうしようも出来ない。

静香は、此処に到達するまで京子に手を引かれなければ歩けないほど憔悴しきっていた。

見かねた清田が手を貸そうとすると、小さく悲鳴を漏らして京子の背に隠れてしまうという事もあった。

救出当初は、安心からか清田に抱きついたりもしたが、落ち着いてくると徐々に先程の恐怖が神経を苛む様子で、次第に彼を避けるよう

になった。

大柄な清田の物騒な外見が、先程の暴漢を思い出させるのだろう。此処に来るまでの道中は完全に怯えられていたが、京子と二人きりで身体を清潔に出来てからはある程度まで回復していた。その際に彼女が色々とフォロワーしてくれたのだろう。

京子は、幾らか疲労を滲ませながらも、辛抱強い母親のように静香をあやした。

その度に清田は、役に立たない所か恐怖を与える己に嫌気が差した。

これでは、京子におんぶに抱っこではないか―彼女も、暴漢に襲われ、頬をしたたかに殴られているというのに。

静香のように獣欲による暴行ではないが、それでも非力な女性が自分よりも圧倒的に体力に優れる男性から受ける暴力は、筆舌に尽くし難い恐怖を感じるだろう。

こうして清田と二人きりでいると、京子も心中穏やかではなかったのだが、彼に非はないのだからと表情には出さないように気を付けていた。

しかし清田は、自分と話す時だけ表情が硬い京子の反応を見て、彼女の男性に対する嫌悪感をひしひしと肌で感じていた。

女性二人がよそよそしかったり、嫌悪感を露わにする反応を見ると、流石の清田も少し傷付いた。

特殊部隊の隊員とはいえ、清田はまだ二十代前半の若者である。

世間で例えるなら、大卒一年目の若輩者であり、人生経験も乏しい。だが、それは、己が犯した判断ミスにより、彼女らが無用な危険に晒した罰だ。

肩身の狭い思いをするのは自らの失態からである。むしろ、二人がこうして生きているだけでも僥倖だ。

針のむしろの気分なんて幾らでも味わってもいい。

二人が無事なだけでも充分だった。

そう思わなければ、強烈に押し寄せる自己否定の波に飲み込まれてしまいそうだった。

「……」

二人の間に気まずい沈黙が訪れた。

今の清田はタクティカルゴーグルを鉄帽まで押し上げており、彼の優しそうな目元が露出している。

京子の発する、男性に対する嫌悪感を敏感に感じ取った清田が、酷く傷付いた感情を一瞬だけ目に浮かべていた。

そうして彼女も知らぬ間に相手を傷付けていたのを知り、己の詰まらぬ感情を発露させた軽率さを嫌悪した。

今の今まで、自分達を守ってくれている清田に悪感情を向けてしまったのは大人気ないが、既に事は起こり、終わってしまった。

どちらも顔を伏せ、居たたまれない思いで佇んでいた。

暫くすると、気まずい静寂を破るかのように更衣室のカーテンが開かれる音が聞こえ、二人はそちらに顔を向けた。

静香は先程よりも肌の露出を抑える為に、薄手のカーデイガンを羽織り、セーターの下にはキャミソールを着ていた。

清田と目が合うと、静香は遠慮がちに視線を床に落とした。

明確な意志を持って拒絶されている、という事実を目の当たりにして、純朴な青年の心は更に痛みを覚えた。

なんともやるせなくて、悲しくて、どうしようも出来なくて。

「…取り敢えず、お二人は休んでいてください」

清田はそう言つて事務室から椅子を一脚持つてくると、ショーウィンドウに並ぶマネキンの陰に置き、それに腰を下ろして通りを監視した。

その大きな背中からは哀愁と、独りにして欲しいという意味が伝わってきた。

†††

取り返しのつかない事をしてしまった―のかもしれない。

静香の傍にいてやりながら京子は、先程の清田とのやり取りを思い返していた。

自分からすれば見上げるほど大きく強大な兵士が、打ちひしがれた子犬のように寂寥とした目をしていた。 寄る辺をなくした兵士は



悲惨だ。

辛く苦しい戦争を生き残り、帰国したというのに自国民から容赦なく浴びせられる罵声に精神を病んだベトナム帰還兵は多い。

国家の為、家族の為、恋人の為―それぞれの想いを胸に異国のジャングルで血反吐に塗れ、戦友の遺骸を抱いて帰り着いた褒美としては余りにも残酷だろう。

清田も、恐らく彼らと同じような気持ちをもったに違いない。

此処に至る道中、命を懸けて守っていたというのに、そのような冷たい反応をされれば誰だって傷付く筈だ。

確かに、途中のあの暴漢による邪悪な行いが、静香と京子の肉体と精神に深い傷を負わせたのは事実である。

それから二人は、あの暴漢と同じ男であるという理由だけで、清田を意識と無意識に関わらず避けていた。

大柄で、見るからに物騒で粗暴そうな外見が、あの思い出したくもない記憶を掘り起こす。

勿論、ガソリンスタンドでの出来事について、彼には感謝している。

清田が助け出してくれなければ、今頃二人ともあの暴漢の慰み者になっただけに違いない。

そうならず済んだのは清田の勇敢な行動の御陰である。

だが、頭で理解していても、一度心に芽生えたトラウマまで簡単に払拭できる訳ではない。

そうして、時折、助け出してくれたというのに、心の中で彼に向かって酷い言葉を言ってしまう。

どうして私達から目を離れたの！―と、自分勝手な言い分を何度も彼に向かって胸中で浴びせていた。

清田に、京子は行き場のない怒りを知らずの内に向けてしまっていたのだ。

その都度、彼にこれといって非はないというのに、そんな身勝手過ぎる自分の妄想に対して嫌悪し、鬱ぎ込んでいく。

実際、あの暴漢との遭遇は運がなかったとしか言い様がない。

だが、もしもあの時、清田が自分達を連れて行ってくれれば、あんな

な怖い思いをしなかったのではないかと考えずにはいられない―あの場にあつては、清田の重荷になるという事実はさて置いて。

仮定の話など幾らしたところで切りがないのだが、でも、もしかして、だったら、と想像が止まる事はない。

京子は一人で悶々と思考の反芻を繰り返していた。

ふと、京子は腰に硬い感触を覚え、服の上から手を触れてみた。

それは清田から渡された、死亡した警察官が所持していた拳銃だった。

それをウエストバンドから抜き取り、机の上に置いてみる。

ごとりと、意外に重い音を立てた。手の小さな京子にも握り易いデザインだが、ずしりとくる。

それは、非力な女性でも簡単に人間を殺す事を可能とする道具だった。

引き金を引くだけで十分な殺傷力を持った銃弾が飛び出し、命中部位によつては即死させる。

たったそれだけで人の命を奪ってしまう事が出来る恐ろしい代物だ。

教壇に立つ聖職者としてはそのような物騒な物に触れるのは忌避すべき事だが、この非常事態にあつては簡単かつ強力に自分の身を守る武器でもある。

ふと、傍らの静香に目を遣った。

彼女は机に突つ伏して、穏やかな寝息をたてていた。

辛い出来事ばかりで、疲れ切っていたのだろう。京子はそつと頭を撫でてやり、まだ水気を含んだ彼女の髪を手櫛で梳いてやった。

そして、目の前の拳銃に視線を戻す。

自分の為にも、静香の為にも、今、学ばなければいけない。

これ以上、理不尽な暴力に屈する訳にはいかなかった。

京子は意を決すると、拳銃を手に事務室を後にした。

†††

通りを監視しながら、清田は鬱屈とした思いに沈んでいた。

何度も何度も、あの時の判断を下した己の不甲斐なさを責め立てて

いた。あの時、二人を連れてスタンドの建物内をクリアリングすれば良かった。

そうすれば暴漢に襲われる事もなく、二人を無用な恐怖に晒す事はなかった。

ただ、それはあくまでも結果論に過ぎない。

クリアリングに連れて行って、もしも建物内の何処かにへ奴らが潜んでいたりでもしたら、不意を突かれる可能性も充分にあった。

そうなれば三人のうちの誰かが犠牲になったかもしれないし、ならないかもしれない。

だが、それはそれで彼女らを危険な目に遭わせてしまう事に変わりはない。

過ぎ去った事をとやかく言っても仕方がないのは承知している。

それでも、あの時あすれば良かったと何度も同じ思考実験を繰り返し、深みにはまっていくばかりであった。

そうすれば、此処まで拒絶される事も無かつただろう。

正直、守るべき存在に目の前で否定されるのは、流石の清田といえども堪えた。

彼女達も理解はしてくれているだろうが、人間の感情は物分かりが良い訳ではない。

二人のあの反応は一時のヒステリックみたいなものだろうとは知りつつ、それでも尚、精神にダメージは受ける。

なんと打たれ弱い男なんだ、お前という奴は！——清田は己を叱咤したが、心に生まれた痼りを消化できなくて、呻きを上げたかった。

罵詈雑言を浴びせられながらの過酷なしごきなど何ら問題はない。清田は肉体的にも精神的にも頑健であり、どんなに困難な任務でもこなす能力は備えていた。

だが、人から冷たくされるといふのは思いの外、異質な苦しみであった。

自衛隊に入隊し、狂気とも言える特殊作戦の世界に足を踏み入れるまで、清田は平凡な人生を送ってきていたに過ぎない。

人並み以上の体格を備える以外はごく普通の少年であり、今時の若

者にしては色恋に疎く、学生時代は勉強や部活に打ち込んでいた。

むしろ彼は、恋にのめり込む周囲の同世代の感情が解らなかった。今のこの「青春」の日々は二度とやってこないというのに、どうして勉強とスポーツに打ち込まずに同世代の多くは横に逸れてしまうのだろうか。

清田少年は今しかない「若き」を徹底的に燃やし尽くし、老いてから後悔などしたくなかったのだ。

あの時、ああしていれば良かった―そんな思いは絶対にしたくはなかった。

そうして彼は考えた。

一度しかない人生、一つしかないこの命を、もつともつと情熱的に燃やし尽くす事は出来ないのかと。

サラリーマンとして働き、社会の一員として税金を納め、ごく普通の家庭を築き、子供を育て、やがて年老いて死んでいく―それも立派な生き方の一つに違いない。

だけど俺は、もつと心臓を高鳴らせたいんだ！―そんな清田に自衛隊、特に特殊作戦群はうってつけだった。

権力や金融による闘争ではなく、鉄と血による闘争の為に仕事をする事で給料が貰えるなんて、凄く単純で面白かった。それが尚且つ、国家の為であるならより一層だ。

武器を片手に重装備で山野を駆けずり回ったり、高々度から落下傘で降下したり、映画のようにへりで強襲するのは刺激的だった。

小銃は勿論、拳銃、機関銃、散弾銃、狙撃銃、無反動砲、ロケットランチャー、グレネードランチャー、対戦車ミサイル、手榴弾、各種爆破薬を扱うのは楽しくて仕方がなかった。

それらの技術は、一般社会にでれば何ら役に立たないだろう。銃の撃ち方よりもパソコンでパワーポイントを使える方がずっと役に立つのは間違いない。

視点を変えれば全く役に立たないどころか、使う機会すらない技術だろう。

そんなものに対して心血を注ぎ、時には命を危険に晒すのは全くの

無駄なのかもしれない。

だが、それでも、清田にとっては充分だった。

兵器の扱いに習熟する事や、人間を効率よく殺す術が、高額納税者以上が納める税金以上の価値があるのならば、それで満足だ。

金では買えないし、作り出すのも難しい、自分の命を真摯に燃やす愛国心を持った人間こそが、特殊作戦群には必要なのだ。

しかし、そうしてある意味で浮き世離れした生活が長く続いた弊害故に、清田は他人の悪感情に慣れていなかった。

守るべき“民間人”から向けられた生々しい拒絶は流石にショックが大きかった。

そうだったのは全て自分の過失故なのだが—また、清田の思考は振り出しに戻る。

そうして延々と続く、苦々しい一人AAR—After Acti  
on Review（事後検討会）—をしていた為だろう。

「田中さん？」

「?!」

背後からの声に、清田は思わず身体をびくりと震わせた。

傍目に見ても、その巨体が情けなく驚く姿が確認できた。

「……何でしょうか？」

取り繕うように、京子を振り返らずに声帯は冷静に震わせる。

膝の上に置いた小銃を取り落とさないだけマシだったかもしれない。ない。

「お話したい事があって…」

京子の声が、心なしか申し訳無さそうだった。

一体、これ以上何の話をするというのだろうか。俺は、二人から拒絶されているというのに—清田は内心ではびくびくしていた。

もしかして、面と向かって辛い言葉を言われるのではないかと。

しかし、もしそうであるならば京子がどうして申し訳なさそうなのだろうか。

ええい。もうどうでもいい。何とでも言ってくれ—清田は半ば自暴自棄だった。

緩慢な動作で立ち上がり、京子に向き直る。

やはり、巨壁のような清田と相對すると、京子は表情をこわばらせた。

慣れようと思っても、改めてそのような顔をされると心が痛む。

ゴーグルによって表情が一切消えた、ロボット然な清田を前にして、より一層彼女は怖がつているような気もしたが、落ち込んだ情けない顔を見せる訳にもいかない。

最早清田に縋り付けるのはちっぽけなプライド程度しかなかった。

「あの…」

京子がおずおずと口を開いた。が、言葉が後に続かない。

暫く、目を右往左往させてから、意を決したのか、真正面から清田を見つめた。

「私に銃の扱い方を教えてください」

頭を下げ、京子は懇願した。

暫く、きよとんと佇んでいた清田だったが、そこで初めて彼女が警官から入手した拳銃を手に行っているのに気がついた。

本来ならばガソリンスタンドでの休憩時に操作方法を彼女に教える筈だったが、あの暴漢によってそれは叶わなかった。

それを京子の方から申し出てきたという事は、早急に銃の取り扱いを身につけなければいけないという焦燥感があの一件で醸成されたと見做して間違いないだろう。

それは何時までも清田にばかり頼り切っていてはいけないという危機感を持つてこれからの道中に望むという、前向きな意思表示に他ならない。

清田からすれば、生存者達が受動的から能動的な姿勢を保持し、行動力を身に付けようとするのは大変好ましかった。

そうすれば清田の負担もある程度は軽減されるだろうから。ただし、銃の操作を覚えたが故に自己を過信し、出過ぎた真似をさせないように指導しなければならぬ。

所詮は素人である事に変わりはないのだから。

「分かりました。それでは、事務室でその練習をしましょう」

事務室には静香がいる。

顔を合わせれば、また怯えた顔をされるのはショックだが、この際相手の心情に拘っている場合などではない。

大事なのは、生き残る事なのだから。

†††

ぎしり、と事務机が鳴った。

清田が背負っていたデイバックを机の上に置くと、重みで脚が悲鳴を上げた。

デイバックそれ自体もかなり容積があるのだが至る所にMOLL Eによる装備の追加が可能で、清田はそれらを可能な限り活用しており、様々なポーチを装着していた。

バックの背面は破片手榴弾、特殊音響閃光手榴弾、煙幕手榴弾を収めたグレネードポーチが鈴なりに括り付けられていた。

バックアップを担当する清田は他の隊員の予備の装備を携行する役目も担っており、それらは直ぐに使えるようにデイバックの中ではなく外の取り出しやすい場所に入れていた。側面には二つの長大なポーチが追加されており、右のポーチにはそれぞれ種類の異なる紐が二束、ダクトテープでぐるぐる巻にされたクツキーの菓子箱ほどの長方形の塊が幾つか、頑丈な鉄製の小さな箱と握りの付いた小さな装置が入れてあった。

左のポーチには、二本の長大な筒を入れてある。恐らく、これが清田が携行する装備の中での最大火力だ。

デイバックの他に、小銃と散弾銃も身体から外して置く。

タクティカルベストのフロントジッパーを摘み、一瞬迷ったが、意を決して脱いだ。更に防弾ベストも脱ぎ、ポーチを鈴なりに括り付けている弾帯を外し、それらを机に置く。

身に付けているのは、鉄帽とフェイスマスク、両手足の防具、両太腿のレッグホルスターとレッグパネルだけだ。手足や太腿の装備は外すのが面倒なのでそのままにする。

事務机の上には装備が山盛りに積まれていた。その殆どが武器弾薬と爆薬であり、まさに清田は歩く火薬庫といった状態で今の今まで任務を遂行していた。

キヤスター付の椅子に腰を下ろす。身軽になったとはいえ、巨漢の清田が座ると椅子が抗議の声を上げた。

ただでさえ上背があり、肩幅も広く、それに加えて体重の殆どが筋肉である。小柄な女性二人分程もあるだろう。

背もたれに体重を預け、背伸びをしながら天井を仰ぎ見る。一気に拘束が解けて、身体を軽く感じた。

ことり、と何かが置かれる小さな音が耳殻に滑り込んできた。

視線を天井から机の上に転じると、装備が積まれたその片隅に紙製のカップが置かれていた。

「よろしければどうぞ、お飲みになってください」

京子が、トレーを持って傍に佇んでいた。カップからはコーヒーの香りが湯気と共に立ち上っている。

「わざわざすみません」

慌てて清田は襟を直し、背筋を伸ばして礼を述べた。休息するとはいつても、少しだらしない。余りに不拔けた姿は晒すべきではないだろう。

京子が煎れてくれたコーヒーが注がれたカップを手に、ちらりと机に突っ伏す静香に目を遣った。

やはり、面と向かって顔を合わせるのは気が引けたので、起きる気配がないほど眠りが深いのが幸いだった。

糞、何を安心していやがるんだ―己の些末で矮小な心の動きに辟易としながら、カップに口を付けたが、清田は自分がまだフェイスマスクを被ったままなのを忘れていた。

「田中さん、目だし帽を被ったままですよ」

京子に指摘され、清田は恥ずかしかった。

こんな事も忘れるほど、俺は疲れているのだろうか。糞、不甲斐ないぞ、清田武―自らを叱咤し、カップを置き、鉄帽を固定する三点顎紐を緩めた。



鉄帽を脱ぎ、装備の山の上に置く。フェイスマスクに手をかけた所で、その手が止まった。

京子は、椅子を傍に持つてきて座っており、興味深げに清田をしげしげと眺めていた。その視線に気付き、急に居たたまれなくなった。残念ながら、自分は美男子ではない。映画やドラマでは、絶体絶命のピンチに駆け付けるヒーローはイケメンと相場が決まっているが、生憎と期待には添えそうにもない。

「林先生。残念ながら、自分はイケメンじゃありませんよ」

脱ぐ前に、一応、清田は釘を刺しておく。下手な期待を持たれて失望されては堪ったものではない。

「いえ、そんな事は決して…思ってませんよ?」

凶星なのだろうか。京子は、頬を赤らめて否定した。

こういった遣り取りが出来るようになっただけ、京子の状態は良くなっているを受け止めるべきだろう。

彼女の中に生まれた、生存への意志がそうさせているのなら好ましい事だ―清田はそう判断し、フェイスマスクをするりと脱いだ。

露わになった清田の素顔は、マスクから僅かに露出していた目元通りのものだった。

短く端正に刈り込まれた頭髪は爽やかな印象を与え、輝きに満ちた瞳には強い意志が溢れている。頬は高く肉が削げ落ち、首は太く鍛え込まれている。どんな困難をも乗り越えようとする不敵な面魂は若く、精悍な顔立ちだった。

今時のイケメンとは全く異なる、逞しい面構えの青年だった。

「ほら、言った通りでしょう?」

清田は頭を掻きながら照れ臭そうに言った。

京子は、漸くお目にかかれた清田の素顔をとっくり眺め、やおら口を開いた。

「意外と、肌が白いですね」

清田の生まれは東北であり、白皙は母親譲りであった。日に焼けても赤くなるばかりで、小麦色に焼ける肌には憧れていた。

「色白なのは母親譲りなんです。これで女の子に生まれてれば良かった

たのでしようけど、怪獣みたいに育っちゃいました」

馬鹿でかい大男なのに色白、というのがアンバランスなのは自覚していた。それが清田にとつての密かなコンプレックスだった。

「おまけに…汗臭くてすみません」

そして今更のように装備の下では大汗をかいていた事実を思い出して、濡れて重くなった戦闘服の臭いが気になった。

清田は腋臭や体臭がきつい、という訳ではないが、やはり汗の臭いは誰にとつても不快だろう。以前に数日間の野営訓練で、先輩隊員に「洗っていない柴犬の臭いがする」と言われた時は、流石の清田もショックだった。

「いえ、そんなにお気になさらなくても。私、こう見えて卓球部の顧問なんです。汗の臭いなんて気になりませんよ」

ちよつと誇らしげに胸を反らす京子を、清田は意外そうな目で見ただ。

成る程、三十路を過ぎてもプロポーションを維持できているのは、運動部の顧問をしているからか—などと、清田は邪推してしまった。

「それに…男の方の汗の臭いって、嫌いじゃないんです」

はにかみながら、さらりと自身の性癖について暴露した京子を、清田はまじまじと見詰めた。

年上の美人が己の性癖を打ち明けるといふ事態を、一体どう受け止めれば良いのだろうか—少なくとも、ある程度心を許してくれていると考えるべきだろう。

またか、またなのか清田武。お前という男は直ぐこれだ—邪な方向に逸れる自分の思考回路を戒めるよう、清田は丁度良い温度まで下がったコーヒーを一口で飲み干した。

「それでは早速始めましょう。林先生、拳銃を自分に渡してください」京子から拳銃を受け取り、清田は慣れた手付きで銃把を握り、親指でサムピースを前進させて回転弾倉をスイングアウトさせ、装填されていた五発の三八スペシャル弾を抜き取った。

実弾が装填されたまま練習する訳にはいかない。

「先ず、握り方から教えます。それでは、どうぞ」

京子は返された拳銃を握り、次の指示を待つ。

清田は立ち上がると、レックホルスターからUSPタクティカルを抜き、弾倉交換ボタンを押して、十五発の9mmパラベラム弾が詰め込まれた複列弾倉（ダブルカラムマガジン）を抜き取り、更にスライドを引いて薬室に収まっていた一発も弾き出した。

その一連の動作は淀みなく流れる水のように滑らかで、銃の扱いの素人である京子にも、清田がかなりの熟練者であるの是一目瞭然である事が解った。

「拳銃を真上から、素直に握ります。丁度、親指と人差し指の根本にあるこの窪みに、銃把を真っ直ぐ当ててようなイメージで」

清田が、自分の拳銃を握る様子を分かり易く見せてくれる。京子もそれにならない、同じ動きをした。

「次に、中指、薬指、小指の順に握ります。包み込むようにしっかり握り、かつ、力を入れすぎないように」

言われた通りに握り込むと、拳銃が手の中で固定された。

「親指はサムピース…本体左側に付いてる、三角形をした突起の事です。そこに、添えるように置いて」

しかし、緊張しているからか、添えたつもりの親指がサムピースを前進させてしまった。蓮根のような弾倉が横にスイングアウトされる。

「そのボタンは新しい弾を込める際に使用するので、射撃中は間違って前進させないようにして下さい」

清田の手が伸ばされ、弾倉を本体に押し込む。回転子と固定子が弾倉を噛むかたちとした感触が指先に伝わった。

「あと、人差し指は、射撃以外の時は引き金に指を掛けないで下さい。暴発の恐れがありますので」

弾倉を押し込むついでに、清田の指が、引き金に掛かっていた京子の指をやんわりと外した。

「射撃寸前まで、人差し指は伸ばしたまま弾倉の下辺につけて下さい」言われた通りに人差し指をピンと伸ばすと、手が釣りそうになつた。人差し指と親指以外は銃把をしっかりと握り込まねばならず、な

かなか疲れる。

「これが拳銃の握り方です。さて、次は構え方の練習をしましょう。準備をしますので、その間は握り方の練習をして下さい」

清田は椅子から立ち上がり、机の上にあつた鉛筆立てからマジックを手にして壁際まで歩く。

そこに、小さな人型を書いた。

「立って、あの標的の前に移動して下さい」

京子は席を立ち、清田が書いた標的の前まで移動する。頭と肩を書いただけの簡単な人型だ。大きさとしては、十メートルほど離れた場所から見る標準的な身長の人型だ。大人男性ぐらいだろうか。

清田は、標的の前に立った京子の背後に移動した。

「標的の正面に立ったのなら、先ず、左足を真横に出し、両足を肩幅程度まで開いてください。んー：そうですね。身体の軸が、両足の間に落ちるようなイメージをして下さい」

清田は、両足の間に金玉を落とせ、と教わったが、それを女性である京子に言う訳にもいかない。

「そうしたら拳銃を持った右手を挙げて。左手は右手を包み込むように添えて：そうそう。上手ですね。両肘を伸ばし、この際、気持ち右腕をやや突き出すようにして。銃を握る右腕が反動に負けない為ですね。それを、左手で引き戻して銃を安定させるように」

清田は拳銃をホルスターに戻し、銃を構える慣れない姿勢を取る京子の身体に背後から触れ、間違っている箇所を矯正していく。

ふわり、と濃厚な男の匂いが京子を包み込む。それは優しく力強く、まるで父親に抱き締められているかのような安心感をもたらした。

それだけで一時でも、あの忌々しい暴漢と同じ男であるというだけで忌避して彼を傷つけてしまった事を後悔した。

彼はあの男とは全く違う。

その事実だけで胸に生まれた、言葉で表せないわだかまりが溶けて消え去った。

清田は背後から、拳銃を握る京子の手を、自分の手で包み込むように保持していた。タクティカルグローブに包まれた彼の指先は、思いの外、繊細な動きを可能としていた。

丁度、あすなる抱きの形となっており、京子の頭の後ろには、清田の分厚い筋肉に覆われた胸板がぴたりと押しつけられていた。

汗に濡れた彼の迷彩柄の戦闘服からは、脳髓を痺れさせるような濃密な牡の香りがする。加えて、ゆつくりと力強く刻む鼓動は、獅子の心臓のように雄々しい。今になって京子は、自分の心臓が早鐘のように鳴っているのを思い知った。

十歳ほど年下の、それも精悍な若者にときめいているとでもいうのだろうか。

決して、京子は年下の男性が趣味ではなかった。異性への興味は専ら同世代である。職場で気になる男性教師だって何人かいた。

ただ、清田が彼らと決定的に異なるのは、まるで男の見本が服を着て歩いているのかというほどの逞しさを備えていた事だ。こればかりは、同僚の教師や早熟な教え子にも無い要素だった。

当初は、戦争映画でしか見た事がない重装備の大男を、ロボットのようは無機質な存在としか見れなかった。しかし、何度も命を救われ、更に精悍だが純朴そうな雰囲気を持つ素顔を目の当たりにして、漸く一人の人間としてその輪郭を認識した。

途端に、何故だか胸に甘い疼きを覚えた。それが恋だなんて思えない。映画やドラマでもよくある、吊り橋効果だとも言うのだろうか。

いや、解っている。女を三十年と少しもやっていれば、これが子宮からくる感情だというのを。生命の危機に瀕する機会が多いからか、男だけでなく女も子孫を残そうとする欲求が働くのだろうか。

そして、手近で、かつ「牡」としてこれ以上ないくらいの条件を満たしている清田に、一時的とはいえ、欲情しているのは確かだ。

—やだ、私、もしかして？—

思考は靄が掛かったように霞み、なんだか身体が火照ってきた。

清田を強く意識した途端、京子の女の中心が妖しく蠢動しているか

の様だった。

「…林先生？」

「わうっ!？」

突然、清田の吐息が耳に拭き掛かり、京子は思わず素っ頓狂な声を漏らした。感覚が、知らず知らずの内に鋭敏になっていった。

彼は矯正していた手を離し、少し怪訝な表情で京子を見た。

「何処か具合が悪いのですか？」

清田は、劣情を催して火照った京子の様子を見て、具合が悪いのではないかと勘違いしていた。

「あ、いえ、すいません…銃に触れるのなんて初めてなもので、緊張してしまいました」

慌てて取り繕うように、京子は嘘を言った。が、清田は納得した様子で頷いた。

「ああ、それは解りますよ。自分も、入隊して初めて銃をこの手に持った時は…凄く重く感じました。ただか三キロとちよつとの筈なのに、やけに重いですよ」

清田は、昔を懐かしむように目を細めた。

「班長から言われました。お前らが持つ銃の重みは、ただの重みじゃないって。それは国を守る重みなんだって…今となつては、あの時の重みを少しでも理解できたような気がします」

しみじみと語る清田の顔を、京子は直視できなかつた。

志の高い、この純粋な青年を、邪な目で見てしまった自分が恥ずかしかつたのだ。

「おっと、話が逸れましたね。それでは続きをやりますか」

それから暫し、京子は清田の指導の下、銃姿勢の練習に励んだ。

清田の分かり易い指導の御陰か、直ぐに練度が向上し、彼ほどとは言わないが、銃を構えるその姿はなかなか様になってきた。

その様子に満足した清田は、次の段階に移行する事にした。

「次は照準と撃発を練習しましょう。しっかりと姿勢が取れてても、照準がとれてなかったり、引き金を引く際に銃がぶれては意味がありませんから」

清田は改めてホルスターから拳銃を抜き、構えて見せた。

「照準の仕方ですが、先ず、照門と照星の上端を一直線に揃えます。照門というのは手前の凹部で、照星は銃身先端の凸部の事です」

京子も、見様見真似で標的に照準を合わせてみる。

清田に言われた通り、照門と照星を一直線に揃えてみるが、腕がゆらゆらと動いてしまい、照準が定まらない。

「構えてみてわかると思いますが、銃口は微かに円を描くように動いてしまいます。この時、無理にブレを抑えつけないでください。意識するのは正しい姿勢と見だし。姿勢は先程やった通りに。照門と照星を真つ直ぐ揃え、焦点は照星に合わせて：狙いたい所に銃口がきたら引き金を引きます」

教わった通りに姿勢を取り、意識を照星に向ける。すると、照星の向こうに見える標的はぼやけ、輪郭が曖昧になった。

「一般に標的は縦に長いので、左右を正確にあわせてください。そうすれば、身体の何処かに当たります：よし、それでは、引き金を引いてみましょう。コツとしては、引き金は真つ直ぐ引きます。また、最初はゆっくり引いて遊びを殺し、あと少しで落ちるとい所で、無意識的に引き切ります。でない、と、がく引きという状態になりますので」

じわり、と引き金に掛けた指に力を込める。引き金の遊びがなくなり、あと少しで撃鉄が落ちるのが分かった。

弾倉が空とはいえ、生まれて初めて実銃の引き金を完全に引き落とすのは、多少の躊躇いと恐怖があった。

今、握っているのは、人間の殺傷のみを目的として設計された、純粹なる殺人機械である。映画やドラマでしか見たことのない代物を、手にしているのだ。

ただの道具といってしまうばそれまでだが、京子のこれまでの人生はそんなものとは全くの無縁だった。教育者として物騒な鉄の塊を握り締めるのは気が引けるし、慣れるものではない。

だが、今はこの道具の扱いを少しでも身につけなければいけない。そうしなければ生き残れないのであれば、他に選択肢はないのだ。

右の人差し指に感じていた抵抗がふっと消え、刹那、撃鉄が落ちた。かちり、と思つた以上に軽い金属音に拍子抜けしたが、撃発する際に京子は思わず目を瞑っていた。

恐る恐る目を開け、手の中の拳銃を見る。勿論、弾が装填されていないので、発砲音も反動もない。だが、そうと分かつていても緊張してしまつた。

取り敢えず、京子はほっと胸をなで下ろし、拳銃を下げた。

「筋はいいですね。姿勢もとれているし、撃発も問題ないでしょう。でも、目を瞑つては駄目です。しっかりと着弾点を確認し、次の発砲に備えないといけません」

清田が簡潔に講評を述べ、更に付け加える。

「それでは、次は呼吸も意識してみましよう。呼吸をすれば勿論、身体は動きます。射撃に於いては、その僅かな動きが弾着を狂わせます。引き金を引く際、呼吸は止めます。でも、長時間止めると血中の酸素濃度が低下し、判断と運動能力を低下させます。なので、長くても五秒程度でしようか」

再度、構え直し、照準し、呼吸を止めてみる。

成る程、先程と比べて、銃口が描く円の大きさが小さくなり、ぶれもそれほど酷くはない。

しかし、息苦しきで少し集中力が削がれてしまう。これが命中と失中を分けるのだろう。

今度は、引き金を完全に引き切っても目を瞑る事は無かつた。

しっかりと手の中の拳銃を握り締め、撃鉄が落ちる瞬間も標的に重ねた照星を見つめていた。

京子は、先程よりも大きく息を吐き出し、銃を下げた。

「…いや、とてもお上手ですね」

見守っていた清田が、素直な感想を述べた。

「短時間でこれだけ身に付ければ上出来ですよ。後は反復演練ですね」

それからは、清田の指導で姿勢、照準、撃発の一連の動作を練習した。



京子が意外に思ったのは、銃を撃つには様々なコツや注意点がある事だった。

ただ引き金を引くだけでは、この小さな鉄の塊は性能を発揮してくれないらしい。そして結構疲労も溜まるというのも意外だった。

\*\*\*

「これぐらいでいいでしょう。後は、実弾を撃つ時も今覚えた事を忘れないでください」

京子の細腕の筋肉が悲鳴を上げ始めたところで、清田はもう充分だと判断した。

「それでは弾を込めて下さい」

京子は五発の三八スペシャル弾を受け取り、慣れた手付きでサムピースを親指で前進させ、弾倉をスイングアウトさせて弾を一発ずつ押し込んでいった。

先程、初めて銃を握ったとは思えないほど、手付きに淀みがない。

「しかし、林先生は筋がいいですね。様になっています」

清田は感心したように頷き、京子を褒めた。

「そう言って下さると助かりますわ」

惜しみなない賛辞に、京子は少し照れた。

実際、京子の飲み込みは早く、清田が教えた通りの事を完璧にこなしていた。後は、発砲の必要が迫られた場面で、訓練通りに滑らか動作で確実に命中させられるかどうかである。

こればかりはやってみなければわからないが、練習を全くしないのとするのでは大違いだ。百発百中といかなくとも、京子の生存を助ける術としては役立つだろう。

訓練の成果に満足した清田は、身体から外した装具を身に付け始めた。

フェイスマスクと鉄帽を被り、顎紐をしつかりと締める。簡易サスペンダー付きの弾帯を腰に巻き、防弾ベストに袖を通し、タクティカルベストを着込む。そうして最後に、散弾銃のスリングをたすき掛けにし、デイパックを背負い、小銃を手にする。

スモークレンズのゴーグルを下ろすと、清田からは一切の表情が消

え、纏っている雰囲気すら一変した。

流麗な動作で拳銃の遊底を引き、薬室に直接9mm弾を装填し、弾倉を叩き込んで安全装置を掛ける。レッグホルスターのアクセサリーポーチから、駄菓子サイズのチョコ棒程のサウンドサプレッサーを取り出し、銃口にねじ込んだ。

休憩間に店内にへ奴らやその他の生存者が侵入したとは思えないが、一人でクリアリングしなければならぬので、扉を開ける際に片手で構えられる拳銃を選択した。

「それでは、鞆川先生を起こしてあげてください」

ゴーグルで表情の隠れた清田に見つめられると、京子は言い知れぬ恐怖を感じた。

まるで人間ではなく、無機質な戦闘ロボットの様で。

「ええ、分かりました」

京子は表情に出さないようにして、寝息を立てる静香の肩を優しく揺すって起こしてやった。

「ん…」

静香は小さく呻くと、突っ伏していた上半身を起こし、微睡んだ目で周囲を見回した。

「鞆川先生。もうそろそろ移動するわよ」

暫く静香は眠気の覚めやらぬ頭でぼうっとしていたが、京子の言葉にこくりと頷くと、目を擦りながら席から立ち上がり、彼女に付き添われた。

途中、清田を視界に収めるとギョツとした様子だったが、直ぐに京子の背後に隠れてしまった。

清田は特に反応しなかったが胸中は少しばかりざわついていた。

ゴーグルに隠された瞳で京子に目配せし、彼女もウエストバンドに挟んである、装填したエアウェイトの位置を確かめ、頷いた。

「それでは行きましょう」

清田は小銃をスリングで身体の前に吊り下げ、扉の鍵を開けて慎重に一步を踏み出した。

店内の様子は先程と変わらなかったが、慎重に越したことはない。

陳列された衣服の列の合間や床上に脅威がない事を確認し、出入りのガラス戸の鍵を開け、押し開いた。

通りの左右に人影はない。

拳銃からサプレッサーを取り外し、レッグホルスターに収め、小銃に持ち替えて外に出た。

一度深く、呼吸をした。

外の空気は思いの外、新鮮で爽やかだったが、身が引き締まるというよりも暗澹とした。

動く死体も同じ空気にいると思うと、空気にすら嫌悪感が沸きそうだった。

清田の先導に従い、京子と静香は彼によつて安全化された道に続いた。

†††

久々に運が向いてきたのかもしれない。清田は一行の先頭を歩きながらそう考えていた。

今、歩いている通りは表通りに比べれば道幅は狭く、錯雑としている。

〈奴ら〉や敵意を持った生存者と遭遇すれば逃走は難しいだろうが、裏通りという事もあって元々の行き交う人間も少ないからか、脅威らしい脅威には洋品店を出てから遭遇していない。

この調子で取り敢えずの目的地まで行ければいいが、流石にそこまで事が上手く運ぶとは思えない。

〈奴ら〉は兎も角として、生存者と遭遇した場合を清田は危惧していた。

あの暴漢の一件のような事態となるかもしれないし、そうでないかもしれない。

先ずは相手がどのような人物で、どんな状態にあるのかを見極める必要があるだろう。

助けを求めるか弱い女子供なら脅威はないものと見做しても問題

ないだろうが、極度の興奮状態にある成人男性となれば冷静な対応をしなければいけないだろう。

本当に今の自分に冷静な対応ができるのだろうか？——清田は今の自己に対して懐疑的だった。

あの一件以来、他の生存者を恐れているのは静香と京子に限った話ではない。

清田も同様に恐れていた。

ただし、それは単純に危険だからという訳ではなく、自分が生存者に対して発砲しなければいけないという最悪の事態に恐怖していた。

あの暴漢のような邪悪な人間ならば少しの同情の余地もないが、それ以外の人間に対して銃口を向けなければいけない事態が生起したのならば、果たして寸分の狂いのない判断の末にそうする事が出来るのだろうか。

冷静でいられる自信が清田にはなかった。

また、あの己の無力さを思い知るような事態を、心の底から恐れていた。

守るべき者を守れなかった。

ただそれだけで充分すぎるほど、自己を否定された。

辛く苦しい訓練の全てが水泡に帰したかのような衝撃だった。

心に誓った思いも、流した血と汗も、全てがああの暴漢の邪悪な行いで粉碎されたかのようにだった。

鍛え抜いていても、決定的な瞬間にあつて発揮されなければ、意味をなさない。

再び、強烈な自己否定の場面になど遭遇したくはなかった。

そうなるくらいならば、そのような可能性を孕んだ状況が生起した瞬間に引き金を引いた方がずっと楽だろう。糞、俺はなんていう大馬鹿野郎なんだ！——清田はあまりにも身勝手すぎる自分に絶望した。

「自分の心が傷つくのが嫌だから引き金を引く」だなんて、エスとしてはあるまじき行為だ。

剣崎が知れば、苦勞の末に手にした徽章を手放さなければいけない。

だがそれでもいい。

こんな生半可な自分がいつまでもいては駄目だろう。

此処はもつと立派な男たちの居場所なんだ。

今の俺にはエスでいる資格なんてものはない——清田は自己を振り返った末に、そう結論を下した。

「…二人とも、止まってください」

清田は片手を上げ、制止した。

二人は素直に従い、清田から少し離れた位置で止まった。

通りは交差点に差し掛かっていた。

合流している道路は、進んできた道路よりも幾らか道幅が広い。

清田は不用意に道路上に出る事はなく、壁際に伝っていき、端まで進んだ所でポーチから伸縮ロッド付きの鏡を取り出し、通りを観察した。

通りに脅威はない。

放棄された乗用車と、複数の死体が倒れているだけだ。

それから暫く丹念に観察を続けたが、動くものはやはり何も無かった。

「自分が先に進んで確認します。何もなければ合図しますので、合図するまでは其処で待機しててください」

二人だけで残される、という状況に京子は不安げな顔を見せたが、おもむろに拳銃を取り出し、頷いて見せた。

次はあのような目には遭わない——そのように強い意思表示を見て取り、清田は少しばかり安心した。小銃を構え、音もなく足を運んで通りに入る。

左右に銃口を擬し、周囲を警戒するが驚異は確認できなかった。

倒れている死体に低倍率のACOGサイトを向け、詳細を確認してみる。

鏡では、死体がどのような状況下までは解らなかった。

死体にこれといって変わった所はない。

首筋付近に噛まれた痕跡があったが、上顎から上が綺麗に吹き飛んでいるので完全に無力化されている。起き上がってくる心配もない

だろう。

その他に転がっている死体も同様で、全てが尽く頭部を吹っ飛ばされている。

「全て頭を吹っ飛ばされている」だって？―清田は小銃を下ろすと、肌が泡立つほどの恐怖を感じた。これは何かがおかしい。何か異常事態が発生している。

それが何であるのかは分からないが、正面に佇む、西日に陰る安アパートに視線を走らせた。

本能が警告していた。此処で起きていたのは、限りなくまずい何かであると。

それが何であるかを特定できないが、清田は咄嗟に小銃を構えようとした。

アパートから誰かの視線を感じた。それはまるで解剖台の標本に向けられる、無機質なものだった。

刹那、右胸に衝撃を感じ、足腰から力が抜ける。

それはまるで目に見えない強大な角獣が、明確な殺意を持って突進してきたかのようにだった。

考えたくもないが、どうやら最悪の事態が発生したらしい。厳し

い銃規制国家である日本国内で、まさか「狙撃」されるなんて！―妙に間延びした時間の中で、清田は驚愕していた。

不可視の衝撃が右胸で炸裂し、肺の空気が全て叩き出された。

それはまるで、犀の角で突き上げられたかのように凄まじく、一瞬で呼吸が停止し、肉体から骨格が抜かれたように脱力した。

被弾するまで清田の状態は、警戒・即応態勢にあり、戦闘の心構えが出来ており、グロスマンの言葉を借りるならば「黄の状態」にあった。

生理的には平常と何ら変わりなく、心理的な面では良好な緊張状態である。

それが被弾と同時に急激に心拍数が上昇する。

明確な殺意を持った他人によつて死に瀕するという、人間が感じるストレスの中でも最も強度の高いものによつて肉体と精神に変化が起きていたのだ。

一生の内に何百万という人間と接触していても、相手が自分を本気で殺そうとするのではないかと用心する人はいない。

日々出会う人間たちが、自分を殺そうとしているのかもしれないと恐れながら生きていくなど、出来る筈がない——尤も、それは日常に身を置く一般人の場合である。

清田のような緑衣の特別な公務員は、普遍的人間恐怖症に対するストレスの予防接種を行っている。

非日常を日常とする訓練を積んでいるが為に、初めて実弾によつて被弾したというのに清田は冷静そのものだった。

しかし流石に被弾という状況によつて、清田の肉体は自動的に過度なストレス反応を選択せざるを得なかった——生き残る為に、彼の肉体は独自に行動しなければならなかった。

心拍数は毎分175回にまで跳ね上がり、四肢に流れ込む血液量が増加し、筋肉内の乳酸が燃え、呼吸と心拍数が上昇し、認知反応時間、瞬間視能力、複雑な運動能力が最高レベルに達していた。血液の凝固速度を上昇させるコルチゾールの血中濃度も増え、肉体が負傷した場合に備えていた。

通常、人間は心拍数が毎分145回を超えると、明らかな能力の低下を招くのだが、清田のように特殊且つ過酷な訓練を受けている特殊部隊の兵士は、そのような状態でこそ最高のパフォーマンスを発揮できるとしている。

高度なストレスを接種し続けた予防が、この生死がかかっているコンマ何秒の世界で役立つのだ。

だから精神は不思議と落ち着いていた。

撃たれたというのに、今にも死ぬかもしれないというのに。

被弾した今の一発は、非常に強烈な警告に過ぎないと考えた。でなければ「撃たれた！」と驚愕する事も出来ないだろう。

撃たれたと分かるのは生きている証拠であり、これは非常に良い兆候だ。生きているならばまだ活路はいくらでもあるという事に他ならない。

だからやるべき事が考えなくても解っていた。

今は掩蔽物を求めなければいけない。

でなければ次で確実に頭部を撃ち抜かれ、瞬く間に脳細胞のスパークに過ぎないへ自分という自我は永遠に消え去り、約百kgぐらいの蛋白質の塊となるだろう。

目下の目標は二発目を頭に食らわれない事だ。その為に肉体と精神を投げ打たなければならぬ。

過度に分泌されたアドレナリンによって、時間は粘り着くように重い液体と化し、周囲の景色がまるで無音のスローモーション映像のように感じられた。

着弾した右胸から、爆ぜて空気中に舞うタクティカルベストの繊維が見える。

空気の壁を超音速で突き破って飛来した弾道が、自身の右胸から紡錘形のトンネルを描いてアパートの方向から伸びていた。

アドレナリンと、死に瀕しているが故に五感が鋭敏となっていた。それのお陰で、空気中に残る弾道の揺らぎのイメージが視覚化され、あたかも実際に目の当たりにしているかのようだった。

そのイメージは、アパートのどの窓から伸びるのかまでは分からない



かったが、着弾した角度から概ねの予測はついていた。

狙撃手の位置の予測はついたが、当面の問題は、突然の被弾で肉体と精神が乖離しかけていているというものだ。

そして銃で撃たれた者は二つの心理状態に陥る。

撃たれた！もう駄目だ！——潔くすらある諦観。

畜生！ぶっ殺してやる！——憤怒に塗れた奮起。

選りすぐられた精鋭として研ぎ澄まされた兵士である清田は、無論の事ながら、選択したのは圧倒的に後者だった。

誰だか知らないが俺を撃ちやがって！殺してやる！——冷静な思考の奥底では、生まれて初めて抱く、純粋な殺意が失いかけていた身体  
の制御を取り戻す切っ掛けとなった。

数歩、ほんの数歩だけ地面を蹴れば、放棄されている車の陰に逃げ込む事が出来る。

だが、まるで何十日もの禁欲の果てに得た射精の快感で砕けたように、腰から下は感覚が麻痺していた。

タクティカルブーツの靴底を通して感じられる筈の地面の感触が、ふわふわとしていて頼りない。

足の筋肉に指令を送っているのに、何ら反応が還ってこなかった。

馬鹿野郎！今やらなきや死ぬんだぞ？！死んだらどうする？！——コンマ数秒の世界の中、思考だけが本来以上の性能を遥かに超えて疾駆する。

今、自分が死ねばどうなる？

高城沙耶の救出という任務はおろか、先刻、守ると誓った筈の静香と京子を孤立させてしまう。

二人は清田の助けが無くても生き延びるかもしれないが、それは低い確率だろう。ならば何としても守ると誓ったからにはそうしなければならぬ。

でなければ、男に生まれた意味がないではないか？！——粘着質の液体から引き抜くような感覚の中、膝をおりかけていた左足がゆるゆると持ち上がる。

その動作一つが途轍もなく億劫で、目蓋で鉄の扉を開けるように大

変な思いだった。

振り上げた左足を蹴り出し、足底でアスファルトの地面を不安定に捉える。右足も同様にして、渾身の力で地面を蹴って身体を推進させた。

脳内ではウサイン・ボルトも真つ青な俊足で駆け抜ける自分の姿を思い描いていたが、現実にはコマ送りのようにカクカクと歯切れの悪い不格好さでもがいていた。

手足を滅茶苦茶に振り回し、ドタドタと家鴨のように走っている。だがそれで充分だった。

コンマ数秒の差で、清田の頭があつた空間を銃弾が擦過し、鉄帽の頭頂部を掠め、破片が飛び散った。

まともに受け身も取れず、清田は無様に前のめりに倒れ込むようにして車の陰に滑り込んだ。

顔面も強かに打ちつけ、口内に血の味が広がった。

衝撃で息が詰まりそうだったが、既に被弾してから呼吸というものを忘れていた。

同時に、時間感覚と聴覚も復帰し、獣のように息を荒げて空気を貪る。酸素不足に陥っていた肺が今にも焼け付きそうだった。

急速に分泌されたアドレナリンのお陰で五感はかつてないほど冴え渡り、荒い息を吐きながらも思考は澄み切っていた。

異常なほどクリアな頭の中を埋め尽くしていたのは、初めて他者から向けられた明確な殺意に対する激しくも冷たく凍り付いた怒りと、その落とし前を相手に何としてでもつけさせてやるという強迫観念にも似た強い意志だった。

誰だか知らないが、俺の事を殺そうとしやがって！——心臓が奏でる狂騒曲と同じ赤く染まった思考のまま、デイパックを背中から下ろし、左側面に括り付けていた長大なポーチのジッパーを開こうとする。

しかし、指先が震えてうまくいかない。

アドレナリンと死に瀕した恐怖により、心拍数はかつてないほどに上昇しており、繊細な動作が難しくなっていた。

極度の興奮状態に陥ると心拍数が上昇し、瞬間的な動作が大幅に増幅されるが、その代わりに精密な運動能力と判断力が失われてしまう。

落ち着け。落ち着くんぞ！——震える右手を左手で抑え、その場に身体を丸めて胎児のようにうずくまる。

明確な殺意の元に実際に死の恐怖を与える訓練は、恐らく何処の国の軍隊でも行われていないだろう。

本当に隊員を死なせてしまうような訓練はもはや訓練ではない。そんな事で優秀な人材をいたずらに喪失してしまつては元も子もないのだ。

タフなエリート気取りな清田が初めて受ける、実弾の飛び交う本当の戦場の恐怖が、彼の神経を苛んでいた。

思考は冷静なつもりだが、それが上手く実行に移せないでいた。抱いた筈の殺意も、恐怖の前には押し潰されていた。

ストレス接種による恐怖の鈍化は充分すぎるほど受けていたが、やはり訓練は訓練でしかなく、リアルには程遠い。理想と現実のギャップが、一時的な停滞を清田にもたらしていたのだ。

金属同士がぶつかり合う甲高い悲鳴と、超音速の不気味な擦過音、乾いた発砲音が耳朶を打った。

どうやら狙撃手が、獲物を仕留め損ねた悔しさを紛らわす為に車に銃弾を撃ち込んでいるようだ。

唇を噛み締め、恐怖に喚き出したくなるのをこらえた。

車が着弾の度に揺れ、銃弾が車体を引き裂いて跳弾する。超音速を越えて飛来する銃弾の衝撃波が、清田の巨軀を精神諸共打ち据えた。まるで目に見えぬ巨大な獣が、今にも隠れている車ごと清田を引き裂こうとしているように思えた。

清田はただ、無力な子供のように銃弾の嵐が過ぎ去るのを耐えるしかなかった。

耐えれば、いずれ相手は装填の為に発砲をやめなければならない。日本国内であれば狩猟用のライフル銃は、弾倉の装弾数を五発以内にしなければならぬからだ。

合計三発ほど撃ち込んで、漸く発砲は収まった。どうやら相手の銃は狩猟用のライフル銃である可能性が高い。

未だに恐怖と興奮で神経は高ぶっているが、冷静な思考と判断力は戻っている。相手の戦力を分析するだけの余裕が生まれていた。

発砲音がより大きく、重かったから、口径も恐らくは一般的な軍用狙撃銃弾である7.62mm×51弾ではなく、より威力の高い30―06弾か、300ウインチエスターマグナム弾だろう。大口径の狩猟用ライフルのハイパワー弾は狙撃で使用されるのも珍しくはない。

慌てるな。慌てるんじゃない―あれほど訓練に訓練を重ねたのに、いざ実際に被弾してみると冷静でいられない自分に失望しながら、清田は掩蔽物となっていて自動車の陰から出ないように身体を起こした。

まずは状況を確認するべきだろう。

清田は大きく深呼吸し、暴れる心臓を何とか鎮めようとして、車の後部バンパーに背を預けて座り込んだ。

現在、清田は放棄されている車両の陰に隠れている。弾が直接飛来してこないのを見ると、此処は狙撃手の射界から充分に遮蔽されているという事になる。

右のタクティカルグローブを脱ぎ、恐る恐る、抗弾ベストの下に手を差し込んだ。

恐れていたぬるりとした血の感触はなかった。どうやら装甲プレートがカタログ通りの性能を発揮してくれたようだ。

痛みはまだ無いが、いずれ落ち着いてくれば被弾の衝撃で負った酷い打撲傷に悩まされるだろう。最悪、骨折やヒビになっているかもしれない。

被弾した場所が右胸なので、肋骨は勿論、鎖骨を痛めている可能性がある。鎖骨は肩の可動に関わってくるので、損傷していれば戦闘行動に大いに支障を来すだろう。

次にタクティカルベストの右胸ポケットに触れてみる。丁度そこには小型のフォールディングナイフを入れていたのだが、もの見事に碎け散っていた。

幸運な事に、右胸のナイフが大幅に被弾の衝撃を和らげたようだ。それにプレートも加わり、大事にならなかったのだ。

チタン製で酸化被膜加工がしてあるこのナイフは、海での使用を前提に作られているのでかなり高価だった。

切れ味、耐久性、共に申し分なくて気に入っていたのだが、背に腹は変えられない。むしろ命を守ってくれたのだから、このナイフは物を切る以上の働きを充分にこなしてくれた。

しかし負傷の程度は不明であり、素直に喜ぶ事は出来ない。加えて、状況は不利なままだ。

対狙撃手戦（カウンターズナイプ）は、数ある最悪な状況の一つに当てはまるだろう。

しかも、何の支援も得られないというのは絶体絶命に近い。他に仲間がいれば迂回して攻撃なり何なりとを得られるが、たった一人で狙撃手に挑まなければいけないのは気が滅入る。

だが、一つだけ運に恵まれている事がある。

それは煙幕を張る手段があるという事だ。

背中から下ろしたデイパックに鈴なりに括り付けられているポーチの一つから、煙幕手榴弾を取り出す。

清田は煙幕に紛れて先程の路地に逃げ込み、別の安全なルートを探す事を目論んだ。

本音としては無差別発砲犯を放っておくのは忍びないが、今はこれ以上のリスクを被る訳にはいかない。

煙幕手榴弾は煙幕を張る以外の目的として、ヘリの降下地点などのマーキングの為にある程度の数を持つてきている。

正面のアパートの方から風は吹いているので幸い風向きには恵まれていた。煙幕手榴弾の煙は微風でも効率良く拡散するように設計されているのだ。

安全レバーごと手榴弾を握り、安全ピンを引き抜く。そして隠れている車の前方に向かって下から放り投げるようにして投擲する。

手榴弾は空中で発火し、着地と同時にアスファルトを転がって濃密な煙幕を張り始めた。

いいぞ、その調子だぞ―煙の濃密なヴェールが、清田が隠れる車を覆い隠そうとした。

だが、その望みは脆くも崩れ去った。

乾いた銃声が一発聞こえたかと思うと、今まで調子よく煙を吐き出していた手榴弾が吹っ飛ばされた。

被弾した衝撃で弾体が大きく裂け、充填されていた化学剤があたりにぶちまけられる。

それにより上手く化学反応が起こらず、まばらな煙を細々と吐き出すだけであり、十分な目隠しとはならなかった。

暫くして手榴弾は沈黙し、同時に清田の目論見は失敗に終わった。まだ手榴弾の数に余裕はあるが、何度やっても結果は見えている。

車の陰に隠れたまま手榴弾を発火させても、風向きの都合で煙は上手く広がらないだろう。車の前方からすっぽりと遮蔽しなければ意味がないのだ。

だが、これで手段が尽きた訳ではない。

更に清田は、有効な対狙撃手用の攻撃兵器を携行していた。

清田はデイパックの左側面に括り付けられている、縦に長大なポーチのジッパを下ろした。

中から現れたのは、グラスファイバー製の円筒形の筒だった。

グラスファイバーの筒が二本、ストラップでポーチ内で固定されているので、ストラップを外して一本を手取る。

全長約六五cmのその重量は三kgにも満たないが、清田が携行する兵器の中では間違いなく最強の火力を有しているだろう。

安全ピンを外し、リアカバーを開く。本来なら負い紐(スリング)が付属しているが、今回はポーチに収納して携行しているので前もって外していた。

インナーチューブを引き出すと、三〇cm近く全長が伸びた。同時に、倒立式の照準器が立ち上がる。

これで発射回路が全て接続され、後は安全装置を解除して引き金を引けばいい。念の為、後方を確認するのは忘れない。

思わず、振り向いた際に小声で「後方良し」と呟いたのは、訓練で

叩き込まれた習慣だろうか。

M72 LAWは、米軍で長らく使用されている使い捨ての軽量簡易な対戦車ロケットである。

自衛隊も使い捨ての対戦車火器としてパンツァーフアウストIIIを装備しているが、如何せん重すぎる為、特殊作戦群ではM72 LAWを試験的に導入していた。

清田が今回携行しているのは榴弾効果を高めたM72E10であり、それを二本、ポーチの中に入れていた。

これで“敵狙撃兵”を吹っ飛ばす準備は出来た―此処は日本で、今は他国からの侵略を受けているという訳ではないが、自衛官を撃つたのならばもう相手は敵と認識するしかない。

非戦闘員が明確な意志に基づいて、正規軍の兵士を攻撃すればもはや敵兵と認識されても仕方がないのだ。

一昔前の自衛隊では、敵に撃たれたらまず空に向かって一発撃って警告し、相手の近くの地面を狙って撃ち、それでも相手が対峙するのを止めなければ、漸く相手の手足を撃つ事が許される。ただし、致命部位への射撃は禁止されているというおまけ付きだ。

だが、そんなのを実戦で守る自衛官など一人もいないだろう。自分と仲間の命が危険に晒されれば、銃後の政治家や学識者達が決めた馬鹿らしい交戦規則になど従える筈もなく、躊躇なく相手の頭と胸に銃弾を撃ち込む。

目の前にいる相手は今すぐにも自分を殺せるが、絞首刑の縄はずっと複雑で長つたらしい裁判やら何やらの末に自分を殺せる。

そして今はそんな事よりも、目の前の敵を如何にして無力化するのが重要だ。

どうやら相手は、生死を問わず人間を撃つのが好きらしい。

それが証拠に、清田の周囲に転がる、頭部を綺麗に吹っ飛ばされた死体の中には、明らかに感染者ではないものもあった。

その母子の死体は、清田が隠れている車の後方から十メートルほど離れた位置に倒れていた。

感染者は身体の何処かを食い破られていたりするが、あの親子の死

体は吹っ飛んだ頭以外に身体の損傷がない綺麗な状態だった。

今は頭がぐずぐずに崩れているから詳細は不明だが、恐らくは年若い母親と幼稚園に通う幼い子供だったのだろう。

着の身着のまままで逃げてきた二人の命を襲ったのは人喰い死体ではなく、気の狂った無差別発砲犯だった。二人とも自分の身に何が起こったのかを知る暇もなく死ねた事が唯一の救いだろうか。

狙撃手は明らかにこちらを生存者と認識して凶弾を撃ち込んできた。いや、生死はこの際関係ないだろう。

老若男女の区別なく、動くもの全てを撃っているのだ。

目的は不明だが、そんな事はどうでもいい。こんな馬鹿げている、畜生以下の相手にはそれ相応の代価を支払って貰う。

絶対にだ。

絶対に文字通り粉々に吹っ飛ばして地獄に送ってやる――展開したLAWを握り締め、清田は殺意を再燃させた。

LAWと共に、小銃もサウンドサプレッサーを外して何時でも弾丸をばらまけるようにしておく。LAWを撃った後に、グレネードランチャーも撃ち込み、更に小銃のフルオート射撃で目標を制圧するつもりだ。

準備は整ったが、このまま身を乗り出せば頭部を容易く撃ち抜かれるのは目に見えている。

小さな手榴弾を正確に撃ち抜くのを目の当たりにすれば、それぐらいの芸当は朝飯前であるのは容易に察せられる。

どうしたものかと清田が考えあぐねているその時だった。

「田中さんー！」

路地の壁際から、京子が此方を心配そうに窺っていた。

其処から清田の行動を今まで見守っていた京子からすれば、斥候として道路上に出て間もなく、大きな発砲音と共に彼の巨軀が傾いたかと思うと、猛然と駆け出して車の物陰に滑り込み、暫くうずくまるといふ奇行としか受け取られていなかった。

そして漸く、狙撃手から放たれた銃弾が車体を直撃する様を前にして、清田が被弾したのだという結論に至っていた。



それ故に道路上に飛び出さず、京子は路地から様子を窺うという自  
制ある行動が選択できていたのだ。

「此方にこないでください！ 自分は今、狙撃されています！」  
そう警告したつもりだったが、被弾の衝撃故か清田の声は掠れてい  
た。

完全に状況は膠着状態にある。既に西日となっており、あと二時間  
ほどで日は完全に没してしまう。

日が暮れる前に此処を脱出しなければならぬ。

その為には、静香と京子の手を借りる必要があった。

清田はポケットから防水メモ帳を取り出し、ボールペンで必要な事  
項を書き記すと、破り取って傍らに落ちていた小石を包み、京子の方  
へ放り投げた。

小石の重みでメモは無事に京子の元まで投げる事が出来た。彼女  
はそれを拾い、広げて読み始めた。

「そこに必要な事が書いてあります！ 林先生、無理ならば自分に構  
わず先に進んで下さい！」

だが、清田の言葉とは裏腹に、メモを読み終えた京子の目には強い  
意志の輝きが見て取れた。

「分かりました！ 鞆川先生と私で何とかします！」  
拳銃を手に、京子は必要なものを揃える為に引き返そうと背を向け  
た。

その背中を見て、清田は何か声を掛けなければという思いに駆られ  
た。

か弱い女性二人に頼るのは正直情けないが、今の状況では仕方がな  
い。精鋭といっても詰みに近い状態では手段を選べない。

だから、「頑張れ」とかそういう月並みの言葉を掛けてやるべきなの  
だろうか。

「林先生！」

清田は京子呼び止めた。

京子は振り返り、此方を真っ直ぐ見つめた。

少し言い淀んでから、清田はゴーグルを上げ、彼女を見つめ返した。

「自分の名前は田中じゃありません！本名は…これが終わったら、俺を名前で呼んでください！」

思わず口をついて出た言葉に、清田は戸惑った。

彼は何時までも謎の男でいる事にうんざりしていた。

何故だか分からないが、京子には偽名の田中ではなく、名前で呼んで欲しかった。

これが詰まらない感傷であるのは自覚していた。

ただ、名前で呼んで欲しい。俺を一人の人間として見て欲しい——こんな生死の掛かった状況だからこそ、謎の男のまま死ぬのは嫌だった。

「分かりました」

京子は場違いなほど柔和な微笑みを返し、静香と共に路地に消えた。

後に残された清田は、二人の安全を祈る事しか出来なかった。



丸く切り取られた視野だけが世界の全てだった。

男は、布団を敷いた食卓の上に寝そべり、枕の上に据えたレミントンM700の機関部上に取り付けてあるカールツアイズ製の狙撃眼鏡（スコープ）を覗込んでいた。

男がとる伏射姿勢（プローン）は完璧で、こうして銃を構え続けて長時間にもなるというのに、微動だにせず、集中力もいつさい乱れない。

男はしがないサラリーマンであり、育った家庭環境と生来からの氣質故か、鬱屈としていて内向的な性格の為に恋人はもとより友人すらいなかった。

仕事はうまくいかず周囲からは馬鹿にされ、入社同期との出世競争からは早々に脱落し、営業先に頭を下げて回る苦渋に満ちた毎日を送るばかりであった。

だが、うだつの上がない男には人よりも優れた才能を備えてい

た。

それは狩人（ハンター）としての才覚に恵まれており、また、大地主でありながら猟師でもあった祖父から幼少の頃より狩りの仕方を教えられていたというのが、彼の眠れる能力を引き出す直接の要因でもあった。

鬱々と過ごす日常から解放される唯一の手段が、ライフルを手に獲物を求めて山に入る事だった。

野生動物との駆け引きは一切の邪気の混じり気のない、純粹にして神聖ですらある行為であり、くたびれた男の神経を慰めた。

しかし何時しか、野生動物ではなく、もつと別の獲物を狩りたいという欲求が首をもたげ始めていた。

人間狩り（マン・ハント）——それは禁じられた究極の狩猟であり、どうも黒くなお甘みな誘惑である。

殆どの人間は同族殺しに本能的な忌避感を備えているものだが、男はシリアルキラーの素質を備えた、殺人に一切の抵抗がない人間だった。

何時かは人間を撃つてみたい。しかし、かといって男には犯罪者になるつもりも、傭兵として何処かの紛争地に赴くほどの気概も持ち合わせていなかった。

だから、今日という日を境に世界が一変してしまったのは、男にとっては何都合だった。

自宅であるアパートの一室という安全な場所から、通りを歩く動く死体や生きた人間を撃つという狂気の遊びに気兼ねなく興じる事が出来た。

指先一つで老若男女の区別なく、一人の人間の人生を簡単に終わらす事が出来る。

神のように自由自在な生殺与奪権を握っているというのは、どうしてこんなにも気分がいいのだろう——人狩りを始めて一番気分が良かったのは、幼い子連れの若い母親を撃った時だった。

手を引かれて走る幼女の頭を吹っ飛ばして、内臓の詰まった血袋に変わった愛娘に起きた事態を理解できずに、驚愕に目を見開いている

様子を観察するのはとても興味深かったが、慟哭する前に娘と同様の物体に変えてやった。

世界がこうなる前は幸せだっただろう母子を、この右の人差し指の僅かな動きでただの肉塊に変えるというのは言葉に表せないほどの邪悪なカタルシスを覚えた。

だが、そうやって人狩りを楽しんでいると、今までとは全く異なる獲物が狙撃眼鏡に映り込んだ。

慎重に、注意深く路地から通りに現れたのは、重武装の兵士だった。それが網膜に投影された瞬間、男の心臓が高鳴った。

まさか映画みたいな展開になるなんて！——今までのマン・ハントはただの弱者をいたぶる嗜虐的な愉悅に満ちていたが、今度の相手は違う。

お互いの距離は二〇〇メートル程度しか離れていない。

今までの一方的な殺戮ならば何も問題はないが、彼は自分と同等かそれ以上の重火器で武装しており、失敗すれば反撃を食らう。

まさに命を懸けた一発勝負は、腰が砕けるほどの恐怖と興奮がない交ぜになった感情に満たされた。それはもはや恍惚と呼んでも差し支えがないほどの強烈な陶酔感だった。

男は照準十字線（レティクル）を兵士に重ね、じつくりと時間をかけて観察した。

兵士は自衛隊員であり、ニュースで報道される災害派遣の映像ではお馴染みの迷彩服を着込んでいた。その上にヘルメット、ベストを着用しており、顔はゴーグルとフェイスマスクで欠片も窺えない。

手に構えている小銃は近未来的なデザインですらあり、一目で自衛隊の野暮ったいものではないと判断できた。ゴテゴテとアクセサリーが追加されたそれは重量がありそうだが、大柄なその兵士は軽々と構えていた。

大きくて強そうで、重武装の兵士をこのチビの俺が撃ち殺すんだ——低身長なのがコンプレックスの男は、これから死ぬであろう兵士に対して優越感に浸っていた。

男は静かに息を吸い、肺がいっぱいになったところで呼吸を止め

る。肺胞が酸素を血中に取り込み、細胞の隅々に染み渡るのを待った。

酸素が消費されるのは五秒から八秒かかり、それを過ぎると酸素不足に陥った筋肉が震え始め、銃口が少しずつ動いてやがて小さな円運動を始めてしまう。

長く待つ必要はない。

引き金に当たった右人差し指に僅かに力を込め、遊びを消す。第一関節よりも先の指の腹に、小さな鉄の部品が食い込む感触がした。

意識を集中すればするほど、自身を取り巻く全てが消え失せ、呼吸や脈拍は無論、皮膚と筋肉の感覚すら無くなり、やがて骨格が支えるライフルの重みだけが残った。

とうとうそれすらも意識の外に追いやられ、兵士に重なり微かに揺れるレティクルと、引き金にかけた指の表面だけが残る。

刹那、兵士と目があった。

彼はゴーグルをしているので瞳すら露出していないが、男は確かに互いの視線が重なり合ったのを確信した。

その兵士もはや断頭台上上がっているのも同然で、死ぬ運命にあるのは変わらない。

男は焦る事なく、全く平常心のままレティクルを僅かに下げ、引き金を絞り切った。

瞬間、薬室内部で解放された撃針が疾駆し、隙間なく収まっていた300ウインチェスターマグナム弾の底部を叩く。

轟音と共に吐き出された銃弾は音速を遙かに超えた速度で飛翔した。スコープの視野が発砲炎（マズルフラッシュ）で白濁し、ライフルが跳ねる。だが、男の左目は兵士の胸に銃弾が命中するのを確認していた。

兵士の胸で着弾した銃弾が硬質な音と共に白煙を巻き上げる。

やはり、予想通り相手は防弾ベストを装備しており、右胸に命中したものの仕留めるには至らない。だが、動きが止まれば頭に狙いを定めるのは容易だ。

投射面積の広い胴体に一発当てて動きを止め、それから頭部を撃ち

抜く算段だった。

男は余裕たっぷりに槓桿を引き、精密な機構が奏でる小気味良い音を楽しみながら、硝煙を燻らせる300ウインチェスターマグナム弾の口紅ほどもある空薬莖をはじき出し、次弾を薬室に送り込んだ。だが、そこで誤算が生じた。

確かに、間違いなく相手の右胸に一発のウインチェスターマグナム弾が命中した。しかし、相手は動きが止まるどころか弾かれるように一気に駆け出した。

予想を遙かに上回る行動の為か、男はスコープを慌てて覗き込み、兵士が完全に車の陰に隠れる前に放った一発は相手のヘルメットを掠めただけだった。

完全に此方が慢心していた。

圧倒的な優位だったにも関わらず、この勝負は相手の勝ちだ。兵士の肉体と精神の頑強さが、男の目立てを上回った為の結果だった。

男は己の目論見の甘さと、仕留め切れなかった悔しさの余り、兵士の隠れる車に残弾を全て叩き込んだ。大口径弾が着弾する度に揺れる車体が引き裂かれても少しも怒りが収まらない。

確かに男は、手強そうな獲物の出現に喜んでいた。だが、実際に己の命を危険に晒さず、一方的に相手をなぶれるからこそ危険なゲームに快感すら覚えたが、その立場が崩れ今度は命を狙われる側に立つのは御免だった。

男は歯軋りをしながら、傍らの紙箱からマグナム弾を取り出し、開放した薬室に一発ずつ装填していった。

まあ、いい。これはこれで新たなゲームの始まりと考えよう―弾薬を押し込みながら、男は思考を落ち着けていった。

その後、再びライフルを構え直し、兵士が車の物陰から投げた煙幕手榴弾を吹っ飛ばして、漸く男は良い気分を味わった。

じわじわと相手を切り刻み、追い詰めていく快感には胸がすくような思いだった。

ほんの十分前に通った路だというのに、まるで冥府魔界へと続くように思えた。

自然と、京子と静香の歩みは慎重となり、視覚と聴覚を総動員しておつかなびつくり進むしかなかった。

特に音には過敏になっており、自分達の足音以外の、時折何処かから聞こえる物音を聞くとびくりと立ち止まり、息を殺してじつと様子を窺ってから再び歩き出すという状況だった。

清田の存在が如何に大きかったのかを、二人は否が応でも認識した。

彼という存在が弱い自分達にとってどんなに心強くて頼り甲斐があり、そして如何に道中にどれほどの苦勞を彼は費やしていたのかを。

京子は、無言で先頭を進むあの逞しい背中を思い出していた。

巨壁の如く聳え立つ屈強な兵士は、一言も不平不満を漏らさず、ただ無力な自分達の為に身を粉にしていた。

脅威がいつ何処から襲い来るのか分からない状況の中、泰然自若とした振る舞いでまさにプロフェッショナルとして彼は行動していた。その間、彼の神経は少しも休まる事が無かつただろう。

全神経を働かせ、周囲に気を配り、驚異と遭遇したならば的確な判断により排除する―その彼が、自分達の為に、今、命の危機に瀕しているのだ。

防弾装備を身につけているとはいえ、その身体は紛れもなく銃弾を受けている。

京子は勿論、銃で撃たれた経験など無いから、それがどれほどの苦痛なのかを知る術はないが、決して生やさしいものではないというのは想像がついた。

清田は大丈夫だと言っていたが、彼の性格とその職責を考えれば瘦せ我慢かもしれない。

一刻も早く、彼を安全な場所へ連れ出さなければいけないと、京子は焦燥にも似た強い使命感に駆られていた。

助けられてばかりでは駄目だ。何かしら役に立つというのを証明しなければならぬ――それは暴漢の襲撃によって味わった、女であるが故の己の無力さを少しでも払拭し、生存への自信を得る為でもあった。

私だって自分の身ぐらい守れるわ――女である前に京子は一端の社会人であり、自立した大人である。それが何も役に立てないどころか自衛すら出来ないとなれば、社会の一員として築いてきた自信を喪失するのは当然だろう。

右手に握る拳銃を、その硬質な感触を確かめるように握り締めた。いざとなればへ奴らや、凶暴な人間を退けるだけの威力を備えたそれは、少しだけ京子の精神の安定に寄与した。

大丈夫。教わった通りにやればいい――何度目になるかも分からない、言葉の反芻を胸の内でも繰り返した。

その時だった。自分と静香以外の、じやり、という地面を踏み締める音が京子の耳に届いたのは。

びくりと身を震わせ、思わず京子は立ち止まった。

背後を振り返れば、どうやら静香もその足音を聞いているらしく、不安げに耳を澄ませて周囲を見回していた。

じやり、じやり、と、ゆっくりと且つ不安定な足音の響きは、十メートルほど前方の右の小径から聞こえてくる。

二人は音を立てないように慎重に、じりじりと後ずさった。

足音は徐々に近づいている様子で、自然と京子の緊張は高まり、心拍数も上がる。

着替えてからそれほど経っていないのに、じつとりと背中汗に濡れ、シャツを重くした。

伝い落ちる汗が目に入り、視界が一瞬ぼやける――ふらり、とぼろ雑巾のような人影が小径から現れたのは同時だった。

眼鏡を額の上に跳ね上げて慌てて汗を拭い、目を凝らす。

背後の静香が押し殺した悲鳴を上げて京子のシャツを掴んだので、その正体を確認するまでも無かったが、一刻も早く脅威を肉眼で捉



えなければいけないという焦りが生まれた。

焦り故だろうか、京子は跳ね上げた眼鏡を取り落としてしまった。かしゃん、と眼鏡が軽い硬質な音を立てて足元に落ちた。

人影が此方を振り返り、歩を向けるのは焦点の合わない曖昧な視界でも確認できた。

京子の心臓が恐怖に締め上げられる。

くすんだ人影は、確実に、ゆっくりと不安定な足取りで近付いてくる。

声ならぬ呻き声はまるでかつては人間だったものとは思えず、二人の硬直状態に拍車を掛けた。

だが、震える右手に携えた確かな重みと、恐怖に引きつった静香の吐息が、いち早く京子を窮地から脱出させた。

そうだ。私は、やらなくちやいけないんだ——京子は右腕をゆるりと持ち上げ、左手で拳銃の握把を握る右手を包み込み、足は肩幅に開いた。

視界はぼやけているが、この際、それはどうでもいい。

清田に教わった標的の見だしは、標的自体に焦点を合わせず、照星にのみ絞るから、相手が実像を結ばない虚像でも構わないのだ。

深く呼吸し、精神と肉体をリラククスさせる。脅威は確実に距離を詰めているが、まずは落ち着かなければ命中しない。

それに、距離が詰まれば詰まるほど、命中の確率は上がる。反面、外せばそれだけのリスクを負うのも承知していた。

ぼんやりとしていながらも人型であるのは認識できた。頭部に照星を合わせ、いよいよ引き金の遊びを殺す。

ゆらり、ゆらりと頭部が左右に揺れる。不規則な動きをする頭部を銃口で追うのではなく、ここぞというタイミングで撃たなければならぬ。

双方の距離は既に五メートルを切っていた。まさに後数歩を踏み出して手を伸ばせば届きそうなほど近い。

既に腐敗し始めた人体が発する臭気が鼻腔を衝き、肌が粟立ち、背筋を悪寒が走り抜ける。

逃げ出したくなるのをこらえて、呼吸を止め、身体が発する振動を必要最小限に留める。引き金を引くのは意識せず、真つ直ぐに指を後ろに動かすのだけに集中させる。

相手の頭部が、照星いっぱい広がる。

期せずして、京子は引き金を絞り落としていた。

機構から解放された撃鉄が、38スペシャル弾の底部を叩き、燃焼ガスが130グレインの完全被甲弾(FMJ)を秒速250メートルで押し出した。

ぱん、と乾いた音が鋭く響き、手の中で拳銃が生き物のように跳ねた。

銃口より放たれた弾丸は、迫っていたへ奴らへの鼻と唇の間―人体の中で最も効果的な射撃部位―に命中し、その運動中枢を完全に破壊した。

どういう原理で死亡した人間の脳が活動していたのかは定かではないが、物理的に破壊する事で改めて正真正銘の死を与えられ、そのへ奴らへは歩行動作の途中で生じた慣性をそのままにして前のめりに倒れた。

水が詰まった皮袋が叩きつけられるような湿った音が響く。何かを掴むように伸ばされたままのその腕は、京子の爪先に軽く触れた。

銃身と銃弾の摩擦により生じた熱と、発射ガスによつて加熱された拳銃を下げ、京子は緊張を解くように肩で大きく息を吐いた。

生まれて初めて行った拳銃射撃は成功に終わった。

見事、迫り来る標的を撃ち倒し、二人は当面の危機を脱する事が出来た。

生き延びた。

その実感が京子には未だに湧かない。

緊張を解かれた心臓は今にも破裂しそうなほど激しい鼓動を刻み、耳の奥では渦巻く血流の音が聞こえた。

取り敢えず、眼鏡を拾わなくちゃ―腰を折り、足元に落ちた眼鏡を震える指先で拾い上げ、掛け直した。

漸く視界が鮮明になり、足元に倒れ伏す無害な死体を認める事が出

来た。

死体は三十代中頃のサラリーマン風と思しき男性であり、スーツの所々が獣に食い散らかされたかのように血塗れだった。

爪の剥がれた指先が、京子の右足の爪先に触れていた。ぴくりとも動く気配が見られず、本当の死を迎えたと見做して間違いないようだ。

京子が少しだけ後ずさると、爪先に引つかかっていた死体の指先が外れ、くたりと地面に落ちた。

すると、死体の袖口から何か小さなものが幾つも転がり出てきて、蠢いているのが見えた。

よく目を凝らしてから、京子は直ぐに後悔した。

それは白く丸々と肥え太った蛆だった。それが何匹も蠢動しながら腐肉を求めていた。

人間だろうと動物だろうと、蠅はどんな死体にも蛆を産みつけて苗床とする。それが彼らの生存戦略である。

その行為には何ら邪気はないが、吐き気を催す不快感に京子はパニックに陥りかけた。

今にも小さな蛆虫に自分も全身をじわじわと喰われるのではないかという錯覚に震えが止まらない。

背後に控える静香は、自分よりも上背の低い京子の背中に顔を押しつけて震えている。

二人とも震えを堪えきれず、暫く硬直していたが、一刻も早く立ち込める死臭と蠢く蛆虫から逃れたくて、京子は静香の手を取って足早に歩き出した。

今にも悲鳴を上げそうになるのを、唇を噛み締めて我慢するしかなかった。

ただでさえ発砲音を上げており、近隣に屯しているかもしれない〈奴ら〉の注意を引き付けた可能性が大いにあるのだ。今更騒々しく喚き散らすのはリスクでしかない。

一所（ひとところ）に長く留まっていれば、それだけ新たな脅威と遭遇する状況が生起するかもしれない。

それに、今は少しも時間に余裕がない。

早くしなければそれだけ清田の命も、自分達の命も危うくなるから。

†††

38口径の拳銃と思しき控えめな銃声は、清田にも届いていた。恐らく、京子が何らかの脅威に対して発砲したのだろう。

二発目が聞こえないので、一発で事足りたのか、それとも次弾を撃てる状況ではなかったのか、今の清田に知る術はない。

ただ、二人の安全を願わずにはいられなかった。

計画通りに事が進めば、多少なりとも反撃の余地はあるだろう。

全てはあの二人に懸かっているが、失敗した場合も想定して別のプランも考えておかなければならない。

だが、現状で講じられる策は殆どない。何とかして相手にLAWをぶち込んで吹っ飛ばすのが最良の方法だ。

手持ちの火器は40mmグレネードランチャー装備のHK416、USPタクティカル、ブリーチング用のKSG、LAWが二本、各種手榴弾、ドア爆破用のC4とそれに関する機材が少々である。

相手との距離は約200メートルほどであり、小銃でも充分に狙える距離だが、現状では相手にアドバンテージがある。

今、清田が最も欲しいのは、火力支援パッケージだ。誰かが81迫や120迫の迫撃砲一個小隊を与えてくれたら、喜んで尻を差し出すつもりだった。

欲を言えば、コブラやアパッチの近接航空支援があれば尚更なのだが、米軍のように贅沢な航空支援は自衛隊に於いては望むべくもない。

ああ、F2支援戦闘機がJDAM（精密誘導爆弾）を投下してくれたら！―五〇〇ポンド爆弾ならばあのアパートごと忌々しい狙撃兵を跡形もなく吹っ飛ばしてくれるが、所詮は無い物ねだりの空想でしかない。

清田は伸縮ロッド付きの鏡を取り出し、慎重に車の陰から突き出した。

鏡が西日を反射しないようにアパートの様子を窺い、狙撃兵の動向を探ろうとする。

二階建ての古い工業団地用アパートは南北に伸びるように建てられており、東側に面しているベランダは西日が作る日陰の中に没している。

敵も馬鹿ではないから、ベランダに陣取っている訳ではなく、部屋の奥まった暗がりからこちらを監視しているのだろう。

部屋を一つ一つ観察するが、狙撃兵の姿は見えない。だが、相手から此方が見えるという事は、此方からも相手を見る事が出来る筈だ。

伏せているならば、頭と肩のラインを持つ人間特有の形状が判別しづらく、発見は困難だろう。相手は間違いなくライフルが一番安定する伏射姿勢（プローン）をとっている筈だ。

鏡を僅かに動かし、部屋を一つずつ確認していく中で、ある部屋に違和感を覚えた。

その部屋のベランダには洗濯物が一つも吊り下がっておらず、ガラス戸が開けっ放しになっていた。

それならばまだ不審とはいえないが、物干し竿や洗濯ハンガーが一つもないばかりか、黄色いリボンが転落防止柵に結び付けられているのには何らかの作意を感じた。

あれは風向きを観測する為のものか？―清田の頭に浮かんだ疑問は、すぐに飛来する銃弾によって解決した。

その部屋の奥の暗がりですばやく小さな閃光が瞬いた刹那、手元の鏡は空気の壁を穿つ音と共に吹っ飛ばされ、大口径弾がアスファルトを抉った。

着弾によって飛散するアスファルトの破片を身に受けながら、清田は小さな鏡に写った光景を脳裏に焼き付けていた。

発砲炎（ガンファイア）によって一瞬だけ浮かび上がったのは、紛れもなくライフルを伏射で構える狙撃兵―というよりも、普通の男―の姿だった。

ビンゴ！——冷静ながらも湧き上がる興奮が清田の胸中を支配した。狙撃兵は間違いなくあの部屋にいる。

それは確定的に明らかだが、依然として有効な攻撃手段を保持しているものの、それを実行に移せるだけの機会に恵まれなければ意味がないのだ。

この膠着状況を打開できるのはやはりあの二人しかない。

そして清田が待ち望んだ人物達は、絶好のタイミングで戻ってきた。

「田中さん！」

京子が路地の壁際までやってきた。

「頼まれた物を持ってきました」

そうして彼女は手に携えている物を清田に見せた。

『それ』の出来を一目見て、清田は満足そうに頷いた。

「それで充分です。後は自分の合図で行動してください」

京子は頷き、再び路地に引っ込んだ。

後は相手の出方次第だ。

これが成功すれば此方の勝ちで、失敗すれば相手の勝ちだ。

生き残るのはどちらかだけであり、まさに命懸けの一発勝負だ。

清田は深呼吸してから、LAWを握り締め、小銃のセレクターレバーをフルオートにしてから手元に引き寄せた。

＋＋＋

車体の陰から突き出ていた鏡を吹っ飛ばしてやり、男は俄然気分を良くしていた。

これで相手は此方を安全に観察する方法すら失った。手も足もない相手はまさに八方塞がりの状況だろう。

絶体絶命の中、自らの不運を呪うがいい。あの時、素直に頭を撃ち抜かれていればこうして絶望に身を振る必要もなかっただろうに。

お前は敗者で、俺は勝者だ。畜生のように死んでしまえ——男はどす黒い愉悦に顔がにやけるのを堪えながら、ライフルを構え続けた。

その時だった。

狙撃眼鏡を覗き込んでいない、左目が何かの影を捉えたのは。

男は咄嗟に其方の方に銃口を巡らした。

そして高倍率に拡大された視界の中に写り込んだのは、路地の壁の上からひよっこりと出ている、緑色のヘルメットを被った人間の頭だった。

しまった。俺としたことが迂闊だった――よくよく考えれば、兵士が単独で行動している筈がない。必ず仲間と共に行動していると考えるべきだった。

あの兵士は斥候で、本隊よりも前方を進んでいたのだ。そして狙撃されたが何とかして逃れ、車の陰から此方を観察し、先程見舞った一発で完全にこの位置を特定したのだ。

それを本隊の仲間伝え、今まさにその仲間達が攻撃しようとしているのだ――視界に写る、フェイスマスクとスモークレンズのゴーグルで顔を隠した、別の兵士の頭にレティクルを重ね、引き金を絞った。狭い視野の中、その兵士の頭が粉々に吹き飛んだ。

戦果（スコア）がまたしても増えたが、もはや男の頭にあるのは一刻も早くこの場から逃げなければいけないという焦燥だった。

直ぐにでもあの兵士の仲間が此処に踏み込んできて、重火器でぼろ切れのように蹂躪されてしまう。

男はテーブルの上で身を起こし、手近にあったものを片っ端から引っ掴んでリュックの中に突っ込んだ。

脳裏に浮かぶのは、白い破片を撒き散らして頭を吹っ飛ばされた兵士の姿だった。

今にも自分がある兵士と同じになるかもしれないのだ。弱者を一方的になぶってきた男は、いざ自分の立場が逆転するとなると生来の小心っぷりを発露させていた。

だが、そこで、ふと、逃げ支度をする男の手が止まった。待てよ。

先程のあの兵士はどうして“白い破片”を撒き散らしたんだ？

大口径弾で撃ち抜かれた人間の頭は、まるで西瓜のように“赤い破

片”を撒き散らして爆裂する筈なのに―そこで漸く男は、己が犯した過ちに気がついた。

自分の推測が思い過ぎであったと願いながら、男はライフルの傍に置いてあった双眼鏡を掴んで覗き込んだ。

狙撃した兵士の頭があつた所には、棒が突き出ていた。その棒の先端には、下顎から上半分を吹っ飛ばされた人間の頭部がくっついてた。

その断面は白く、プラスチックのようだ―事実それは、FRP（強化プラスチック）製の、マネキンの頭だったのだ。

驚愕に目を見開きながら、男は双眼鏡を、兵士が隠れていた車に向けた。

隠れていた兵士は今車の上に身を乗り出し、何かの筒を肩に担いで此方に向けていた。

あれは……何だ？―男の疑問は、間髪入れずに秒速一四五メートルで飛翔する66mm成形炸薬ロケット弾が解決してくれた。

M72E10の、榴弾効果が強化された弾頭は、男ごとアパートの一室を爆炎で包み込んだ。



## #1st day⑨

煙を砲口から燻らす発射器を肩から外し、清田は黒煙を上げるアパートの一室に視線を送った。

部屋の中で慌ただしく動く人影は確認していた。

放ったロケット弾は見事、狙った通りに部屋の中に一直線に飛び込み、狙撃兵を盛大に吹っ飛ばしてくれた。

駄目押しは必要ないだろう——空になった発射器を傍らに捨て、小銃の銃口にサプレッサーをねじ込んだ。

清田の目論見通り、相手は此方の誘いに乗ってくれた。

静香と京子には、先程の洋品店まで戻ってもらい、ヘルメットを被った自衛隊員に偽装したマネキンの頭を持つてくるように指示していたのだ。

ヘルメットの形は厚紙などで作り、その上に迷彩戦闘服に近い色合いの衣服を被せ、顔はサングラスと黒い布地でそれらしく装飾した。

何処かに潜む狙撃兵をおびき寄せる為に、ダミー人形を撃たせて注意を逸らすのは対狙撃戦（カウンタースナイプ）では定番といえる。

もしもダミーと見破られれば、今頃清田はまだ車の陰にうずくまっていただろう。

結果として此方に軍配が上がったから良かったものの、失敗していれば目も当てられなかったに違いない。

だが、この状況で考え得る最良の選択だったと、今は断言できた。

「田中…:さん?」

まだ狙撃を警戒しているのか、ひよっこりと、京子が壁際から此方を窺っていた。

「林先生、もう大丈夫です。脅威は排除しました」

自分自身に言い聞かせるように、清田は車にもたれ掛かりながら言った。

そうだ。あいつはこの俺が吹っ飛ばしてやったんだ——清田は未だに黒煙を上げ続けるアパートの一室に一瞥をくれた。

とうとう、俺は人を殺した。間違いなく、粉々に吹っ飛ばして殺し

てやったんだ―教えられていた殺人に対する罪悪感は何片も無かった。

自分が殺人を行ったというのは明確に理解できたが、実感が沸かなかった。

何故なら、相手を目視できる距離ではあったが、清田は相手と直接目と目を合わせた訳でもないし、断末魔を聞いた訳でもないからだ。相手の目を見たり、肉声を聞いたり出来る距離であれば自責や罪悪感を覚えただろう。だが、実際の距離が増大するにつれて殺人に対する心理的距離も増し、兵士はトラウマなどに悩まされずに済む。

命が消え逝く相手の瞳を見詰めながら素手で首を絞めて殺すのと、モニターに写った白黒の人影に向かってミサイルの発射ボタンを押すのを同列に語る事は出来ないのだ。

それに、清田は、むしろあの無差別狙撃犯は死んで当然の人間だと考えており、正義が成されたのだと確信していた。

だが、清田のその精神の働きですら、無意識の内に相手を同じ真つ当な人間ではないと断じて、殺人に対する正当性を自己の内で作り上げるという、精神的な防御機構でしかなかった。

京子はおっかなびっくりといった様子で、静香と一緒に路地から通りに出た。

清田の言葉通り、銃弾が飛来する事は二度となかった。

「田中さん…貴男、撃たれたんですよね？」

傍までやってきた京子は、清田の右胸に刻まれた弾痕を見て、確かめるように訊ねた。

弾痕の周囲のタクティカルベストの生地は着弾の衝撃と高熱で繊維が飛び散り、焦げ付いていた。

「ええ。幸い、これのお陰で大事にはなりませんでしたが」

右胸のポケットから砕けたフォールディングナイフを取り出して見せる。

ナイフとプレートのお陰で致命傷とはならなかったが、その衝撃は生易しいものではなく、いずれ激痛に襲われるだろう。

清田が着用しているのがシンプルなプレートキャリアではなく、

トラウマパッド（衝撃緩衝材）を装備したボディアーマーならばその負傷もかなり軽減出来たのだろうが、動きやすさと軽量さを優先した為の結果だった。

すると、被弾の事実を意識した途端、戦闘を無事に潜り抜けたという安堵感から脳内麻薬の麻痺効果が切れたのか、右胸にヘビー級ボクサーの一撃を喰らったような重い痛みを覚え、清田は思わずその場に膝を着いた。

「田中さん!？」

清田の突然の異変に気付き、京子は慌てて彼の傍に寄り、屈み込んでその顔を覗き込んだ。

京子と共に静香も、彼の安否を気遣って傍についていた。

ハンマーで思い切りぶん殴られたような鈍痛は内臓まで届き、呼吸が上手く出来ない。

フェイスマスクの下でだらだらと脂汗を掻きながら、清田は被弾箇所を抑えてうずくまるしかなかった。

「……田、です」

「？」

激痛に喘ぎながら清田は掠れた声を漏らしたが、内容を聞き取れず京子は首を傾げた。

「…自分の名前は、清田、です…清田、武です」

顔を青ざめさせながら、清田は顔を上げて京子の目を見て、自分の本名を名乗った。

これで俺はもう謎の男じゃない——不思議と後悔はなかった。

「清田…武」

反芻するように、京子は彼の名を呟いた。

名前を呼んで貰える——たったそれだけの事だが、そうして初めて清田武という個人として、彼女らに認識された。

漸く、実体のある一人の人間として、彼女達と顔を突き合わせる事が出来るのが嬉しかった。

何度か肩で荒い吐息をつき、呼吸する事だけに意識を集中させ、肉体を緊張させないようにする。

強張った肉体はダメージを逃がしにくいので、そうなるとそれだけ回復は遅れる。

「戦術的呼吸法」を実施していくと、少しだけ痛みが和らいできた。

何とか動けるぐらいまで回復した清田は、二人の肩を借りて立ち上がった。

「……迷惑をおかけしてすみません」

清田は痛む被弾箇所をさすりながら、肩を貸してくれた二人に詫びた。

「いえ、それよりも……大丈夫なんですか？」

京子が、傷付いたその身体を労るように言った。

「負傷の程度は解りませんが、行動に支障はないと思います……多分」

痛みをしかめながら、清田は言った。

酷い打撲により、もしかして肋骨にヒビが入っているかもしれない。だが、子供の頃に肋骨の骨折を経験している清田は、その可能性は低いと考えていた。

個人差や箇所によっては変わるだろうが、骨折したりヒビが入っていれば、寝起きするだけでもかなりの苦痛を伴う事が多い。

今はずきずきとした疼痛を感じるだけであり、多少の呼吸のし辛さはあるが行動に支障を来すレベルではないと感じた。

清田は長身を折ってずしりと重いデイパックを拾い上げ、肩に背負った。重みが傷に響き、堪える為に歯を食いしばった。

「余り此処に留まってはいただけません。かなり大きな音を出し続けていましたから」

清田は小銃を構えるなり、後方を振り返って発砲した。

押し殺された銃声と同時に、のろのろと集まってきた数体のへ奴らが顔れ、人体が地面に叩きつけられる湿った音を立てた。

サプレッサーによって幾らか抑制されているとはいえ、射撃の反動が胸に堪えた。

「移動しましょう。目的地はもうすぐそこです」

二人は頷き、一行は狙撃兵のキリングストリートを後にした。

清田は絶句していた。

眼前に広がる、余りにも凄惨な現状に彼は言葉を失っていたのだ。清田を始めとした一行は、時折遭遇する〈奴ら〉を止むを得ない場合のみ排除しつつ、人気の少ない通りを選んで目的地を進んでいた。

そして集合地点である床主城からは目と鼻の先の所で、一行は立ち往生を余儀なくされていた。

清田は、雑居ビルの物陰から、市街地西部の中心地を走る大通りの様子を観察していた。

そこで繰り広げられているのは、もはや戦争と言っても過言ではないほどの熾烈な暴動だった。

通りに面する主要な建物は打ち壊され、駐車していた車は炎上し、人々は生者も死者も関係なく殺し合っていた。通りに打ち捨てられた様々な人間の死体は数えるのも苦勞するほどだ。

外国でしか起こらないと思われるいた大規模な、いやそれ以上の暴動が日本で起きるなどと、清田は思いたくはなかったが、現実には直視しなければならぬ。

唐突に発生した殺人病の感染大爆発（パンデミック）によって引き起こされた社会不安が、このように極端な形となって発露したのだ。

正直、此処を通りたくはないが、市街地の中心部に近づくにつれて人気の少ない場所を選んで進むのは既に限界があった。

途中、此処に到達するまで生存者とは何人かすれ違ったが、彼らの殆どは自分の命を守る為に逃げるのが精一杯で、清田の存在など眼中にはなかった。

何人かは清田の存在に気がついたが、物々しい重装備の兵士に声を掛けようなどという胆力を備えた人間は皆無だった。

尤も、清田にとってはそれが幸이었다。これ以上、他の人間に関わる事は出来ない。

今は新床第三小学校を目指すようにとしか言えない。助力を請わ

れても手を差し伸べる事が出来ない現状には歯痒かった。

自分はスーパーマンなどではない。与えられた任務から大きく逸脱しての救助は不可能だった。

静香と京子を此処まで護衛してきたのも、あくまで任務に逸脱しない範囲でだ。高城邸を目指しているのは、そこにいけば司令部との何らかの通信手段を確保出来ると見込んでいるというのもあった。

清田は後ろを振り返り、二人を見た。

彼女らも大通りの光景は目の当たりにしており、より一層緊張した面もちでいた。

「今から、此処を突っ切ります。なるべく、自分の後ろから出ないようにしてください」

静香は無言で頷き、京子はズボンのウエストから拳銃を引き抜いた。

「回避不可能な脅威については自分が排除します。しかし、自分も万能ではないので、脅威の察知については限界があります。なので、お二人には自分の視界外のカバーをお願いします」

清田は二人に、具体的な監視方向と報告要領を説明し、それを彼女らが理解した所で、いよいよ気持ちを引き締めた。

「焦らず、落ち着いてください。必ずお二人の安全は自分が守ります。だから、自分に協力してください。何があっても、自分を信じてください」

これを成功させるには何よりも二人の協力が必要だった。

練度の高い同僚であれば、何も言わなくても一個の生物のように完成された連携で難なく乗り切れる所だが、素人の女性を交えての市街地戦闘行動は、清田でなくても頭を抱えたくなるほどの難事だ。

だが、やらなければいけない以上、それを達成する為に創意工夫を凝らさなければならぬ。

二人が落ち着き、手順を確認し、反復練習した所で、清田は満足そうに頷いた。

「それでは行きましょう。そして自分が指示しない限り絶対に走らないで下さい。早歩き程度で問題ありませんから」

清田は流れるように淀みない足運びで、小銃を油断なく構えながら大通りに出た。

上体がまるで自動追尾装置を搭載している戦車の砲塔のように、一切ぶれる事なく小銃を暴徒に向け続ける清田の背後に二人は続いた。

暴徒の中で特に目立つのは、日本刀や鈍器、果ては小口径火器で武装した集団だった。

勿論、清田はその集団に対する警戒を強めていたが、願わくば此方には気が付かないで欲しかった。

しかし、直ぐにそのささやかな願望は打ち砕かれた。

その集団を束ねていると思しい、裸の上半身が入れ墨に覆われている、スキンヘッドの中年が目敏く清田達を見付け、傍らの男達に彼を指差しながら何事か指示を飛ばしていた。

命令を与えられた複数の男達は、それぞれの得物を手に、血走らせた目に狂気を宿して此方に向かってきた。

清田は素早く、男達の戦力を冷静に分析する。

鈍器や刃物、日本刀で武装している男達の中で一番脅威が高いと判断したのは、狩猟用の上下二連装式の散弾銃を抱えている男だった。

その男は、他に比べて遠距離から攻撃可能な銃器で武装しているの  
で、既に此方に銃口を向けようとしていた。

「撃つな！ 撃つな！ 撃つんじゃない!!」

清田は声を張り上げて必死に警告した。

だが、それにも関わらず、男は上下二連式散弾銃の銃口を彼に、明確な敵意と殺意を込めて向けた。

刹那、男の命運は決まった。

男よりも早く且つ精確な照準を終えていた清田は、躊躇う事なくその頭部にダブルタップで5・56mm高速弾を撃ち込んでいた。

超音速の銃弾を二発も受けた男の頭部は、瞬時に爆裂した。

命令系統を失った男の身体はその場に頽れ、引き金に掛かっていた指がその衝撃で引き金を絞り落としてしまい、結果的に散弾銃を暴発させた。

散弾はあらぬ方向へぶち撒けられ、不運にも前方を走っていた仲間

の男の背を抉った。

約9mmの鉛粒のダブルオーバーバックが十二発も着弾するその威力は、単純に9mm口径の拳銃で瞬時に十二回撃たれるのにも等しく、不運なその男は幸運な事に即死してもんどり打って倒れた。

「止めろ！ 此方に危害を加えようとするな！ でなければ撃つぞ！！」

直接的に一名、間接的に一名の計二名を一瞬で制圧したが、清田は迫り来る男達に向かって警告を続けた。

相手はあくまでも日本国民であり、暴徒と化していようがそれは変わらない。

既に形ばかりの警告なのかもしれないが、それでも清田は己の職務に忠実であろうとした。

しかし、完全に狂気に飲み込まれてしまった男達は、仲間が清田の正確無比な射撃に倒れようとも自制など出来る筈もなく、目を血走らせて確実に距離を詰めて来た。

清田ほどの射撃の腕前を持つてすれば、男達の手足だけを撃ち抜くのは造作もない。

かといってそれでは完全に無力化できた訳ではなく、少しでも反撃の余地があるのなら脅威として存在し続けるという事でもある。むしろ興奮状態にある中で中途半端な傷を負わせても逆効果ではない。

自分と、静香と京子の命を守る為にも、確実に脅威は排除しなければならなかった。

馬鹿野郎どもが！——清田は心底から獣にまで身を落とした男達に怒りとも呆れともつかない感情を抱き、だが、容赦なく引き金を絞っていた。

最初に、一番清田へと接近していた肉切り包丁の男を、続いてゴルフクラブを持った男、金属バットを持った男——三人の人間が、ほぼ同時に頭部を撃ち砕かれて肉塊へと変わった。

五人の仲間が即死するという状況に、流石にスキンヘッドの男も戦意を挫かれた様子で、明らかに戸惑いの表情を浮かべていた。



だが、清田は、その男を含めて、現在対峙している脅威集団と見做していた。

直接手を下さずとも、戦闘員に対して非戦闘員が攻撃を加えるように指示をした時点で同罪だった―スキンヘッドの男も、清田に頭と胸を撃ち抜かれて制圧された。

瞬き一つの間、五人の命を奪ったが、清田には欠片も罪悪感はない。

自身の行為は何ら道理に外れてはおらず、正当防衛の範囲で無法者どもをやっつけたのだ。

そうしなければ自分ばかりか、か弱い女性二人まで命の危機に瀕するのだ―清田は何時の間にか、己が躊躇なく振るう武力の根拠を、静香と京子に求めていた。

一方的な殺戮を終えたというのに清田の肉体と精神は全くの平静で、理想的な状態にあった。

度重なる高度な訓練と条件付けが、年若い青年を呵責なき戦争兵器へと仕立て上げるのが立証された瞬間だった。

たった一度だがそれで充分すぎた。

銃弾の中を潜り抜けた事実が、実戦知らずのエリートを、本物の熟練した戦闘員へと変貌させたのだ。

「清田さん！ 後方に注意！」

背後に追従する京子が、落ち着いていながらもはつきりとした声で清田に注意を促した。

清田は即座に左足を軸にして反転すると、ACOGサイトに猟銃を構える男を捉えた。

先程、撃ち殺したのとは別の男が、猟銃の狙いを清田に定めていた。

清田は男よりも早く引き金を二回引いたが、照準が充分ではなく、頭部ではなく胸に一発しか命中させられなかった。

だが、生身の胸に高速の小銃弾を受ければ無事で済む筈もなく、男は猟銃を取り落としてその場に膝を着いた。

そうなつてはもはやただ的である。速やかに頭部に一発を撃ち込み、血煙となって消失する脳髓と共に男を無力化した。

「このまま床主城へ向かいましょう」

小銃を構え、周囲に油断なく銃口を巡らせながら清田は足早に大通りを進んだ。

狂乱の渦と化している市街地では、もはや清田の存在はある意味では歯牙にも掛けれられないほどちっぽけな存在だった。

清田達を狙ったあの集団は、偶々彼らを発見しただけであり、特に理由もなく暴力の矛先を向けただけだった。

清田が重武装の自衛隊員であるからとか、魅力的な美女を二人も連れていたりとか、そのようなものは彼らの眼中には全くなかった。

みんなでやれば、怖くない——人が集まれば必ず増強効果が生じる。喜びが存在すれば、人が集まる事で倍加する。攻撃性が存在すれば、人が集まる事で更に高まる。

理由もなく振るう陰惨な暴力の味に彼らは酔っていただけだった。

それは祭のようなものであり、同じ目的を持った人間が一カ所に集まれば群集心理により、一度振るわれた暴力は留まるところを知らずに膨張していく。

普段は法律や道徳規範によって抑圧されていた獣性が、社会的混乱と暴動によって解き放たれた人間が大勢集まっているからこそ、清田は向かってくる暴徒を撃ち殺すだけで良かった。

それは助けを求められるよりも簡単に楽な事だった。

引き金を引くだけで良いのだ。それで全てが解決する。

殺人によって良心が痛む心配もない。何故なら、連中は俺と二人の女性を殺そうとするからだ——自己の大義及び正当性を信じているからこそ、清田は滑らかに作動する戦争機械として機能し続ける事が出来た。

法と秩序とその他諸々の、善にして聖なるものを踏みにじった、血に飢えた恥知らず共を駆逐するのに如何して躊躇いがあるう！——それはある意味では危うかった。

静香や京子の為、若しくは助けを必要とする人の為、という根拠があれば、清田はどんなに残酷な事も平気で実行可能な状態にあると言えた。

勿論、道理に著しく外れた事の判別はつくが、人間に必ずという言葉はあり得ない。

今の彼は、倫理的距離によって罪悪を感じる事のない殺人マシーンと化していた。

そんな清田自身にも自覚のない、自動操縦に近い肉体の反応のままに、脅威とそうでない者を判別しながら通りを進み、やがて道路の青い案内標識が見えた。

一〇〇メートルほど進めば、広々とした四車線道路の床主大橋へと辿り着く。

清田達は、若干大橋を見下ろせる小高い位置におり、そこから橋の上の惨状が具に見て取れた。

大橋は警察と消防によつて交通規制が為されており、車両は完全に通行止めとなっていた。人々は徒歩で橋を渡ろうとしていたが、警察の検問を受けなければ通行は許可されず、通行しようとして噛まれていてまだ意識のある者は警官達によつて何処かに連れて行かれた。

生者も死者も入り乱れる混沌と化しており、許可待ちの通行者の列には「奴ら」と化した者達が襲い掛かり、事態は収拾がつかない状況にあった。

時折、警察の誘導に従わずに橋を渡ろうとする者は放水車によつて排除され、高水圧の水放射で橋の上から吹っ飛ばされる。

大橋を渡るといふ選択肢は有り得なかった。

わざわざあの混乱の渦中に飛び込んで無事でいられるという自信は、流石の清田にも無かった。

自衛官の身分証明書は携行しているが、そんなものを見せた所ですんなりと通して貰えるとは思えない。行儀よく順番を待っていれば「奴ら」に食い殺されるのがオチだろう。

強行突破という選択肢も有り得ない。

治安維持の為に命を投げ打っている警察官や消防士に対して銃を向けるなど出来る筈もない。

床主大橋とは別に、下流に架かっている御別橋も同様の事態にあると考えるべきだろう。

渡河の手段は、また、考えなければいけないが、当初の目的は床主城で冴子達と合流する事だ。

時刻は既に一七〇〇を回っている。一時間もしない内に暗くなるだろう。

清田達は、御別川に沿って続く川岸上の二車線道路を下流に向かって歩き、床主城を目指した。

やがて十分と掛からずに、床主市の観光スポットの一つである、床主城の大きく頑丈そうな城門の前までやってきた。

城門は閉まっており、敷地内には簡単に入れそうにない。

清田は床主城の案内板を眺め、周辺の地形を頭に入れた。床主城はぐるりと城壁に囲まれており、出入りは北と南に設けられたら城門からしか出来ないようだ。

関係職員用の出入り口も幾つかあるようだが、鍵が閉まっているだろう。尤も、清田は殆どの扉を開けるマスターキーいざとなればスラッグ弾で鍵を吹き飛ばすだけだーを携行しているので、これはさほど問題とはならない。

床主城で落ち合おうとは言ったものの、床主城の何処に集合するとは決めておらず、妥当に考えれば城門前なのだろうが、北門と南門とでは正反対の方向に位置している。

北門で待ち続けていたら実は南門に、また、逆の事態も起こり得る。分派してそれぞれで待機という案を思い付いたが、二人の内のどちらかを自分の目の届かない所に置いておくのは心配であり、清田はこの考えをすぐに却下した。

集合は今日の午後五時までと決めており、このままぐずぐずしていたら日が完全に暮れてしまう。左腕にはめたプロトレックの液晶画面に目を落としながら、清田は逡巡した。

今日が駄目なら明日の同じ時間とも決めている。三人の、特に沙耶の安否が気になるが、何時までも此処に留まり続ける訳にもいかないだろう。

「当初はここに集合する予定でしたが、既に集合時間を過ぎています。待ち続けても彼らが来るという保証もありませんし、我々も身を守ら

なければいけません」

清田の言わんとしている事を察した二人は、素直に頷いた。

「そこで今日は、何処か安全な場所に身を隠そうと思つています。自分はこの辺については何も知らないのです、お二人は何処か思い当たる場所がありますか？」

清田の問いに、静香がおずおずと手を上げて答えた。

「この近くに私の友達が住んでるの。長く家を空ける時は、私がお掃除とかをしにいったりするから、今日はそこでお休みしましょう」

静香の提案は、この場にあつてはまさに渡りに船だった。

野営に慣れている清田は、三日四日ぐらい野晒しで過ごすのには何ら抵抗はないが、流石に妙齡の女性をそのような目に合わせるのは気が引けていたので、そうならずに済みそうでほっとした。

「では、そうしましょう。鞆川先生、道案内をお願いします」

清田が先頭に立ち、すぐ後ろに静香が追従する。

そうして踏み出した矢先だった。

「清田さん。あれ、もしかして…」

静香が指し示す方向に、今となつては懐かしい顔触れが見えた。

木刀を逆手にして腰に携えた、遠目からでも凜とした静謐な雰囲気漂わす黒髪の少女も、どうやら此方に気付いた様子だ。

その後ろに続く、小太りの少年や、ツインテールの少女も同様だ。

「ご無事で何よりです、田中さん」

その落ち着き払った美貌に一切鬩りのない冴子が、開口一番、涼やかな微笑みと共に此方の健在を喜ぶ声を掛けてくれた。

腰に携えた木刀は、分断される前よりも多くの血糊が染み着いているように見受けられた。実際、真新しい血指が西日を受けてぬるりとした光を発していた。

それだけで、此処に至るまでの彼女らの道程も、自分達と同様に生半可な修羅場ではなかったのを物語っていた。

「いえ、そちらこそ…」

無事で良かった、という言葉で清田は続ける事が出来なかった。音もなく、唐突に冴子が距離を詰めたからだ。

既に二人の距離はお互いの吐息を感じられるほどであり、清田よりも頭一つ分以上も背の低い冴子は、まじまじと彼の右胸を注視していた。

ふわり、と少女剣士の爽やかな汗と甘やかな体臭の混じった匂いが鼻腔を擦り、清田は微動だに出来なかった。

「これは…どうされたのですか？」

冴子に真剣な眼差しで問われ、清田はたじろいだ。

清田の右胸―そこには被弾した痕跡が禍々と刻まれており、先刻の狙撃者との死闘で受けたパールハート（名誉負傷章）と言えた。

「市街地で狙撃されました…幸い、大した傷ではありません」

相手を無力化した、つまり粉々に吹っ飛ばして殺したとまでは言えなかった。

女子高生に面と向かって「俺は人を殺した」と発言するのは、未成年者の情操教育上よろしくないように思えたが、多くの人間の死を目の当たりにしているのに今更という感があった。

既に何人も殺している。

それは仕方がなかった事であり、今でも正しい選択だったと自信を持って断言できる。

だが、改めて言葉にして発するとなると、途轍もなく非人道的な行いのように思えて、己の罪深さに嫌気が差す。

殺したあのゴロツキ共の一人一人に両親がいて、家族がいて、妻子がいたのかもしれない。

自分が撃った銃弾で、それら多くの人間が悲しみに暮れるのかもしれないと思うと、あまり良い気分とは言えない。

これについては考えるだけ無駄だ。今は余計な思考にエネルギーを割いている場合ではない―清田は罪悪という名の底無しの深みにはまりそうになった思考を引き揚げ、気持ちを切り替えようと努めた。

「そうだったのですか…お互いに苦難の道程でしたね」

冴子の物静かな語りから感じ取れたのは、苛烈な戦闘を生き残った者のみが共有する、肉親の情よりも深く強固な連帯感だった。

彼女も、清田と同様に先頭に立ち、文字通り血路を切り開いてきたのだ。

鍛錬用の本赤檜の木剣は頑丈だがずしりと重く、剣の熟練者が振るえば人間を一刀で撲殺する事など造作もない。

幼少の頃より父親に剣術を叩き込まれてきた冴子は、若くして「腕前」のみは達人の域に達している。

その彼女が例え真剣でなくても帯刀している時点で、銃火器で武装している素人以上の戦闘能力を有しているのは明白だった。

しかし、冴子といえども決して楽ではなかった様子で、それが言葉の端々から察せられた。

冴子は清田から離れると、静香に向き直った。

「鞆川校医、あなたの持ち物を預かっている。少しばかりテープピングをさせて貰ったが、構わないだろうか？」

肩に掛けていたバックを静香に手渡す冴子の右掌は、血の滲むテープピングテープに覆われていた。左手も同様なのは想像に難くない。

両の掌の皮が剥けるほど、木剣を打ち込み続けたのか―多くは語らない、毒島冴子という少女の精神的な頑健さに、清田は頼もしさよりも畏怖を覚えた。

「毒島さん、後で傷を見せて頂戴。適切な治療をしないと化膿してしまおう」

冴子からバックを受け取った静香は、その傷の具合を気遣う。

途中で退行が著しかった静香だが、今では自分の本来の役割と立場を取り戻した様子で、己の仕事をこなそうとしていた。

それはとても好ましい事だろう。

自分に出来る事をやれるだけで、人は無力感から脱する事が可能だから。

「あと」

今度は清田を振り向き、彼女は言葉を続けた

「清田さんですからね。胸の傷、酷いかもしれませんから」

静香が医療従事者であるのが幸いだった。

清田にとって胸の負傷は、己の見立てではたいしたものではないと

考えていたが、やはり少なからず不安があった。

この状況下にあつては、専門的な知識と技術、経験を備えた人間の診断を受けられるのがこれほど有り難い事だとは思わなかった。

「それに林先生も頭の傷を診せて下さい。耕太君や高城さんも怪我していたら教えてね」

水を得た魚、といった様子で細やかに負傷者の把握に努める姿こそが本来の静香なのかもしれないと、清田は思った。

「それではぼちぼち移動しましょう」

清田は静香の友人宅へ向かう道中、自分の本名を合流した三人に名乗り、いよいよこのグループの一員になったのを実感した。

己のIDに関する秘密保全が出来ないようでは特殊部隊員としては失格かもしれないが、今は生き残る為にもこの集団との繋がりを深めなければいけない――尤もらしい理由を付けて、清田はこれを正当化した。

†††

静香の友人宅は、高台に建てられたメゾネットタイプの賃貸住宅であり、真新しい外観とその洒落た造りからかなりの高級物件と思われた。

共用の門から階段を上ってエントランスへ接続する方式なので、簡単なバリケードを築けば外部からの直接の侵入を防げそうだ。

見晴らしが良いので、周辺の監視にも最適だろう。

門の隣は各部屋の駐車場であり、大型の四輪自動車が一台だけ停められていた。

清田はその車を一目見て、思わず口笛を吹きそうになった。

おいおい、一体何処でこいつを手に入れたんだ？―見慣れたOD色の車両は、普段から乗り慣れている車種だった。

幅広の角張った車体を持つ高機動車は、米軍のハンヴィーと同様の車両を自衛隊が要求した為に製作された。

ハンヴィー同様、車体はファミリー化されているのだが、イラクに



派遣されるまで追加の装甲キットは用意されず、一部の部隊を除いて装備されている車両の殆どはFRP製の車体と幌布を備えるだけの非装甲（ソフトスキン）である。

通常仕様の高機動車は著しく耐弾性能が低い、重い装甲がない分、車体が軽く、優れた駆動装置により、大柄な車体でも軽快な機動性を発揮するので、非常に操作しやすい。

また、車体が大きいのだが、4WSなので旋回半径も意外と小さいのが特徴でもある。

「戦車みたいなその車は、私の友達のものなの」  
静香のその言葉に、いよいよその友達とやらの存在は謎めいてきた。

高機動車はトヨタが開発しており、民生版のメガクルーザーが一期発売されていたが、今では自治体や政府機関からの纏まった注文がなければ民生向けバージョンは生産されない。

問題なのは、そこに停めてある車体が自衛隊仕様である事だ。

自衛隊仕様は勿論、自衛隊にしか販売されていない。どうやってこれを手に入れたのかは分からないが、その友達とやはただ者ではなさそうだ。

「高機動車だ…」

「一体どんな友達なのよ…」

耕太と沙耶も見慣れぬ軍用四駆車には脱帽している様子だ。

一行は敷地内に入り、門には忘れずに鍵をかけた。

そしてエントランスへと続く階段を上る途中で血痕を見付け、今日という日は簡単に終わりそうにないのを否が応でも思い知らされた。

階段を上りきり、メゾネットへのアプローチの広場で立ち止まり、陣容を整える。

周辺は視界が開けており、エントランス前の広場の左右には、各部屋の庭が広がっていた。

そこにへ奴らへが潜めそうな植え込みもないので、建物へ入る前に簡単なブリーフィングを行うには適した場所だった。

「建物へは自分一人で入ります。残りは此処で待機し、もしもの時に備えて下さい」

当然すぎる判断に全員が頷き、清田は静香から部屋の鍵を受け取った。

「いえ、私も一緒に行きます」

だが、冴子だけはそう申し出た。

清田は怪訝な表情で少女を見やり、その真意を問うた。

「…どうしてその必要が？」

まさか、俺一人では心配だとも言うのだろうか？

だとしたら、随分と侮られたものだ——曲がりなりにも戦闘を職業とするプロフェッショナルであり、しかもただの自衛隊員ではない。

選りすぐられた精鋭として訓練を積み重ねてきた、特殊部隊の一員なのだ。それが武道を修めている女子高生に心配されるようでは笑い話にもならない。

「不測の事態に備えるのがそんなに悪い事でしょうか？」

少しばかり反抗的な冴子の物言いに、一瞬、腹を立てそうになったが、そこはぐつと堪えた。

アドレナリンの残滓が残っているのだろうか？——何時もよりかつとなりやすい己の迂闊さを戒め、清田は深く息を吐いた。

落ち着け。こんなに頭に血が上りやすいようでは、次の戦闘では必ずミスを引き起こすぞ——今は冷静にならなければいけない。

物事に慣れる事はあっても、それを軽んじるようになってはいけない。

悪い兆候だ。

慣れてきた事でも、常に初心を忘れずに、習い覚えた手順通りに実行できるように気を付けなければならない。

よくよく考えれば、冴子の言葉にも一理ある。

CQB（近接屋内戦闘）に於いてのクリアリング（屋内搜索）は、原則として複数人で行わなければならない。単独で突入すれば忽ち、死角に潜む敵から攻撃を受ける可能性が高まるからだ。

複数人がそれぞれの役割を分担し、一つの部屋を迅速に搜索・制圧

する事で相手に反撃の暇を与えず、作戦を遂行する事が出来るのだ。

人質の救出作戦ともなればそれはより高度なレベルを求められ、秒単位のスケジュールを実行し、また変化する状況に対応しなければならぬ。これは個人の練度も当然だが、チームワークも必要となってくる。

今回は建物内に潜んでいるかもしれない〈奴ら〉を掃討するだけでないので、迅速性は必要ないが細かな範囲までしっかりと搜索しなければならぬ。

その為には簡単な手順を決めて、ある程度の連携を確保する必要があるだろう。

「…分かりました。では、自分が前衛（ポイントマン）を務めます。毒島さんに守って頂きたいのは、自分よりも絶対に前にでない事、これだけは確実に守って下さい。銃の射線に入るのは大変危険です。誤射してしまうかもしれませんので…脅威についてはなるべく自分が排除しますが、万が一、自分が見落としている標的があれば、その制圧をお願いします」

状況が複雑となりやすいCQBに於いて絶対にやってはならないのは、射線が交錯した末の友軍相撃である。

人間は必ずしも正しい判断を咄嗟に下せるとは限らないので、ならばそのような状況をなるべく作り出さないようにするのが最善の手段だろう。

「承知しました」

これから臨む戦闘前の独特の緊張感を滲ませた表情で、冴子は頷いた。

「それと中は暗いと思うので、これを使って下さい」

清田はベストの胸ポケットから小振りなタクティカルライトを取り出し、冴子に渡した。

既に太陽は地平線に接しており、西日の届かない屋内は暗いだろう。

「よし…耕太君、俺の荷物を預かっておいてくれ」

冴子にライトの使い方を教えてから、清田は少しでも身軽な格好で臨むべく、背負っていたデイパックを耕太に渡した。

「分かりましたあつ!？」

デイパックを受け取った瞬間、耕太は武器弾薬がぎっしり詰まったその重みに素っ頓狂な声を上げ、危うく取り落としそうになった。

「男ならもつと鍛えようぜ？ それじゃ、女性陣の事は頼んだぞ」

耕太の肩を叩き、清田は冴子と共にエントランスへ足を向けた。

彼に散弾銃を渡そうかと迷ったが、流石に男子高校生に実銃を渡すのは躊躇われたし、それに鍵を破壊して部屋を捜索する必要性があるかもしれないので、やはりそうするべきではないだろうと判断した。

綺麗に掃き清められたエントランスは掃除が行き届いており、大理石の床の所々に点在する血痕が異質な雰囲気醸し出していた。

薄暗い屋内へ足を踏み入れた途端、濃密な血と死の臭いに冷や汗が吹き出る。

火力よりも屋内での素早い取り回しを考えた結果、清田は小銃からサプレッサーを装着した拳銃に持ち替えており、銃身下部のレールに装着しているフラッシュライトで隅々まで照らした。

強烈なライトの光が、質量を備えたかのように重い薄闇の中から様々なものシルエツトを照らし出す度に、清田は心臓が飛び上がりそうな緊張を味わっていた。

願わくば、へ奴らへを照らさないでくれー幸い、エントランスに不穏な影は見当たらなかった。

安全化したエントランスを横切ると、各部屋への玄関扉が左右に並び廊下からは声ならぬ複数の呻き声が聞こえてきた。

清田は壁に身を寄せ、後方の冴子を振り返った。

宵闇の中、少女の白い顔（かんばせ）が仄かに浮かび上がっていた。美人な幽霊がいるとしたら、まさにこんな感じなのだろうかー取り留めのない事を考えながら、清田はその傍に寄った。

「先ずは左から掃討します。自分の合図があるまで、廊下にでないで下さい」

冴子は無言で頷き、しやらり、と鴉の濡れ羽のような髪が揺れたのが心配で確認できた。

清田は静かに呼吸してから、音を立てないようにそっと廊下に躍り出た。

そして左の廊下に銃口を擬し、眩い白光が揺れ動く人影を闇の中から浮かび上がらせる。

目も眩むほど強烈な光の直撃を網膜に受けているというのに、彼らは虚ろな眼差しで虚空を見つめていた。

数は全部で三体。

一番遠い標的でも距離は十メートルも離れていない——それぞれ頭部にダブルタップで9mmパラベラム弾を撃ち込み、殆ど同時に三つの湿った音が響く。

すかさず清田は反転し、今度は右の廊下に拳銃を向ける。

数は同じく三体。

既に音に反応し、のっそりと此方に向けて歩み出していたが、それらも難なく無力化した。

これで廊下にいる分は全部だろう——清田は肩の力を抜いて銃口を下げた。

瞬間、ぱつと足元に浮かび上がったのは、ずるずると這いずる物体だった。

それは両足を食いちぎられた犠牲者だった。

歩行手段を失っても尚、死する肉体を突き動かす飢餓感に従って、彼は奇妙にねじ曲がった指先を清田の両足首に万力の如く絡めていた。

見落としていた?!—清田は咄嗟に下方を狙おうとしたが、亡者の鬼のような引き込みに足元を掬われ、受け身も取れずに背中から地面に倒れ込んだ。

ごっこん、と鉄帽が重い衝突音を響かせ、頸椎が湿り気を帯びた軋みを上げる。

清田は頸の痛みに気を割く暇などなく、上体を僅かに起こして迫る亡者に拳銃を向けようと必死になった。

だが、既に亡者は口をかあつと開き、装備に覆われていない彼の無防備な股間にかぶりつこうとしていた。

くそ、金玉を食われて俺は死ぬのか？—コンマ数秒の後に襲い来るであろう男の激痛の予感に陰囊がひゅつと縮み上がり、清田は己の情けない最後に諦観していた。

ふわり、と風が舞った。

黒豹のように軽やかな影が、横合いから躍り掛かるや否や、ゴルフのスイングよろしく下方から峻烈な斬り上げを放っていた。

清田の股間に迫っていた餓鬼の顔が、上顎から削ぎ飛ばされ、びしやり、と腐りかけた血を飛散させて壁に打ち付けられた。

舌を根元から露出させた、上顎のない死体が、くたりとその膝の上に頽れる。

暫し清田は、だらりと延びきって脱力した死体の舌と喉奥を眺めていたが、やがて自分に代わって周辺を警戒する人影を見上げた。

冴子は左手にライトを握り、右手には切っ先を下げた木剣を携えながら、左右に他の敵影を探し求めている。

全ての脅威を排除し終えたのを確認し、冴子は安堵の吐息を漏らすと、床に仰向けになって転がる清田を振り返った。

「大事ありませんか？」

左手のライトを制服のポケットにしまい、再び暗闇に沈んだ冴子が、自由になったその手を清田に差し出す。

「あ、ああ……」

未だに茫然自失の清田は生返事で、差し出されたその手を握った。「つつう……」

しかし思いの外力を込めすぎたようで、冴子が苦痛に端正な顔を歪める。

「あ！ すみません……」

己の思慮の足りなさに清田は慌てて手を離し、自力で身を起こして立ち上がった。

清田を見下ろしていた冴子は、再び彼に見下ろされる形となって元の立場に戻った。

だが、清田は、プロの戦闘者としての精神的優位性を完全に失ったと感じていた。

あれだけ偉そうにしている、女子高生に命を救われるとは――ほとんど、己を見下げ果てた気分だった。

「これからどうします？」

ライトを再び手にした冴子が、清田の指示を待つ。

自分よりも情弱と思っていた存在に命を救われ、感謝と共になんとも煮え切らない感情を抱えていたが、それはおくびにも出さず、清田は思考を切り替えた。

過ぎ去った事は考えても仕方がない。

今、重要なのは、己の不始末を、この少女剣士が片付けてくれたという事だ。

詰まらないプライドは捨てろ。任務を邪魔する要素は全て排除しろ――冴子の英雄的な行動には一点の曇りもなく、それは感謝して然るべきだ。

「まずは鞆川先生の友人の部屋をクリアリングしましょう：先程と同じ手順で」

そう言ったものの、心なしか言動に自信が持てないのは気のせいだろうか？

◆◆◆

メゾネットには全部で八世帯が入居しており、先ず最初に静香の友人宅を安全化した所で、外で待機していた人員を招き入れた。

清田と冴子が屋内に突入した後、敷地内に別の〈奴ら〉がいたそうだが、耕太の釘打ち機で難なく撃退しており、犠牲は出ていない。

そうして四人には休息を取る為の準備をしてもらい、その間に清田と冴子の両名は残りの世帯のクリアリングに専念した。

端から順に風潰しに搜索・安全化し、清田は先程のような油断は絶対にしなかった。

最後の世帯を搜索するべく、清田は玄関扉に手を掛ける。

八度目ともなれば慣れたものだが、同じ間取りとはいえ住人によって家具の配置などが異なるので、未知の領域に踏み込む緊張を保持するのを忘れなかった。

冴子に目配せをし、彼女が頷くのを確認してから、清田は音を立てないように玄関扉をそつと押し開けた。

靴みの一つも立てずに扉が開くのは、まだこのメゾネットが真新しいからだろう。扉の蝶番も滑りが良い。

するりと土足のまま部屋に上がり込み、左手の壁にある照明のスイッチを押そうとする。

だが、巨漢の清田がフローリングに足を踏み入れた途端、床板がぎしりと鳴った。

拳銃は部屋に広がる暗闇に向け続けているとはいえ、その中から今にでもその音を聞きつけたへ奴らに襲われるのではないかと恐れしたが、取り敢えずその心配はなかった。

室内灯の殆どが間接照明な為、部屋が柔らかな光で満たされる。

へ奴ら姿はない。

安堵しそうになるのを堪え、清田は拳銃を構えたまま同じく一階にある風呂場やトイレ、キッチン等をクリアリングしていき、脅威がないと判断した。

そうして初めて後続の冴子を招き入れる。

体重の軽い彼女は部屋に上がり込んでも床板一つ鳴らさず、清田の傍までやってきた。

「清田さん。あれを…」

冴子が部屋の片隅にあるものを示し、清田もそれについては照明を点灯した時点で気がついていたが、改めて緊張に身を強ばらせた。

それは箱に収まった幼児用の玩具だった。

それを確認しなくても、部屋に置かれている調度品や内装、玄関に置かれていた靴からこの世帯には小さな子供がいるのは明白だった。

冴子が言わんとしている事は察せられた。

今の今まで、撃ち倒してきたへ奴らは大人であり、まだ子供のへ奴らとは遭遇していない。



果たして、子供の〈奴ら〉を目の前にした時、二人は今までと同様に、容赦のない攻撃を加える事が出来るのだろうか―清田としては、その答えはイエス以外には有り得ないと考えているが、心情的には難しいと言えた。

だが、子供だろうが何だろうが、脅威と判断されれば躊躇いなく引き金は絞られるだろう。そうしなければ此方に身の危険が及ぶのは明らかだろうから。

子供の〈奴ら〉と自分達の命など秤に掛けるまでもない。むしろ、一刻も早く不運な子供の遺体を自由にしてやらなければと考えるべきだ。

「もしも『そういう時』が来たら…なるべく自分が対処します。ですが、毒島さんも心の準備だけはしておいて下さい」

頷く冴子の瞳は、心なしか揺れているように見受けられた。

技は熟達の域にあるようだが、彼女の精神までそうはいかないと見做すべきだろう―先程の一件で冴子に対する見方を改めた清田だったが、手放して彼女を評価する事は難しそうだ。

小さな子供が段差を上りやすいように、低い位置に追加された手摺りなどの工夫が凝らされた階段を上り、二階へと踏み込んで照明のスイッチを入れた。

家族三人が川の字になって寝られるほど大きなベッドが置かれた寝室にも〈奴ら〉の姿はなく、清田はひとまず胸を撫で下ろした。

念の為、ベッド下とベランダも忘れずに確認するが、何ら危険はなかった。

「取り敢えず、これで全ての搜索は終わりましたね」

「ええ」

冴子も、先程危惧した事態が生起しなかったのに安心している様子で、肩の緊張を解いていた。

清田は何気なく左腕のプロトレックに目を落とした。

クリアリングを始めてから既に一時間以上が経過していた。日は完全に没しており、ベランダの向こうに広がる市街地に灯る明かりはまばらだった。

不意に、くう、と子犬の鳴き声のような音が聞こえた。

清田は何事かと背後を振り返ったが、腹部に手を当てながら恥じらいの表情を浮かべている冴子を認め、合点がいった。

「…すみません」

頬を羞恥に赤らめた冴子が、俯き加減に言った。

戦闘の際は冷徹な剣鬼と化す彼女だが、はにかんだその姿を見るとやはり年頃の少女なのだなど、清田は微笑ましく思った。

「いや、俺も腹が減って腹が減って、今にも倒れそうですよ」

清田も自分の腹をさすると、絶妙なタイミングで、腹の虫がぐうぐうと牛蛙のような鳴き声を発した。

お互いに顔を見合わせると、どちらともなく吹き出した。

和やかな雰囲気の中、くすくすと笑い合っていると、今日という一日ですり減らされた魂が少しだけ癒されるような気がした。

口元に手を当て、品の良い笑い方をする冴子は、美しいというよりも愛らしい少女だと感じた。

時には青白い炎のように、時には綻んだ花のように、千変万化の表情を見せる毒島冴子という少女は、もしも同年代であったならまさに高峰の存在だっただろう。

だが、そうやって傷付いた心を癒やす時間は唐突に終わった。

がたり、とクローゼットの扉が揺れた。

瞬時にして緊張を漲らせた清田が拳銃を素早く構え、冴子は動じる事なく滑るように移動し、その射線上から身体を外した。

その中に何が潜んでいるのかは分からないが、脅威である可能性が高いかもしれない。

冴子に目配せすると、彼女はクローゼットの横に位置してから取っ手に手を掛け、いつでも開かれる態勢を整えた。

トリチウムサイトをクローゼットに重ね、何が現れても躊躇なく銃弾を叩き込める覚悟を決めてから、清田は頷いた。

冴子がクローゼットから離れるように扉を開放すると同時に引き金の遊びを殺した。

サイトの向こうにいたのは、ぐったりと横たわる小さな女の子だっ

た。

## #1st day ⑩

トリチウムサイトが捉えているのは、小さな女の子だった。

清田は咄嗟に拳銃を下ろし、安全装置を掛けるとサプレッサーを着したままレッグホルスターに突っ込んだ。

「清田さん？」

冴子が訝しげに此方を見る。

清田は首を振り、クローゼットの中にいたものが脅威ではない事を伝えた。

「小さな女の子です。酷く消耗している…」

年の頃は小学校低学年程度だろうか。

女の子はタオルケットにくるまり、ぐったりとしていた。

清田はクローゼットに寄り、女の子をタオルケットごと抱きかかえた。

そして子猫のような軽さと、小枝のように華奢な身体に驚いた。触れれば壊してしまいそうな脆さが、腕に感じる重みから伝わってくる。

弱々しい鼓動と、熱病に浮かされているような体温から、女の子が相当弱っているのが分かった。

額に浮かぶ珠のような汗に、子供特有の繊細な髪の毛がぺたりと張り付いている。

余りにも弱り果てたその姿に心を痛め、清田はタクティカルグローブを脱いだ無骨な右手でその汗を拭ってやった。

「鞠川校医を呼んできましようか？」

状態の芳しくない女の子の様子を見て、冴子は深刻な面持ちで窺う。

「お願いします。熱を出しているみたいなので」

冴子は頷き、足早に部屋を出て静香を呼びに行った。

残された清田は、取り敢えず、女の子を抱き抱えたままその場に座り込んだ。

正直、小さな子供の扱いなど分かる筈もなかった。

自分よりも遙かに小さくて弱い存在に対する接し方の訓練なんてした事がない。

兎に角、この子を一人にする訳にもいかないというのは分かったが、どうすればいいのかが分からない。

冴子の手前、右往左往するのも大人としての示しがつかないというのが清田の本音だが、正直言ってこういうのは仮にも女性である彼女に任して、自分が静香を呼びに行けば良かったのではないかと思いつめていた。

清田が女の子を抱えたまま思考停止に陥っていると、やおら腕の中でむずがり、うつすらと目蓋を開けた。

寝起き直後の、そのぼんやりとした瞳と目が合い、清田は硬直した。自分がもしもこの女の子の立場だったら、間違いなく泣くだろう。目覚めてみると、両親ではなく、見ず知らずの、しかも厳つい姿の兵士に抱かれていたら恐慌状態に陥るのは目に見えている。

女の子が泣き出すのに備えて、清田はひしと身構えた。

しかし女の子は、泣き出す事も、むずがる事もなく、じつと清田の顔——とはいっても鉄帽とゴーグル、フェイスマスクで分からない——を、生気の抜けた虚ろな瞳で見上げるだけだった。

流石に状況が突拍子もなさすぎるから、理解できずに混乱しているのかもしれない。

ただ、泣かないでいてくれるのを祈り、清田もゴーグル越しに女の子を見詰めた。

両者は暫くの間、無言で見詰め合っていたが、やがて女の子がぺたぺたと小さな手で清田の顔に触れ、執拗にゴーグルをいじり始めた。女の子は依然として生気の抜けた、具合の悪そうな顔をしている。触れる手の力も殊更に弱く感じた。

「んん」

小さくうなるように声を漏らし、女の子はゴーグルを弄る。

ゴーグルを取れという事なのだろうか？——清田は素直に従い、ゴーグルを鉄帽の上に跳ね上げた。

「おじちゃん…誰？」

女の子の弱々しい問い掛けに、清田は窮した。自衛隊員と名乗ったところでこの子が理解してくれるとは思えない。

「えーとね。おじさんはね、君を助けにきたんだよ」

清田は精一杯の笑顔を作ったつもりだが、女の子は胡散臭そうな眼差し—というよりも全てに興味のない諦観を滲ませていた—を向けるだけだった。

「おじちゃんは、かなのこと食べない？」

女の子—佳奈は、蚊の鳴く声でそう訊ねた。

その言葉の意味に、清田は背筋に冷たいものが流れ落ちるのを感じた。

同時に、湧き上がった疑惑が間違いであってくれと祈らずにはいらなかった—子供特有の乳臭い体臭に混じって、微かに血の臭いを感じ取ったのを、気のせいだと思いたかった。

「…どうして、そんなことを聞くの？」

清田は努めて怖がらせないように、優しく言ったつもりだったが、言葉の震えを抑える事が出来なかった。

そう訊ねてから、佳奈の答えを聞くのが途轍もなく怖かったが、言ってしまった後で悔やんでも手遅れだ。

「かなね、隣のおじさんに食べられそうになったの」

佳奈は、ゆるゆるとタオルケットの中から右腕を持ち上げ、清田の眼前に翳した。

子供の細腕に巻かれた、血の滲んだ包帯が示すある一つの事実からはもはや逃れようがなかった。

この女の子は、噛まれている—座り込んだまま、深い闇の奥底に落下するような絶望が、清田の思考を支配する。

〈奴ら〉に噛まれたという事は、いずれこの女の子もそうなるという事に他ならない。

恐れていた事態が、こんなにも早く訪れるなんて—信じたくはない。信じたが、信じなくとも事実は変わらない。

「大丈夫だよ。おじさんはそんな事はしないよ」

清田は声の震えを抑える事が出来なかった。

落ち着け、落ち着けよ、落ち着けたら！—今の今まで堰止めていたものが決壊しそうで、声は半ば涙ぐんでいた。

どうしてなんだろう。

どうして、こんなに小さな子供がこんな目に遭わなければいけないのだろうか。

この子が一体何をしたのだろうか。

この子は、こんなにも酷い仕打ちを受けなければいけないほどの罪を犯したのだろうか。

だとすればそれは一体どんな罪だということか。

誰か教えてくれ。

この子や、罪なき善良な全ての人々が、どうして理不尽な運命に翻弄されなければいけないのか。

せめて人間らしく死ぬことも許されないのか？

誰が決めたんだ。

死して尚、その尊厳を冒瀆されなければいけないと誰が決めたんだ

!!

清田の胸中では様々な想いが渦巻き、そして現状を変える事の出来ない己の無力さに、涙が零れそうになった。

泣くな。泣くんじゃない。泣いてどうなる？ どうにもならない

だろう—涙を流すのは無駄な感傷だ。

涙を流したところで、何の役にも立たない。

泣くぐらいなら、何かマシな事を考えろ。

この子は、いずれへ奴らになる—いつ、この女の子が噛まれたのかは分からないが、発症するまでに掛かる時間は個人差がある事が判明していた。

大抵の者が噛まれてから直ぐに高熱を発し、吐血と共にやがて死に至る。そして再び蘇り、生者の血肉を求める屍食鬼として活動を始めるのだが、中には前述した症状を数時間も繰り返してから死に至るケースも確認されていた。

それは稀であり、もしかしたらそのような個人には何らかの特別な

免疫機構が備わっていて、殺人病に対する耐性を発揮するのではないかと考えられていたが、まだ治療方法や確証すらない状態なので万に一つの望みもない。

もしかしたら、この女の子は特別で、噛まれても発症しないのかもしれない――馬鹿げた妄想を抱いた清田だったが、映画やドラマのようにご都合的な展開などある筈もなく、すぐにその望みは打ち壊された。

「けほ、けほ」

弱々しく、苦しそうに佳奈が咳き込むと、少量だが吐血していた。

ひゅー、ひゅー、と喘息のように息苦しく呼吸を続ける幼子の姿を見て、何もしてやれない己に怒りすら抱いた。

「おじちゃん……とても、苦しいよう」

喘ぐように呼吸をする佳奈の手を握り、清田はどうにかして言葉を絞り出した。

「大丈夫だよ。すぐにお医者さんが来るからね。そしたら、すぐ良くなるよ」

静香が来たところで、弱り果てていく子供の命を救うどころか、楽にしてやる事も出来はしないだろう。

この子は死ぬ。

今すぐにも死んでしまう。

それは確定的に明らかで、誰にも変える事は出来ない。

この子の小さな命は、その灯火が尽きる最後の時まで、耐え難い苦痛に満たされているのだ。

何という命の終わり方だ。

せめてもの情けは欠片も存在しないのか。

楽に逝く事すらは出来ないのか――否、*“逝く”*のではない。

誰かが*“逝かせて”*やらねばならないのだ

その誰かとは――自分を於いて他にいる訳がないだろう。

まさか、静香や冴子に介錯をさせる訳にもいくまい。

これは、俺がやらねばいけない事なのだ――清田は今すぐにも逃げ出したいくなる気持ちを堪え、そう決断した。



幼子の未発達な体に対する銃火器類の使用は余りにも酷い損傷を与えるだろうから、手段は自然と素手か刃物に限定されるだろう。

それらの手段は同じ結果を齎すが、過剰な威力の銃弾で惨たらしく引き裂くのと、必要最小限の力で安らかにしてやるのでは大きく異なるだろう。

素手と刃物で苦しむ間もなく命を奪う方法はいくらでもあるが、それには大きな抵抗があった。

銃で撃ち殺したとしても、感じるのは指先の引き金のみである。

素手やナイフは、温かな血が流れる相手の肉体を自らの手で傷つけ、その全てを感じ、やがて一切合切を奪い去るのだ。

頸を折れば若木を折る湿った感触を、ナイフで刺せば硬軟入り混じる肉の感触を手に覚えるだろう。

どれもこれもおぞましいものだが、清田は数ある殺害方法の中から、ナイフによる中枢神経の破壊を選択した。それが一番苦しみがなく、かつ出血も少ない。

まさに眠るように死ねるだろう——こんなに小さな子供の首を絞め、喉を抉り潰すという真似は清田にはできそうになかった。

だが、銃剣やナイフ等といった刃物は、自然に使用者の身体の延長、つまり付属物になる。そうして身体の付属物で相手を刺し貫くのは、幾らか性的な意味合いを帯びた行為となるのである。

そんな方法で相手を殺す事に対して、人間は強烈な嫌悪感を覚える。それは清田とて例外ではない。

冷たく鋭い刃が、温かな血肉を切り裂いて自らに押し入る様子は、想像するだにおぞましい。それは強姦されるのと同等かそれ以上の嫌悪感を催すだろう。

腕の中の幼女は、段々と弱々しくなっていく。

清田を見上げるつぶらな瞳に宿る生命の光が、今にも消えそうだった。

俺はこれから、今にも死んでしまいそうな幼子を、強姦するようなものではないか——それらしい理由を付けても、これから実行しようという行為の真実は前述した通りである。

安らかにしてやるといっても、結局、行われるのは殺人である。その行為に貴賤はない。

「かなね、ポカリが飲みたい」

腕の中で佳奈が、最後の望みにしては余りにも素朴な内容を口にす  
る。

「おじさんが持つてきてあげるから。お医者さんからお薬をもらった  
ら、飲んで良いからね」

掠れるような声で呟く佳奈に、清田は唇を戦慄かせて応じた。

出来るなら、今すぐにでもポカリスエットを取りに行つてやりた  
い。

だが、そうしている間にこの子は間違いなく死ぬ——結局、その願  
いすら叶えてやれそうにない自分に腹が立った。

清田は抱え方を変え、右腕全体で佳奈の尻から背中を支え、抱つこ  
するような形にした。

佳奈は、清田の左肩に顔を俯けるように埋めるような体勢となり、  
彼女の盆の窪が露出した——普段は頭蓋骨と頸椎に覆われているそこ  
は、頭を俯けるようにする事で骨に覆われていない部分が生じ、延髄  
を守るものが軟組織のみとなる。

延髄は脳幹の一部であり、生命維持を司っている。ここに重大な損  
傷を受ければ重傷は確実であり、破壊されれば死は免れない。

清田は、佳奈の抱き方を変える際、左手で左太股のレッグパネルに  
固定してある鞘から音を立てないように、大振りなコンバットナイフ  
を抜いていた。

「ほかに何か食べたいものはある？」

禍々しい凶器を握りながら、こんな事を幼子に訊ねる異常な状況  
に、清田は狂ってしまった。

いつそ狂つてすべてを投げ出せたらどんなに楽だろうか——しかし  
それは出来ない。

己を取り巻く全てを打ち捨てられるほど、清田は強い人間ではな  
かった。

「ママの、卵焼き」

佳奈はもはやぼんやりとした夢見心地で、清田の耳元で囁いた。その言葉を聞いた瞬間、清田の時は止まった。

偶然にも、清田も母親が作る卵焼きが好きだった。

思わず、味蕾に懐かしい味が甦る――母親は元々卵焼きを作るのが得意ではなかったが、幼い清田の為に何度も失敗を重ね、遂には寿司屋の卵焼きにも勝るとも劣らない、美味しいものを作ってくれた。

甘く、しつとりとやわらかな優しい味は、まさに母親の味だった。

高校生の頃に、弁当に甘い卵焼きを入れないで欲しいと言った事が何故か思い起こされ、その時の母の顔も脳裏に蘇った。

違うんだ、お母さん。俺は、甘い卵焼きじゃおかずにならないだけで、お母さんの卵焼きが嫌いになった訳じゃないんだよ――自分のその何気ない一言で母親を傷つけてしまった事を、今になって酷く後悔していた。

「お、俺も、卵焼き、す、す、好きだよ……」

佳奈の一言が、清田武三等陸曹を、清田武という一個人に戻してしまった。

左手に握った白刃の切っ先は行き場を失い、今にも床に取り落としそうだった。

そもそも、介錯してやる必要はあるのだろうか？――今になってそのような疑念が、清田の胸中に生まれた。

それは単に、自分の身勝手な自己満足に過ぎないのではないか？

この幼子が、自らの死を望んでいる訳でもなく、苦しみに満ちていても最後まで生を全うしたいというのなら、それは甚だお節介な行為に他ならない。

だが、分別のある大人でも難しいその判断を、十年も生きていない子供が下せるというのか？――実際、このような思考のループは一種の逃避に過ぎないのは自覚していた。

事実、介錯をせず、このまま天命に任せて佳奈を死なせ、その後で〈奴ら〉と化すのを黙って見過ごすという選択肢も無いわけではない。そうすれば、自らの手を汚さず、自分が傷つく事はない。

この幼子を死から救う事が出来ないのは確定しており、わざわざ

人間らしく”という尤もらしい自己満足を達成する為に、自らの手を血に染める必要もないだろう。

そうとも。この子を介錯しなければいけない必要性が何処にあるのだろう―いや、そんな事は考えなくてもわかっている。

選択肢はたった一つしかあり得ない。

それは最初から決まっていたのだ。

俺に逃避という選択肢はない―仮にこのまま死なせ、この部屋に閉じこめたとしても、へ奴ら〱となって蘇った小さな女の子の死体が、何時までも生命の法則に反してまで存在するのを許せるのだろうか。

喜びも怒りも哀しみも楽しみもなく、飢餓感に突き動かされるままに徘徊するその姿は、果たして苦痛に満ちた生命を全うした代価に見合うのだろうか。

この子を安らかに逝かせてやる事と、苦痛のままに死なせて徘徊させるのでは、どちらが為になるのだろうか。

死という結果を変えられないのであれば、その結末の後に待ち受ける運命を考えれば、自ずと答えは初めから用意されていると知るべきだ。

清田は再びナイフを握り直し、静かに呼吸した。

「かなね、ママとパパに会いたいの」

幼子の眠たげな響きの声が、脳にするりと入り込む。

「ママとパパに、早く、会いたいの」

弱々しい力で、ぎゅう、と清田の首に抱きつく。

「おじちゃん…早く、会いたいよう」

懇願するようなその声から、清田は全てを察した。

この子は自身の逃れられない死も、両親の死も、全て知っているのだ。

ただ、上手く伝えられるほど成長していないだけであって、己の最後の身の振り方などとうの昔に覚悟していたのだ。

こんなに小さな子供が、その辛過ぎる決断を受け入れているという―その事実には、清田は、己の弱さを再認識した。

左手のナイフの握りを確かめ、ゆるゆると持ち上げる。切っ先は、

佳奈の盆の窪に向けていた。

呼吸が荒くなりそうになるが、失敗する訳にはいかない。悲しみと苦しみで暴れる動悸も抑え、表面上の平静は保った。

「おじちゃん…ありがとう」

佳奈の安らいだ響きの言葉に、清田は、絶叫したかった。

俺は感謝されるような人間じゃない―反射的に下された命令が、神経を伝って、腕の筋肉の収縮と伸縮を実行させていた。

もはや後戻りは出来なかった。

研ぎ澄まされた白刃は、幼子の軟組織に一切の抵抗を覚えることなく、まるでバターのように滑らかに刀身を埋めた。

握り締めた柄から伝わるのはおぞましい感触だった。ゴリゴリと未発達組織を切り裂く感覚が、佳奈と接する肉体から伝わってきた。

それは自身のペニスを、彼女の脳に挿入するかのごとく、冒瀆的で穢らわしい行為であり、思わず嘔吐感がこみ上げてきた。

だが、此処で中途半端にしましては、無用な苦しみを与えるだけ―胃を身悶えさせながら、清田は白刃を幼子の脳へと突き進めていった。

ナイフの切っ先は、延髄ごと脳幹を正確に刺し貫き、苦しみを欠片も与えることなく、佳奈に安らかな最後を与えた。

肉体に異物が挿入される感覚から反射的に、最後の時を迎えた佳奈が、清田の襟をぎゅっと握り締める。

その肉体にもはや魂は宿っておらず、物理的な反射行為に過ぎないのだが、清田にはそれが、本当は生きる事を望んでいた佳奈のささやかな抵抗のように思えた。

小さな体が強張り、やがて、筋肉の弛緩と同時に脱力し、息を吐き出すというよりも、その肺が萎んで空気が抜けていった。

ぐったりと生気の抜けた幼子の肉体は軽く感じた―清田は放心状態のまま、佳奈の後頭部からナイフを引き抜き、取り落とした。

僅かに血と体組織の付着したナイフが、フローリングの床に突き刺さる。

刀身から伝い落ちる幼子の無垢な血が、清田から永遠に魂の純真を奪い去った瞬間だった。

泣くことも叫ぶことも、何もする気も起きなかった。

必要に迫られたとはいえ、子供を殺害してしまったという事実が、清田に心身喪失を齎すには充分すぎた。

敵を殺す為の訓練を施されているとはいえ、彼は子供を殺す為の訓練は欠片も施されていなかった。

その真実の前には、長く積み重ねてきた殺人を合理化するプロセスも、何ら作用しなかった。

＋＋＋

冴子は焦っていた。

早くあの場にいかなければ、何か取り返しのつかないことが起きるのではないかと――何故か学園での「喪失」が思い起こされ、胸に鉛のような重みを感じた。

「鞠川校医、こっちだ」

冴子は早足で歩き、静香を先導した。

「ちよつと毒島さん。慌てないで」

その後ろに続く静香は、妙に焦っている冴子を窘めた。

二人は土足で上がり込み、階段を上がって幼子を発見した部屋に足を踏み入れた。

冴子は、異質な雰囲気既に既視感を覚えていた。

つい先ほどまで部屋の明かりがっていたのに、今は消されている。

加えて、ベランダから差し込む町の灯りに浮かび上がる、彫像が床の上に出現していたからだ。

彫像はゴテゴテとした物々しいもので、床に座り込んでいる――それが誰であるのかは、考えなくても分かった。

「清田さん……?」

明かりの消えた部屋の中、微動だにしない清田の姿に、冴子は背筋

に薄ら寒いものを感じた。

それは静香も同様であり、彼女の背後でどうしていいのかわからずに固まっていた。

取り敢えず、灯りをつけねば―事態の把握に努める為、冴子は照明のスイッチを入れた。

ぱつと照らし出されるその光景に、二人は絶句した。

床に座り込んでいる清田は、タオルケットに包まれた物を抱き締めたまま、呆然と虚空を見つめていた。

タオルケットに包まれた、血を滲ませた幼児ぐらいの人型のそれが何であるのかを、二人は直接目で確かめなくても理解できた。

遅かったか―冴子は苦渋に満ちた表情で、彼の選択した行動に胸を痛めた。

静香はただ口元を手で抑え、衝撃的な結末を傍観するしかなかった。

「清田さん」

冴子は座り込む清田に歩み寄り、その直ぐ傍に膝を折り敷いた。

清田は傍らの冴子に構わず、微動だにしない―と思われていたが、音もなく、彼女の方を振り向いた。

冴子は息を呑んだ。

まるで先程とは別人のように変わり果てたその瞳は、深く沈んでおり、焦点が定まっていなかった。

「きょよ…」

冴子が言葉を発しようとする、清田が片手を上げて制止した。

その手は麻薬の切れた中毒患者のように病的に震えていたが、抑えきれない感情の発露が身体に現れているが故だった。

「何も、言わないで…」

震える声は、まるで何かに怯える子供のようで、それが痛々しくて冴子は思わず目を伏せた。

あんなにも強く、逞しく、全てを薙ぎ倒して進む重戦車のような男が、今は完全に小さく萎れている。

冴子にはそんな清田の姿が衝撃的であると同時に、彼の選択した判

断はこの場にあつては限りなく人間的で、自らが傷つくのを厭わない献身的な行為だと思つた。

清田武という男は、本当ならば兵士には向いていないほど優しい男なのかもしれない――何となくだが、冴子にはその精神性が垣間見えたような気がした。

「この事は……」

清田は震えを抑えきれない手で、ゴーグルを目許に戻した。

「もうケリがつきました……ただ」

そして一拍置いてから、清田は亡骸を抱えて立ち上がった。

「俺には、悲しみを感じる資格はないという事です」

その声は抑揚に欠け、感情を無理矢理押さえつけているのが感じ取れた。

清田は幼子の亡骸を抱えたまま、その場を後にした。

出て行くその背中に向かって、静香と冴子は掛ける言葉が見つからなかった。

†††

腕に抱えた亡骸は殊更に軽く感じた。

佳奈という幼子の魂は消失し、その抜け殻である肉体だけが遺された。

同時に、清田の魂の純潔も失われ、彼は子供殺しという事実を一生背負っていかなければならなかった。

俺は理由は何であれ、子供を殺した――その事実が、彼の心に重くのし掛かる。

頭では、この行いが必要だったのは理解している。

自らが汚れるのを恐れて、幼子の死すら冒流する結末を看過していたとしても、同様な思いに駆られていただろう。

どっちに転んでも、精神の十字架を背負う事は確定していたのだ。

だが、必要な事だったと自らに言い聞かせたところで、子供殺しの事実は変わらない。



無抵抗な子供を、ただの弱り果てた子供を、最後にポカリと母親の卵焼きが食べたいと望んだ子供を、ナイフで脳をかき混ぜて殺した。何をしても許されるものではないだろう。甘んじて全てを受け入れる準備はできていた。

清田は亡骸を抱えたまま、庭に出た。

外気は纏わりつくように重く、橋の方からは止む事のない喧騒が聞こえてきた―風に乗って、人ならざる犠牲者の呻きも。

今、こうしている間にも、罪なき善良な人々が死に、佳奈と同じような子供がいるのだろう。

それらに対して何もしてやれるものでもないというのは承知している。だが、歯痒い気持ちは変わらなかった。

おいおい。お前はまだ正義漢ぶっているのか？―皮肉たつぷりに己を嘲笑う。

歯痒い気持ちになっているつもりだろうか？止めるよ、そうやって善人の振りして、本当は違うくせに―何が違うというのだと、清田は自らに問い掛ける。

今日一日で殺した連中に対して、欠片も罪悪を感じない所か、心の片隅では習い覚えた技術を正確に駆動させる事が出来たのを、喜んでいたというのに―それはその子も例外ではないだろうか？

正確な角度と力加減で瞬時に絶命させた事に対して安堵すると同時に、微かな達成感と喜びを覚えていた筈だ―それは確かに一理あると、清田は素直に認めた。

もし失敗して、無用に苦しめてしまったらどうしようという恐れはあった。

失敗して、自分の所為でもがき苦しみなから死ぬ子供を目の当たりにしたら、恐らく二度と武器を持つとうという気概は沸き起こらなかっただろう。

今の清田は、十分にそうする必要―彼が武器を手に血路を開くのを望む人―があると認識している上で、再び自信を持って戦う気力がある事を、喜んでいた。

それが贖罪の為なのか、自己満足の為なのかはさておき―彼は、ま

だ逃げるつもりはなかった。

ひとまず、清田は随分と軽くなつた小さな亡骸をそつと地面に横たえ、庭の片隅に置かれていた物置へと足を向けた。

物置の引き戸を開け、目当ての物を探し出し、再び亡骸の傍へと戻った。

手にしたシャベルを地面に突き立て、足で押し込み、土を搦り上げる。

銃火器と戦闘装備を身に付けたままなので、酷く動き辛く、途端に汗も吹き出てきたが、清田は構わず地面の掘削を続けた。

直ぐに子供一人を埋めるには十分な広さと深さの穴を掘り終わったが、清田は思い直し、再び掘り続けた。

身に着けている衣服という衣服が、汗を吸って途轍もなく重く感じる。

流石にこのままでは作業効率が悪いと気がつき、清田は上着と戦闘装備の全てを脱ぎ去り、一心不乱に土を掻き出し続けた。

滴となつて鼻先からぽたぽたと汗が伝い落ちる。

春先とはいえ夜は冷え込むというのに、清田の広い背中からは湯気が出ていた。

滝のように流れ落ちる汗を拭う為、清田は作業の手を一旦休め、難燃繊維のシャツの袖で顔を擦った。

だが、拭つても拭つても、汗は止まらない―いつの間にか、目から零れ落ちる涙もそれに加わった。

顔面の穴という穴から液体を垂れ流し、嗚咽を漏らしながら、清田は半狂乱になつて穴を掘り続けた。

無理にでも体を動かし続けなければ、今すぐにでも潰れてしまいうだつた。

立ち止まっていると、考えたくもない事を考えてしまうのが、堪らなく怖かった。

冴子の目には、狂ったように墓穴を掘り続ける清田の姿が痛ましく映った。

だが、それは、方法は違えど、冴子も身に覚えがあるものだった。彼女の場合は、木剣を振るい続け、ただの剣鬼へと変貌する事である事実から逃避していた。

それはこの場にあつては、唯一、静香が知るのみだが―今は、それから逃避する為に、敢えて彼と同じ事をするのも良いだろう。

冴子は踵を返し、ベランダを後にしようとした。

「毒島さん。何処へ行くの？」

だが、その背に静香からの問いが投げかけられる。

「決まっているだろう」

振り返る事なく冴子は答えた。

「男の誇り（プライド）を守ってやる事こそが、女たるの矜持（スタイル）なのだ」

冴子は木剣を置くと、ベッドからシーツを剥ぎ取り、階段を下りて廊下に出て、手近な死体―彼女よりも小柄な女性―にそれを被せた。

「んん…い」

そして死体の血に汚れるのも構わず、ぐつたりと重いそれを渾身の力を込めて抱き上げ、ふらふらと覚束無い足取りで庭へと向かった。

幾ら冴子が平均的な高校生女子よりも背が高く、常日頃から心身を鍛えていようとも、生気の抜けた死体を抱え運ぶのは大変な重労働だった。

だが、直ぐにその重みが半分となった―見れば、静香が死体を抱え運ぶのを手伝ってくれた。

「私だって大人なのよ？ 頼ってくれてもいいんじゃないかしら？」

そして、せーのと息を合わせ、二人は庭へ出た。

†††

絶対此処にある筈だ…！

耕太は、頑丈なロッカーの扉にボールを差し込み、渾身の力を込め

てこじ開けようと奮闘していた。

静香の友人宅で休息を取る為の準備を終え、清田と冴子が戻ってくる間、耕太は色々と物色していた。

自衛隊仕様のメガクルーザー、つまりは高機動車を所有している人物がただ者である筈もなく、何か役に立つものがあるのではないかと二階の寝室を焦っている、無数の実弾が保管されているロッカーを発見したのだ。

そしてロッカーはもう一つあり、それには鍵が掛かっていた―耕太からすれば宝箱のようなそのロッカーは、何としても開けて中身を確かめる価値があった。

「あ、あがああ…!!!」

だが、悲しいかな、日頃の運動不足が祟ってか、はたまた今日という一日で体力を使い果たしたのか、耕太は背中の筋肉を釣らせて床の上で悶え苦しんだ。

筋肉が限界以上に突っ張るそのなんとも形容し難い激痛に喘ぎながら、やはり一人では無謀で、清田の力を借りれば良かったと後悔していた。

そうして彼がのたうち回っていると、外から物音が聞こえてきた。規則的なそれは、ざく、ざく、と土を掘るような音であり、耕太は何事かとベランダの外に出て確かめた。

庭では、見慣れぬ大柄な青年が地面に穴を掘っていた。

耕太は暫くしてその人物が清田である事に気がついた。今の彼は素顔を晒しており、戦闘装備も外した身軽な格好をしていた。

戦闘服の上着も脱いでおり、汗を吸い込んだシャツが鍛え抜かれた上半身に纏わりつき、隆起した筋肉の陰影を浮かび上がらせていた。

清田は黙々と、何処からか見つけてきたシャベルで穴を掘っていた。

一体何をしているのだろうか―耕太のその疑問はすぐに解決した。見れば、白いシートに包まれたものが、清田の直ぐ傍に並べられていた。それは人型をしており、中身が何であるかの察しがついた。

数は全部で十一内ひとつは、明らかに他よりも小さい―あり、清田

はそれら全てを埋める為の穴を掘っていた。

こんな状況下で、彼は死者を埋葬しようというのだろうか―見れば清田だけではなく、耕太を除いた全員が死者を弔う為に働いていた。

耕太は皆と合流するべく、慌てて外に出た。

†††

「す、すみませーん！」

耕太が息を切らしながら作業に合流する。

「遅いわよデブチン！ ほら、さっさと掘る！」

清田と共に何時の間にかシャベルを振るっていた沙耶が、耕太に別のシャベルを突き出すように渡した。

シャベルを受け取った耕太は、清田の横で掘削に従事した。

既に全員が泥や血にまみれていたもので、耕太は身綺麗な自分が恥ずかしくて、がむしやらに動き回った。

ざくざくと土を掘る音、声ならぬ亡者の呻き、大橋からの喧騒が聞こえ、奇妙な雰囲気の中で全員が同じ作業に没頭していた。

恐らく、全員がある種の連帯感を覚えただろう―やがて人を埋めるには十分な広さと深さの穴を掘り終わり、二人一組となって死者を一人ずつ安置していった。

最後に一際小さな亡骸は、清田自らが抱え上げ、そつと置いた。

そして全員で土を掛けていったが、土を一掬いごと掛ける度に清田は顔を辛そうに歪めているのを冴子は見逃さなかった。

埋葬し終わり、最後に京子が見つけてきた線香を焚き、全員で手を合わせ、死者の冥福を祈った。

それは自己満足に過ぎない行為かもしれないが、まるで当然のように死が我が物顔で闊歩する世界の中にあっては、人間が人間らしくある為の必要な儀式だった。

清田は、いまだ安らかな眠りにつく事の出来ない、哀れな死者達に向けても厚く手を合わせ、祈りを捧げた。

血と泥にまみれた清田の戦闘服は、汗を吸って重くなっていた。

空挺隊員に支給される戦闘服は通常のものとは細部が異なり、空挺降下という任務内容に適した作りとなっている。

迷彩服Ⅱ型空挺用に於ける一般との相違点は、各ポケットタブや袖口の止め方がスナップボタン形式に改められており、上衣については左袖のペン差しに耳栓入れの追加、前合わせ部はボタンとファスナーの併用、ウエスト部は紐で絞り込める点であり、ズボンについては裾に小ポケットの追加、臀部の生地が二重となっている。

そして若干、通常のもの比べると細身に作られているという特徴があり、空挺団は一般部隊よりも体格の良い隊員が多数いるのでワンサイズ大きめのを着用している事が多い。

清田は高い秘匿性を要求される特殊作戦群に所属する以上、訓練や任務で着用する戦闘服は右胸に偽の名札を貼り付けるか全くの名無しだが、左胸には自由降下徽章と空挺レンジャー徽章、そして冬季遊撃徽章が燦然と輝いていた。

同業者である陸上自衛隊員からすれば、それらの徽章は尊敬の眼差しで見られるものだが、生憎と民間人である京子にはその意味を知りようがなかった。

ただ、京子にも、なんとなくだが、その三つの徽章を保有する凄まじさは伝わり、彼が流した血と汗の量は常人の及ばぬ域に達しているのが推察できた。

京子は、洗濯籠に放り込まれていた、汗に濡れた清田の戦闘服を手にして眺めながら、感慨に耽っていた。

今日、地獄と化した学園で出会ったばかりだというのに、彼との結び付きがこの一日でたえようもなく強くなったように思われた。

職員室の机の下で震えていると、僅かな物音も立てずに現れた彼に発見されたのが出会いの始まりである―あの時ほど、恐怖に顔をひきつらせた事は無かった。

それから、常に彼が先頭を進み、立ち塞がる障害の全ては悉く薙

ぎ倒していった。類い希なる勇敢さと行動力を示し、常に第一に無力な自分達の為に身を粉にしてくれた。

その強くて大きな彼が、涙と鼻水と汗を垂らしながら庭に穴を掘っている姿を見た時は、流石に衝撃的であると同時に安堵した。

清田武という男は、まるで無敵の鋼鉄艦のように揺るがない存在だと思っていたが、情けなく嗚咽を漏らす様子を見て、彼も同じ弱味を持つた人間であると知り、より親しみを感じた。

彼もまた、この異常事態に心を酷く痛めているのだ。

でなければ、穴を掘って犠牲者を埋葬してやろうとはしないだろう。

私は、そんなこと少しも考えなかった——今日という一日を無事に乗り切れた事に安堵していた京子は、こんな状況下でも他者を思い遣れる清田と自身の矮小さを比べ、己を強く恥じた。

だが、余りにも他者を優先し過ぎるその姿勢には危うさを感じたのも事実だった。

確かに、自衛隊員である彼はこの非常事態にあつては課せられた使命を果たす責任があり、義務がある。

己を削り、他人を救わねばならない。

その事を承知で自衛隊という組織に入ったからには、今更泣き言などとは言っていられないのかもしれない。

しかし、それでも、己の使命に忠実で真っ直ぐな若者が、苦痛に喘ぎ、魂が引き裂かれんほどの悲しみに暮れる姿を目の当たりにすれば、放っておけないと思うのが人情だろう。

だから、少しでもそんな彼の為に何かをしてやりたくて、京子はこうして彼の汚れた衣服を洗おうとして——といっても、洗濯機に放り込んでボタンを押すだけだが——脱衣場にいた。

目を遣ると、曇りガラスの向こうでは、清田が身体に染み付いた血と汗と硝煙を落としている。それは、ガラス越しの朧気な輪郭と身体をタオルで擦る音で確認できた。

思わず、あの逞しい肉体を脳裏に描いてしまい、京子は己の煩惱塗れの思考に恥じた。

別に私は邪なことは——そう心の中で自らに言い聞かせるように眩き、手に持つている彼の戦闘服に再び視線を戻した。

清田の戦闘服は、お世辞にも良い匂いを発しているとは言えなかった。

しかし、この匂いは嫌いではない。

京子は卓球部の顧問を務めており、放課後は教え子と共に汗を流している。

若さ溢れる健全な青少年がスポーツに打ち込んで流す汗は尊く、美しいものだと彼女は考えていた。

それはまさしく人間賛歌であり、父母から授けられた健康な肉体を鍛え上げる事は正しき喜びであるのは間違いない。

尊く、正しく、美しい行為によつて生じた汗を、どうして汚いと言えようか——それは清田の行為にもそっくり当てはまった。

だが、京子は、そう考える一方で、何も全ては綺麗事で片づけられない自分の感情を素直に認めていた。

正直に述べると、年下の若く逞しい男性が、命懸けで守ってくれるという映画やドラマでしか見れないようなシチュエーションに少しばかりときめきを覚えていた。

恋愛をするなら、勿論、同年代か若干年上の落ち着いた男性が好みであるのは変わりはない。

だが、女だつて若い男が好きである。それは男が若い女が好きであるのと変わらない。

京子も、恋愛を抜きにして、若くて逞しくて、強くて優しい男が好きなのだ。

初めて清田の素顔を見た時、従順で優しい大型犬のようだと感じており、不覚にも「ペット」にしたいと思つてしまった。

昨今では経済力のある三十路女性が「ペット」を飼う感覚で若い男を囲うのが密かなブームとなっている。

流星に教師という聖職者である以上、京子はそのような不埒な事をするほど軽率ではない。

正確に言うならば、職業上、「若い男」と密に接する場面が多い為、



そのような欲求は充分に満たされているというべきか。

だが、この異常な状況と、今まで接してきた「若い男」にはない強さと逞しさには、強く惹かれたのも間違いない。

同時に、先程見せた弱々しさがギャップとなって、母性本能も撥られてしまった。

白状すると、強く逞しいけれど何処か放っておけないと年下男性の体臭を嗅いで発情した事実は否定しない。

今だって、彼の汗を吸った戦闘服の匂いを嗅ぐと、興奮のあまり自身の「女の部分」が熱く濡れそぼるかのようだった。

京子はこれがはしたない事だとは承知しているが、こういった状況下だからこそ慰めを欲しているのを認めていた。

少しだけ、ほんの少しだけ。そうすれば明日も頑張れるから――下世話な欲望をそれらしく飾り立てて正当化しようとする己の浅ましさに辟易としつつ、京子は清田の戦闘服を抱き締め、顔を埋めた。

胸を満たす、若い男の体臭は、まるで力強い父親に守られているかのような安心感を齎した――その時である。

「誰かそこにいますか？」

薄いガラス越しに、風呂場で反響した清田の声が聞こえた。

慌てて京子は、彼の戦闘服から顔を離し、洗濯籠に戻した。

心拍数はかつてないほどに上昇していたが、京子は取り繕うように平静を装った声音で応じた。

「あ、林です。清田さん、こちらの服は洗っても大丈夫かしら？」

全くいつも通りの自分を演じられたのを、京子は褒めてやりたかった。

「わざわざすみません。お願いします」

まさか自分の戦闘服の臭いを嗅がれているとは露とも知らず、清田は素直に頼んだ。

「わかりました」

何も知らない彼に罪悪感を覚えながら、京子は彼の衣服を洗濯機に放り込でスイッチを押し、若干名残惜しげに退散した。

ボデイソープを染み込ませたタオルで何度擦っても、手の汚れが落ちた気がしなかった。

それはもはや魂にこびり付いた罪悪の染みであり、この先の人生の中で永遠に拭い去る事は出来はしないだろう。

清田はじつと己の両手を見た。

右手には常に銃の握把を握り締め、人差し指は引き金に添えられていた。

初めて生きた人間に銃を向けた時―正確には対戦車ロケットランチャーだが―、欠片も躊躇いがなかった。

それは相手がそうされても仕方がなかった輩であり、同情を挟む余地はなかった。

その後の市街地での暴徒集団も同様である。こちらの警告に従わず、明確に危害を加えようとしてきた。

だから皆殺しにしてやった。

頭と胸に鉛玉を撃ち込んでやった。

いい気味だ、ざまあみろ、くたばりやがれ悪党ども！―嗜虐的な喜びを心の奥底で感じたのを否定する気はなかった。

習い覚えた技が正しく駆動し、効果的な威力を発揮する様を目の当たりにすれば、誰だって達成感を覚えるだろう。

それは練習を重ねたアスリートが、試合でいい結果を出せたのを喜ぶのと何ら変わりはない。

自分が苦勞して積み重ねてきた努力が実を結ぶのを喜ぶのは正常だ。

そうだ。俺は間違っではない―たとえそれが、必要に迫られて行っただとはいえ、殺人である事には変わりはない。

だが、果たして、あの子にやった事も正しいと言えるのだろうか―左手には、まだあの感触が残っている。

思い出したくなくても、勝手にあの恐ろしくおぞましい記憶が、生々しい感触と共に再生される。

握り締めたナイフの柄から感じたのは、硬軟入り交じる幼子の未発達な組織を裂く感触だった。

薄い皮膚、柔らかな肉、弾力のある軟骨を一緒にたに切り裂き、脳髓を犯して殺した。

それは幼子の肉体を凌辱しているかのような強烈な嫌悪感を伴った行為だったが、途中で止める訳にもいかず、その魂の抜けた肉体の痙攣が収まるまで抱き締めるしかなかった。

全てが終わった時、自身も抜け殻のようになってしまった。

幼子の魂と一緒に、己の魂の純潔も失ってしまった。

もう、戻れない。

何もかもが同じように感じる事はない。

人生を全うするその瞬間まで、俺はこの重荷に悩まされるのだろう――清田は重い疲労と疼痛を覚えながら、身体に纏わりつく泡を熱いシャワーで流した。

ふと、人の気配を感じ、ガラス戸の方を振り返った。

曇りガラスの向こうに人影が見えたので、清田は声を掛けた。

「誰かそこにいますか？」

ほっそりとしたシルエツトから、耕太以外の人間であるのは察しがついた。

「あ、林です。清田さん、こちらの服は洗っても大丈夫かしら？」

ガラス戸の向こうで、京子が窺うように言った。

「わざわざすみません。お願いします」

彼女のその何気ない心遣いが嬉しくて、清田は洗濯を頼んだ。

「わかりました」

了解の言葉とちよつとした物音の後、脱衣場から京子が出て行った。

清田は再び、正面に向き直り、風呂場に備え付けられている鏡に映る己の姿を見た。

右胸に刻みつけられた痣は、まるで苦悶の表情を浮かべる人面瘡のようであり、今日一日で殺した死者の怨念が宿っているかのようだった。

いや、怨念は俺そのものか―暗い情念を宿した瞳の男が、鏡の中から清田を睨んでいた。

＋＋＋

風呂から上がり、他の世帯で見つけた男物のスウェットに着替えたが、大柄な体格と発達した筋肉に鎧われた清田では辛うじて入るサイズだった。

鍛え込まれた胸筋が今にも布地を破らんばかりで、競輪選手の如き太腿もぱつぱつに張っている。

おまけにスウェットは寸足らずで、手足がつんつるてんとなっていた。

戦闘服が乾くまでの辛抱だ―特に清田は風体を気にする事なく、生存者達の様子を見ようとりビングへ足を向けた。

死者の埋葬を終えた一行は、思い思いの時間を過ごしていた。

清田はそれに関しては何も言わず、各人に自由に過ごさせる事にしていった。

ただの素人が始まりから終わりまで、親しくもない誰かの指示によつて拘束されるといふのはかなりのストレスが溜まるものだ。

それが生き残る為に必要だとはいえ、本人達は自覚している以上の鬱憤を抱えてしまいうだろう。

ストレスを発散できる環境があるならば、今のうちに存分に利用するべきだ。

明日は、今のように寛げるとは限らないのだから。

清田がリビングに足を踏み入れると、そこに人影はなく、代わりにキッチンから和気藹々とした女性達の声が聞こえた。

キッチンを覗くと、そこには沙耶を除いた女性陣がおり、和やかな雰囲気の中で料理に勤しんでいた。

料理をする女性というのは、やはり心を穏やかにしてくれる麗しい存在だと清田は思った。

昨今では料理上手の男性が持て囃されているが、古来から台所は女

性の仕事場であり、男はそこでは彼女らに素直に従うしかない。

人類が獲物を求めて山野を駆けずり回った遙か太古から、男女の仕事はそれぞれの性別に見合ったものと決まっていた。

男は外で働き、女は男の留守を守る。

その仕事に優劣をつける事は出来ない。

どちらの仕事も大事であり、尊いものだと考えていた。

清田は時代錯誤の性別主義者ではないが、男女の性差を鑑みない訳にはいくまい。

特に肉体労働を要求される兵士という職業にあつては、銃火器の発達によつて男女の戦力差がほぼなくなつているとはいえ、やはり女性よりも体力に優れる男性の独占市場であるのは変わらない。

それに、女性に危険で辛い事をさせたりするのは、男としての良心が咎める。

戦い、傷つくのは男の役目でいい—今の時代とあつては、清田は古臭い男だった。

そして清田はキッチンを覗き込んでから面食らつた。

炊事場に立つ女性陣の、三者三様の格好に—特に冴子の後ろ姿は直視できなかつた。

静香は普段からこの部屋に泊まる事があるのか、自前のパジャマを着ている。

静香から借りたのか、京子は彼女のものとはよく似た色違いのパジャマ姿だが、サイズがあつていないようで袖などを捲っている。

その二人は普通の格好である。

問題なのは冴子のみであつた。

何故か彼女は、裸身にエプロンと下着—その下着というのがまた過激なものである—のみという、非常に肌の露出の多い格好をしていた。

どうしてそのような破廉恥な格好をしているのかを訊ねる清田ではないが、それとは別に驚嘆の吐息を漏らしていた。

冴子の、陸上選手のようにしなやかに鍛え上げられた肉体は、まるで彫刻のように美しかった。

十代の少女にしては高い上背に纏う筋肉に一切の無駄はなく、過剰になりすぎてはいない。バレエダンサーのように大胆な躍動性と柔軟性を併せ持った肉体の上に柔らかな脂肪が乗っており、女性特有の円やかな姿態を形作っている。

女性にしてはやや幅広な背面はまるで変声期前の少年のように中性的ではあるが、それすらも人間が持つ肉体美の発露に他ならない。発達した肩の筋肉によって陰の浮かぶ上腕は、やや男性的ですらあるが勇ましい冴子にはよく似合う。

背面から脇腹に至るラインには肋骨のパセティックですらある陰影が微かに浮かんでおり、その先には摘み頃の果実を彷彿とさせる乳房の、柔らかそうな側弦が見て取れ、剛健と豊艶の美しい対比構造を作り出している。

くびれた腰からむっちりとしたヒップに至るラインは、少女が女へと成熟し始めたのが窺えた。

非常にセクシーなデザインの黒のTバックを穿いている為に、お尻の山の間を通る細い布地の存在が、綺麗につり上がった臀部を強調していた―柔らかな脂肪の下にはあの運動量を支える筋肉の存在が認められた。

すらりとした脚は見るからに健康そうで、運動量に秀でた健脚であるのが一目でわかる。雌鹿のようにたおやかさと瞬発力を備えた脚は、横に並ぶ他二人より太く見受けられるが、それが澁刺とした健康美を感じさせた。

竹刀を握る握力、竹刀を振る腕力、竹刀を振り上げ、振り下ろす時に使う腹筋と背筋、突進する時に使う脚力―つまり剣道とは全身運動であり、筋肉を効率良く連動させる事に重きが置かれている。

冴子の均整の取れた格好良くすらある肉体は、剣士故に獲得したものだろう。

だが、冴子の特筆すべき点は体幹の強さだろう。

決して軽くはない、素振り用の本赤樫の木剣を恐るべき速度で打ち込みながらも体軸に一切のブレが見られなかったのは、彼女が生半可な鍛え方をしていないという証に他ならない。

アウターマッスルは派手なワークアウトで見栄えよく鍛える事は出来るが、インナーマッスルは地道な鍛練を積まなければ機能的に鍛える事は出来ない。

見れば見るほど、冴子の肉体は機能性を集約する過程で生まれた美の顕現そのものであるように思えた。

俺にはあんな鍛え方は出来ないな——強靱な体力を備える清田だが、素直に毒島冴子という少女の壮烈さには舌を巻いた。

そうして清田が、ある意味で熱い視線を送っていた為だろうか。

「ああ、清田さん」

その視線に気付いた冴子が、清田を振り向いた。

またしても清田は驚嘆した。

布地を突き上げる、冴子の張りのある乳房は格好良いという印象すら受けたが、それよりもエプロン越しでも引き締まった腹筋にはうっすらと筋肉の凹凸が浮かんでいるのが見て取れたのに感動した。

男が腹筋を割らすのと、女が腹筋を割らすのでは意味が違う。

プロの女性アスリートでもなかなか腹筋を割らすのは難しいのだ。

何故なら女性は男性に比べて皮下脂肪と遅筋の割合が多く、相当長期的に鍛えなければ無理である。

女性が腹筋を割るには、遅筋を鍛えて徹底的に体脂肪を落とすか、速筋を鍛えて太い筋肉をつける必要がある。

冴子の場合はその両方であり、若干速筋の割合が高いのだろう——清田はまじまじと彼女の下腹部を観察し、そう結論付けた。

「…やはり、はしたなさすぎましたか？」

じつくり眺める清田の視線に気恥ずかしさを覚えたのか、冴子はお玉を持った手で、身体を掻き抱くように隠した。

流石の清田も、己のしている事の重大さに気がついた。

「あ、いや…すいません」

慌てて視線を外し、目を伏せる。

俺に女子高生を視姦する趣味はない——それについての言い訳を探したが、正直に冴子の研ぎ澄まされた肉体美に見惚れていたと白状するのも躊躇われた。

「サイズの合う服が無かったので…鞆川校医のパジャマは数がないので、林先生に使って頂いたものですから」

冴子が、己の露出の多い格好の理由について話した。

成る程、それならば仕方はないのかもしれないが、もつと別の服はなかったのだろうか、と野暮な事を聞く清田ではなかった。

「私みたいなおばさんが毒島さんみたいな格好したら、それこそ目の毒になってしまうわ」

茶化すように京子が冴子をフォローする。

いや、恐らくそれも充分魅力的かもしれない―清田は、だぼついたパジャマ姿の京子を、脳内で裸エプロンに変換してからそう思った。

しかし、パジャマ姿というのは愛くるしさと気怠げな色気を感じる。

寝心地が良いようにゆつたりとした作りが、なんだか子供が大きな衣服を着ているようなアンバランスな可愛さと、生活感のある雰囲気  
が妙な魅力を感じさせた。

日常に潜むエロス、というのだろうか。

夜、就寝する前、共に寝床に潜り込み、どちらともなくちよつかいを出し、やがて情事に耽るという妄想が、現実味を持って想像できるという事に強い興奮を覚えそうだった。

静香も京子も、その点では冴子にはない魅力を備えているといつて良いだろう。

幾ら美人とはいえ、そういういかかわしい妄想の相手に冴子を選ぶのは、流石の清田も罪悪感を覚えた。

相手は子供だ、子供なんだぞ―子供、という単語に、胸の奥がざわついたが、清田は敢えてなんでもないように装った。

「ところで、味見は如何です？ 今夜の夜食にと作ったのですが」

冴子が小皿に鍋の中身を掬い、清田に差し出した。

小皿を受け取った清田は、一口で中身を飲み干した―口内に広がるのは、濃厚で温かな味噌味だ。

しかし、ただの味噌味ではない。まったりとじていてコクが強く、バターが入れられているのが分かった。



バター豚汁か―それは清田にとっては、馴染み深い味だった。

高校生の頃、既に今と遜色ない体格だった清田は、日々の激しい部活で消費するカロリーを摂取する為にかなりの大食らいだった。

そこで手軽に高カロリーを取る為に、母親がバターの塊を入れた豚汁をよく作ってくれた―懐かしい家庭の味に、清田は涙腺が緩むのを感じた。

泣くな、もう泣くんじやない…みつともないだろ―思わず眉間を強く摘み、涙を堪える。

だが、今まで考えないように抑えていたものが心の奥底から噴き出してきた。

ずっと家族の事が気になって仕方がなかった。

この一度しかない人生で、命を捧げるに値する仕事という事で自衛官を選んだが、命を燃やし尽くすという目的の他には、勿論大切な人を守りたいという想いもあった。

それなのに、こんな時に一番に守りたい人達の傍に居てやれない矛盾ともどかしさに、心が狂いそうだった。

だから無理にでも、何の根拠もなく家族の安全を信じていた。

そうだ、きつと大丈夫だ。なんといても親父がいるんだ―父親は清田と同様に大柄で頑健であり、きつと家族を守ってくれているに違いない。

若い頃は自衛官であり、今も腕っ節には自信のある血気盛んなオヤジだ。

お前には負けねえ、と口癖のように言っては久し振りに帰郷する清田に力比べを挑み、自分の年齢も考えずに無茶をしては負ける。

その都度、心底悔しそうにしては、もつと鍛えていつか倒してやる、と実の息子を相手に息巻いては母親に苦笑いされていた。

父親とは対照的に、小柄で細い母親と、母によく似た妹も、親父が守ってくれている。

親父なら…きつと、親父なら大丈夫―そう信じたいが、ふと、脳裏に、もう年だなあ、と溜め息を吐く父親の弱々しい背中が蘇った。

そうだ。親父だつてもう年なんだよ。じゃあ、そんな親父は誰が

守ってくれるんだ？—自分を除いて他にはいない、という強い思いに駆られ、飛んでいけるならば今すぐにでも家族の元へ駆けつけたかった。

俺の父親と母親と妹を、一体誰が守ってくれるんだ？

俺は、大切な人を守りたくて、自衛隊に入ったんじゃないのか？—多くの自衛官が抱える葛藤に、清田も悩まされていた。

日本国民を守る為、とは言うが、顔も知らない誰かの為よりも家族の為に命を懸けたいと思うのが人の情だろう。

中には本気でそう考えている人間もいるかもしれないが、大多数は身近な人の為になるならばと職務に励む。

清田も、無力な民間人の為に身を粉にする覚悟は充分に備えていたが、度重なる疲労と心労、人格を根底から揺るがす心的外傷が、公私の境を曖昧にしていた。

だが、サービスの宣誓を誓った自衛隊員としての矜持が、清田を踏み留まらせた。

正直に言えば家族を助けたいが、現実的に考えてそれは出来ない。

出来ない事を言及しても仕方がないなら、目の前で助けを必要としている人々の為に命を懸ける他ない—仮に己の職務を放棄して駆けつけたとしても、家族はそれを喜んでくれるだろうか、赦してくれるだろうか。

俺は清田武であって、清田武ではない—自衛隊員である以上、個人を優先する事は出来ないのだ。

それに、家族の安否に身を焦がさん焦燥に苛まれながらも、職務を遂行せんと命を懸けている仲間や、警察官、消防士、その他全ての勇気ある男女に申し訳が立たない。

なんとか自分を理屈で納得させたが、それでも悲しみと不安を堪えきれない己の情けない心の働きに、清田は嗚咽を漏らさないようにするので必死だった。

「凄く…美味しい、ですね」

両目を手で覆い、涙声でそう言いながら清田は小皿を冴子に返した。

そして背を向け、足早に玄関に向かった。

サンダルも突っかけず、裸足で外廊下に出ると、壁に背を凭せ掛け、  
ずるずるとその場で膝を抱えた。

もう、堪えきれなかった。

清田は膝に顔を埋め、声押し殺して泣いた。

今、自分がしている事がどれだけ情けなくて、どれだけ愚かな行為  
であるのかは自覚していた。

この場にあつては、無力な民間人を守り、それとは別に高城沙耶の  
身柄を最優先に考えなければいけないという任務を帯びている。

しかも、清田はただの自衛官ではない。

陸上自衛隊が擁する特殊作戦群に所属する最精鋭である。

その隊員にと求められるレベルは自ずと高く、心技体の何れも常人  
を超えねばならない。

どんな苦境に遭っても弱音一つ吐かず、課せられた任務を果たす為  
には人間的な要素の全てを切り捨ての厭われない、狂人でなければな  
らない。

狂ってる、何もかもが狂ってる——今の今まで、この道を選んだ事を  
後悔した事は無かった。

会いたい、家族に会いたい、会って無事を確かめたい。

たとえ死体となつていてもいい。それならばまだ手厚く葬つてや  
る事が出来るから——清田は、もう二度と家族と会えない事を恐れてい  
た。

それに泣きたいのは清田だけではない筈だ。

家族や肉親がいない人間は兎に角として、いる人間は一行の中には  
何人もいる。

沙耶の両親は床主にいるが、耕太や冴子の肉親は国外にいる。

彼女の両親の安否を確認する事は可能であり、一行の当初の目的で  
もある。だが、後者二人はどうしたって連絡を取るのすら難しい。

顔には出さないだけで、二人とも気にしているに違いない。

家庭に問題がなければ、家族の事を気にしない人間がいる筈がない  
だろうから。

そう考えると、自分よりなんて強いんだ、と改めて清田は己の弱さと情けなさに落ち込んだ。

一頻りぐすぐす泣いていると、誰かの気配を感じ、清田は思わずびくりと身体を震わせた。

恐る恐る顔を上げると、目の前には京子が佇んでいた。

表情までは見えなかったが、恐らくこんな情けない自分の姿を見て失望しているに違いないと、清田は諦観していた。

それは当然だろう。

今まで無敵の兵士を演じていたのに、蓋を開ければ泣き虫の大男だなんて情けないったらありやしない——自分が同じ立場になったら、間違いなくそう思う。

京子は何も言わず、無言で隣に腰を下ろし、清田と同様に膝を抱え、顔を埋めた。

清田は彼女のその行動の真意が分からず、泣き腫らした目でじっと見た。

膝に顔を埋める京子の頭には、包帯は巻かれていなかった。

彼女の頭の傷は包帯を巻くほどのものではなく、静香が丁度良い大きさの絆創膏を貼ってやり、それは前髪に隠れる程度のもだった。

「私もね」

ぽつり、と京子が唐突に呟いた。

「いっぱい酷い事をしたわ」

懺悔をするような、そんな声音で彼女は続ける。

「私は、教師なのに、教え子を誰一人救えなかったし、救おうともしなかった…」

そう告白した京子は、肩を震わせていた。

「私は教師である事に誇りを持っていたし、この仕事が好きだった。生徒の未来の為に尽くすのはとても崇高で、そんな自分にちよつとだけ酔っていたわ…でも、いざこんな事が起こってみると、自分の事だけを考える最低な女だって分かった」

清田は掛ける言葉が見つからず、黙って耳を傾けるしかなかった。

「同僚や生徒が大勢死んでいく中で、私は自分の事しか考えていな

かった。私は教師で、先生で、親御さんから預かった子供達を守らなくちやいけなかったのに……！」

ぎり、と奥歯を噛み締める音が、清田にも聞こえた。

「こんな事が起これば誰だって」

「仕方なくなんかない！」

ようやく見つけた言葉が、京子の血を吐くような叫びに掻き消された。

「仕方ないの一言で済ませられる訳がない……確かに、私一人でどうにか出来る筈がないって分かった。でも、私は、教師で、子供を守る義務があったのよ。子供を亡くした親御さん達にどんな顔をして会えばいいのか、なんて言えればいいのか、分からない……分からないの」

職務の重責を感じているのは、京子も同様だった。

確かに、あんな事態が起きてしまえば、彼女に出来る事など何もなかっただろう。

だが、それでも教師であるからには、その責任を果たさなければいけないという思いがあった——あったが、実行に移す勇気が彼女にはなかった。

ただそれだけの話であり、たとえ実行していたとしても、今頃彼女は学園で亡者の一人として生者の血肉を求めて彷徨していただろう。

人間であるならば誰もが持つ生への願望と、教師として生徒を守らなければいけないという使命の狭間で、京子も人知れず悩んでいた。

それは清田が抱える、自衛官の葛藤とよく似ているように思えた。

暫し重い沈黙が二人の間に訪れたが、ややあつて清田が口を開いた。

「……過ぎた事は、もう取り返す事は出来ません。この問題は当事者ではない俺が何と言ったところで、林先生が納得する訳がないと思います」

言葉を慎重に選び、清田は相手の反応を窺いながら続けた。

「出来るとするならば、最後まで生き延びて、死んでいった生徒達を葬ってやり、その親御さん達の元に還らせてやる事ぐらいですね」

それが一番、死んでいった彼らの為だろう。

それは今この瞬間も、世界中で蠢いている死者達の全てに当てはまる事だと清田は思っていた。

「俺も、自衛官である以上は皆を守らなくちゃいけないのは解つていきます。でも、一番に守りたいのは、やっぱり家族なんです…そんな事は出来ないのは解つてます。自衛官の全てがそんな事をしたら、忽ち大勢の人間が死んでしまう。生きてるか死んでいるかも分からない家族よりも、目の前で助けを必要としている人を救うのが、現実的だつて解つてるんです」

自らに言い聞かせるように、清田は言った。

「俺が今一番やらなければいけないのは、皆を無事に安全なところまで連れて行き、そしていつか家族に会う事です…死んでいても構わなない。見つけ出して、ちゃんと葬つてお墓に入れてやりたい。家族だけじゃない。庭に埋葬した人達も、そこらを歩き回つてる犠牲者も、全て何時かはちゃんと送つてやりたい…だから、俺は、生き抜いて、生き抜いて、生き抜いて、生き抜いて、生き抜いて決めました」

これが都合の良い話だとは思っていた。

幼子を殺しては泣き、家族を想つても泣く。

なんと身勝手な人間だろうと、清田は己に呆れ果てていた。

だが、何時までもうじうじと悩んでいても仕方がないのも事実だ。

今は、今だけはこの問題を先延ばしにしなければならぬ。

でなければ、自分の助けを必要とする人達の為に立ち上がり、武器を手に取る事が出来なくなってしまうから―常に感じる、鋭い胸の痛みを、忘れる事など出来る筈がない。

目を閉じれば今すぐにでも脳裏にあの光景が蘇る。

気を緩ませれば左手にあのおぞましい感触が蘇る。

右腕に抱いた重みも、温もりも、襟を握る小さな手も、最後の吐息の音も、痙攣する華奢な身体も―五感の全てで感じたあの幼子の存在は、清田の魂に消えぬ傷跡を残した。

「…それが自己満足に過ぎなくても、目的がある限り、俺は生きるって決めました」

そう言つて、清田は押し黙った。

暫くは、再び訪れた沈黙の中で手持ち無沙汰に体育座りをして、京子の反応を待った。

「やっぱりなあ」

やおら、京子が顔を上げて清田を見た。

その目は充血して潤んでおり、声も出さずに泣いていたのが窺えた。

「清田さんは凄いのね…私、自己嫌悪するだけで、そんな事考えもつかなかった」

そつと、京子が清田の肩に頭を凭せ掛けた。

急に接近した互いの距離に、清田は内心ではどきどきしていた。

「なんだか貴男を好きになってしまいそう。まだ、会って一日も経っていないというのに」

京子の何気ない言葉に、正直、どうしていいか解らなかった。

学生時代にまともに異性と付き合った経験など清田には皆無であり、そうしたいと願った事もない。

ましてや入隊してからのこの数年間は恋に現を抜かす暇などありはしなかった。

いや、正確に言えば恋愛はもっぱら興味の対象外で、清田はひたすらに己を高める事だけに打ち込み、汗を流して肉体と精神を痛めつける行為に没頭し続けていた。

自他共に認める生粋のマズヒストである事を否定できない清田だが、かといって彼に正常な性欲がない訳ではない。

精気溢れる、頑強にして健全な男子である以上はそれなりの欲望がある。

しかし、その発散の仕方は、白濁とした欲望が透明になるまで自らを慰めるか、悶々としたら性欲が失せるまで肉体を追い込むという両極端な手段であり、異性との間に性交渉を持つとうだなんていう発想には至らない。

先輩からは大人の遊びとして風俗に行く事をよく勧められたが、わざわざ安くもない金を払うぐらいならその金でサウナで汗を流した後冷たいビールとそこそこ美味いつまみをたらふく腹に詰め込む

事がよっぽど建設的であると考えており、彼は事実その通りの余暇を過ごす事が多い。

風俗嬢を相手にするのを嫌悪しているという訳ではなく、単純に性交は金を払ってまでする価値がない行為だというのが清田の持論であり、だからといって一般女性との恋愛とセックスを楽しむうだなんという気概も持ち合わせていないのだ。

ムラムラしたら二八〇kgのバーベルを持ち上げればいい―清田武という男は、意識的か無意識的かに関わらず、徹底して色恋を排している存在だった。

だが、京子ほどの年上の美人に、真っ向から好きと言われるのは、正直良い気分ではあった―心の奥底では、今の自分は人に好かれる資格はないと思いつつも。

ええい、浮かれるんじゃない。お前はハリウッド映画の主人公か―まるで映画のような状況だが、これは現実であると戒め、素直に酔いしれるような気分ではないのも事実であると認めた。

かといって、上手く返す言葉が見つからない。  
先輩の浜岡ならば女性の扱いには長けているから、咄嗟に殺し文句の一つや二つが口から出るのだろうが、清田にそんな器用な真似が出来る筈がなかった。

ああだこうだと考えあぐねていると、京子が手を伸ばし、清田の頬に添えて振り向かせた。

彼女の手はすべすべとしていて、ひんやりと気持ち良かった。

今の京子は眼鏡を掛けていなかった。

重なり合う視線の向こうには、潤んだ女の瞳があった。

濡れた瞳の熱っぽい輝きに、流石の朴念仁の清田といえども彼女が何を伝えたいのかは察せられた。

一瞬、清田は躊躇った。

きっと今ここで頷けば、傷を舐め合い、慰め合う事で多少なりとも心の重石を軽くする事は出来るだろう。

しかしそれは結局は逃避に過ぎない。

何をしても満たされるものでも、癒されるものではない。



自分自身を許す事が出来ないのであれば、何をしたって無駄なのだ――清田は京子の手を取って頬から離すと、首を横に振った。

「すみません。俺は…その、まだ自分が許せません。だから、こういう事は、出来ません……」

これが女性に対して途轍もなく失礼な事なのは承知していたが、曖昧な気持ちで彼女を受け入れるのはそれ以上に相手を侮辱している行為だと思った。

京子は傷付いたというよりも、少し残念そうな表情で微笑んだ。

「分かっていたわ。きつと、貴男は断るだろうって……」

でも、と言って、京子はそのまま清田にしなだれかかった。

「今だけは私のわがままを聞いて…抱き締めてくれるだけでいいから」

お願い、と消え入りそうな呟きに、清田は京子を掻き抱く事で応じた。



それから京子と別れたのは暫くしてからだった。

どちらともなく身体を離し、お互いに見つめ合うと、気恥ずかしそうに笑い合った。

そして、ちよつと夜風に当たってきます、と言って京子はそそくさとその場から立ち去ってしまった。

清田も、何だか嬉しいような恥ずかしいような気持ちだったが、幾らか心が軽くなっている事実に氣力が湧いてくるような覚えがした。そうして扉を開けると、其処には沙耶が仁王立ちで待ち構えていた。

今の彼女はタンクトップに下着姿と大胆な格好をしていたが、そんなものは清田の目には入らなかつた。

「ちよつといいかしら、色男さん？」

若干棘のある声音に、清田は己の迂闊さを嘆いたが、今となってはもう遅いだろう。

「手伝って欲しいのだけれど」

清田は一言も弁解する事なく、沙耶の後ろに付き従って二階の寝室へ移動した。

そこでは耕太が重厚なロッカーを開けようと悪戦苦闘しており、全体重を掛けてこじ開けようとしていたがびくともしていない。

「見ての通り、デブチンこと平野がやってるけど、軟弱なデブオタじや梃子でも動かないって訳」

やれやれと肩を竦める沙耶は、恐らく高みの見物を決め込んでいたのは想像に難くない。

それについてとやかく言うつもりは清田にはなかった。

「で、そこでアンタの出番って訳よ」

「…中身は？」

「わからないけど、多分役立つものが入ってるのは確実ね。隣のロッカーには弾薬があつたし」

沙耶の言葉通り、隣のロッカーには多種多様な弾薬の紙箱が、堆く積まれていた。

「ぜえぜえ…清田さん、お願いします」

汗だくで荒い息を吐く耕太からボールを受け取り、清田は扉の隙間に差し込むと、一気に力を込めた。

清田の背中中の筋肉が隆起すると同時に、扉が金属を無理やりねじ曲げる音と共に解放された。

「おいおい。一体こいつを持ってるなんて何者なんだ？」

思わず口について出た言葉は、彼も舌を巻く代物が収められている事の証だった。

ロッカーに収まっている三挺の銃器は、どれもこれもが日本国内では手に入らないものだった。

清田はそのうちの一つを手に取り、細部を改めた。

サンドイエローに塗装されたその銃は通常のものよりもずしりと重く、長く肉厚の銃身と機関部上部に据え付けられた高倍率の狙撃眼鏡から、半自動式（セミオートマチック）の狙撃用ライフルであると判別できた。

「それはH&K G28スナイパーライフル！HK417の民間向けの軍用仕様！」

嬉々として耕太が解説せずとも、清田にはこの銃が何であるのかは知っていた。

H&K G28は、7.62mm×51弾を使用するHK417の民間向けバージョンであるMR762A1を、軍用向けに改良してドイツ連邦軍が採用したセミオートマチック・スナイパーライフルである。

ドイツ連邦軍に於いてはHK417は、半自動狙撃銃としての精度に関しては、先代のDMR（選抜射手ライフル）であるG3ライフルに劣るとされ正式採用は見送られた。しかし、競技用の高精度マツチバレルを搭載した民間のMR762A1は、精度、操作性、携行性の全てに於いてG3を上回ると判断され、G28の名称を与えられて採用された。

民間のスポーツシューティング向けの改造を施した途端、軍に採用されるなどなんと皮肉めいた経緯を持った銃だが、性能が良ければ関係ないという証明でもある。

HK416の扱いに習熟している清田は、G28をすんなりと構える事が出来た。

各部に設けられたピカティニー・レールには様々なオプションが追加されており、伏射用の二脚（バイポッド）、CQB用のフラッシュライト内蔵型フォアグリップ、シュミット&ベンダー製高倍率狙撃眼鏡の上部には近接戦闘用の小型レッド・ドットサイトが搭載されていた。

勿論、バックアップ用のアイアンサイトも装備しているが、まず出番は無いだらう。

狙撃仕様という事で若干重量があるが、それが苦にはならないほどの扱いやすさがあった。

槓桿を引くと、その滑らかさと汚れ一つない機関部から、この銃がよく手入れをされているのが窺えた。

機関部から立ち上る真新しいガンオイルの臭いには、流石の清田も

新しい玩具を手に入れた子供のような気持ちになった。

「でも、まあ、俺には必要ないな」

清田はそう言つて、傍らでうずうずしている耕太にライフルを手渡した。

既に清田は十分に重武装している。一人で二挺も三挺も持ち歩く必要はない。

受け取つた耕太はそれこそ、子供のように目を輝かせてライフルをいじるのに夢中になった―その妙にこなれた手つきは、ソフトエアガンなどの玩具で培つたようなものではなかつた。

続いて清田はもう一挺を手にとつた。

「それは？」

銃器に疎い沙耶は、清田が手にする銃を訊ねた。

「モロトVEPRセミ・オートマチック・ショットガン：半自動式の散弾銃ですよ」

ロシアのモロト社製のVEPRセミ・オートマチック・ショットガンは、同社が製造するRPK軽機関銃のノウハウをフィードバックした軍用散弾銃である。

外観はRPK軽機関銃に酷似しており、小銃弾よりも大きな散弾を使用する為に銃身や機関部は再設計されているが、それ以外の幾つかの部品はそのまま流用されている。

ロシア製銃火器ではお馴染みとなつている、堅牢で確実な作動には充分な信頼性があり、過酷な状況でも安心して使用できるだろう。

長い銃身を装備しているので、これが軍向けではなく民間向けモデルであるのが分かつたが、装弾数八発のスチール製インサート入りの強化プラスチック製弾倉は軍向けのものだった。

八発もの十二ゲージ・マグナム・ショットシェルを装填出来るので、その気になれば一瞬で辺り一面を挽き肉の海に変える事が出来るだけの火力を備えているだろう。

これも機関部上にダットサイトが装備されており、正確かつ迅速な照準がしやすくなつている。

例によつて清田はこれも耕太に渡し、泥濘の中でも作動する質実剛

健なロシア製銃器は彼を大いに喜ばせた。

「さて、問題はこいつだな…」

残る一挺を手に取り、清田は驚きの余り感情を表す事が出来なかった。もはや呆れていたのだ。

昨今の銃は軽量合金と合成樹脂の部品が多用され、まさに近未来然とした形状であるものが多いが、これはまるで鉄塊から削り出したかのように旧態依然の無骨で古臭いものだった。

自衛隊の主力小銃として長年使用されてきた六四式小銃―それに違いないのだが、原型を留めぬ程に手が加えられていた。

まず銃身が通常のものよりも延長され、更に肉厚で倍ほどの太さがあり、銃口部の消炎制退器(マズルブレーキ)、着剣装置である剣止め、脚固定筒、皿型座金、二脚、前部銃床部に取り付けられている照星もなかった。勿論、機関部後方にある照門も廃止されていた。

被筒部(ハンドガード)は従来のちやちなものではなく、スチールから削り出したピカティニー・レール・ハンドガードであり、G28と同様に可変式二脚(バイポッド)、フォアグリップとフラッシュライト、レーザーモジュールが装備されていた。

機関部のデザインも大幅に変更されていた。

遊底を操作する為の槓桿が上部から右側へと移行している。そして照門があつた所から排莖口の前、前部機関部までレールが渡しており、その上に低倍率のACOGサイトとブースター・サイトが据え付けられていた。

試しに槓桿を引いてみると、通常の六四式は機関部上面が開くようになっていたが、これは右側だけが開放された。

槓桿の位置が右側に移行しているのは、そのままではライフルスコープをオフセットで装着しなければいけない問題を解決する為だろう。スコープは銃の真上に装着するのが一番精度の高い射撃を行える。

握把や銃床は木製ではなく、合成樹脂製に改められていた。木製部品は湿度によって膨張したりするので、それが射撃の精度を狂わせる事が往々にしてあるのだ。

左手でフォアグリップを握り、右手で握把を握り込んで肩付けし、サイトを覗き込む。

しっかりと「血に馴染む」感触は、やはりこの銃に流れる血がそう思わせるのだろう。

この六四式小銃は見ての通り、ただの六四式小銃ではない。

六四式小銃は採用されてから、A、B、Cと初期型から改良されて使用されていたが、S型と呼ばれるものもごく少数だけ生産された。

スペシャルのSと、スナイパーのSを冠したS型は、自衛隊と警察の一部にしか配備されていない代物だ。

どちらの組織も近年では新型狙撃銃を採用しているが、それによって余剰となったS型が民間に出回るなどという事は有り得ない。

幾多の自衛隊員の汗と涙を吸った六四式小銃は、重みと誇りを備えた小銃である。

ただの銃ではないのだ。

六四式小銃S型に手が加えられたこれは、六四式小銃S型改といふべき代物であり、何を如何こうして手に入れたのか定かではないが、本来なら民間に出回る筈がない。

しかし、既に高機動車を所有している点からして、静香の友人がただ者ではないのは知れている。自衛隊の装備火器を持っていても別段驚くほどの事ではないのかもしれない。

三挺の銃火器に加え、狩猟用コンパウンドボウも弾薬が保管されているロッカーにあった。

現代の優れた物理学と、軽量高耐久の部品によって作られたこの種の狩猟弓は、正しい使い方をすれば銃器にも負けない威力を発揮する。

実際、アメリカでは若干十七歳の女子高生が狩猟用コンパウンドボウで体重二〇〇kgの熊を仕留めた事例がある。使い手もさることながら、現代の優れた科学が作り出した弓矢の威力も馬鹿にならないという証明でもあった。

幾つかの矢筒には強靱なカーボン製の矢がびつしりと収められていて、先端に装着されている狩猟用の大型の鍔は剃刀のように鋭く、

威力が高そうだ。

弓矢の威力は知っているが、残念ながら自分には扱えそうにない――清田は各種銃火器ならば問題なく使用できるが、流石に弓矢の扱いは心得ていなかった。

恐らく、サウンドサプレッサーを装着した銃火器よりも高い消音性能を持つ狩猟弓は、この状況下では役立つ場面が幾つもあるだろう。もしかしたら冴子ならば多少の心得があるかもしれない。折角手に入れた武器を活用出来るならばそれに越した事はないだろう。

「さて、これらは有効に活用させて貰うとして……」  
清田は六四式小銃を胸の前に抱えたまま、耕太と沙耶に向き直った。

「平野君は兎に角として……高城さんは、銃の扱いは？」

聞くまでもない事だろうが、一応形だけでも訊ねておいた。

「か弱い女子高生がそんな物騒な代物、扱える訳ないでしょ」

自信満々に言っただけの沙耶に、清田は銃の基礎的な扱い方と操作方法を教えなければならなかった。

## #1st day ⑫

カチ、カチ、と規則的な金属音が手の中で響く。

手の中の二〇連箱型弾倉に、単三電池よりも若干大きい7.62mmマツチグレード弾をひたすら込めていく。

一発一発を押し込む度に弾倉のバネが強く反発し、抵抗感が増していく。

二〇発をフルに装填しようとする、最後の一発を込めるのには結構な力が必要だ。

清田は、確実に弾薬が薬室へと送り込まれるように装填弾数を減らし、バネを圧縮しすぎないように気を付けた。

フルで装填するとそれだけバネを強く圧縮するので、いざという時に弾性が弱って装填不良の原因となるかもしれないからだ。

二〇発入るところを、十八発の大口径弾を詰め込んだスチール製弾倉はそれでもずしりと重く、振ると薬莖内に充填された炸薬（ガンパウダー）がしゃかしゃかと音を立てた。

最後に、弾倉を振って掌で叩き、込めた弾薬の並びを均等にする。

映画などで兵士が弾倉をヘルメットに何度か打ち付けてから装填するシーンがあるが、あれは装填不良を減らす為の工夫だ。ただし、固いもので叩くと暴発の恐れがあるので、清田は掌で叩くようにしていた。

清田は重くなった弾倉に満足すると、それを弾薬の込め終わった弾倉の列に置き、新たに空の弾倉を手にして次に取り掛かった。

なんであれ、作業に没頭していれば煩わしい苦悩から解放されるような気がして、清田は目の前の物事にひたすら集中した。

清田の他には全員が二階の寝室に会しており、黙々と弾込め作業に従事していた。

沙耶に銃の扱いを教えていると、階下にいた三人が途中で加わり、簡単だが改めて銃と弾薬の取り扱いを教えた。

昼間に自ら進んで拳銃の扱いを教わろうとした京子が一番、四人の中では習得が早く、次点で沙耶、冴子、静香の順といった具合だ。



特に冴子は銃に関しては乗り気ではない様子だったが、生き残る手段であればと受け入れた。だが、銃よりも狩猟弓に興味を示し、実際彼女は弓道の心得もある―毒島家の息女として武道全般に精通している―らしく、手に入れた武器を無駄にせずに済みそうだ。

静香に関しては豊満すぎる乳房が運動に向かない故か、射撃姿勢の覚えが悪かった。

そうして四人とも一通りの扱い方は覚えたので、今はこうして更に銃へ慣れる為に弾倉への弾込めを手伝って貰っていた。

銃に早く慣れる為には、日常的に触れる事が近道である。

清田も入隊当初は銃の分解結合や基本教練を数え切れないほどこなしてから、実弾射撃や戦闘訓練に臨んだ。

銃に限らず、己の手足の延長とすることで初めて武器の扱いは上達するのだ。それは刀や弓、槍も同様だろう。

女性陣が弾込めという何の変哲もなさそうに見える作業に四苦八苦している傍ら、やはり耕太の手付きは淀みなく、滑らかである。

彼は間違いなく実銃に触れた経験があると見做すべきだろう。それも一度や二度の射撃ツアーではなく、濃密な体験をしている。

清田は黙々と作業をする間の暇潰しとして、その事について訊ねてみる事にした。

「平野君。君は銃の扱いに慣れているようだけど、以前にこういう経験があるのかい？」

待ってましたとばかりに、耕太が誇らしげに答えた。

「アメリカに行った時、民間軍事会社：ブラックウォーターのインストラクターに1ヶ月教えてもらいました」

にやり、と唇の端を歪める耕太の愉悦の表情は、何処か人間の暗く澁んだ感情を匂わせた。

民間軍事会社と言えば聞こえは良く思えるが、結局は金で雇われる傭兵集団である。

特にブラックウォーターは業界内でも評判はよくない―そもそも彼らP S M C s はどんな形であれ戦争を食い物にしている―ので、それに関して清田はあまり良い感情は持っていない。

「そうか…君のような存在は、今は心強いよ」

裏を返せば、平時にあつては危険なオタク少年と言えたが、今は素直に耕太の存在を喜べた。

己の感情など二の次でいい。大事なのは有効な手段を利用する事に他ならない。

耕太が銃火器の扱いに精通しているという事実が今は大事だ。

「ところで、鞆川先生、その友達とやらは一体どういう人物なんですか？」

清田はずつと気になっていた疑問を、静香に向けた。

「警察官をしているわ。確かS A Tとかいう部隊に所属しているらしいの」

弁当箱ほどもある弾倉に、三インチ・マグナムショットシェルを一個ずつ詰めながら、静香は答えた。

女性でS A Tに所属しているという時点で凄まじい女傑であるのは察せられるが、清田は何故か脳裏にとある人物を思い浮かべていた。

まさか、と思いつつ、その人物について静香に聞いてみる。

「S A Tか…もしかして、その人って、彫りが深い顔立ちで、肌が浅黒い女性ですか？」

「ええ、そうよ。でも、どうして清田さんがリカを知ってるの？写真とか家には置いてなかったと思うのだけれど」

静香の言葉に、やっぱりか、と清田は全て得心がいった。

「いえ…今更隠すのもどうかと思うので、教えましょう。実は、今日、学園に来る前に床主洋上空港に強襲降下し、既に展開中のS A T部隊と一緒に行動しました。その中で女性のS A T隊員がいたのが強く印象に残ってましたので」

清田の言葉に、静香が食い入るように彼の顔を見た。

「リカに会ったの?! あの子は無事だった?!」

おっとりしている彼女らしからぬ反応だった。

声を荒げ、今にも詰め寄らんとするその表情に、清田は気圧された。「安心して下さい。鞆川先生の友人は健在でした。空港のメインター

ミナルビルは確保され、今頃は我々の主力が展開している事でしよう」

「そう…良かった」

そう言うのと、静香は心底から安堵した様子だった。

しかし世間は狭い、と清田は思わずにはいられなかった。

まさかあの女ゴルゴが静香の友人とは、一体人と人の関わりは何処で絡んでくるのか予測がつかない。

清田にとって空港での出来事は苦い思い出しかない。

今日という一日で様々な戦闘を潜り抜け、名実ともに精鋭となった清田だが、初めての实任務は上手くいかない事ばかりの連続だった。どうにかして戦闘が終わると、清田は極度の緊張と疲労によって嘔吐してしまい、その恥ずかしい場面を静香の友人・南リカに目撃されてしまった。

彫りの深い端正な顔立ちと、なめらかな褐色肌という日本人離れした容姿の美女ならば一目会えば忘れられる筈もない。

しかもそれがノーメックスフライトスーツと突入装備に身を固めていれば尚更である。

不敵な笑みを浮かべながら細い葉巻を唇の端にくわえ、此方を見ていた褐色の女傑―エスも大したことないのね、と言われたような気がして、清田は暫く己の不甲斐なさにうんざりしていた。

その後、ヘリでやってきた剣崎とS A Tの部隊長が互いに情報交換し、今後の行動方針について話し合っていたが、清田は直後に高城沙耶の保護命令を下されて再出撃したのでリカとはそれきりである。

恐らく、彼女は無事だろう。

まず、彼女自身が相当タフであり、加えて特殊作戦群を始めとした各部隊が今頃は空港に集結しているのだ。これで駄目なら安全な場所など日本の何処にもない事になってしまう。

そうだ。あそこは安全だ。俺の仲間もいる―不意に仲間の安否が気になったが、清田は作業を続けた。

そうしていると、ぱん、と乾いた音が外から聞こえ、清田は反射的にカーテンを潜ってベランダに出ていた。

今の音は間違はなく銃声だろう。

しかも距離はそれほど離れていないと思われ、一気に緊張感が張り詰め、全員が物音を立てずに清田の背中を静観した。

清田は、ベランダで乾かしていたタクティカルベストのポーチから双眼鏡を取り出し、周囲の路上を観察した―発砲者の姿はすぐに見つかった。

他よりも一際に群がる〈奴ら〉の集団の矛先に、上下二連装散弾銃を持った少年がいた。

年の頃は高校生ぐらいだろうか。

凶暴な笑みを浮かべた少年は、〈奴ら〉に向かって銃を撃っている。

至近距離から浴びせられるダブルオーバックの散弾が、二、三体の〈奴ら〉を纏めて吹き飛ばす。

だが、相手を引き寄せ過ぎていた。

少年は再装填しようとしたが、既に手遅れだった。

あつという間に〈奴ら〉の群れに飲み込まれてしまった―皮膚を剥ぎ、肉を貪るように喰われ、骨を噛み砕かれて骨髓を啜られ、まだ血の流れる内臓を引きずり出されている。

それでもなかなか死ねない少年の断末魔が此処まで聞こえてきて、背筋におぞましい寒気を感じた。

余所に双眼鏡を向ければ、もう一人、男性が命辛々逃げているのが発見できた。

〈奴ら〉の間をすり抜け、掴み掛かる手を彼が躲す度に清田は胸中で冷や冷やし、どうにか逃げ延びて欲しいと祈った。

男性は決死の逃避行の末、漸く一軒の家に辿り着き、縋り付くように扉を叩いた。

どうか彼を入れてやってくれ―しかしその願いは聞き届けられない事はなく、男性は追いついた亡者の群れに背中から引き裂かれ、殆ど間を置かずに血飛沫となって掻き消えた。

「酷すぎる……！」

いつの間にか耕太と冴子が横におり、耕太はG28をベランダの手摺に据え付けてその狙撃眼鏡で、冴子はロッカーに入っていた双眼鏡

で一部始終を見ていた。

耕太に関しては、リカの私物であるタクティカルベストを着込んでおり、臨戦態勢を整えていた。

清田も彼の言葉には同感だったが、かといって自分達にはどうする事もできない。

全てを救う事など出来はしない。

これ以上、道連れを増やしても身動きがとれなくなるだけだ―集団の規模が増大すればそれだけ機動力は失われてしまう。

微かな灯りの中に浮かぶ街のそこかしこでは、亡者たちの陰鬱な晚餐が繰り広げられていた。

「慣れておくべきですね。この世界に…」

そう呟く清田の表情は嶮しく、迷いに満ちている。

「生き残りたければ…ですね？ 清田さん」

その言葉を強く肯定するように、冴子が彼の横顔を覗く。

清田はその事実を否定できなくて、双眼鏡で熱心に周辺を観察する振りをした。

「…清田さん！ 十一時の方向！ 距離一〇〇！」

そうしていると急に耕太が警告してきたので、清田は咄嗟にその方向に双眼鏡を向けた。

その光景が網膜に投影された刹那、清田の心拍数は上昇し、瞳孔は開いた。

鉛を飲み込んだように酷く胃のあたりが重く、口の中が渴いた―背筋に悪寒を感じるほどの忌々しい記憶が蘇り、足元が喪失するような感覚に襲われた。

血と脳漿に塗れたナイフの刀身が網膜に。

溜息のような幼子の臨終の吐息が耳朶に。

汗と乳の入り混じる独特な体臭が鼻腔に。

骨を刃物でゴリゴリと裂く感触が左手に。

母の作る甘く優しい卵焼きの味が味蕾に。

血肉の通っていた生肉を素手で引き裂くように生温かく、痛みと恐怖に満たされた声を、清田の魂は血を吐きながら絶叫した―実際は、

声にならない渴いた呻きがその唇の隙間から漏れ出ただけだったが。双眼鏡の丸く切り取られた視野の中に、女の子が映っていた。視界の中に清田が手に掛けてしまった女の子が映っていた。

俺は気でも狂ったのか―震え出しそうになる手を誤魔化すように、清田は双眼鏡を強く握り締めた。

気を落ち着けるように呼吸を穏やかにし、改めて観察すると、その女の子は、あの子とは全く違った。

年の頃は、あの子と同じで小学校低学年ほどだろう。

柔らかな亜麻色の癖っ毛を白いカチューシャで留めており、子供らしくピンクのワンピースにレースのカーディガンを羽織っていた。

不安げな表情をしている顔立ちは愛らしく、左の目元には泣き黒子があった。

その女の子の手を引く女性は、恐らく母親だろう。

女の子と同じ亜麻色の癖っ毛と、左目許の泣き黒子までもが同じだった。

母親のパーカーにチェック柄のスカートといった装いなのに足元はサンダルというちぐはぐな格好から、親子ともども着の身着のままで逃げてきたのが容易に察せられた。

親子は、必死に亡者の間を掻い潜り、安全な隠れ家を探して走っていた。

途中、母親は何度も家々に駆け込んで堅く閉ざされた玄関を叩き、保護を求めたが住人の返答はどれもがつかないものである。

娘だけはお願ひします、とこの距離では声は聞こえないが、必死に訴えかける表情からそう窺えた。

親子は何件もの家を回ったが、時間が経過するに従って二人をのろのろとつけ回す亡者の数が増えていく。

あれではじきに逃げられなくなる―清田がそう危惧した直後、最後に訪ねた家屋の軒先で、とうとう親子の進退は窮まった。

親子は玄関扉を背に、目前の鉄格子の門扉には数体のへ奴らゝの姿があり、これでは連中をすり抜けての逃走はもはや不可能だった。

あの親子が危機から脱するには、家の住人達の良心の在り方次第だ

ろう—だが、その可能性は万に一つもなく、扉は閉ざされたままだった。

自分達の運命を諦めた母親は、幼い娘を強く掻き抱き、餓えた亡者たちに背を向けてうずくまった。

抵抗よりも、最後まで愛する娘と共にいる事を選択したのだろう—母親の背に回した女の子の手が、ぎゅう、と迫り来る凄惨な未来を覚悟するように母の衣服を握り締めていた。

自分の首に回された小さな手が、襟を握り締める感触がフラッシュバックする。

あの子も最後は覚悟していた。俺に殺される運命を黙って受け入れていた！—あの苦々しい無力感が再び、清田の胸中に蘇る。

少しも救ってやる事の出来なかった女の子。

どうしたってただ死ぬしかなかった女の子。

俺が殺す事ではか楽になれなかった女の子。

だが、目の前のあの子は、あの女の子と違って母親と一緒に救ってやる事ができるかもしれない。

その可能性に考えるよりも先に身体が動きそうになったが、清田は寸での所で辛うじて押し留まった。

あの親子を救う事で少しでも贖罪になるのではないか、と分かり易くもある罪悪感から逃れる方法に直ぐにでも飛びつきたくなる感情を押し殺し、僅かに残った理性的な部分が現状を機械的に分析する。

あの親子を救う事で得られるものは、果たして相応の価値があるのだろうか？

自分を含めた残りのメンバーの命を危険に晒してでも救う価値があの親子にはあるのだろうか？

あの親子を一行に加える事で得られるメリットは何があるのだろうか？

答えは考えなくても解りきった事だ。皆無である。

あの親子を救う価値は皆無である。

一行の安全とあの親子の救出は、どうしたって前者を優先すべき

だろう。

「単純な算数の問題だ。

6と2ではどちらが大きな数字だろうか。  
無論ながら6である。

6<2という数学上の永久不変の真理が覆らない限り、この問題は論ずるに値しない。

そう、価値がないのだ。

あの二人には救う価値がないのだ。

自分のちっぽけな心の安寧や人情を優先するよりも、今は冷酷に徹して、あの二人の命を無価値と切り捨てなければいけない。

でなければこの先、寄り道ばかりでどうやって一行の安全を守れるというのだろうか？―非人間的とも言える思考の御陰で、清田は真横で聞こえた弾倉を叩き込む音に咄嗟に反応できた。

清田は槓桿を引こうとしていた耕太の手を無造作に掴んだ。

「清田さん?!」

清田の思いがけない行動に、耕太が驚愕の声を上げる。

彼の手を振り解いてG28の薬室に第一弾を送り込もうとするが、臂力に大人と子供以上の差がありすぎて、耕太にはどうする事も出来なかった。

「…撃つてどうする?」

冷たく掠れた声で、清田が訊ねた。

「決まってるじゃないですか! あの親子を助けるんですよ!」

耕太の、至極真つ当な人間らしい感情から迸る言葉が、清田には何よりも眩しく、心に痛かった。

「それは此処にいる全員の命を危険に晒してでも?」

対する清田の無情な言葉も、この場にあつては紛う事なき正論だった。

「それは…」

熱くなっていた感情に水を差され、耕太が口ごもる。

「どちらが正しいと言えますか? 毒島さん?」

清田は耕太の右隣の冴子に目を向け、言葉を促す。



「……どちらとも正しいと思いますが、我々の状況を考慮すれば清田さんの言葉に従う他ないでしょう」

なるべく感情を表に出さないように、冴子は努めて素っ気なく答えた。

つい先程、陰惨な世界に慣れるべきだと主張した彼女だが、真つ直ぐな正義感を備えた心はそれを決して許容しないだろう。

内心では今すぐにも木剣を携えて亡者の群に斬り込みたいと思っていた。

胸の前で組んだ腕に、爪を強く立てなければ冴子は自分を押さえきれぬ自信がなかった。

「そういう事だ、耕太君」

マガジン・リリースボタンを素早く押し、清田はG28から弾倉を抜いて銃と共に耕太の手から取り上げた。

成す術もなく従う他ない耕太だったが、代わりに憎悪と怒りを込めて清田を睨み上げた。

だが、能面のような顔で清田は平然と受け流した。

冴子も、氷刃の如く冷たく尖った眼差しを向けてきた。

「君はこいつを撃つべきじゃないし、撃つ資格はない」

銃と弾倉を手に、清田は二人の視線が背中に突き刺さるのを感じながら部屋の中に引つ込んだ。

そして彼を迎えたのは、事態を静観していた残りの三人からの侮蔑の眼差しだった。

清田武という男に失望した、と言わんばかりの眼差しは、同時に清田を除いた全員から正常な思考が喪われている証でもあった。

真つ当な正義感と使命感を備える人間であれば、目前で命の危機に晒されている子供を放っておけないだろう。

尚更、自分達にそれを救うだけの力と手段が存分にある場合は――それは清田武という一個人が、それだけの難事を必ずやり遂げるだろうという期待を抱かせるに足る人物という評価でもあった。

しかし、その期待は裏切られ、今日一日で積み上げた信頼すら失う結果となってしまった。

だが、それでもいい——清田はそれらに対して大仰な仕草で肩を竦めて見せ、ベッドの上に銃と弾倉を放り投げて部屋の片隅に移動した。向けられる眼差しは非難がましいが、同時に一行の安全を疎かにして、感情による無計画な行動は出来ないという清田の論理を認めてもおり、彼を憎み切れてはいなかった。

清田は周囲に構わず、屈み込み、目当てのものを手にベランダに戻った。

清田が手にする代物に、三人とも目を疑っていた——そして、やはり彼という男は見上げた野郎なのだという安堵を覚えていた。

「撃つべきはこいつで、撃つ資格は俺にある」

そして清田はタクティカルベストを足元に置き、フルカスタムされたHK416を構え、ACOGサイトを通して、親子に迫ろうとしていた〈奴ら〉の一体の頭を照準し、引き金を絞った。

減音された銃声と、機関部が後退する音が響く。

一〇〇メートル先でその〈奴ら〉の頭部が、腐った西瓜のように爆ぜる。

硝煙を燻らせる葉莢が、きん、と鳴ってベランダに転がった。

事態を飲み込めない冴子と耕太が、清田の言動の不一致な行動に目を見開いた。

だが、清田は二人に構わず引き金を引き続けた。

撃って撃って撃って撃ちまくった。

まるで何かに憑依されたかのように、清田は没頭した。

親子に迫っていた〈奴ら〉が次々と頭部を撃ち抜かれ、湿った水音と共に頽れる。

すると弾倉が瞬く間に空になり、遊底が後退位置で停止した。

油臭い熱気が解放された機関部から放出され、周囲にモーターの焦げ付いた臭いが立ち込めた。

「君はこいつで俺を支援しろ。そして君にこの事態を招かせるような真似はさせられない」

最後にこれを見舞ったらな、と清田が呟くと、ぽん、と溜め込んだ空気が一気に抜けるような音と共に四〇mm擲弾が発射され、放物線

を描いて飛翔する。

親子の後背に迫っていたへ奴らゝの新手が道路上で纏めて吹き飛ばすと、清田は固い決意を漲らせた瞳で、二人に向かって頷いた。

†††

開戦の火蓋は切って落とされた―いや、切って落としてやったと言うべきだろう。

くそつたれな世界に対して俺は宣戦を布告する。

今は小難しい理屈は抜きにしようじゃないか―非人情的な数学上の換算で、清田には目前の親子を見殺しになんて出来そうになかった。

これが重責を担う立場にある者としては最低の行為であるとは自覚していた。

だが、もはや体を突き動かす激情を押さえ込める理性も、赴くままに駆動する肉体を宥めるエネルギーも彼には残っていないかった。

正直に白状すれば、純粹にあの親子を助けたいという利他的な思いと、あの親子を助ける事で殺した幼子に対する贖罪として少しでも自身の心に安らぎを齎したいという利己的な欲望があった。

むしろ後者の方が強い。

ああ、そうさ。俺は自分の為にこの集団を危険に巻き込んだ―半ば捨て鉢気味な思考に、自分自身で呆れ果てた。

そもそも、助けるのに理由が必要なのだろうか。

敵中に孤立した数人の兵士を助けるのに、航空機などの高価な兵器やありとあらゆる支援パッケージを投入する事など珍しくはない。

そこで見捨ててしまえば、兵士は軍に対して不信任を抱き、結果として士気の低下に繋がる―それと同様の事が、今は目の前で起きているのだ。

それに今は立ち直る切っ掛けが必要であり、見捨てていけば一行に芽生えた、自分に対する悪感情を払拭して新たに信頼を積み上げなければいけないという難事が待ち受けている。

どちらにしろ、あの親子は助けなければいけないのだ―思いつく限りの理由を列挙して、清田は理論武装して己を正当化した。

清田はタクティカルベストから弾倉を幾つか抜いてベランダの手摺に置くと、撃ち尽くした弾倉と擲弾の空薬莖を小銃から抜いた。

「耕太君！ 銃の扱いは大丈夫だな？」

ぽかんとしている耕太に、清田は有無をいわず小銃を押しつけた。

フルカスタムされたHK416のずしりとした重みに、耕太は慌てて我に返った。

「清田さん?!」

「そいつで俺を支援してくれ。G28じゃ銃声が大きすぎて目立つからな。ついでにこいつも渡しておく」

清田は耕太に米国ハリス社製の軍用トランシーバーを渡した。

銃と同じく、ロッカーの中に入れていた代物だ。

「チャンネルは既に合わせてある。俺が目標を指示する場合はその通りにしてくれ。それ以外は君の判断に任せる…あと、返事をする必要はない。了解したなら送信スイッチを二回押してくれ」

自前のヘッドセットの端子をもう一個のトランシーバーに差し込み、喉に装着したスロートマイクに向かって声を吹き込んだ。

『テスト、テスト、テスト…感明良し、終わり』

耕太の手の中のトランシーバーから清田の声が聞こえた。

「あと、グレネードは使うなよ？ あれはコツがいるし、慣れないと何処に弾が行くかも分からないからな」

ベストに屈み込み、拳銃の弾倉を幾つか抜き出しながら清田は続けた。

そして彼が肩越しに振り返っても尚、耕太は固まったままだった。

「何をぼさつとしてるんだ！ あの二人を助けるぞー！」

「は、はいー！」

清田の打って変わった態度に耕太はまだ戸惑っていたが、その叱咤で漸く自分のやるべき事を理解した男の表情となった。

耕太はHK416を構えようとしたが、アクセサリーがしこたま付

けられたら小銃は重いので、手摺にグレネードランチャーの装着された銃身を乗せて射撃姿勢を取った。

「LET&S ROCK!!!」

レティクルをへ奴らゝの頭部に重ね、獣のような笑みを浮かべて引き金を引いた。

押し殺された銃声と共にサイト内で爆ぜるへ奴らゝの頭部に、耕太は思わず射精するほどの快感を覚えそうになった。

銃火器はしばしば男性器に喩えられ、射撃は射精の代替行為と謂われるが、まさしくそうであると耕太は実感していた。

釘打ち機なんかでは味わえなかった、本物のスリルと充足感がそこにはあった。

やつぱりホンモノじゃなきゃー！引き金を引く度に強烈な解放感を腰骨あたりに感じながら、耕太は他人の銃で次々とヘッドショットを決めていった。

耕太の活躍を横目に、清田は拳銃の弾倉の幾つかをスウェットのポケットにねじ込むと、立ち上がって冴子に向き直った。

「毒島さん。俺はこれから装備を整えてあそこへ向かう。君は女性陣を纏めて不測の事態に備えてくれ」

そう指示を下してこの場を後にしようとした清田だが、冴子が咄嗟にその腕を掴んだ。

何事かと振り返った清田が見たのは、強い決意を宿らせた冴子の瞳だった。

「私も一緒に行きます。いえ、行かせて下さい！」

頑なな冴子の態度と言葉に、清田は少々戸惑った。

冴子が幾ら達人といえども、木剣では限られた活躍しか出来ないし、一振りで人間の頭部を容易く砕くとは言え、雲霞の如く押し寄せる亡者の前にはやがて力尽きるだろう。

だが、此処で彼女の申し出を無碍にするのも気が引ける。

事実、メゾネットを搜索する際には冴子に助けられているのだ。

彼女の機転がなければ、今頃清田は亡者として徘徊しているか、冴子自身の手で頭を砕かれていただろう。

清田は逡巡した末に、その申し出を受け入れる事にした。

「…分かりました」

清田の了承の言葉に、ぱあ、と冴子の表情が明るくなる―これから死地に飛び込もうというのに、まるでデートにでも行く年頃の少女のように。

「ただし、貴女はあの弓で自分を支援して下さい」

ロッカーの狩猟用コンパウンドボウを指差し、清田は言った。

「しかしそれでは」

だが、予想通り冴子は不満の声を上げた。

やはりこの少女は「こういう荒事」を好んでいる―清田はそんな冴子に若干の畏れを感じながら、言葉を続けた。

「今は少しでも火力が欲しいがやたらと銃声は出せません。そこで貴女の弓の腕前が必要なんです。貴女は階段下の門に陣取って、可能な限り支援射撃を行って下さい」

サウンドサプレッサー付きの銃よりも静かな射撃兵器を使わない手はない。

それに、と清田は腕を掴んでいた冴子の手をやんわりと外し、その掌に親指を立てて軽く握り込んだ。

「つつうー」

皮の剥けた掌をテープリングで覆っている今の冴子では、長時間木剣を振るうのも難しいだろう。

その現実には、漸く冴子も渋々と了承した。

「それでは行きましょう」

寝室に足を踏み入れると、残りの三人が清田の指示を待っていた。それぞれが銃を手を持っているが、彼女らには銃を撃つよりも重要な役割があった。

「三人はもしもの時に備えて荷物を纏めておいて下さい。もし、この場所を今夜中に放棄するのであれば、トランシーバーで連絡します」  
ロッカーにあった最後の一個を京子に渡す。

京子は、一瞬心配そうな表情を浮かべたが、直ぐに気丈な微笑みを見せた。

「分かりました。清田さん、毒島さん、気をつけて下さい」  
清田と冴子は頷き、戦闘準備を整える為に階下へ急いだ。

＋＋＋

乾燥機の中から戦闘服と下着を取り出し、清田は破り捨てる勢いでスウェットを脱いだ。

アンダーアーマーのスパッツを穿き、難燃繊維のシャツを着込み、厚手の靴下を履き、戦闘服に袖を通す。

乾き切っていない戦闘服はごわごわしていて、非常に不快だったが清潔なだけマシだろう。

今は素早い行動が重要なので、重くかさばるタクティカルベストと抗弾ベストは置いていく。

戦闘服の上着の裾をズボンにたくし込み、丈夫なBDUベルトにレッグパネルとレッグホルスターを括り付け、ファステイクベルトでそれぞれの大腿部に固定する。

そして簡易サスペンダー付きの弾帯を腰に装着し、手足の装備とヘッドギア類を手にとたととと玄関へ急ぐ。

タクティカルブーツの中から湿気取り用に丸めた新聞紙を取り出し、足をつ突つ込んで紐を強く引き締める。

自衛官の多くがズボンの裾を半長靴に突つ込むという、米陸軍スタイルだが、清田を始めとした特殊作戦群の隊員は動きやすさを重視して裾は外に出したままの米海兵隊スタイルだった。

ブーツの紐を結び、膝まで覆う防弾レガースを両脚に、肘まで覆う防弾アームガードを両腕に固定すると、頭に難燃繊維のフェイスマスクと空挺仕様の八八式鉄帽を被った。

暗視装置は装備する必要がないだろう。街灯などの光源は多くあり、戦闘をするには充分に明るい。

東富士演習場や北富士演習場も、場所によっては町明かりによって暗視装置が必要ないほどののだ――日本に於いて全くの暗闇は、人の手の届かないほど奥深い山中にしかないだろう。

最後にタクティカルゴーグルを目許に下ろして、清田の戦闘準備は完了した。

「お待たせしました。それでは行きましょう」

準備を終えるまで待つていた冴子に向き直る。

彼女はエプロンの上からチェストガードを胸に付け、矢筒を右腰に下げているという格好だった。

弓を保持する左手にはアームガードを装着し、矢を射掛ける右手にはグローブをはめており、不測の事態に備えて木剣を携えていた。

裸エプロンというのを除けば、やはり冴子には銃よりも刀剣や弓槍の類がよく似合う。

それは偏に、彼女が発散する静謐な闘気がそう思わせるのだろう。

マーシャルアーツやコンバットシューティングでは身に付ける事の出来ない、武道特有の高い精神性を身に付けているからこそ持ち得る雰囲気だ――心手期せずして技が駆動する、達人の妙技を目の当たりにしているからこそでもあるが。

清田はサプレッサーを銃口にねじ込んだUSPを手に玄関扉を開け、メゾネットの廊下に出た。

銃身下部に備え付けた、フラッシュライトに照らし出されたそこら中に飛散している血痕は、既に乾いているが鈍い光を反射した。

侵入しているかもしれない脅威に備えながら足早に廊下を渡り、エントランスを通り抜けてメゾネットの外に出る。

石畳のアプローチを踏み締め、階段を下りて門扉に到着すると、そこから耕太が次々と〈奴ら〉を射殺しているのを確認できた。

一〇〇メートル程先にいる〈奴ら〉は、遠目からだど独りでに倒れているように見えるが、実際は耕太が放った銃弾が正確に頭部を撃ち抜いている為だ。

銃火器からすれば一〇〇メートルなど目と鼻の先にも等しい近距離だが、静標的なら兎も角、多少なりとも移動している動標的に命中させるのは思った以上に難しい。

ろくに訓練をしなければ、二〇メートルも離れていないE的――自衛隊で使用されている標準的な人型標的――に立射によるCQB射撃を



命中させるのも難しいのだ。

彼は思った以上にやるな―素直に今は耕太の確かな射撃の腕前に感謝したかった。

清田は喉元のスロートマイクを手で押さえ、声を吹き込んだ。

「耕太君。今から門を出る。撃たないでくれ」

カチカチ、と了解の合図が返ってくるのを確認してから、清田は門扉に手を掛けた。

「それでは行ってきます…毒島さんは左右の通りから近付くへ奴ら〱を排除して下さい。正面はなるべく撃たないで欲しい」

狩猟弓の有効射程は銃よりも短いだろうが、射線上で行動しなければならぬのは、心情的には嫌なものだ。

「分かりました」

冴子は頷き、軽々とした身のこなしで門扉を据え付けている柱の上に登り、狩猟弓を構えた。

柱の上という、足場が限られているのにも関わらず、冴子は最小限でなおかつ安定したスタンスを取り、ゆるゆると弓を持ち上げ、矢を一本つがえた。

手近なへ奴ら〱は二〇メートルほど離れた場所でゆらゆらと動いているが、冴子はしっかりと目標に向かって肩を一直線にし、サイトを覗き込み、弓を保持する左手と矢をつがえる右手で弦の張りを均等にした。

弓を持つ左手は、右が引く弦に引っ張られすぎないように前に押し出し、右手は引きすぎないように注意し、顎で矢を摘む右手を固定した。

柱の上からでは路上のへ奴ら〱を撃ち下ろす形となるが、矢は緩やかな放物線を描いて飛翔するのであまり下に向けすぎると失中してしまう。

冴子が構える狩猟弓の弦を引く強さは、標準的な七五ポンド（三五kg）であり、鏃の重さは三〇〇グレイン（約二〇グラム）もあった。標準的な7・62×51mm NATO弾の弾頭重量は一四七グレイン（約九・五グラム）である事から、限定的な条件下ではあるが弓

矢の威力も馬鹿にはならない。

精神統一し、自然体に、何の意識もなしに、ごく普通に、冴子は右手を離した。

びゅん、と弦が風を鋭く切り、矢が放たれた。

大口径ライフル弾の二倍以上の重さがある鏃は、容易く人間の頭蓋骨を貫通し、その脳を破壊していた。

揺れ動く頭部を正確に射抜いた冴子は、矢を放った反動をフォローし、スルーした弓を素早く構え直し、腰から新たな矢を手に次の獲物を探した。

先程の射殺したへ奴らが頽れる音に引きつけられた新手を次の標的と定め、つがえた矢の照準を定め、弦を引き絞った。

張力七五ポンドの弦をそのまま引くのは、幾ら冴子が鍛えているとはいえ女性の腕力では難しいが、この狩猟弓には梃子の原理を利用した滑車機構が組み込まれており、それほど強い力は必要なかった。

二射目も滞りなく頭部に命中させた冴子の腕前に、清田は思わず門扉の柱の上に立つ彼女を驚きの眼差しで見上げた。

そして、丁度エプロンの下から覗き見る形となってしまうので、Tバックの必要最小限しかないクロッチによってくつきりと形の浮かび上がる、冴子の「女の子の大切な部分」を見てしまった。

という奴は―清田はフェイスマスクに隠された頬を赤らめ、咄嗟に目を外そうとしたが、ほぼ同時に冴子も足元の清田を見下ろしていて、両者の視線はかち合った。

「どうですか？ 私の弓も銃にも負けてませんね」

月を背景に涼やかに微笑む冴子は、まさに夜叉のように美しく、ぞくりとした妖艶さを漂わしていた。

この年齢で、これほどの色気を身に纏っているのだから、一体大人になったらどれだけの美人になるんだ―清田は別の意味で彼女の底の知れなさに畏怖した。

「ええ。その調子でお願いします」

清田は若干、羞恥からか掠れた声で応じ、照れ隠しに鉄帽を目深に被り直した。

冴子は、少し挙動のおかしな清田を不審に思ったが、両者の立ち位置から彼の視界が見る光景について直ぐに察した。

「…いえ。気にしてませんよ」

年頃の少女らしい、人並みの羞恥心が冴子にない訳ではないのだが、今はそのような事を気にしている場合ではないと承知していた。

「それに、信頼の置ける男性に見られるぐらいなら別に構いませんし…」

ぼそり、と呟かれた囁きは、清田の耳に届く事はなかった。

「それでは、此処の守りをお願いします」

気を取り直して、清田は音を立てないように門扉を押し開け、いよいよ敷地の外に足を踏み出した。

鉄帽の側面に取り付けてあるヘッドライトを点灯し、USPタクティカルを手に構え、握把に追加してあるフラッシュライトスイッチを握り込んだ。

街灯によつて十分な明かりが確保されているとはいえ、光源があつても損はない。

周囲に感染者の姿は少なく、彼らの意識は一〇〇メートルほど先の民家の軒先で練り広げられている、一方的な射的ゲームに向けられていた。

清田は、まるで潜行する巨大な潜水艦のように足音を立てず、亡者の合間をすり抜け、塀に張り付いた。

そして指を掛け、一気に身体を引き上げて塀の上に立った。

その塀は、道路と平行して建てられており、件の親子がいる民家の軒先まで続いていた。

清田ほどの巨漢が上に乗れば、幅の狭い塀の上は流石に場所によっては危うげかもしれないが、道路上を進むよりも安全だろう―尤も、バランスを崩せばそれまでだが。

拳銃をレッグホルスターに戻し、清田は初めはおっかなびっくり歩を進めたが、やがて慣れてくると小走り程度の早さで塀の上を駆けた。

一步一步が危うげで頼りなげで、やはり道路上を行けば良かったと

後悔していたが、交戦する必要がないのは有り難かった。

やがて修羅場の近くへと至り、清田は再び拳銃を抜いた。

そこからは軒先にうづくまる親子と、彼女らに迫ろうとするへ奴らへが悉く頭を吹っ飛ばされて頽れる様子が確認できた。

既に射殺もルーチンワークと化しているのか、民家の門扉の前には折り重なる無害な死者の遺体で土塁が築かれており、親子に迫ろうとしても足を取られて無様に転がるへ奴らへが多かった。

清田はいよいよ、親子のうづくまる民家の塀の上にまで辿り着くと、巨軀に反して軽やかに敷地内に降り立ち、足早に駆け寄った。

清田が駆け寄るのと、遺体の土塁を超えて敷地内にへ奴らへが侵入するのは同時だった―恐らく、耕太が再装填する絶妙なタイミングでこれを許してしまったのだろう。

銃口をへ奴らへへ向かって擬し、サイト・アライメント―照星と照門が一直線に並ぶ事―を取り、間髪入れずに引き金を絞った。

つい癖で、胸と頭部に一発ずつ撃ち込んでしまったが、胸に銃弾を受ければ流石に衝撃で多少なりとも硬直するので効果はある。

侵入した三体のへ奴らへはきっちり六発の9mmパラベラム弾で仕留め、清田は親子の傍に駆け寄って周辺を警戒した。

門扉からは新手が押し寄せようとするが、今の三体を除いて撃ち漏らしはないようで、目の前で次々とへ奴らへの頭部が爆ぜていく。

「耕太君。親子は確保した。まだ射撃は継続してくれ」

スロートマイクに声を吹き込み、耕太の了解の合図を確認してから、清田はうづくまる女性の肩に手を置いた。

瞬間、びくりと女性は震え、娘を抱きしめる腕に力を込めていた―が、何時まで経っても襲いくるであろう死者のあぎとの気配がないので、恐る恐る此方を振り返った。

しかし、清田が被る鉄帽のヘッドライトの光を直視してしまい、目を眩しそうに細めたので、彼は慌ててスイッチを切った。

女性は細めた目で清田の姿を確認し、感染者ではない事を理解してくれたが、いまいち状況が飲み込めていない様子だった。

安堵よりも戸惑いが大きいのだろう。

「自衛隊の者です。あなた達を助けにきました」

清田は通りを気にしながらそう名乗った―耕太の狙撃の御陰で、  
〈奴ら〉の数はかなり減っていた。

女性は戸惑うというよりも、疑い深い眼差して清田を眺めたが、漸く状況を理解したらしく、娘を抱いたまま立ち上がった。

「親子ともども助けて頂き、なんてお礼を申し上げたら…」

恭しく礼を述べようとした女性を手で制し、清田は自分の口元に人差し指を当てた。

「今は静かにして下さい…連中は音に敏感なものですから」

間近で重武装の巨漢に凄まれては、女性は押し黙るしかなく、表情をこわばらせて固く頷いた。

「…ママ？」

女性の胸元に顔を埋めていた女の子が、一変した状況に気が付き、恐々と顔を上げて母親の様子を窺っていた。

「大丈夫、大丈夫だからね…あります。もう大丈夫だから…」

押し隠せない不安を誤魔化すように、女性は娘を抱く力を強め、その額に優しくキスをしたり、背中や髪を撫でたりして最愛の者の存在を感じ取ろうとしていた。

重武装の兵士が助けにきたとはいえ、状況が好ましくない事は承知している―それは冷静に物事を把握している証に他ならないので、清田にとっては有り難かった。

親子が暫し、束の間の危機を脱したのをしめやかに喜ぶ姿を横目に、清田は拳銃から弾倉を抜いてダンプポーチに放り込み、新しく全装弾された弾倉を装填した。

そうやって母親に熱烈なスキンシップをされていた女の子だったが、やがて清田の存在に気が付き、ぎよつとした表情を浮かべていた。

自分の母親よりも、ひよつとしたら父親よりも一回りも二回りも大きな、しかも物々しい格好の大男には怪物と対面するかのような恐怖を感じているのだろう―それもまた、正常な思考ではあるので好ましい。

生への気力が失われた、あの幼子の瞳が脳裏に蘇る―何に対しても

無関心なあの小さな瞳は、もはや永遠に網膜にこびり付いて離れはしないだろう。

「……………」

きよとん、とした様子で、女の子は清田を眺めていたが、やおら母親の胸元に顔を埋め、そのまま彼を再び見る事はなかった。

「取り敢えず、此処から移動しましょう…自分の後ろに」

「はい」

女性は清田の指示に素直に従い、彼の広く大きな背中の後ろに隠れた。

「耕太君。今から親子を連れて外に出る…その前に通りの様子を確認するから気を付けてくれ」

カチカチ、と了解の合図が返ってきてから、清田は門扉の陰から通りの様子を窺った。

清田と親子のいる民家の周辺にへ奴らへの姿はなかった。耕太が一通り掃討してしまったようで、いたとしてもまだ大分距離があった。

全て消音器付きの銃火器による射撃だから、あまり遠くのへ奴らへを呼び寄せる事が無かったのだろう。

民家からメゾネットまでの進路上に脅威と呼べるものは少なく、疎らである。

「耕太君。俺がいる民家からメゾネットまでの進路上にいる標的を、君から見ても一番手前からどんどん狙撃していってくれ」

了解の返信の後、清田からすると一番メゾネットに近い一体が射殺され、どんどん火線がこちらに延びてきた。

最初の一体が狙撃されて、地面に湿った音を立てて倒れると、それに釣られて感染者達がメゾネット側に誘導されていく。

もし、清田達の周辺にいる感染者を狙撃すれば、その音につられてやってくる集団は前後から彼らを挟み込む形となってしまう。

清田は、少しでもへ奴らへの流れを一方に絞り、挟撃という最悪の状況を作り出さないように留意した。

暫く、へ奴らへの流れを見極め、十分に距離を取れるほどのスペースがそこかしこに出現したのを確認してから、清田は親子に合図した。

「行きましよう」

女性は硬い表情のまま頷き、その背に追従した。

清田が通りに出て、拳銃を構えながらメゾネットに向けて歩き出す。後方にも〈奴ら〉の集団を確認しているが、充分に離隔距離は取れているので心配はない。

問題は、耕太の銃弾が此方に飛んでこないかどうかである。

メゾネットの二階からだど、かなりの高所からの撃ち下ろしとなるので跳弾も少ないと思うが、地面への衝突角度が浅ければ此方に飛散しないとも限らない。

前方では、一体、また一体と、〈奴ら〉が頭部を撃ち抜かれて頽れていく。

いい腕だ。その調子だぞ——心の中で耕太に賞賛を送りつつ、清田は慎重に歩を進めた。

まるで屠殺場で整然と殺されていく家畜のようだが、〈奴ら〉と家畜には異なる点がある。家畜は食肉にされるのを察して恐怖を感じるが、〈奴ら〉に感情はない。

あるのは飢餓感——それすらも怪しいが——だけであり、もはや生物ですらない。

あと十メートルと少しの距離に迫り、門扉の横の柱の上で狩猟弓を携える冴子の勇ましい姿が確認できた。

まるで女武者だな——彼女の活躍の御陰か、周囲にあるのは矢を頭部で射抜かれた死体だけであり、清田の指示を忠実に実行していた。

「清田さん」

門扉に辿り着き、先に女性を中に入れてやりながら、清田は冴子に向かって親指を立てて見せた。

それを見て、冴子も緊張を解いた様子で安堵の吐息を漏らした。

「耕太君、よくやった。任務完遂：林先生、聞こえていればそのまま聞いて下さい。今夜はこのまま此処で夜を明かしましょう。放棄する必要はありません」

それだけスロートマイクに吹き込むと、清田はゴーグルを鉄帽の上に跳ね上げた。

だが、まだ終わってはいない――後ろ手で門扉の鍵を閉め、女性に向き直る。

女性は、まだ硬い表情のまま、自分達の今後の処遇について不安げだ。

清田は左腕にはめている、カシオのプロトレックに目を落としてから、女性を見た。

「もう夜も遅いので、今日は休みましょう…林先生、今から風呂と着替えの用意をお願いします」

スロートマイクに向かって京子に指示を出すと、清田は再びデジタル腕時計の液晶画面のバックライトを点灯させた。

時刻は既に深夜零時を回っており、日付が変わっていた。

長い長い一日が終わり、新たな一日が始まっていた。



## #2nd day①

自律神経は、交感神経系と副交感神経系から成っている。

殆どの器官がその両方の神経系から信号を受けとっているが、両者の神経系は正反対の働きをする。

例えば、交感神経系は心拍数を上げ、副交感神経系は下げると言うように。

交感神経系は消化を抑制し、アドレナリンとノルアドレナリンの分泌を促し、気管支と心血管を拡張させ、筋肉を緊張させる―つまり身体のエネルギー資源を戦闘という目的に向けて振り向ける役割を担っているのだ。

副交感神経系はその正反対で、内臓の働きを活発にして消化を促し、身体にエネルギーを溜め込む―これが優勢になるのは睡眠などリラックスしている時が多い。

そして朝が来て目覚め、シャワーを浴び、コーヒーを飲むと、いわゆるホメオスタシスに達する。これは交感神経系と副交感神経系の働きが釣り合っている状態である。

だが、戦闘などの生命の危機的状況に陥ればそれどころではない。

肉体の反応は完全に交感神経系に支配され、消化吸収などの副交感神経系の働きは全て放棄される。

消化などしている場合ではないのだ。

緊張や恐怖の為に唾液が分泌されずに口の中が渇くのはその為である。

そういった体験を、清田は今日という一日で何度もこなしていた。

そういう強烈な体験の後の揺り戻しは凄まじいものであり、それはセックスの際に男性の肉体に起きる現象に似ていなくもない。

勃起し、射精すると、急激に生理的な虚脱が起きると言うのは、戦闘も同じなのである。

死線を潜り抜けた直後に堪えようのない眠気や倦怠感に襲われるのは、交感神経系に費やされていたエネルギーを生産して充填しようとする肉体の正常な反応なのだ。

だが、今の清田の肉体と神経は異常なほどに高ぶっていた。

動悸は早く、頭は冴え渡り、ぶるぶると筋肉が震え、身体が疼いて仕方がない―これが過剰に分泌されたアドレナリンの燃え残りの所為であるのを、清田は自覚していた。

原因は、休息をとろうとしていた矢先にあの母子を救出した為だろう。

幾度となく強烈な体験をし、自己を否定したくなるような心的外傷を伴う行為も実行して、清田の心身は疲れ果てていて、彼の感情は別として、肉体は休息を欲していた。

あの恐ろしい行為の後、清田は自ら進んで仕事を探して体を動かして何も考えないようにしていたのだが、それが結果として今日一日で放出されたアドレナリンを燃やし尽くしていた。

そうして何時でも身体は休める態勢にあつたのだが、そこへあの救出劇によってアドレナリンが大量に放出されてしまった。

体内を未だに強力な神経伝達物質が駆け巡っており、それを燃やす手段がないまま清田は寢床についた。

戦闘に狙撃手として参加した耕太も同様の症状を現していたので、清田は彼に一時間ほどの見張りに立って貰い、高ぶる神経を宥めるように取り計らった。

冴子だけは特に変わった様子もなく、アドレナリンの残滓を燃焼させる必要がなさそうなので、他の女性陣と同様に二階で休んで貰っている。

清田は、自分も耕太と一緒に見張りに立てば良かったのではないかと後悔し始めていたが、新たに加入したあの親子の事が気になっており、すぐに駆けつけられるよう当初は一階のリビングに陣取る事にした。

目が冴えて眠れないので起きていようかと思ったが、肉体が疲弊しているのは事実であり、取り敢えず毛布にくるまってフローリングの床に寝転がった。

眠れなくとも目を瞑って横になるだけでも体力は回復する―この状況は最悪とは言い難い、と自らに言い聞かせた。

雨風をしのぐ寝床があり、温かい毛布があり、餓える事も渴く事も今の所はない。

任務遂行中に衣食住の心配をしないで済むのはかなり助かる。

清田は、地獄の空挺レンジャーの最終想定中、豪雨に見舞われた経験があるが、それに比べれば今の状況はまさに文明の恩恵を充分に受けられるといえた。

乾いた寝床と衣服があるだけでもはや何も望むべきではないのだ――戦闘行動中に衣服は一度濡れば乾く事はなく、そうなれば状態は悪化の一途を辿るだけだ。

惜しむらくは、頼れる仲間とあらゆる支援が皆無であるという点だが、そればかりはどうしようも出来ない。

そうだ。どうしようも出来ない。どうしようも出来なかったんだ――清田の思考は、気を緩めると、あの冒流的でおぞましい出来事へと向かっていってしまう。

永遠に赦される事のない罪と、誰にも与えられる事のない罰が、清田の疲れ果てた精神を苛む。

止めろ。そんな事は考えるな。考えたって仕方がないじゃないか――疼痛のように胸がずきずきと痛み、呼吸が苦しくなる。

目を瞑れば、あの光景が蘇ってしまう。

だから、涙に潤む瞳で天井を見上げ、加工された合板の紋様を目で追った。

精神が肉体を凌駕していた。

疲れ果てているというのに、今にも押し潰されそうな精神が休息を許す事はなかった。

そうやって悶々と悩んでいると、みし、と床板が微かに鳴った。

瞬間、行き場を失っていた血中のアドレナリンが本来の用途に使われるべく燃焼され、清田の五感が鋭敏となる。

侵入者、だろうか――清田は寝返りを打つ振りをして、身体をガラス戸に向けた。

玄関には鍵が掛かっており、出入りは庭に面しているリビングルームのガラス戸からではないと出来ないようになっていた。

暗闇に慣れた視覚には、不審な人影を認める事は出来なかった。みしり、と再び床板が鳴った。

それは背後からであり、どんどん清田に近づいてくる。寝ている振りをしている清田の緊張が高まった。

鼓動は早まり、思考が高速回転していた。

侵入者という訳ではないだろう。無論、感染者でもない。

だとすれば、今、この家にいる人間の内の誰かという事になる。

誰だかは分からないが、こんな時間に一階に降りてきて、清田に目的があると思われる以上、喉が渴いて水を飲みに来た訳ではなさそうだ。

しかし一体誰だというのだろうか？—清田は別の意味で身体を緊張させ、起きているのを気付かれないようにした。

やがて気配は背後で立ち止まり、謎の人物の呼吸を微かに聞き取る事が出来た。

呼吸音が近付いた—気配と音の変化から、その人物が屈み、座り、そして寝そべるのが分かった。

一瞬、清田の時間が停止した。

その人物は、清田の毛布にするりと身体を滑り込ませ、広い背中にびたりと密着させてきた。

背中には女体の軟らかな肉体の感触を覚え、項にその人物の、熱と湿り気の混じった吐息を感じた。

シャンプーだと思われるが、妙に甘やかな芳香にはとろけそうな気分させられた。

一体、こんな夜這い紛いの事をするのは誰だろうか—興奮と緊張がない交ぜになった頭で、清田は考えようとした。

刹那、清田はびくりと身体を振るわせそうになったが、寸でのところで堪える事が出来た。

女人の細い指がシャツの隙間に入り込み、つう、と脇腹をなぞったのだ。

ひんやり、しっとりした感触に肌が粟立ち、ぞくぞくとした悪寒が背筋を這い上る。

指先は、脇腹を通り過ぎ、清田の岩のように割れた腹筋に至ると、その割れ目の一つ一つに沿って滑り落ちていく。

ある意味で清田の頭の中では警報が鳴っていた。

マズいぞ。こいつはマズいぞ――腰骨のあたりにぞわぞわした感触を覚えながら、勝手に反応しそうになる自分の体の一部分を叱責する。

腹筋をなぞる感触から、その人物の爪が綺麗に整えられているのが判った。

同時に、ざらり、とした掌の感触に、清田は背後の人物が誰なのかを特定する事が出来た。

清田は、やんわりと悪さをする手を捕まえた。

びくり、と背後の人物は驚きに体を震わせたが、抵抗する事なく素直に従っていた。

全く、どうしてこんな事を――清田はやれやれといった心情で、背を向けたまま静かに声を発した。

「毒島さん」

思いの外、暗闇の中で声が響き、冴子は再び身体をびくりと震わせた。

手の中で、ざらざらとしたテーピングに包まれた冴子の手がぎゅつと握り締められるのが判った。

「どうしてこんな事を？…いや、言いたくなければ構いませんが」

清田は捕まえていた冴子の手を離し、お互いに顔を合わせるのが気まずかったので背を向けたままにした。

暫く冴子は押し黙ったまま清田の背に身体を預けていたが、やおら口を開いた。

「眠れなくて…すみません、軽率でした」

ぽつぽつと話す冴子は、いつもの冷涼と落ち着き払ったイメージからは懸け離れていて、妙に歯切れが悪かった。

眠れないのは解るとして、それがどうして夜這い紛いの行動に繋がるのだろうか。

最近の女子高生はよく解らないな――つい五、六年前まで自分が高校

生だった事を棚に上げ、清田は溜め息を堪えた。

「実は自分も眠れなくて。ずっともやもやしてました」

「…では、最初から気付いていたのですか?」

「ええ」

清田の言葉に冴子は羞恥に頬を赤らめ、彼の背に顔を埋めて誤魔化した。

そうやっていじらしく誤魔化そうとする冴子を、清田はちよつと苛めたくなってしまった。

まだ一日しか経っていないが、毒島冴子という苛烈にして凄艶な美少女は容姿通りに気高い女武者であり、近寄りがたい雰囲気纏っているのは充分に理解できた。

そんな彼女が、今はこうして年相応な恥じらいを見せているというのは一種のギャップであり、それがまた可愛らしいのだ。

だから、年上の男として、この少女をちよつとだけからかってみたくなったのだ。

「それで、こんな事を?」

清田は追及の手を緩めず、理由を問いただした。

眠れないからといってそれが破廉恥な行動に出る理由とはなり得ないが、やはり清田としては確かめずにはいられなかった。

世界がこんな有り様とはいえ、未成年と淫行紛いの事をするほど分別を失ってはいない。

五、六年前まで小学生だった少女とどうしてそんな事が出来よう。

清田の好みは年上の落ち着いた大人の女性であり、あわよくば包み込んでくれるような優しさがあるとなおよい。

「…解らなくて」

ぼつり、と冴子が答えた。

「心と体が堪え難いほど興奮していて、でも、どうすればいいのか解らなくて…自分でも、今、何をしているのか解りませんでした」

絞り出された声音は不安げであり、心細そうだ。

清田のシャツを掴む冴子の手は震えており、それが先程の戦闘で放出されたアドレナリンによる症状であるのが察せられた。

少しばかり芽生えた悪戯心も、自己に起きている変化に戸惑いと恐怖を覚えている少女を前にしては萎えてしまった。

武道に精通していても、戦闘という極度のストレス環境下で人体に生じる生理現象までは知らないのだろうか——今までは戦闘に次ぐ戦闘で、単純に自覚がなかっただけなのだろうかと清田は考えた。

清田と同様に冴子も、死者の埋葬や夕食の準備などの雑事によって身体を動かし、頭を働かせた事で結果としてアドレナリンの残滓を燃やし尽くしていたが、母子を救出する為に戦闘に参加してそのままにしてしまったが為に、こうして今はその後遺症に悩まされているのだ。

その知識がない冴子は、高ぶった興奮を収める為に、本能的に手近な雄との性的接触によって疼く身体を鎮めようとしたのかもしれない。

あながちそれは間違いではないかもしれない。

戦闘の興奮醒めやらぬまま、兵士が民間人の女性を強姦するというのは古今東西では多くあった事例だ。

あたり一面の死と破壊と恐怖を目の当たりにすると、自分が生きているという事を確かめたいという強い衝動が生まれ、それが人を性に走らせる事があるのだ。

遣り場のない戦闘の興奮を、性的な興奮によって代替的に満たす事で取り繕おうとするのは自然な反応だろう。

少女が戦闘後の後遺症に悩んでいると察する事が出来なかったのを悔やみつつ、清田は対処法を検討した。

アドレナリンは単純に体を動かす事で燃やし尽くするのが最も良い。サーキットトレーニングを四セットもこなせばクタクタになっめぐつすり眠れるだろう。

だが、アドレナリンの残滓の他に、心的ケアも行った方が良いだろう。

冴子は年齢に反して気丈そうに見えるが、どんな人間にも絶対というのではない。

今日という一日で経験した過酷な体験は、本人が思っている以上に

心身を蝕んでいるものであり、自覚のないままストレスを積み重ねればいつか暴発を招いてしまう。

そうなる前にある程度のガス抜きをする必要がある。

方法としては、過酷な体験をお互いに話し合い、共感を得るというものだ。

辛い記憶を抱えて独りで塞ぎ込むよりも、誰かの共感を得て寄り添って貰った方が慰めにはなる―それは清田も同様であり、彼自身が誰かに胸中を吐露したいという思いもあった。

これを情けない行いなどとは最早思わない。

自分の身を守る為に必要な行いであり、戦い続ける為に必要な儀式なのだ。

苦しみの共有は悲しみの割り算であり、人は抱え込んだ秘密の数だけ病んでしまう―人間は強くはないのだ。それを自覚しなければならぬ。

清田は寝返りを打ち、毛布の中に潜り込んで冴子と間近で目を合わせた。

冴子は、彼の突然の行動に戸惑い、慌てたが、真剣な眼差しに圧倒され、じっとしていた。

「今から自分は…いや、俺は自分の心を洗いざらいぶちまける。だから君もさらけ出してくれ。いいかい。これは必要な事なんだ。生き残る為に必要な事だから、恥ずかしいだなんて思わないでくれ」

冴子はこくりと頷き、清田は秘密を共有する同志としてひそひそと話し始めた。

清田は軽く深呼吸してから、胸中を吐露した。

「まず、俺は今日という一日で大勢の人間を殺した…嘘じゃない。死んで歩き回ってるゾンビじゃない。生きている人間を殺したんだ」

冴子の瞳は逸らされる事も、侮蔑の感情も浮かんではいなかった。それに少しの安堵を覚えながら、胸の中に抱えた鉛を吐き出すように、言葉を続ける。

「俺が撃ち殺した連中はどいつもこいつも悪党だった。俺と鞠川先生、林先生を殺そうとする。だから俺はそいつらの頭と胸に一発ずつ



鉛玉をくれてやった」

言葉と共に脳裏にあの時の光景がフラッシュバックする。

引き金の感触、発砲の衝撃、硝煙の臭い、弾き出される空薬莖、血飛沫と飛び散る肉片―全てが鮮明に網膜に蘇っては消えていき、新たな映像を再生させる。

「俺はろくでなし共を殺した事については少しばかりの罪悪しか感じていない。殺されて当然だ。そんな事をした代償を支払って貰わなきゃいけない。それが嫌なら最初から敵対なんかしなければいいのに、あいつらは馬鹿みたいに俺達に突っかかってきやがった…ぶっちゃけると、ざまあみろと思った」

殺人を犯したというのにほんの少しだけの罪悪感しか抱いていないのは、別に異常ではないと解っていた。

自己を正当化し、またその正当性が客観的に見ても立証されていると確信に足るからだ。

「悪党を殺した事についてはもうどうでもいい。問題は…そう、問題は、もつと、別の所にある」

あの事を思い出すと、呼吸が苦しくなり、瞳は潤み、嗚咽し、鼻を啜る音が混じり始めた。

冷や汗がだらだらと流れ、心拍数が異常なまで上昇する。典型的な発作症状に冴子は心配そうな表情をしたが、清田は苦痛を堪えて言葉を吐き出す。

言葉にして口にするのは苦行であり、今にも逃げ出したいほどだが、乗り越えなければいけない壁であるのならばどうしようもない。

ぶるぶると唇を震わせ、嗚咽しながら清田は続けた。

「俺が…俺が、あの女の子を殺したっていう事実が、途轍もなく怖くて、苦しくて、悲しくて、どうにかなってしまいたいほど全てを投げ出したくて…誰かに助けて欲しいって思った」

そこから先は、どうしてそうする必要があったのか、どうしてそうしなければならなかったのか、それにまつわる諸々を洗いざらいぶちまけた。

己の正当性の主張、抗しがたい要素の数々を並べ立てている間中、

清田は自分を情けないと思ったが、仕方がない、仕方がなかったんだと自らに言い聞かせた。

全てを言い終えた時、相変わらず胸はずきずきと痛むが、心に抱えていたものを誰かに聞いて貰えたというだけである程度は休まるような思いだった。

自身が休まる事にすら罪悪感を覚えたが、それが殺人を犯した後に訪れる強烈な自己否定性だと清田は自覚しており、なるべく凧い大海のような心で受け止めようと必死になった。

暫くの間、二人は無言となり、互いに見つめ合い、静かに呼吸する事ばかりに集中していた。

聞こえるのはお互いの呼吸音と、街中からさざめく亡者の呻きばかりである。

奇妙な静寂の中、冴子はそつと手を伸ばし、清田の頬に触れた。

肉の削げ落ちた頬に添えられた細やかな指先の温もりと感触を、清田は目を閉じて噛み締めるように感じた。

彼女は何も言わなかったが、添えられた指先だけで充分だった。

清田はその手を優しく握り、目を開いた。

眼前の冴子は、何か覚悟を決めたようなのか、少しばかり緊張した面もちだった。

触れたい。

もつと冴子に触れてみたい――乾いた砂に水を垂らすように、心が癒やしを貪欲に求めていた。

誰かの呼吸を、鼓動を、体温を、匂いを、切実に感じ取りたいと願った。

血を流し続ける心には、それを覆い塞ぐような誰かの存在が必要であり、それを感じ取るには肌を合わせるのが最良の方法だろう。

白い顔（かんばせ）を長い黒髪に縁取られた目の前の美しい少女は、きつと求めれば差し出してくれるに違いない。

少しばかり強張った表情も、恐らくその事に対して覚悟を決めている故だろう。

互いに背を預け合い、戦鬪を潜り抜けた間柄だからこそ、そんな確

信が清田にはあった。

出来るならば甘えたい。

その優しさを享受したい——つい先ほどまで、誰が年下の少女に欲情などするものか、と粹がつていたが、成熟の度合いに関わらず、目の前に自由に摘んでもよい果実がぶら下がっているという事実を認識した途端、この有り様だ。

安らぎを求める餓えた心を必死に宥め、清田は辛うじて押し留まった——実際に状況に流され、事に及んでしまつては取り返しがつかない。

そこまで俺は分別を失つてはいないぞ！——悲しみと苦しみにのた打ち、温もりを渴望する心に魂を身悶えさせながら、清田は強がった。

生唾を飲み込み、奥歯を噛み締めて声を絞り出す。

「ありがとう。俺の話聞いてくれて」

名残惜しそうに冴子の手を離し、次は君の番だ、とばかりに再び見つめ返す。

冴子は、清田の瞳から視線を外し、俯き加減に口を開いた——彼女もまた、他人の目を直視して語れない、暗く過酷な体験をしたのだろう。

「…私も、人を殺めました」

その事実にはさほどの衝撃は受けなかった。

むしろ、同じような経験をした人間がいるという事実には、心が少しだけ軽くなった気がした——清田はそのような自身の矮小な心の働きにまたしても自己嫌悪を感じた。

「学園で、既に手遅れだった生徒を介錯しました」

清田はその言葉を聞いてから逡巡した。

それは全くもって気高い行為だ、君は自身の心が傷つくのを躊躇事なく献身的に尽くした、だから何も気負う必要はない——そのような言葉、掛けてやるべきだろうか？

だが、声を発しようとしたところで冴子が続けた。

「私は、既にその事については納得…したつもりです。清田さんがなさった事と同列にして語れませんが、避けられない運命として受け入れました」

淡々と語る冴子は、必要に迫られたとはいえ、殺人を犯した少女とは思えぬほど落ち着き払っている。

なんと心の強い少女なのだろうか―半ば取り乱しながら胸中を吐露した自分とは違うその姿に、清田は惨めな気分を味わった。

「私の問題は、もっと別のところにあるんです」

伏せていた目を上げ、冴子は清田を真正面から見据える。

冴子の瞳は暗く淀み、まるで過去を追体験するかのように中空をさまよっていた。

毛布の中はお互いの吐息と体温で汗ばむほどなのに、一気に冷え込んだような錯覚を感じた。

「正直に白状しましょう…私は、殺人を犯した事については、それほど悩んではいません」

「え？」

戸惑いが言葉となって、思わず口から漏れ出た。

人を殺した事を「それほど」悩んでいない？―それは嘘だと、清田は直感した。

彼女は、全く良心の呵責もなにも感じてはいない。

路傍に転がる石ころを蹴ったような、そんな感覚で人を殺めたのだと、心で理解できた。

「最も戸惑ったのは、それを含めた、自分という存在の人間性です…」

冴子の形の良い唇から言葉が零れ落ちる度に、どんどん気温が下がっていくような気がした。

「四年前、夜道で暴漢に襲われました…無論、大事ありませんでした。その時は部活帰りの為、素振り用の木刀を携えていましたので。私はその男の肩胛骨と大腿骨を叩き割ってやりました」

静かな語りだというのに、言い知れぬ狂気を言葉の端々から感じ、清田は何も言えなかった。

「…：…楽しかった」

口角を僅かに吊り上げ、冴子がくすりと笑った。

「明確な敵を得られた事！ それは悦楽そのものだった！ 木刀を手にした自分が圧倒的な優位に立っていると知った後は…怯えた振り

をして男を誘い……躊躇う事なく逆襲した！」

暗い愉悦を押し隠そうともせず、狂気を宿した瞳は炯々と輝き、饒舌に語る冴子はそれまでとは全くの別人だった。

血に酔い狂う夜叉そのものだった。

「楽しかった……本当に楽しくてたまらなかった」

だが、急に少女の狂気は萎え、再び臥せ目となってしまうた。

「……それが真実の私、毒島冴子の本質なのです。まともな理由もなく力に酔える私が、果たして正常といえるのでしょうか」

それから冴子は押し黙ってしまった。

†††

どうしてこんな事を話したのか、冴子には自分自身が解らなかった。

それは恐らく、フェアではない、と思ったからだろう。

目の前の清田は、自分の立場もプライドも投げ捨て、全てを語ってくれた。

大の大人の男が、それも相当な修練を積んできた戦士が、涙と嗚咽混じりで胸の内をさらけ出したのだ。

そのような姿を、冴子は情けないとは微塵も思わなかった。

むしろ、あまりにも人間的すぎるその姿と心が羨ましく、尊いと感じた。

流星に己のうちに潜む狂気を明かすのは躊躇われたが、そうしなければ彼と釣り合いが取れないと思ったのは、まだ少なからぬ人間性が残っている証拠だったのだろう。

貴男の悩みは幸せだ、私は当然のような事を悩めもしないのだから——心の片隅では嫉妬に近い感情混じりに吐露したのも事実だったが。

毛布にくるまり、こうして無言でいるのは随分と長いように思えた。

事の始まりは、高ぶる心と体の行き場を求めたのではなく、殺人の技を身につけた「同類の人間」だと思った清田と二人きりで話しかっただけだ。

皆が寝静まった今の状況が、その為には都合が良かったのだ。清田

の身体をまさぐったのは、父親以外の鍛え抜かれた戦士の肉体に興味があつたに過ぎない。

冴子は、このような狂気を抱く原因の一つが、幼少の頃より父に叩き込まれてきた、戦う術に因るものと考えていた。

習い覚えた術が本当に効果的なのか、どのような威力を持つのか、それは武道に限らず、誰しも思う事だろう。

料理人の心理も似たようなものだろう——料理を作ったとしても、果たしてそれが本当に美味しいのか、自分以外の人間も美味しいと感じてくれるのか。

武道に関しては、技を駆動させるには心を同時に鍛えねばならない——肉体だけを鍛えたところで精神性が伴わなければ、ただの無法者だろう。

だが、結局のところ、必要とされる高い精神性も、技を如何に効果的に発動させるかという手段に過ぎない。

どのような状況にあつても平静で、動じない精神があれば、技の威力は更に高まる。

結局のところ突き詰めると、武道は他者よりも物理的に優れているという事を実証するものであり、それに携わる者の多くが優位性を誇示したいと願うものなのだ。ならば弱者をなぶつて悦に入る事は正常だといえる。

だが、果たして本当にそうなのだろうか？

そう考えているのは自分だけではないのか？——人間は孤独に耐えられない生き物だ。

だから、このような自分の狂気が発露しやすい状況に置いて偶然出会った、「戦士」を職業とする人間に聞いてもらいたかった。

もしかしたら、同類なのかもしれない、と清田に対して淡い希望を抱いていたのだ。

清田は、ずっと黙っている。

その表情は思い悩んでいるようにも、引いてしまっているようにも見える——やがて彼が口を開くには、随分と時間が掛かった。

「それはなんという事はないよ。謂わば練習を積んだアスリートみた

いなものだ」

妹に聞かせる兄のように、清田は親身になって語った。

「…俺も白状しよう。昼間、悪党どもを撃ち殺した時、自分がやってきた事は全て無駄じゃなかった、報われたという気持ちがあったよ…暫くの間、その事実を認められなかったけど」

苦笑しながら清田は言った。

「誰だってそういうものじゃないかな？ 学力や腕力の違いはあるかもしれないけど、自分の力を誇示したい、他より優れているのを証明したいってのは、別に異常でも何でもないと思うよ。それが今まで積み重ねてきたものであるのなら尚更だよ」

実にあっけらかんとした様子で清田は言った。

むしろどうしてそんな事を悩む必要があるんだ？ もっと別の問題で悩むべきだろう——言葉の端々にはそのような響きすらあった。

だが冴子は、清田が本心から述べているのか確かめたくて、再び口を開いた。

「本当に正常だと、そう思うのですか？ 私は、木刀で人間の頭を叩き潰したり、骨を砕いたりする事を楽しいと感じるんですよ？…正常な人間は、普通はそんな事に悦びを見出す事はありません」

冴子の言葉に、清田は眉根を寄せると、溜め息を堪えるような表情で言った。

まるで聞き分けがないな、とでも言いたげだった。

「それを含めて正常だと言っているんだよ。ならば俺は、銃で人間の頭を吹っ飛ばしたり、胸を撃つ事を楽しいと感じる異常者という事になる…いいかい。何が正常で異常だなんて、自分の尺度でしかないんだ。少なくとも俺は、それは人間の誰もが普遍的に備える暴力性の発露だと考えているよ。ムカつく奴をぶっ飛ばしたい——そう思うのと大差はないよ」

尤も、と清田は最後に付け加えた。

「例えば、幸せな家族連れを皆殺しにしたいのと、凶悪で卑劣な殺人犯を殺してやりたいと思うのは同列には語れないけどね。君がもし、前者すら蹂躪したいと考えるようでは、いよいよお手上げだ——君は自分

の暴力性に悩んでいるようだけど、力を振るうべき時と場所と対象を正常に判断できているのだから、それは全く普通だよ…俺だつて子供を手に掛けなければ、ここまで苦しまなかったさ」

これでこの話は終わり、とても清田は言いたげだが、冴子は納得がいかず、しつこく食い下がった。

「…一っだけ、まだ言っていない事があります」

毛布に包まれた暗がりの中、冴子は顔を赤らめ、呟く。

この事実を明かすのは、少しばかり羞恥を伴うので気が引けたが、全てを知った上で清田がどのような判断を下すのか、確かめたかった。

まだ私に羞恥心があったなんて！—少しばかり己に躊躇いがあつた事に驚きつつ、冴子は言った。

「暴漢を叩きのめした時、当時中学生だった私は…その、濡れてました」

一瞬、冴子の言葉の意味が解らない様子で、清田は小首を傾げていた。

その反応を見て、冴子はやけくそ気味にはつきりと言って伝えたい内容を清田に浸透させた。

「私は、四年前、相手に容赦なく木刀を振るっている最中に、性的に興奮していたと言っているんです。警察署で事情聴取されている間、自分のもので濡れた下着ばかりが気になって、それどころではなかったんです」

そこまで己の恥ずかしい内面を晒した冴子は、目の前の清田の顔を直視できなかつた。

冴子の言葉の真意を理解した清田は、当初はぎょっとしていたが、やおら考え込むように神妙な表情となった。

むしろ学術的な対象を前にした研究者、というふうにしげしげと冴子を眺めていた。

「暴力とセックスの関連性は深いから、それもまた正常な反応の一つと言えるね」

清田の飾らない明け透けな言葉に、冴子は戸惑った。



血生臭い暴力で感じてしまう事が正常だなんて、一体何をどうすればそんな考えに行き着くのだろうか―もしかしなくても、清田武という男は何処か狂っていて、まともな答えを期待するだけ無駄なのかもしれないとすら考えてしまった。

それ以前に、多感な思春期の女子高生に向かって、臆面もなくセックスという単語を言つてのける清田の精神はどうなっているのだろうか―尤も、このように殺人や暴力について語らいあっている時点で、両者とも普通とは言い難いだろうが。

「いいかい。セックスは謂わば征服行為の一つなんだ。男視点のセックス観について言わせて貰うと、女性の顔や膣内に射精する行為は強烈に征服欲を満たしてくれるものなんだよ…銃はしばしば勃起した男性器に例えられるが、成る程、確かにそうかもしれない。銃は勃起したペニスであり、弾丸は射精であり、それが相手を貶めるのはセックスも戦闘も変わらないだろう。ぶっちゃけ、相手を撃ち倒した瞬間、俺は確かな満足感を味わっていたしね」

卑猥な言葉を真摯な眼差しで言つてのける清田の方が、今は圧倒的に変態だと冴子は思った。

「あれは格闘訓練だったかな…初めて暴力で相手を叩きのめした時、恥ずかしながら勃起してたよ。そういう人間は多いものなんだ。それは恥ずかしい事なんかじゃない。兵士の中には、戦闘が病みつきになる者だっているんだ。謂わばセックス中毒みたいになるんだよ。過酷な状況下で、相手を征服したくてたまらないという人間がいるんだ」

清田は、心底から親身になつて語りかける。

それがどのような内容であれ、冴子を思っているからこそであり、初潮を迎えた無垢な妹の身を案じる兄のようだった。

「何度も言うが、それは正常の範囲だよ。だから深刻に考えては駄目だ」

「でも…」

しかし、そう諭された所で、直ぐに納得できる訳ではない。

自分に潜む凶暴性を知つてからというもの、冴子はこの四年の間

ずっと誰にも相談できずに思い悩んできたのだ。

それ故に少女らしい淡い初恋も諦め、女としては出来損ないという負い目があったのだ。

こんな女が、果たして人を好きになる資格があるのだろうか？—その悩みを氷解させてくれるに足る言葉を、冴子は欲していた。

「…そうか。君はずっとそれで悩んできた訳なんだね」

ふと、清田の表情に翳りが差す。

「自分の居場所がないと、そう思っているんだろう？」

清田の言葉は正確に冴子の胸を抉った。

自己の異常性を認めた時、他者とは違うという自覚が、冴子が自ら居場所を奪った瞬間だった。

身の置き場が何処にもなく、地に足が着かないような心持ちで冴子は今まで過ごしてきた。

誰でもいい。

誰か、こんな自分を認めて、受け入れて欲しい—だが、正体を明かした途端に拒絶されるのではないかという恐れも同時にあり、今まで沈黙するしかなかったのだ。

「俺も居場所がなかった…自衛隊という組織の中に、俺の居場所はなかったんだ」

訥々と語る清田の言葉に、冴子は耳を傾けた。

「何というのかな。馬鹿正直すぎたんだ。国を守るっていう事に。今思えば、聞き分けのないガキだったんだな…でも、肩の力を抜いて、周りを見て、俺と同じ人間が大勢いる事が解つてからは、やっぱり俺は此処にいてもいいんだって知つたよ」

清田は、その大きな手で冴子の頭を撫でた。

父親のように雄大で、兄のように親身なその手の感触に、冴子は目を閉じ、感じ入った。

「居場所がないと言うのなら俺と一緒に戦ってくれ。俺には君の力が必要だ。生き残る為にも、皆を救う為にも、君という存在は必要なんだ」

清田の大きな手に引き寄せられ、逞しい胸板に抱かれた。

薄いシャツ越しに伝わる、清田の体温と鼓動に顔を埋め、雄々しくも優しい体臭に包まれると、無類の安心感を覚えた。

出会ってから一日しか経っていないのに、まだ見ず知らずといても過言ではない男に心を許してしまう自分のふしだらさに、冴子は恥ずかしくなった。

だが、戦闘という特殊な状況下で通じ合い育まれた絆は、時には肉親以上に強固なものとなると実感していた。

高鳴る自身の鼓動は、きつと何か別の予感によるものだろう―喪つてしまった、淡い想いを取り戻せるという期待が。

「こう言うのも何だか気恥ずかしいんだけどな」

冴子を胸に抱きながら、清田は照れ隠しに頭を掻いた。

「君はまるで妹のように放っておけないんだ」

冴子のロマンチックな甘い期待は、少々裏切られた。

## #2nd day②

あれは入隊したばかりの頃だろうか。

平地ならば肌寒い日々が増え始めた中秋、部隊に配属されてから初めての演習は、既に寒さの厳しい北富士演習場だった。

新隊員教育隊は同じ釜の飯を食らう同期と、兄のように慕っていた班長しかいなかったが、部隊に配属されてしまえば同期も少なく、自分以外の殆どが先輩という環境の中で慣れない事をしなければならなかった。

初めて経験する事が多く、それ故に疲労も大きく、演習三日目の夜は今にも眠り落ちそうな目蓋を擦りながら、軀の芯まで冷える秋雨に打たれつつ、円ぴを振るってひたすら蝸壺を掘っていた。

防御陣地を構築する前に、先ずは空挺降下から始まり、富士の火山性の固い地面に叩きつけられるように降着し、全ての装備と重い落下傘を持って集合地点へ全力疾走で目指してから約一〇〇kmもの道程を行軍しなければならなかった。

疲労のピークの中、赤色に遮光したヘッドライトの僅かな明かりを頼りに、火山灰の固い地面に円ぴを突き立て、雨を吸って重くなった土砂を掬い、放り投げる―何時終わるとも知れぬルーチンワークに、心身は疲れ切り、思考する余力すら残っていないかった。

ぱらぱらと降りしきる秋雨が鉄帽に当たり、庇から雨水が絶え間なく滴り落ちる。

雨衣のフードを鉄帽の上に被っているとはいえ、時折首筋に雨水が流れ込むのを防止する術はない。雨に打たれ続けた透湿防水繊維製の雨衣は既に防水性と撥水性を失い、下着まで濡れている。

もう心は不快感を覚える事すらなかった。

ざく、ざく、と規則的に掘り進み、動く度にガチャガチャと身に付けた装具が鳴り、背負った小銃が揺れた。

がつ、と大きな石を掘り当てた感触を覚え、一旦手を止めてヘッドライトで足下を照らし、目を凝らす―何度目になるかもわからない岩石の発見に、溜め息をつく事すらなかった。

漬け物石ほどもありそんな火山岩を円びで掘り起こすのは大変な作業だ。そこでツルハシに持ち替え、頭上に掲げるほど大きく振り上げた。

ふと、顔を上げると、煌びやかな光が網膜に映った。

演習中は灯火管制が行われているから、色とりどりの光なんて見える筈がないのに――訝しみながらツルハシを下ろし、その正体を見極めた。

それは演習場の麓、河口湖畔に面した町の光だった。

暗闇と赤色灯に慣れた目には、遠い町明かりすら眩しく、思わず目を細めた。

あの光の一つ一つが人の営みなのだろう。

中秋の夜雨に打たれながら穴を掘っている人間などには関係ない、平和な日常がそこにはあった。

暫し眺めていると、一瞬視界がぼやけ、雨が目に入ったのかと思っただが、なんて事はない、涙が溢れただけだった。

いったい俺はなにをやっているのだろう――止め処ないやるせなさ  
が胸中に溢れ、思わず涙腺が緩んでしまった。

それから清田は、涙を零しながら穴を掘り続けた。

自分が本当にやりたかった事と現実の落差に、根底から否定されたような気がした。

俺は穴掘りをする為に自衛隊に入ったんじゃない――心は現状に対する不満を抱いていたが、頭では個人用掩体壕の必要性と重要性を認識していた。

それこそが自ら望んだ事の一つであると理解していたから、心を宥め  
め賺して目の前の蛸壺掘りに没頭した。

そうしなければ今にも座り込んでしまっそうだった。

高校を卒業して入隊したばかりの少年が、遠く故郷を離れ、仲の良い同期とも別れ、慣れない環境で冷たい夜雨に打たれながら穴を掘り続けるという苦行に、心が折れ掛けていた。

泣くな、泣くんじゃない。これがお前の望んでいた事だろう？――半ば自虐的に己を励まし、清田は嗚咽を堪えながら円びを振るった。

演習が終わったのは、清田が十個目の蝟壺を掘り終えた頃だった。無事に演習を終えたという余韻に浸る暇もなく、今度は掘った穴を埋め戻す作業が待っていた。

涙はとうに枯れ果てており、砂漠のように渴き、疲れ切った心で、清田は重い軀を引きずるように動かした。

心にあるのは、早く全てを終わらしたいという思いと、〃もつと刺激的で過酷で使命感溢れる〃任務に携わりたいという望みだった。

†

どうして今になって、新隊員の頃を思い出したのか―清田は己の心の働きを、漠然とだが察した。

初心に還れ、という事なのだろう。

何を成す為に肉体を鍛え、技を磨き、苦難に挑み、打ち勝ってきたのか。

与えられた任務をこなし、寸分の狂いもない機械のような兵士で在り続ける―それは研ぎ澄まされた刀と等しい。

だが、本来であれば刀は鞘から抜かれぬまま錆び付き、朽ち果てるのが好ましいが、今となってはそのような事は言ってられない。

抜かれたからには刃零れ一つなく、一刀の元に斬り伏せる威力を保たなければならぬ。でなければ鍛え上げた意味がないのだ。

鈍った瞬間、死に近づく。

いや、鈍れば、それは死に直結するといっても過言ではない。

人間である以上、エラーを完全に排する事は不可能だが、その為の努力を注ぎ込む事は可能だ。

触れれば容易く柔肉を裂く切れ味を持ち続けなければならない―清田は今一度、密やかに自己を戒めた。

刀のように在続けるには、切れ味を鈍らす要素を排除しなければならぬ。

清田は眼前に右手の人差し指を翳し、引き金を引く動作をした。

俺は引き金だ。ただそれだけでいい―外科医のような精確さと判断力を併せ持った引き金にいるには、余計な感情はいらない。

眼前の対象が脅威なのか、無害なのか。

脅威であれば速やかに撃ち殺すか、刺し殺すか、殴り殺すか。

対象を無力化する最適な手段と方法を選択し、何の躊躇いも翳りもなく実行する。

それについては既に立証されている。無法者を何人も殺しているのだから。

だから大丈夫だ。俺はやれる―何度も自らに言い聞かせ、夜が明け  
る四月の涼やかな空気を肺一杯に吸い込み、吐き出す。

清田はキャンプ用の折り畳み椅子に腰掛けていた。

これは敷地の片隅の物置から引つ張り出してきた代物で、こうして  
庭で見張りに立つのに都合が良かった。足下には蚊取り線香も置いてあり、用意は万全だ。

膝の上には小銃を乗せ、傍らに置いたもう一つの椅子の上にはチーズやサラミ、雑多な菓子類と飲料を置いてあった。

あの後、冴子が二階の寝室に引つ込むと同時に見張りの時間となり、清田は軽く摘める物をかき集めて耕太と交代した。

チーズとサラミを摘んでいると、つついっいビールが飲みたくなつた。

こんな状況でなければ、曙光を着に朝からビールという贅沢を楽しみたかったが、致し方ない―尤も、絶え間なく聞こえる亡者の呻き声でそんな気分になれる筈もなく、任務中という状況下でそんな軽率な事を出来る訳がなかったが。

双眼鏡を床主大橋に向けると、もはやそこは犇めく亡者に埋め尽くされており、放棄された車両が散乱していて通行が困難だった。

必死に封鎖線を張っていた警察や消防の姿は見えない。

〈奴ら〉の群れの中に、警官や消防士の姿が混じっており、既に封鎖が破られてしまったのは明白だ。

これで床主大橋を通行するという選択肢は消えた。

高機動車が米軍のハンヴィーみたいに渡河能力が高ければいいのだが―高機動車は膝丈程度の浅瀬ぐらいしか問題なく渡れないので、渡河という選択肢も有り得ない。

計画としては、可能であれば御別橋を渡りたいが、駄目ならば別の

橋を探すしかない。

御別橋は大橋よりも下流にあり、此処からでは望める事は出来ない。

偵察が必要だろう。

何の情報も収集せずに御別橋に向かえば、そこで身動きが取れなくなるという可能性もあるのだ。

折角手に入れた車両や武器、物資をそのような詰まらない事で手放すのはなるべく避けたい。

そうと決まれば行動に移るべきだろう――空が白み始めてから少し経つと、部屋の中から人の気配が感じられた。

何名かが起きて、今日の行動の準備をし始めているのだろう。最早見張りは必要ない。

清田は椅子から立ち上がると、残っていた菓子類を口に放り込んでバリバリと咀嚼し、チーズとサラミにかぶりついて数口で食べ終えた。

小銃を片手に庭に面したガラス戸からサンダルを脱いで部屋に上がり込むと、毛布にくるまった耕太が床で盛大に鼾を掻いていた。

何の悩みもなく爆睡している耕太を羨ましく思いながら跨ぎ越え、台所を見やると、エプロン姿の冴子の背中があった。

今の彼女は昨晚の裸エプロンではなく、藤美学園の制服の上からエプロンを身に付け、朝食の準備に勤しんでいた。

だが、腰に穿いているのは学生服のスカートではなく、黒いタイトスカートだった。

ぴつたりと張り付くような生地が、冴子のきゅつと引き締まりながらも大きめな臀部を控えめに強調していた。

すらりと伸びる足も、レースに縁取られた、セクシーなデザインのストッキングに包まれている。

スカートの裾から覗く、ストッキングに包まれていない白い素肌が眩しい。

「毒島さん」

清田に呼び掛けられ、冴子が振り向くと、家事をしやすいように後



頭部で結われていたポニーテールが揺れた。

「おはようございます、清田さん」

涼やかに微笑む冴子は、昨晚—といつても今からほんの数時間前だが—の出来事を微塵も気に留めてもいない様子だった。

毛布の中、互いの吐息と体温を寄せ合っていたのが思い出され、清田は思わず赤面した。

くそ、気にしているのは俺だけか?—別にやましい事は何もなかった。

むしろ、冴子の告白を聞いた瞬間、まさしく清田の胸中に生まれたのは、兄が妹へ抱くような愛おしさだった。

彼女は、自身の異常性に悩んでいた。だが、そのような暴力的な願望は人間にとつては普遍的なものであり、悩むほどのものではない。

問題なのは、それを制御しうるかどうかという点である。

冴子がそのような呵責なき暴力性を発揮したのは、暴漢に襲われた時と、現在のこのような状況ぐらいなものだろう。

それを弁えていれさえすればいい。それすら解らないようでは人格に問題ありと言えたが、冴子は至つて「正常」だ。

清田からすれば、そのような自己同一性に頭を悩ます年下の少女は、まさしく妹のように放っておけない可愛い存在だ。

ここは年長者として、戦闘に携わる者として教え導いてやらねばなるまい—清田の冴子に対する対応は、このようなものだった。

「おはよう。よく眠れたかな?」

何気なく言つたつもりだが、やはり気恥ずかしさがあった。

妹分と思いつつ、大人びた妖艶さを漂わす美少女と間近で接していたとなればそれなりの照れはあった。

「はい…これから何処かへ?」

返事をするものの、清田の物々しい雰囲気を感じたのか、そう訊ねる。

「いや、ちょっと偵察にいくこうと思つてね。御別橋を渡ろうと思つただけど、そのまま現地に行つて駄目だった場合、そこで足止めを食つてしまうかもしれないしね。今は大所帯だから、行動は今までよりも

慎重にしなければいけないし」

そう、今まで以上に慎重になる必要がある。

車両と武器を入手すると同時に、新たな人員の加入により集団の規模が大きくなり、昨日のような無計画で突発的な行動はもうするべきではない。

何よりもまず優先するべきは、高城沙耶の安全である。

どうしてそうする必要があるのであるのか定かではないが、課せられた任務である以上は従う他ない。

可能な限りリスクを排除し、沙耶の身柄が安全と思われる計画を練り、的確な状況判断を下さなければならぬ――その為の苦労は惜しむべきではないのだ。

今まで以上に清田の負担は増加するが、それについては仕方がない。

その為の訓練を積み重ねてきたのだから。

「私も……いえ、何でもありません」

一緒に行きましょうか、と冴子は言い掛けたが直ぐに言葉を嚙み、伏せ目がちに力無く微笑んだ――その笑みの理由は、暴力に餓えた己に対する自嘲だろうか。

上手く掛ける言葉が見つからなくて、清田は冴子の手元を何気なく見た。

まな板の上にはさつと茹で、冷水で冷やして水気を切ったほうれん草の束があった。

その他には炒り胡麻の袋があったから、冴子はほうれん草の胡麻和えを作ろうとしているのだろう。

清田はそつと冴子の肩に手を置いた。

はつとして彼を見上げる瞳には、戸惑いの色が浮かんでいる。

「一つ、頼んでもいいかな」

「えっ？」

「胡麻和えにはめんつゆを入れて欲しい」

一瞬、間が空く。

冴子はきよとんとしていた。

「めんつゆで味付けすると美味しいんだ。鶏の照り焼きは作れる?」  
「え、ええ。作れますけれど」

狐狸に化かされたような面持ちで、眼前の清田の問いに答える。  
「ちよつと甘めで頼むよ。それとは別にベーコンエッグも。ウインナーもあれば食べたいな…後はそうだな。他の部屋で見つけた国産牛のパックがあったね。朝から豪勢に焼き肉といこう。それとお歳暮用のハムもあつたなあ。兎に角、高カロリーなものを食べさせて欲しいかな」

清田は自分の食べたい物のリクエストを一通り伝えると、にっこりと笑った。

それに毒気を抜かれたのか、冴子もつられてくすりと笑う。

「朝っぱらから辛気臭いのは駄目だよ。君は立派だ。卑下しなくてもいい…嘘じゃない、本当さ。だって俺の命を救ってくれたし、俺の話聞いてくれた」

昨晚の寝物語が思い起こされると、胸が痛むと同時に、少しばかりの安堵感が蘇った。

清田からすれば、心につかえていた重石を聞いてくれただけでも冴子の存在は有り難かった。

「君という少女は強くて立派で、おまけに料理上手だ。本当にありがとう」

冴子の手を取り、万感の思いを込めて両手で握る。

触れ合った清田の肌から感じる彼の真摯な想いに、冴子は凝り固まった心を解きほぐされるようだった。

「ふふふ…そんなに私なんかを褒め殺しても、何も出ませんよ?」

冴子も、清田のごつい手を握り返す。

細やかな指先からの圧迫感が愛おしい。

「それじゃあ、俺は準備が出来次第、出発するよ。朝飯までには戻る」  
冴子の手を名残惜しげに離し、清田は準備に取りかかった。

レッグホルスター、レッグパネルを両太腿に装着し、弾帯を腰に巻き、抗弾ベストを頭から被るように着込み、その上に更にタクティカルベストを着込む。

両腕にアームガードを付け、玄関の上がり框でタクティカルブーツを履き、膝当てと一体化した防弾レガースをしつかりとベルトで固定する。

最後にタクティカルグローブを詰め、フェイスマスク、鉄帽を被って準備は完了となった。

携行火器のチェックも忘れずに済みます。

小銃、拳銃はもとより、破片手榴弾、四〇mmグレネード弾についても異常がないか確かめる。

昨日撃ち尽くした弾倉については新たな弾薬を込め直す暇がなく、小銃には箱型弾倉を装填していた。

デイパックと散弾銃については置いていく。

携行する弾薬と火器は充分すぎるほどであり、散弾銃でブリーチングする状況が生起する可能性は低く、火力についても小銃と拳銃があれば事足りるし、そもそも交戦はなるべく避けるつもりだ。

それぞれの銃の遊底（スライド）を引き、薬室が空である事を確認してから弾倉を装着し、弾薬を装填する。

薬室に弾薬を送り込む小気味良い金属音が、清田を戦闘する者として目覚めさせる。

何度繰り返したかも覚えていない手順だが、そこそが重要だった。

精神がどのような状態であろうとも意識せずに肉体が寸分違わぬ動作を自動的に実行する。

弾薬を装填した小銃を構え、玄関の壁に掛けてある姿見に向けてA COGサイトを覗き込む。

姿見に写っているのは、フルカスタムされた小銃を構える重武装の兵士だった。

いつも通りの清田の姿がそこにはあった。

大丈夫だ。俺はやれる――喪失しかけていた自信を無理にでも叩き起こし、奮い立たせる。

「待つて下さい、清田さん」

自己暗示も済んだので小銃を手に框から腰を上げたところで、背後

から冴子に呼び止められた。

振り返ると、冴子が皿を持って佇んでいた。

皿の上には海苔に包まれた特大の握り飯が二つと沢庵が盛られている。

「せめて軽く食事を取ってからにしませんか？」

冴子のその心遣いが素直に嬉しかった。

清田は偵察程度で死ぬつもりなど毛頭なかったが、これが最後の食事になるとも限らない。

温かな食事を取る事で少しでも生きる活力となるのならば、それに越したことはないだろう。

「ありがとう。喜んで頂くよ」

清田が再び框に腰を下ろすと、貞淑な妻よろしく、冴子が傍に膝を折り敷いて座った。

「どうぞ。召し上がってください」

皿ごと受け取り、グローブを填めたままの手で握り飯の一個を手にも、フェイスマスクの口元を露出させて豪快にかぶりつく。

清田の大柄な体格に合わせて握り飯は大きめだったが、それでもほぼ一口だった。

口内に広がるのは、濃厚なバター醤油味と、とろりと溶けたチーズのまろやかな味わいだった。

高カロリーな食事を望む清田に合わせて、冴子が気を利かせて短時間で用意してくれたのだろうー朝っぱらからチーズ入りのバター醤油おにぎりとは、なんとも胸焼けがしそうだが、代謝の高い清田にはこれ以上ない食べ物だった。

「美味しい。凄く美味しいよ。ありがとう」

思わず顔が綻び、清田は感謝の言葉を口にする。

そうして沢庵を口に放り込み、最後の一個も瞬時に平らげた。

「お口にあって何よりです」

空の皿を受け取り、冴子がほっとした表情で言った。

「それじゃあ、朝飯、楽しみにしてるよ」

胃も心も満たされ、清田は晴れやかな気分で立ち上がった。

肉体の欲求が満たされるだけで士気は上がる。  
それで充分だった。

「あ、でも…」

扉の取っ手を握り、清田が振り返る。

「肉類は止めた方がいいかもしれないね。こんな状況だから…さつき  
の事は忘れて欲しい」

既にこの状況に慣れてしまった清田だが、死体が溢れ返る現状に於  
いて朝から肉を食べられる凶太い神経を持ち合わせた生存者がいる  
のだろうか。

少しばかり配慮が足りなかった事を反省しつつ、清田は死者の街へ  
赴いた。

†

こいつは思った以上に厄介だな―塀の上に陣取り、双眼鏡を覗き込  
みながら、清田は溜め息を堪えた。

御別橋は床主大橋よりも立派なトラス橋で、上下三車線の立派な代  
物だった。

無論ながら此処も封鎖されていたが、放棄された警察車両や消防車  
両の周囲に生存者の姿はない。

幅の広い道路に屯するへ奴ら〴〵の数はそれほどでもなく、上手く誘  
導すれば乗り切れるだろう―尤も、一掃するという訳にもいかない程  
の数だ。

ただ、問題なのは、対岸に渡りきろうという所に、大型のコンクリー  
トブロックがバリケードとして並べられており、車両での通行が不可  
能という点だった。

あれを退かさない限りは御別橋の通行も諦めねばなるまい。

清田は後ろ腰のバットパックからジップロックで防水処置された、  
床主市の地図を取り出した。

地図を広げ、他のめぼしい橋を指で追う。

此処から上流に四、五kmほど遡上すれば橋があるが、其処も通行  
できるとは限らない。

いつそのこと、高機動車が渡河可能な浅瀬がある上流まで遡上する

という手段もあるが、時間は有用であり、なるべく速やかな方法を選びたい。

コンクリートブロックを爆破処理できるほどの爆薬は携行していない―護岸工事に使われるような大型コンクリートブロックを爆破するとなると、TNTが百キロ単位で必要となる。

無論ながらLAWでも無理だろう。

対戦車榴弾は戦車の装甲はもちろん、バンカーなどにも有用だが、あくまでもモノロー効果で装甲やコンクリートに穴を穿ち、内部の人員や機材を破壊するだけであり、そのものを粉々にするだけの威力はない。

御別橋は諦めるしかない―地図を仕舞い、清田は改めて双眼鏡を向けた。

その時、あるものが目に留まった。

それを一目見た瞬間、清田は故郷の雪国で身に付けた技術が役に立つ時が来たのだと直感した。

警察や消防の車両と同じく、それは放棄された車両なのだが、車体が黄色に塗装されたそれは、間違いなくこの状況を打開できる代物だった。

問題は燃料が残っているかどうかだ。

その車両の周囲にへ奴らへが群がっていない事から、エンジンが停止しているのは明白だが、それはエンジンを点けたまま燃料を消費し尽くしてなのか、運転者がエンジンを切ったものによるのか。

それを確かめない限りはぬか喜びに終わってしまう。

清田は身に付けている全ての火器の薬室を確かめ、考え得る不測の事態に対する予行演習を脳内でぎつと済ませてから、塀の上から飛び降りた。

†

目覚めは、多分、悪くはない。

フローリングの床に毛布を敷いただけで眠るなんて、町内の子供会で催されたお泊まり会以来だろうか。

むくりと起き上がり、座ったまま頭上に手を伸ばして背伸びする。

関節が湿った音を立て、凝り固まった筋肉が少しだけ解れた。

沙耶は、枕元においてあったケースから眼鏡を取り出して掛けた。ぼんやりとした視界がはつきりとした輪郭を形作り、実像を形成する―薄暗い寝室内は、女だけで雑魚寝しているという有り様だった。それについて沙耶は不満を抱いている訳ではない。

今は非常事態であり、こうして安全な場所で睡眠を取れるだけマシだ。多くの人間はそれどころではなく、自分達がこうしている間にも過酷な生存闘争を繰り広げているに違いない。

そう。私達は運に恵まれている―沙耶は、学園で出会った人物について思いを馳せた。

まるで映画から抜け出てきたかのような、完全無欠の重武装（ヘヴィメタル）のたつた一人の軍隊（ワンマンアーミー）。

まさかそんな存在が、アメリカではなく、日本にいるとは予想だにしていなかった。

沙耶からすれば見上げるような巨体に重装備を施し、魔法瓶そのこけの巨腕で軽々と重たげな銃火器を操り、鬼のように力強く歩み、銃弾の一発一発を致命部位に必中させる外科医のような技量を備えている。

スクリーンの中でない限り、ランボもメイトリクスも彼にはかなわないだろう。

唯一彼に匹敵するような男は、自分の父親ぐらいなものだろうと沙耶は思っていた。

そのように屈強な兵士が、どうして藤見学園にやってきたのか。清田の存在を有り難いと思う反面、素直に喜べないのも事実だった。

学園以外にも救いの手を求める人々は幾らでもいる。

そのような状況なのに、どういった基準なのか定かではないが、一介の私立高校を救出対象として選定して部隊を派遣するとは到底思えない。

仮にただ救出にやってきただけならば、彼らを投入する必要があると言えるのだろうか。



精鋭部隊はここぞという場面まで温存されるべきであり、いたずらに使い減らす訳にはいくまい。

それらを鑑みて、普通の私立高校に日本の国防上の最高機密に属するであろう特殊部隊を投入する必要があるのだろうか―裏を返せば、彼らが投入されて然るべき理由があつたという事でもある。

故に彼には何か目的があると考えるのが自然だ。

それが判明しない限り、清田武という男に全幅の信頼を置く事は出来ない。

我ながらひねくれているとは思うが、合理的かつ論理的でない気が済まない性分なのだ。

どう考えたって筋が通らない以上、不審に思うのは仕方がないだろう。

但し、自身の感情はさておき、清田は見上げた野郎であるという事実も沙耶は認めていた。

自分達の為に先頭を歩き、命を危険に晒している。それが彼の職業上の責務とはいえ、その勇氣は讃えて然るべきだ。

同時に、このような状況下では忘れてしまっていた、人間らしさを目の当たりにした―死者の埋葬など考えもしなかった自分に、沙耶は少しばかりの嫌悪感を抱いた。

〈奴ら〉といえど、動かなくなければ無害な死体である。

沙耶とて平均的な日本人として、死者の亡骸は丁重に扱い、手厚く葬るべきだと考えている。

だがそれはあくまでも平時であり、この非常時にあつて優先すべきは自己や仲間といった生ける存在であり、ただの肉塊に成り下がった元人間に心身のリソースを割く余裕はなかった。

人間も死ねばただの有機質の塊である。

死者が泣いたり笑ったりする訳ではないどころか、何も思う事は無い、ただの物体になるだけだ。

そこに湿っぽい情けが介在してなんになるというのだ?―唯物論的な思考が、この時ばかりは便利だと思つた。

しかし、それにも関わらず、彼は人間らしさを忘れず、己の心身の

疲労など気にする事もなく、涙を流しながら死者を葬ろうとした。

それは無言の抗議に思えた。

俺はこんな現実には認めないし、受け入れる訳にはいかない！——この変貌した世界に対して彼は抗おうとしているのだと、沙耶は察した。

こんなにも強く気高い男が、まだ日本にはいたのかと、心底から感嘆した。

目的が不明である故に信頼できないとはいえ、その精神性までを否定できる訳ではない。

取り敢えずは、そこまで彼について心配する必要はないのかもしれない——寝起きの頭でこんな事を考えるのは少々疲れるわね、と沙耶は胸中で呟き、何気なく寝室内を見渡した。

部屋の中央に置かれているキングサイズのベッドでは、昨晚保護した母子が眠っている。

流石に子供を床で寝させるのは可哀想だし、何より命辛々生き延びたばかりなのだ、少しでも二人には寛いで休めるように配慮してやるのが当然だろう。

沙耶の他には京子と静香が毛布にくるまって床で寝ていたが、冴子が横になっていた場所にはきちんと畳まれた毛布が置いてあるだけだった。

耳を澄ませば、階下から微かな物音がする。

冴子の事だから、恐らく皆の食事の用意でもしているのだろう。

取っ付きにくいのが、冴子は意外と面倒見が良い。

学園内では有名な人物だったが特別に接点があるという訳でもなく、女子剣道部に所属するクラスメイトからその人となりは多少なりとも耳にしていた。

しかし、このような慣れない状況でも他者を配慮して行動できるのには恐れ入る。

きっと彼女には余裕があるからだろう。

冴子が備える並外れた武力が、彼女に余裕を与えているに違いない——その技前は清田とはぐれた後の道中で目の当たりになっている。

耕太も釘打ち機で戦ったが、木刀一本で何体もの〈奴ら〉を壮絶に

薙ぎ払っていくその姿は驚愕するばかりであり、父親の剣術に勝るとも劣らない。

女子高生が木刀だけでゾンビを容易く屠るなんて、漫画やアニメの中でしかあり得ないと思っていたが、真に術を身につけた達人というのは実在するのだと、考えを改めさせられた。

父の壮一郎も剣の達人だが、冴子は齡十七の少女なのだ。時代が違えば劍聖と謳われていたかもしれない。

毒島冴子という少女に対する沙耶の評価は大変好ましいものだが、なにもその全てが手放して賞賛できる訳ではない。

一つだけ懸念事項があった。

それについては、この後にでも問い質す事にしようかしら——寝ている者を氣遣って物音を立てないように寢床から立ち上がり、沙耶は階段を静かに降りた。

台所では冴子が朝食の支度に取りかかっていた。

高城家の令嬢ゆえに家事には疎い沙耶だが、洗練された無駄のない動きから冴子が家庭的なスキルに長けているのを察するのは簡単だった。

暫く、沙耶は台所に向かう冴子を観察した。

見目麗しく、慎ましやかで、更に料理も上手いとくればこれ以上の男が理想とする結婚相手はそうそういないのではないだろうか。

冴子が小皿に取った味噌汁を味見し終わったところで、彼女は漸く沙耶の存在に気がついた。

「目覚めはどうかな?」

「悪くはないわね。ところで…あのアイアンマンは?」

「アイアンマン?」

「あいつよあいつ。あの自衛官よ。ごてごてした格好なんてアイアンマンそっくりじゃない」

ああ、清田さんの事か、と納得した冴子は、くすくすと笑った。

「彼ならば偵察に行くといつて出掛けたよ。もうじき帰ってくるだろう」

ちらり、と壁の時計に表示されている時刻に目をやる。

清田が此処を出てから一時間と少しが経っている。何時までに帰るとは言わなかったが、なんとなく、彼はもうそろそろ帰ってくるよな気がした。

「朝食の支度もそろそろ終わる。顔を洗ってきたらどうかかな？」

「そうね…そうさせて貰うわ。でも」

沙耶は歩を詰め、冴子の眼前に立った。

冴子は不意に間近に迫った沙耶に戸惑い、朝餉の支度をする手を止めた。

「あなたに一つ、忠告しておきたい事があるの」

薄いレンズ越しの沙耶の瞳が剣呑な光を帯びているのを察し、思わず冴子は身構えた。

沙耶は腕組みをし、自身よりも背の高い冴子を射抜くように見上げている。

「軽率な行動は止めておいたほうがいいわよ」

その言葉が何を指しているのか、冴子は一瞬分からなかった。

沙耶はそんな様子の彼女に対して些か大仰な仕草で肩を竦めて見せる。

「どういうつもりでアイツの布団に潜り込んだのかは知らないけど、あなたの行動一つでこの集団を瓦解させるかもしれないんだから。安っぽいゾンビ映画じゃないし、男女の痴情のもつれで全滅だなんて御免被るわ」

昨夜の事が全てばれていた―瞬時に血液が冷え込むような錯覚に陥り、冴子は狼狽を顕わにしそうになった。

しかし寸での所で思い留まり、冷静に考える。

沙耶の言葉から察するに、彼女は昨夜の出来事の細部までは知らない様子である。

でなければ『どういうつもりで』や『男女の痴情のもつれ』という言葉を口にする必要はない筈だ。

後ろ暗い感情を共有する者同士の秘密を知ったのであれば、『あなたやあいつの頭のネジが吹っ飛んでても驚かないわよ』と彼女なりの軽口の一つや二つは言っているだろう。

高城沙耶という少女は、自分や清田の深層に根差す人間性を知ったところで侮蔑を露わにするような薄っぺらい人間ではないのは間違いない。

彼女は、己の感情を切り離して合理的に思考する事が出来る、予想以上に酷薄な人間だ。

たとえ快樂殺人者であろうと、生存に必要なだと判断すれば取り入れる程の度量は備えているだろう―だからこそ、彼女はあの惨禍を生き延びる事が出来たのだ。

どちらにせよ、昨夜の冴子の行動を軽率でふしだらな行為だと沙耶が勘違いしているのであればそれに越した事はない。

あの秘め事がバレたところで特にこれと言つて影響はないが、冴子としてはやはり秘密にしておきたいという感情があった。

男女の仲となるよりも、もつと強く深い絆で結ばれた自分達の間柄は、二人だけの秘密にしておきたかった。

そうなると此処はその勘違いを訂正するべきではないだろう。

「すまない…その、私もどうかしていた。神経が高ぶつて眠れなくて、あのような行動に及んでしまった」

冴子は取り繕うようにはにかみ、気恥ずかしさを演出する。

沙耶は暫しじろじろと胡散臭そうに冴子を眺めていたが、まあいいわ、と溜め息を一つ吐き、それ以上この問題について追求する事は無かった。

冴子はそれで漸く、少しばかり胸をなで下ろした。

「確かに、ちよつとばかりイケメンだけだよ。まあ、どつちを選べと言われたら解らないでもないけど」

ちらり、と沙耶は豪快に床で大鼾をかく耕太に目を遣り、冴子に同意を求めた。

それに対して冴子は、甘いな、とでも言いたげに、立てた人差し指をチツチと左右に振った。

「平野君もあれはあれで立派な男子(おのこ)だ。昨日の彼の働きは君も知っているだろう?」

「そりゃあ、ね…あのデブチンがまさかあんなに頼りになるとは思わ

なかつたわ。でも、やっぱ、平野は平野って感じね」

寝転がっている耕太に対して、呆れているような、それでいて安堵しているような表情で、沙耶は言った。

「男も女も中身こそが重要だ。平野君はよい男になるぞ。それは私が保証しよう」

「ええー。平野があ？ ちよつとあなた、趣味悪いんじゃないの？」

「趣味の良し悪しは兎に角、彼の銃火器に対する造詣の深さとその操作法及び戦術は大いに我々を助けてくれた。そしてただそれらを身に付けているだけではない。それらを非常時にあつても遺憾なく発揮する彼の胆力こそが最も評価する点だ。こればかりは並み居る男など足元にも及ばない」

自信たつぷりに語る冴子の言葉も一理ある。

あのまさにデブオタと言っても過言ではない容姿の平野だが、世界がこうなつてからと言うものの、予想以上に並外れた行動力で一行を支えていたのは事実だ。

特に清田とはぐれてからは冴子、沙耶、耕太の三人で約束の集合地点を指さねばならなかつたが、無事に其処へ到達できたのも彼の存在が大きかつたのは改めて言及するまでもない。

それらの事実を鑑みて、平野耕太という少年に対する評価はちよつと所か物凄く上がつてもいいものだが、沙耶の生来からの気質と、彼女が心密かに思いを寄せていた幼馴染みの少年の存在がそれを許さなかつた。

「まあ、確かに、度胸はあると思うけど…」

合理的でドライな沙耶にしてはなんとも煮え切らない態度である。耕太の事を認めたくない、というよりも、認めるのが照れ臭いという感情が勝っていた。

沙耶は耕太と同じクラスに所属していたが故に普段の内向的でおどおどしていた彼の様子を知っており、如何にも気弱で虐められっ子なオタク少年といった姿に我慢ならなかつた。

父親の壮一郎やその思想と生き様に共感して付き従う彼の部下に囲まれて育つた沙耶の理想の男性像は、まさしく強さと優しさと気高

さを備えた厳格な武人であり、その対極に位置する耕太は箸にも棒にも引つ掛からない。

それなのに、まさかそのデブオタが自分を守ってくれたという現実が、彼女に苛立ちを募らせた。

沙耶は密かに、耕太ではなく、幼馴染みの少年が傍にいてくれたら良かったのにと何度も空想した。

その少年がああ惨劇の中、自分の元に駆けつけ、この手を引いて連れ出してくれたらどんなに良かったろう——尤も、その少年は沙耶ではなく別の少女を選び、既に自衛隊に救助されているという事実を彼女は知る由もないが。

だが、現実には、その少年ではなく、耕太こそが沙耶を守った。

叶えられる事の無かった自身の幼稚な願望と少年への憧れが、耕太によつて否定されたような、そんな錯覚があつた。

だからといって沙耶は耕太を恨んでいる訳ではないし、そんなつもりは毛頭ない。

彼の勇気ある数々の行動は賞賛すべきであり、自分の身勝手な妄想による怒りなど向けるべきではないのだ。

かといって、思春期の少女が己の心の働きを完全に制御できる筈もない。

沙耶はどうにもままならぬ己の心を持って余していた。

「難しく考えるような事ではないよ。ただ一つ、彼に感謝の言葉を述べてみたまえ。そうすれば世界はがらりと変わるよ」

こちらの心を見透かしているかのように論ず冴子の語りに、沙耶は澁々と頷いた。

確かに、今の今まで、耕太に礼の一つも述べてはいなかった。

いや、耕太ばかりではなく、眼前の冴子や清田にも述べてはいない——それは常識ある人間として、礼節を重んじる高城壮一郎の娘としてはあるまじき行為ではないだろうか。

今更のように、沙耶はその事実が気がつき、自分がとても恥知らずな人間に思えて、顔を赤面させた。

「平野よりも、さ、先に言っておくわ！……今まで、ありがと。平野ばか

りじゃなくて、あなたにも世話になったし」

一瞬、冴子はきよんとしていたが、直ぐに爽やかな笑みで応じた。「毒島家の女として当然の事をしたまでさ。礼には及ばないよ」

嫌味一つない冴子の人となり余計に羞恥心を煽る。

沙耶は堪らなくなつて、照れ隠しにそっぽを向いた。沙耶がそっぽを向くのと、ガラス戸の外に清田がのそつと姿を現したのはほぼ同時だった。

「やあ、起きていたのかい。昨晚は眠れたかな？」

ガラス戸をがらつと開けるなり、清田が沙耶にそう訊ねた。そして手早くブーツを脱ぎ、リビングに上がり込む。

重武装・重装備で相変わらずロボットのようで否応なく威圧感を与える姿だが、唯一露出している目許に浮かべた人懐っこい笑みが彼の純朴な人柄を表しているようで、その厳つい印象を和らげていた。

沙耶は先程の冴子と同様に、清田にも礼を述べようとしたが、いざ本人を目の前にすると言葉に詰まってしまった。

冴子に対しては少々の照れが入り交じりながらも素直に述べる事が出来たが、何故だか清田に対してはそれが出来ない。

沙耶は思わず視線を外し、俯きがちに言った。

「寝心地は兎も角、安心して眠れただけマシだったわ」

ぶつきらぼうに答えながら、意固地な己を恥じた。

ありがたいの一言も言えないなんて！―悶々と沙耶が悩む傍ら、清田は言葉を続ける。

「思いの外、収穫はあったよ。飯を食ったら今後について話そう。それで：他の人はまだ寝ているのかな？」

目の前の冴子と沙耶、床の上で寝転がる耕太以外に気配を感じなかったので、清田はそう訊ねた。

「そのようですね」と冴子が応える。

「それじゃあ、起こしてきてくれないかな。今は少しでも時間が惜しい」

冴子にそう頼み、清田は耕太の元へと歩み寄り、屈み込む。



「耕太君、起きてくれ。朝だぞ」

揺り起こすと、むにやむにやと耕太が呻きながら瞼を開いた。

「ふぁ…おふぁようございまふ」

寝起きで呂律の回らない耕太が、視界いっぱい広がる巖つい清田に動じる事なく、朝の挨拶をする。

「おはよう。まずは顔を洗ってくるといい」

目脂のこびり付いた目元を擦りながら、耕太はもそそと起き上がり、のっそりとした動作で洗面所へ向かった。

「さて…俺達は、朝飯の準備でもしようか？」

清田は盛りつけ途中の調理済みの料理に顎をしゃくり、沙耶を促す。

台所には清田が所望したものととは違うが、ほっけの塩焼きや玉子焼き、おひたし、味噌汁といった典型的な朝食が用意されていた。

「…美味しそうなんだけど、食欲があんまり湧かないわね……」

料理を前に沙耶がげんなりとした表情を浮かべる。

「食える時に食わないとね。後で後悔しても遅いよ」

装備をつけた姿のまま、清田は、人数分の碗に味噌汁をよそっていく。

沙耶も清田に倣い、副菜や主菜、炊き立ての白米をよそってはテーブルに運んでいく。

巖つい格好のまま朝食を準備する兵士の姿は何ともシニールであり、沙耶はそれだけで非日常であるというのを否応なく実感させられた。

## #2nd day③

寒い。

堪らなく寒い日だった。

清田は、落下傘と武器のみを装着した状態―空挺降下に於いては限りなく身軽である―で滑走路横のコンクリートの上で、冬も間近の晩秋の分厚い曇り空を仰ぎながら寝転がっていた。

海上自衛隊下総航空基地―そこは教育航空集団司令部、海上自衛隊第三術科学校、海上自衛隊航空補給処の下総支処などが置かれており、対潜哨戒機を使用した海上自衛隊航空要員の教育訓練を行っている基地として知られていた。

しかし、それ意外にもこの決して航空基地の中では広大とは言い難い下総基地は、陸上自衛隊が唯一擁する落下傘部隊である、第一空挺団の訓練支援を担当している事でも有名であった。

新隊員後期教育課程を終えた清田は、中隊に配属されその空気に馴染む暇もなく演習に参加し、漸く落ち着いた所で空挺隊員にとつては必須技能である、基本降下技能を修得する為に再び空挺教育隊に入隊していた。

着地訓練に始まり、落下傘装着訓練、模擬扉訓練、跳び出し塔訓練、降下塔訓練、傘回収訓練などを経て、今日はいよいよ実機からの実降下訓練である。

地上約八十メートルから吊り下げられ、その後に切り離され落下傘で着地する降下塔訓練を終えてはいたが、やはり実機となると勝手が違う。

降下塔訓練は地上からワイヤーによって吊り上げられ、その後切り離されるといふ恐怖もあったが、実機は時速250kmで飛行している。そこから跳び出さなければならぬのだ。

降下に必要な技能と知識は全て修得している。だから後は実降下でもそれらを発揮出来れば何も問題はない。

全ての訓練は何事も問題なく、つつがなくこなしていたから大丈夫だ―不安な気持ちを押さえつけるように、清田少年は自らに言い

聞かした。

現在、清田達は降下待機中だった。降下場である習志野演習場の風速が若干強いため、天候の回復を待っていたのだ。

その待機時間が殊更に不安を煽り、掻き立てるのだ――周囲に目を遣れば、清田と同様に落ち着かない様子の者や、中には顔面蒼白な者もいる。

皆、後期教育を共に過ごした同期であるが、一様に不安であるというのは隠せない。

聞くところによれば、背中に背負ったメインの主傘が開かない確率は三十万分の一らしい。それは事前教育という事で読まされた、空挺団出身のとある有名な格闘漫画家の自伝漫画にもそう描いてあった。

おまけに主傘が開かなくても胸にサブである予備傘を着けている。この両方が開かないという確率は殆どゼロだろう。

だが、頭ではそう解つていても、不安な気持ちに陥るのは止めようがない。

ある墜落死した隊員の指の爪は全て剥がれていたという。予備傘を開こうとしてパニツクに陥り、激しく掻き筆った末に爪が剥がれてしまったそうだ。

自分がそうならないとは絶対に言い切れないのだ――冷たいコンクリートの上だというのに、背中は冷や汗でじつとりと濡れている。胸の予備傘の上で組んだ、空挺手袋を嵌めた両手は微かに震えていた。

その時だった。

「注目――」

降下長を務める、ベテラン空挺隊員である教官の曹長が、青い顔をしている清田達のところにメモを片手にやってきた。

清田達と違って小銃を収納した携行袋を体の左横に装着していない、落下傘のみの身軽な格好である。首元から覗く空挺マフラーが様になっているのは流石だった。

「先程、習志野降下場の気象が入った。風向は大きく変化なしで29

5度。侵入方向に対しほぼ真後ろ。風速は上空で最大四メートル、最低二メートル、平均三メートル。地上で最大六メートル、最低四メートル、平均五メートル：以上、降下可能である！」

その言葉を聞いた瞬間、覚悟を即座に決めなければならぬと分かったが、頭の中は真つ白だった。

「それでは搭乗！お天道様が気分を変える前にとつとと立て！」

清田達は助教らに急ぎ立てられるように立ち上がり、エプロンに駐機しているC-1輸送機に向かって重い一步を踏み出した。空挺靴が、じやり、とコンクリートの地面を踏みしめたが、足元は心許ない。

しかし直ぐに搭乗という訳ではない。輸送機の横には三脚の上に載ったカメラを手に待ち構えている助教がいた。

初降下は精鋭と名高い空挺隊員としての記念すべき第一歩である為、こうして写真が撮られるのである。

しかし、ただの記念写真という訳ではなく、もし不運にも墜落死すれば即座に遺影となる——らしいが、万が一にもそうなって欲しくない。

初降下前の吐き気を催す緊張の中、ぎこちない笑みを浮かべてフレームに収まった清田は、脱着防止の紐が付いた耳栓を耳腔にねじ込み、薄暗く窮屈な機内の簡素な座席に収まった。

屈強な野郎どもが三十人ほども収まれば、輸送機としては小さいC-1の機内はすし詰め状態である。

加えて人並み以上の体格を持つ清田少年は殊更に肩身を狭めなければならなかった。

全員が搭乗し終え、教官や助教らが空自のロードマスターと何やら手順を確認している間中、清田は込み上げる吐き気を堪えるので必死だった。

十分ぐらいそうしていただろうか。降下する順番が最後の方である為、清田は操縦席付近に近かった。

操縦席と貨物室は壁で隔てられており、後から機体側面の搭乗口から乗り込んで来たパイロットの姿はちらりとしか見えなかった。

やがてロードマスターが機壁の操作盤を弄ると、後部貨物扉がモーター駆動音と油圧の作動音を発しながら閉鎖され、いよいよ機内は丸い小さな窓から差し込む晩秋の昼光と、申し訳程度の室内灯の明かりしかない。

そうして突如、耳を突き刺すように甲高いエンジンの始動音が轟き、やがてけたたましい唸りへと変わる。

この時点で清田は空挺団に来たことをかなり後悔していた。

微かな振動の後、とうとう機体が動き出した。電車よりも少ない揺れで滑るように移動しているので、注意しなければ分からなかっただろう。

民間の航空機と違って、自衛隊ではわざわざ機内放送を流してくれるほど親切ではないし、外の風景を見る余裕もない。

ノロノロと動く機体がいっせいに離陸するのか分からないが、長大な滑走路の端まで移動するのは時間が掛かるだろう。やがて揺れが収まり、いよいよ離陸に移るのだろうかというのが察せられた。

今まで唸っているだけだったエンジンが、大量の空気を取り入れて爆音と共に咆哮を上げた。刹那、急加速によって生じたGに体は傾き、隣の隊員に凭れかかった。

傾いたまま浮遊するような感覚を僅かに感じたが、最早清田は気がではない。更に機体は上昇しながら旋回しつつあるので、生まれてから一度も感じた事が無い複雑なGに不安と恐怖と吐き気は最高潮である。

暫くして水平飛行に移った時には、右スネのポケットに入れてあるジップロックを取り出して吐瀉しようかと思っただが、下手に動くとそのだけで胃が暴れ出しそうだった。

水平飛行中も機内は縦やら横やら不規則に揺れ動き、今にも墜落するのではないかと思うほどだ。民間航空機よりも乗り心地が良い軍用機などありはしない。

清田は終始気が気ではなかったが、そんな彼を他所に機体はいよいよ降下経路に侵入を開始していた。習志野駐屯地と下総基地は車で一時間も掛からない距離にあるので、航空機ならば離陸して降下高

度に達するぐらいには目的地にすぐ着いてしまう。

空自のロードマスターが降下扉を開いた瞬間、気圧が変わり、機壁を隔てて聞こえていたエンジンの唸りを肌で感じた。機内に吹き込む風はジェット燃料の排気ガスの匂いが混じっており、それは灯油ストーブの匂いだった。

降下長は降下扉の点検を済ませ、降下扉が何かの拍子に降りてこないようにする為のプロテクターを装着し、ジャンププラットフォームを足で何度か踏んで異常がない事を確認し、眼下に流れ行く市街地のランドマーク―北習志野駅、日大滑走路、演習場近くのイオンモールなどがそうだ―を見定め、両手を叩いて降下員達の注目を集めた。

そうせずとも、隊員達は離陸してから常に降下長を注視していたが。

「いっせんかーい（第一旋回）、いくぞー！」と声を張り上げる降下長。

「おうー」と己を不安な心を鼓舞するように応える隊員達。

何度もやってきたその呼応は、もはや条件反射として心身に刻み込まれている。

清田は頭の中が真っ白になりながら、声の限り叫んでいた。

俺に飛べるのか？ 本当に飛び出す事が出来るのか？ー

緊張と不安が普段よりも五感を研ぎ澄まさせていた。

降下長の表情筋が具に見て取れる。

耳栓をしても機壁が僅かに軋む音が聞こえた。

排気ガスと男達の汗と体臭、それと誰かのシェービングクリームの臭い。

今朝食べたパック飯のカレーが喉元をせり上がりそうになる。

隣に座る同期の血流と、微かな震えが服越しにもわかる。

「いくぞー!!」

「おう!!」

「いくぞー!!!」

「おう!!!」

「降下よーいー……たてええええい!!!」

隣の者と肩をぶつけ合いながら立ち上がり、パイプを組み合わせただけの簡素な座席を折り畳み、自動索環―落下傘を引つ張り出す紐の為のアンカーとなる特殊なカラビナーを右手で握り、左手はそれを引つ掛ける為に機首から機尾に向かって機内に張つてある繫止索を掴んだ。

誰もが降下長の一挙一動を食い入るように見詰めている。清田も瞳孔の開き切つた目を血走らせ、臓腑を揺さぶる不規則な揺れに耐えながらその時を待つた。

自動索環を握る右手は、空挺手袋の中で湿り気を帯びていた。

「環掛けええ!!」

降下長は大きく、指をフックにかけるような動作をした。

「自動索環二重ロック良し!」

自動索環を繫止索に引つ掛け、しっかりと掛かっているのを確認し、別命なく自動索―パラシュートを引つ張り出す為の紐―と自動索環を右手で一緒に持つた。

「そおおぐてんけえええん!! (装具点検)」

降下長も負けじと声を張り上げ、空挺隊員の卵達の孵化を促した。

隊員達は何度繰り返したかも分からぬ点検動作を、呼称しながら各部を手で触つて行つた。

「いち!」―自動索環。

「に!」―空挺用鉄帽の顎紐、首紐。

「さん!」―肩部離脱器。

「し!」―両脇腹の救命胴衣。

「ご!」―胸帯。

「ろく!」―予備傘。

「しち!」―股帯。

「はち!」―その他の装具。

それが済むと、今度は前の隊員の背面を点検する。

「いち!」―自動索環。

「に!」―自動索の流れ。

「さん！」―主傘の閉鎖。

「し！」―主傘の外観。

「ご！」―股帯。

「ろく！」―その他の装具。

「よし！」―異常がないという事を知らせてやる為に、前の隊員の尻を左手で叩く。

それら全ての降下前に必要な儀式を終えると、一瞬だけ機内は静寂に包まれる―耳を聳するようなエンジン音が絶えず咆哮している最中だというのに、全員の心は一つになり、まさに明鏡止水の如くであった。

目をギラつかせる降下員達の顔を見渡し、降下長は頷いた。

「ほうこおおく！（報告）」

瞬間、隊員達は最後尾から「よし！」と前の者の尻を叩くと同時に機壁側の左足を一回だけ踏み鳴らして行く。

その合図が順番に巡って行き、先頭降下員の番になると「右扉よよし！」と降下長に報告する。

降下長はそれを確認すると、再度地上のランドマークを見定め、更なる合図を送る。

「成田街道通過…この位置まで前へ！」

両手を水平に広げ、前のめりに低い姿勢で一步を踏み出す。

先頭降下員は、不規則な揺れの中、覚束ない足取りで床に貼られているテープの線まで進む。

降下長はまた地上のランドマークを見定めて合図を出す。

「ストリップ通過…位置につけ！」

先程の動作に、手の動きを加えた合図を出す。

先頭降下員は右手で握っていた自動索環を思い切り繫止索に沿って投げつけると、いよいよ降下扉の前に立ち、扉横の降下ランプを凝視していた。

降下長は先頭降下員の腰辺りを掴み、何かの拍子に勝手に飛び出さないようにしている。

清田の位置からでは先頭降下員をよく見る事が出来ないが、あ



とほんの十数秒の後にはあそこに自分も立つのである。

今更不安がつても仕方が無い。

乗りかかった船、もとい離陸してしまった飛行機の中である。

地上に戻るには飛び出すか、もしくは降下長に泣きついて降下を中止し、他の同期達が空挺隊員として華々しく大空に躍り出る姿を惨めに見届けるしかないのだ。

絶対に後者にだけはなるまいと決めていた清田である。ならばすべき事は決まっていた。

「コースよし、コースよし。用意、用意……」

降下長の呪文のような号令が、最後尾付近の清田にもエンジンの爆音の最中でも聞こえるような気がした。

そして運命の合図が出された。

「青！」

その号令と共に今まで赤だった降下ランプは青へと変わり、鼓膜に刷り込まれたけたたましいベルの音が鳴り響いた。

先頭降下員は号令と共に弾かれたように顔を上げ、降下長に尻を叩かれてから、何の躊躇いの素振りも見せずに、勢い良く機外へと跳び出していった。

機内の繫止索に引っ掛けていた自動索が飛び出した隊員の落下傘を引っ張り出す為に緊張し、やがて開放し終えると風に靡いていた。

完全に開傘したのを確認してから、風に靡いていた自動索を助教の一人が回収する。次の降下者の邪魔をしないようにするのだ。

とうとうやりやがったー清田は本当に後戻りできないところまで来たのを自覚した。

そうして次々と前の者が跳んでいくー落下傘が開かなければ死ぬかもしれないというのに、皆恐怖に怯える事など一切なかった。

いよいよ清田の番となった。

清田は自分の番がくると右手で自動索環を繫止索に沿って投げつけ、降下扉の両脇を掴んでその前へと立った。

踏み出した足が震えて今にもくずおれそうだったが、自分が飛ばなければ後ろが飛べない事が分かっていたから、恐怖に竦む心を叱咤していた。

眼前にはただっ広い習志野演習場、そしてその周囲を取り囲む市街地の様子が見える。

吹き込む風の強さ、流れる景色、遠くに聞こえるエンジン音――それはまるで映画館で流れる映像のように、何処か空々しく他人事のように思えた。

周囲の市街地では普通の市井の営みが今日も行われている。

演習場の東側に広がる工場の群れ、何処かの高校の野球場、コジマ電気の看板、演習用品を買いに行ったロイヤルホームセンター、同期と飯を食いに行つた大阪王将――それらがミニチュアのように見えた。

尻に僅かに衝撃を感じた。

それが降下長による降下の合図であることは分かった。

瞬間、全ての音が消え去つた。

風の音も、エンジン音も、自身の鼓動すら聞こえない。

目の前の出来事は無声映画的一幕のようになにか感じられなかった。

だから、清田は少しも恐怖を感じなかった。

あれだけ不安と恐怖に落ち着きをなくしていたのに、いざそうになると、もはやどうでもいいというような投げ槍的な思考になつていた。

失敗して死んだとしても後悔する事はない。

死人が後悔などできる筈がないのだから。

ただ、中途半端に生きているのだけは嫌だな――そんな事をぼんやりと考えながら、清田は肉体に刷り込まれた反射によつて四肢を駆動させ、吹きさすぶ風の中に身を投じた。

「初降下あ!!?」

思い切りジャンプステップを踏み、顎をしつかりと胸につけ、両手を予備傘の上で組み、両足を一本の棒のように揃える。

清田は力の限りそう叫んでいたが、緊張に裏返った声は猛烈な風にかき消されていた。

不思議と落下の重力を感じなかった。

降下扉から飛び出し、自動索が切り離される僅かな瞬間だが、航空機に引つ張られるのだ。

それはさながら、巨大な怪鳥に連れ去られる獲物の気分である。

重力を感じる暇などない。

感じたのはジェットエンジンの熱い排気のみであり、それも直ぐに遠ざかり、代わりに刺すような冷気が頬を颯つた。

清田の長駆は頼りない枝のように大空を踊り、緊張した自動索が落下傘を引つ張り出し、やがて完全に切り離された。

背後ではバタバタと布が突風に煽られる音が聞こえ、主傘を収めたコンテナが背中からずりりと引つ張り出されるのを感じた。

それは見えない巨人の手が清田の首根っこを摘みあげようとしているかのようだった。

「二降下、サン降下、ヨン降下…」

清田は一本の棒のように堅固な姿勢でその時を祈るように待った――四秒ほど経ったら頭上を仰ぎ見て、落下傘が開いているのを確認しなければならない。

もし、開いていなければ、即座に予備傘の手動索を引かなければならない。でなければ墜落死は免れないだろう。

主傘が開かなくても予備傘が開けば何も問題はないのだが、初めての降下でそのような緊急事態に遭遇したら、たとえレバーを引くという簡単な動作ですらこなせる自信がない。

仮に予備傘を開く事が出来ても、その後は冷静でいられる筈もなく、着地に失敗する可能性が高いだろうーいや、この際、着地云々よりもまずは傘が開くかどうかを心配していた。

落下傘が開くまで約四秒ほどの短い時間の中、清田は生まれて初めて神に祈った――来るべき猛烈な開傘衝撃を心から待ち望んだ。

「点検!!？」

顔を上げ、頭上を仰ぎ見る。

肩の装着帯ハーネスから上方に伸びるは懸吊帯ライザ確かにその先の傘本体と繋がっており、傘は今まさに空気を孕んで開かんとしていた。

世紀の花よとはいったものだが、成る程、これほど感動する花の開花も無いだろうー直後、完全に開いた落下傘が急制動を清田の体に与え、股帯が強烈に締め付けられる。

清田は瞬間、陰囊がゴリゴリと音を立てるのを感じ、股帯を締め過ぎた事を後悔しながら腹の奥底からやつてくる耐え難い圧痛から吐き気を催したが、なんとか堪えた。

だが、直ぐにその吐き気も何処かへ吹き飛んだー目の前の光景にハッと息を飲んだ。

煩雑な市街地の光景だというのに、全てが輝いて見えた。

雲間から射す陽光が灰色にくすんだ市井を淡く照らし、荘厳な宮殿のようにさえ見える。

忙しない市街地の上だというのに、喧騒は失せ、聞こえるのは穏やかな風の音色のみである。

命の綱と言えるのは落下傘のみであり、風に吹かれるまま、自らの意思で行き先を変える事は出来ない。

たった数百メートル上空だというのに、そこは下界から隔絶された別世界であり、それが酷く神秘的に思えたのだ。

空を飛ぶ鳥は常にこの風景に慣れ親しんでいるのかー暫くの間、自身の短い人生の中で最も凄烈な経験を呆然と受け入れていたが、やがて現実に引き戻される。

「五番ーオラァー！脚を閉じろォーこのボンクラァー！」

地上にいる助教が拡声器で激烈な指導の声を飛ばし、一旋回五番降下者ー清田は我に返った。

下方を注視すれば、鉄帽に白いカバーを被せた助教が、清田に拡声器を向けながら先に降下した隊員の所へ走り寄っている真つ最中だったーやがて隊員は助教に蹴り倒され、傘の畳み方の不十分を指導されている。

鬼の助教の存在を思い出し、清田は別の意味で大きな身体を縮こませた。

そうだ、トグルを掌握して操作しなければ――清田は足を揃え、トグルを掌握し、風下に正対しようとした。

しかし、初めて実際に降下中にやるものだから上手いはず、そうこうしている間に地面が迫ってくる。

あれこれともがいている間に地面が近づいてくる――最早あの神秘的な体験から得た荘厳な気持ちは綺麗さっぱり吹き飛んでいる。

またもや顔を青ざめさせながら、清田は着地の衝撃に備えた。

†††

がくん、と衝撃を感じた。

すわ、着地の衝撃かと思つて周囲を見回したが、あるのは見慣れぬ部屋の光景だった。

暫くの間、夢と現の判別のつかぬ、鈍った脳髓がぼんやりと思考を停止していたが、口元のよだれを拭い、両頬を両手でぴしやりと叩いた。

どうやら、ほんの少しだけ居眠りをしてしまったようだ――清田が床の上に座ったまま背伸びをすると、関節が湿った音を盛大に立てた。

朝食の後、清田は生存者達に出発準備をするように指示を下し、自身は二階の寝室で空になった弾倉に弾薬を込めていた。

胡座を搔いた膝の上には、5. 56 m m小銃弾を途中まで詰めたんだ弾倉が落ちている。手にはバラの小銃弾を握ったままであったから、安全管理を疎かにし過ぎていた。

昨晩は新たに入手した銃器を使用できるように準備したり、操作方法を教えたり、あの母子を救出したりで自身の武器の手入れをする暇がなかったので、こうして僅かに空いた時間を利用して整備に当たっていたが、昨日から殆ど動き放しでろくに眠れなかったから、今になって眠気がやって来たのだろう。

悪い兆候だ。状況に慣れる余りに緊張感を持続出来ていない。人間の集中力などたかが知れてはいるが、肉体的な限界の所為にするのはまだ早い。

取り敢えず、その他の雑多な物品と同様にして手に入れたキシリトールガムのボトルを手元に手繰り寄せ、タブレットガムを二三個口の中に放り込んだ。

ガムには様々な効能がある。正確には物を噛むという行為にだが。

ガムを噛む事で顎の筋肉が運動し、脳への血行が促進され、脳細胞の働きが活発となり、思考力、集中力、判断力が増し、更に眠気防止の効果がある。

また、ものを噛むという行為は食べるという行為であり、生物にとって生きていく上でどうしても避けられない飢餓感へのストレスを和らげるので、手軽に緊張を解す事が出来る。

清田は、長く辛い単調な作業である長距離行軍時にもガムを噛み、眠気と気分を紛らわす事がよくあった。尤も、歩き終わった後には顎が酷い筋肉痛になっており、レーションを食べるのもひと苦労な為、パック式のお粥を流し込む事で当面の餓えを凌いでいた。

ガムを噛みながら、清田は弾薬を込める作業に戻ろうとしたが、もはやそんな気分になれる筈もなく、作業を中断して片付けた。

火器類のクリーニングとメンテナンスは既に終わっていた。リカの私物のクリーニングキットを拝借して銃身と部品に付着したカーボン汚れは綺麗にこそぎ落とし、上等なガンオイルをたっぷり注した。

目の前には清田が身に付けていた武器類が並べられていた。HK416アサルトライフル、USPタクティカル、ケルテックKSGショットガン、M72 LAW、破片手榴弾、特殊音響閃光手榴弾、煙幕手榴弾、C4爆破薬、各種爆破用雷管、導爆線（デトネーターコード）、導火線、発火装置、マルチツール、タクティカルナイフ、弾倉、散弾、40mmグレネードランチャーなどがまるで警察に押収された証拠品のように整然と陳列されている。

小銃を手に取り、槓桿を握り遊底を引くと小気味良い程に滑らかに動く。銃に装着されている各アタッチのスイッチを入れ、構える。ホロサイトのドットが浮き上がり、エイミングモジュールからはフラッシュライトと可視光レーザーが照射される。清田は精緻にして機能美の局地とも言える兵器に嘆息した。

武器を何時でも万全な状態に保つのは気分が良いし、何が起きてても問題なく戦えるのだという安心感があつた。

ひとしきりそれぞれの武器を点検し、問題がないのを確認したが、唯一それだけは意識的に避け、結果として最後に手に取る羽目になつた。

無骨な鞘（シース）に収まつたそれは、罪深い原罪そのものが顕現したかのような忌避を想起させた。――昨晚、幼子の命を容赦無く奪つたタクティカルナイフである。

それも他の武器同様、使用したのならば点検しなければならぬが、手にとってみたものの鞘から抜く事が出来ない。

柄を握るので精一杯だつた。――抜こうとすると途端に発作によく似た症状が出そうになつた。

冷や汗がダラダラと背中を流れ、手は震え、強烈な目眩と動悸に呼吸も俣ならない。

心臓は冷たい死神の手で鷲掴みにされているようで、上手く血流を送ってくれない。

糞、糞、なんてザマだ！――清田は荒く息を吐き出し、ナイフを床に置いた。

想像以上に傷ついている。

精神が、今まで多くの苦痛と困難に打ち勝ってきた兵士の心が、首の皮一枚を残して繋ぎ止められている現状に、清田は蹲りたい衝動に駆られた。

蹲り、泣き叫び、自身の無実と悔恨と不可抗力の諸々を誰かにぶち撒けたい。――それは冴子によって叶えられ、清田に再起を与えたが、心に巣食つた病巣は簡単に取り除く事は出来ない。

一体いつまで続くのだろうか？

この胸の痛みはいつまで抱え続けなければならないのだろうか？――  
答えは分からないが、少なくとも十年二十年で晴れるような代物では  
ない。

涙が出た。

止め処なく涙が滂沱となって零れ落ちた。

このまま子供のように嗚咽を漏らして泣けばいいが、寸で  
のところ留まる理性が阻止する。

清田は一頻り嗚咽を堪えながら涙を流すと、床の上に広げて  
いた仕事道具をデイパックに詰め直し、装備を整え、完全武装の完全  
無敵の兵士へと変身し、階下へ降りていった。

＋＋＋

リビングに足を踏み入れると、清田の心臓が縮み上がった。

心拍数は急激に上がり、一気に精神と肉体はレッドへ突入  
し、ブラックに至ろうとする――戦闘に最適なイエローを保てない事  
実に、またしても清田は辟易とした。

ぐわんぐわんと歪む視界の中、女の子がいた。

その女の子は、あの女の子だった――殺した筈の女の子が、  
耕太と童歌を唄って遊んでいた。

気でも狂ったのかと思った。

いや、事実、幾らか狂っているのだろう。

でなければこんな幻覚を見る筈がない――清田の精神は、冷  
静に自己を分析する傍ら、目の前の幻覚を掻き消すべく肉体に指令を  
送ろうとしていた。

右手が咄嗟にレッグホルスターから拳銃を抜こうとしてい  
た。

まるでこれは悪夢とでも言いたいかのように、銃弾をぶつ放  
して悪い夢から醒めたいとも言いたいかのように。

銃を抜いたら向けるその先は、あの女の子ではなく、狂った  
自分の脳髓にしよう――

「清田さん」

だが、自身の脳味噌を吹っ飛ばすどころか、拳銃を抜く事も



無かった。

背後から誰かに右腕を掴まれ、硬直したロー振り返ると、冴子が立っていた。

もはや彼女は裸エプロンではなく、所々血痕の薄まった藤美学園の制服姿だった。

唯一普通の制服姿と異なるのは、タイトスカートに穿き替え、黒いガーターストッキングを身に付けている点だった。

年頃の少女が身に付けるにしては大人び過ぎているそれも、すらりと背が高く、容貌の整った冴子には似合っている。

結果として反射的に動こうとしていた肉体の反応は未遂に終わった。

いや、冴子が止めてくれたというべきだろうーもしも彼女が、清田が発する異質な雰囲気を感じ取れなかったら、彼は唐突に拳銃自殺を行う羽目に陥っていただろうから。

「顔色が優れませんが、大丈夫ですか」

そう冴子は気遣うが、当の清田はヘルメットにタクティカルゴーグル、フェイスマスクといつも通りの正体不明のマスクマンだった。

不安定な精神状態を見破られまいと考えた末の処置だったが、やはり彼女はお見通しなのだろう。

「いえ、大丈夫です」

何も大丈夫じゃない、精神状態は最悪で、発狂寸前だーカラカラに乾いた口の中を唾液で潤そうと舌先で犬歯を突いたが、干涸びた舌が上顎に張り付きそうになった。

「今後について話したいので、取り敢えず席について下さい」

今はそんな話をしたくない気分ではないが、もうそろそろベソベソと泣いて塞ぎ込む時間は終わりだ。

清田は気を取り直し、睨み付けるような気持ちで正面に向き直った。

耕太と一緒にいたのは、 昨晚救出した女の子だった。

名前は希里ありすといい、 母親の優子と共に保護をした。

昨晩はあまり元気がない様子だったが、休息を得て回復したのだろう、耕太と楽しそうに遊んでいる。その屈託のない笑顔とは対照的に、清田の心は重く沈んでいた。

しかし表面上は平静を取り繕い、生存者達が一堂に会したのを確認し、本題を切り出す。

「今後についてですが、当初は高城さんの実家、その次に新床第三小学校を目指したいと思います。理由としましては―」

「私の両親の安否の確認、じゃなくて、何かしらの通信手段がある可能性が高いから：でしょ？」

唐突に清田の言葉を遮り、沙耶が言葉を引き継いだ。

結果的にこのメンバーの中で肉親が床主市に健在である沙耶の実家へ赴き、その安否を確認した後には避難所を目指すという行動指針が藤美学園で決定された訳だが、それを真に受けるほど彼女はお人好しではない。

沙耶は一晩経った今、清田があのような行動指針を了承した理由は、やはり損得勘定からであろうと結論づけていた。

事実、父の壮一郎が組織する憂国一心会はただの右翼団体ではない。

かの三島由紀夫が組織した楯の会に準ずるとも劣らぬ、過激派武装集団であり、沙耶はその細部を知らぬが恐らく物騒な代物を幾つも所有しているのは間違いないだろう。

その中には、連絡用の本格的な通信機材もあるだろう―通信手段が途絶した状況下でも唯一有効である、衛星電話を一心会が所有しているのを沙耶は母親が管理するパソコンの帳簿データから知っていた。

沙耶はその事を清田に教えてはいないが、相手は特殊部隊である。著名で過激―高度に武装した―な右翼団体のリストや大まかなデータぐらい公安警察や自前の情報組織から入手していても何ら不思議ではない。

それらも加味して、清田はあの様に判断したのだと、今では自信を持って言えた。

「…今となつてはそれも理由の一つではありませんね」

渋々といった様子で清田は認めた。

「高城さんの家で通信手段を得る事が出来れば、小学校を目指さずに脱出できる可能性があるのでは、と考えましたが…しかし当初の行動理念に偽りはありません」

清田はゴーグルを額の上に押し上げ、優子に目を向けた。

「優子さん。御主人やその他に肉親がいるのであれば、そちらの安否の確認も協力させて頂きますが…如何なさいます?」

清田の提案を、優子は暫し考え込んだ。

「…いえ、大丈夫です。主人の両親と私の両親も田舎ですし、床主には特に親戚もいませんし…それに主人については、もう、諦めております」

俯き、今にも消え入りそうな声で優子は言った。

母子二人の命からがらの逃避行の経験から、もはや夫の生存が絶望的であると判断しての言葉だろう。

生きていて欲しい、探しに行きたいというのが優子の偽らざる本心だろうが、そうする事で一行であるばかりか娘の命をいたずらに危険に晒す可能性が高くなるのであれば、諦める他ないというのが現状だった。

成り行きで身を寄せた清田たちのグループに無理強いを出来る程、優子は私の強い女性ではなかった。

「…分かりました」

その事を察せない清田ではないが、優子がそういうのであれば素直に従うしかない。

今まさに娘と夫を秤に掛け、両者のどちらかを優先しなければいけないという苦渋の決断を迫られ、結果として娘を選んだ優子を誰も責めはしないだろう。むしろ母親として至極真つ当であり、また苦しみなながらも現状に基づいて冷静な判断を下していると断言できた。

「それでは予定通り、高城さんの家を目指します」

清田の決定に誰も異論は差し挟まない。

「あと、全員、出発準備は大丈夫ですか？」

前もって清田は一行に必要な最低限の個人の準備―最低限の着替え、動きやすい服装、歩き易く丈夫な靴、ライト、手袋、保存の効く食料、水分、救急品などをするように達していた。

全員、清田が言った通りの準備は出来る範囲で済ませており、各人がデイパックに纏めて武器弾薬類と共にリビングの片隅に集積していた。

「この先、何処で物資を入手できるとも限りません。まだ充分ではないという人は正直に言ってください…いないようであれば結構。それでは、気持ちを切り替えて行動しましょう」

清田の言葉に全員頷き、席を立ち上がる。

ひと時の休息は終わった―再び、死者の蠢く街に繰り出し、生存を賭けて戦わなければならない一日が幕を開けたのだ。

その中で唯一ありすだけが、緊張した面持ちの大人たちをきよとんとした様子で見上げていた。

## # 2 n d   d a y ④

目の前の背中中は相変わらず聳え立つ城塞の如くであり、さながら巨神である。

しかし冴子は、過剰な重武装が外骨格となつて今の清田を支えているのを知っていた。デーパックを背負い、纏つた分厚い抗弾ベストの下に隠しているのは、削がれて寡れた魂だ。

今に背負うものの重さに耐えきれなくなつて、崩れるのではないかと危ぶんだが、冴子の心配を他所に清田は前を進み、階段を降りていく。

清田が硬く閉ざした鉄扉を、音を立てないように押し開け、周囲を確認する。――油断なく銃口を擬する姿は昨日と同様であり、冴子の心配は杞憂に思えた。

清田と冴子は周囲を警戒しながら駐車してある高機動車の運転席側に回り込むと、清田がドアを開き、車内をざっと点検する。その間、冴子は狩猟弓に矢をつがえ、動くものがないか周囲を見渡した。

車内を点検しながら、清田は、リカがこの高機動車をどうやって手に入れたのかは不明だが、恐らく、東南アジアから逆輸入したのだろうと推測した。

基本的に自衛隊の車両は溶断してからスクラップ業者に引き渡すのだが、それらのスクラップが東南アジアに流れ、何個イチで一台の車両を組み上げられ、現地の高所得者向けに販売されており、ほぼ自衛隊仕様を再現したものもあれば、内装は革張りの高級仕様もあったりする。

特にフィリピンにはそれらの再生車両が多く、高機動車以外にも三トン半、一トン半、パジエロなどがインターネットで調べればすぐに出てくる始末だ。

リカがこの車を所有するまでに費やした金額と手間を考えると、清田は嘆息せずにはいられなかったが、今は彼女の苦勞の甲斐を喜んで利用させて貰おう。――清田はキーを差し込み、電灯系統の

ターンスイッチを《1》に合わせた。

「林先生、聞こえますか？ 車両と周囲に異常はありません。皆を連れて来てください」

咽頭マイクに声を吹き込み、トランシーバーでメゾネット  
で待機する京子にそう伝える。

「毒島さんは引き続き警戒をお願いします」

「分かりました」

清田は車体後部に回り、観音開き式の乗降扉を開き、牽引装置の下に普段は収納されている乗降ステップを出した。高機動車は地上高があるので、後部兵員室に乗り込む際にはステップがないと一苦労する。

程なくして残りの全員が荷物を持って階段を降りてきたので、清田が誘導に当たった。

手を貸してやり、生存者を次々と乗せていくと、ありすの番が来た。

瞬間、清田は固まった。ただでさえ子供を視界に捉えると精神が千々と乱れるというのに。

だが、直ぐに気持ちを切り替え、ありすの脇に手を添え、軽々と抱え上げる。

清田からすれば自分の半分もない幼子は子猫のようであり、小さな彼女からすれば清田は大怪獣のようである。

ケブラーとコーデュラの皮を纏った、重火器の牙と爪で武装した怪獣。まさしくその通りであるが、その心は怪獣とは程遠く、打ち拉がれた捨て犬以下だ。

子供の無邪気な瞳と目を合わせる事も出来ず、清田は先に乗り込んでいた優子にありすを任せた。

ステップは出したまま、全員が向かい合わせとなっている座席に座ったのを確認してから扉を閉め、冴子に声を掛ける。

「全員乗りました。毒島さんはそのまま助手席に座って下さい」

冴子はぐるりと周囲を見回してから矢筒に手早く矢を戻し、高機動車の助手席に乗り込んだ。

清田は一瞬、右前輪の前後を確認した。――自衛隊では駐車する都度、輪留めをするのが通例となっている。流石にリカはそこまで自衛隊マニアではなく、己に身に付いた習慣に清田は苦笑した。

ドアを開け、運転席に乗り込む。演習による土埃が一切ない、綺麗な座席だった。

単に所有者がまめに手入れをしているのもあるかもしれないが、新鮮な驚きと共に鍵を一段捻る。

ヴウーというブレーキ用の圧縮空気を充填するコンプレッサーの唸りが聞こえ、やがて消えた。

それからもう一段捻ると、甲高い音を発してインタークーラーターボ付き水冷直列四気筒ディーゼルエンジンが咆哮を上げた。

エンジンのレスポンスも悪くない事から、状態が良好であるのが察せられた。――乱雑に扱われ、草臥れた特戦群の高機動車とは大違いである。

サイドブレーキを解放し、アクセルを踏み込み、発車させる。滑らかなステアリングも心地良い。

地図と事前の偵察によって頭に叩き込んだ経路に従い、清田は高機動車を進ませる。――途中、除け切れない《奴ら》の何体かを撥ね飛ばし、その都度、清田はFRP製のボンネットが割れやしないか気を揉み、放置された車両で幅の狭くなった道路を慎重に進んだ。

路地の其処彼処に屯する死者の群れは昨日今日死にたてのものばかりであるから、一見すると挙動不審な集団のようにも見られるが、近くに行けば腐り始めた肉の悪臭が鼻を衝く。

彼らは死んでいるにも関わらず、動き回り、生者の肉を求めている。

どういう原理で死体の筋肉が、生前よりも遥かに力強く機能するのかは不明だが、ある程度の物理法則は通用するらしく、破壊可能であり、腐敗も進行している。

よくある終末論の世界が現実となったのかもしれないが、今のところ第一のラップが吹かれている様子はない。ただし、死者が蘇るという事は、天上界に於ける七つの封印の内の五つまでが解かれたと

いう事であり、世界の終わりは近いのかもしれない。

取り留めの無い妄想に耽りながら、二十分程度の短いドライブの末、御別橋に到着した。

御別橋は床主大橋と違って橋上は避難者の車が溢れかえっていないかった。というのも、車止めのバリケードが大橋と違って入り口に設置されており、侵入を防いでいたのだ。

だが、御別橋に至る道路には渋滞の車列が放置されており、清田は車幅のある高機動車が通れる道路を探すのに苦勞した。一歩であれば直ぐだが、惜しみなない労力を払うだけ車両移動の利点は多大だ。

清田は橋の手前で車を止め、エンジンを切り、後ろに座る生存者達を振り返った。

「このままでは通行できないので、自分が通行出来るようにしてきます…その後の運転は、林先生、お願いします」

「分かりましたけど…清田さん、一体どうなさるおつもりなの？」  
だが、清田は京子の質問に答える事なく、ケルテック製散弾銃のフォアガードを目にも留まらぬ速さで前ボンファクション後させ、片方の筒型弾倉からドアブリーチング用のショットシェルを全てを弾き出した。

清田の突然の物々しい行動を理解できたのは、この場に於いては耕太のみだった。

耕太は言われるまでもなく、リカの家から持ち出した3inc hマグナム・ショットシェルを一掴み、自身が身に付けているタクティカルベストのポーチから取り出し、清田に差し出した。

「清田さん、これ、使ってください」

「ありがとう。手持ちのダブルオーバックス00が少ないんでね」

耕太から受け取り、手早く弾倉に押し込み、忘れずに薬室内にも装填しておく。

合計十三発もの対人用ショットシェルを装填された散弾銃はずしりと重いが、空挺レンジャー最終想定の間、背囊に指向性散弾を入れ、84ミリ無反動砲を絶えず携行していた清田である。



この程度のウェイトは取るに足らないが、動き易くする為、ベストの下に着込んでいる抗弾ベストは脱いで置く事にした。

全ての装備を整えた清田は、ゴーグルを目元に下ろし、小銃を手に一つ深呼吸した。

これからやるべき事は、全て頭の中で整理できているローしかし、やり残している事がないか考えを巡らせ、自分が仕事に取り掛かっている間の指示を一行に下していないのを思い出した。

「自分はこれから、ある程度のへ奴ら」を排除してきます。その間、基本的には乗車待機でお願いします。しかし、危ないと判断した場合は下車して応戦して下さい：自分がいない間のその判断は、毒島さんに任せます」

「心得ました」

冴子は力強く頷いてくれて見せた。冴子ならば、恐らく冷静な判断を下してくれるだろう。

「銃を持っている人は今の内に点検を済ませ、何時でも発砲できるようにしておきましょう：ああ、静香先生、安全装置は掛けたままで、あと、引き金に指を掛けないで下さい!!？」

自然と銃器装備組のリーダーとなる耕太は、銃器を持つ者—この場では冴子以外の全員だが—に注意を促してくれた。

全員が、やるべき事を承知しているロー成り行きで結成されたグループだが、早くも一個の生命体のように淀みなく滑らかに動作し始めている事に、清田は少しばかりの安堵を覚えた。

「それでは—始めますか」

清田は躊躇う素振りすら見せず、ドアを開け、早くも蟬集し出した死者の群れに向かっていった。

おどろおどろしい死者たちを前にして、例によって清田の歩みは平然としており、悠然としているローもはやそれが当然の出来事であるかのように。

清田は小銃を構えるや否や、二体のへ奴ら」の頭部を撃ち抜き、群れへ向かっていくロー清田が目指すべきものは、決して少なくはない群れの中へと飲み込まれており、戦闘は避けられない。

素早く、且つ正確な照準で、適切な目標を選定し、斃さなければ、あつという間に距離を詰められ、食い殺されるだろう。

それはさながら流動的なジェンガであり、一手間違えば支払うのは己の命である。

骨片混じりの血飛沫が飛び散り、硝煙の匂いが清田を包み込み、ばら撒かれる薬莖が狂騒曲を奏でる。

死者の群れが声ならぬ声で唱和し、コーラスとなつてメインヴォーカルを盛り上げる。清田が張り上げるのは重火器の、文字通りのデスボイスであり、憐れな観客は瞬く間に魅了され、興奮が頂点に達したかのように地面に崩折れる。

ゴーグルのレンズ越しに清田の瞳は、老若男女の歩く腐った肉袋に對して冷めた視線を向けるのみである。

落ちて着いた初老の男性、品の良さそうな老女、柄の悪そうな若い男、今時のハイティーンエイジャーの少女、太った主婦、痩せぎすのサラリーマン――それら全てはもはや厄介な死体でしかなく、排除すべき対象だ。

銃弾は一切の慈悲も区別もなく、それらを引き裂き、吹き飛ばし、爆裂させ、普段は皮膚の下に隠されている人体のグロテスクな構造物をぶちまけ、路面を腐肉で覆った。

加熱する銃口から、刹那、曳光弾の真つ赤な軌跡が迸った。  
弾倉の残弾が少ない事を示す合図だ。

清田は瞬時にタクティカルリロードを行おうとしたが、早々に弾幕を張らねば掴み倒されん距離までへ奴らへが迫っていた。

弾倉交換は諦め、手早く脇の下に吊り下げていた散弾銃に切り替え、目にも留まらぬ早さで速射する。

一度に16発の拳銃弾相当の鉛玉を吐き出すその威力と銃声は凄まじく、押し殺された小口径高速弾の発砲音に慣れていた鼓膜を痛いほど震わせた。

至近距離で放たれた、都合百発以上の散弾は纏めて数体をぼろ切れのように引き裂き、モーゼもとやかくのように腐肉で埋め尽くされた道を切り開く。

散弾銃の速射によりキーンと耳鳴りがするー聞こえるのは、亡者の呻き、銃器の咆哮、自身の荒ぶり始めた呼吸ばかりだったが、それら全てが遠くへ追いやられた。

目の前の出来事が急激に現実味を失い、スプラッター映画を無声で鑑賞しているようだった。

老若男女の顔面が弾け飛び、皮膚を裂き、肉を抉り、骨を砕き、腐臭を漂わす臓物を溢れさせるーそれらを前にしても清田の心は驚くほど澄んでおり、まるで凧いだ湖面のようである。

だが、やがて、あっと思う間もなく、大人に混じって子供のへ奴らへを吹っ飛ばした瞬間、ふつつつと一つの感情が沸き起こり、瞬く間に枯野を焼き払う炎のように胸の内から迸った。

怒り。

誰に向けるでもない怒り。

身に付けている全てを総動員し、目に入るもの全てを破壊してしまいたい怒りだった。

それは清田を襲った狙撃犯に対するものと同類だったが、自らが作り出す圧倒的な暴虐が齎す凄惨な光景が極度の興奮状態を引き起こしており、一匹の野獣へと変貌させていた。

吹き飛ばしたその子供は、最早男の子か女の子か分からないうー首から上の小さな顔は、散弾によって穴空きチーズよりも酷い有様だったからだ。

服装から、低学年ほどの女の子と分かった。瞬間、あの女の子の最後がフラッシュバックする。

清田を凶行へと至らしたのはまさしく彼が心の奥底で埋み火の如く抱いていた現状への怒りと、恐るべきストレス、そして幼児殺害といういつPTSDを引き起こしてもおかしくはない程の心的損傷である。

それが、今、子供という切っ掛けにより、籠が外れてしまった。

「あああああああああ!!?」

恐慌をきたしたかのように、清田は叫び、慟哭するーそれで

もなお、正確無比な殺人マシンのように、染み付いた戦闘技術が駆動する。

散弾銃を撃ち尽くす頃には、まるで巨大な鎌が薙ぎ払ったかのように死体の山を築き上げており、群れはその数をかなり減らしていた。

獣のように荒々しく息を吐き、目は血走り、喉からは唸り声すら迸っている――まさに一匹の獣へと身をやつしていた。

「!??!」

視界の隅に蠢くものを捉え、清田はそちらを神経質そうに振り向いた。

足元で、倒したとばかり思っていたへ奴らへの一体―下顎は吹き飛び、両足は膝から下がらない幼児―が、ひしゃげた指先を清田の足に絡めようとしていた。

脳裏に昨晚の失態が過るが、真つ赤に染まった思考は殺意の自動操縦を続けた。

「うあああああああ!!?!」

清田は咄嗟に絡め取られそうだった右足を振り上げ、そのまま腐りかけた小さな頭蓋骨を踏み砕いた。

幼児の脆い頭蓋は卵の殻のように容易く粉碎され、膿のように黄色味掛かった灰白質が飛び散った。

「ああ!!?!ああああ!!?!ああああ!!?!」

狂ったように清田は幼子の頭蓋を踏み潰し、砕き、蹂躪した――そうすることで受け入れ難い現実を拒絶するかのよう。

ごついブーツが振り下ろされる度、腐敗した幼児の体組織が飛び散り、形容し難い感触が足裏から全身に響く。

一頻りストンピングし終わると、もはやそこには小さな身体のうちこちから折れた骨が突き出す、赤黒いズタ袋があるだけだった――新たなへ奴らへが集まり始めていたが、清田は武器に新しい弾薬を込めたりはせず、手近な一体に向かって遮二無二走り出した。

「うおおおおお!!」

ばかでかい足から繰り出される、加速のついた前蹴りがそのへ奴

らゝのー体格が貧弱な中学生男子と思われるーの胸で炸裂し、大きく後方へ吹っ飛ばした。

清田はそのままその頭蓋骨を先程と同様に踵で踏み潰し、にじり、そこでようやくやくハリネズミのように纏っている武装のひとつを使わなければいけない事を思い出した。

腰のユーティリティーパーチから無造作に破片手榴弾を掴み取り、ピンを抜き、手近な集団に向かって投擲した。

それは室伏もとやかくの滅茶苦茶なフォームであるにも関わらず、恐るべき球速で真つ直ぐに飛んでいき、哀れな一体の顔面にぶち当たって前歯と鼻骨を砕いた直後、爆発した。

顔の高さほどで爆発した手榴弾はその威力が余すところなく発揮され、破片と共に周囲に盛大に血飛沫を撒き散らした。

清田はそれによって決して少くない量の腐り始めている血を頭から被ったが、構わず破壊活動を続けた。

最早その程度では今の彼を止める事など出来はしない。

## #2nd day⑤

何度目だろう。

「イチーニーイチーニー！」

折れかけた心を叱咤し、繋ぎ止め、立て直すのは。

「れんぞくほちょうー！ちよう、ちよう、ちよう…かぞえ！！？」

朦朧とした頭で、清田はぼんやりと考えた。

地獄と名高い空挺レンジャー課程教育に入校してから早半月、駐屯地に於ける基地訓練は半分も終わり、ひたすら精神と肉体に耐え難い苦痛を与えられる日々を過ごしていた。

現在、レンジャー学生達は、体力調整運動ーとな名ばかりのシゴキーの一環である、小銃を胸の前に掲げたままの持久走ー所謂ハイポーターを行っていた。

体力調整運動は空挺式体操と呼ばれるー種目の筋力トレーニング、一周約三〇〇メートルの障害走コースを十五周、不意のダツシユを織り交ぜたハイポートを約七km、最後に巨大な丸太を担いでひたすら降下塔広場と呼ばれるグラウンドを歩かせられる。

午後の課業開始と共に始まった体力調整運動は、その全てを終える頃には日も暮れており、煌々とライトで照らされた芝生の上、屈強な空挺隊員といえども疲労困憊で呆然としてしまう。

勿論、運動着などという身軽な格好で行うわけもなく、戦闘帽、戦闘服、半長靴、弾帯、サスペンダー、銃剣、小銃を携行した状態でその全てを行うので、身体に与えられる負荷は並大抵ではない。

全国の普通科連隊で行われているレンジャー教育は集合教育であり、好き好んで志願した学生は容赦なく篩い落とされるため、課程教育である空挺レンジャーよりもキツイとは言われるが、清田にとつてはこれが初めてのレンジャー教育なのでその差などわかりはしない。

とにかく、きついことに変わりはない。

「イチ！！？」

「そーりゃ！！？」

「！！？」

「そおーりや!!？」

「サン!!？」

「そおーりや!!？」

「シ!!？」

「そおーりや!!？」

声を荒げ、汗の飛沫を滴らせ、男達は気力のみで走っている。

既に肉体のエネルギーは枯渇しようというのに、足並みは規則正しき揃っており、残熱を孕んだアスファルトと軍靴がスタツカートを刻む。

「くーてい！」

「はあっ!!？」

「レンジャー!!？」

「くーてい！」

「はあっ!!？」

「レンジャー!!？」

旗手を務める清田は、小銃を背負い、空挺レンジャー隊旗の翻る旗竿を両腕で高く掲げながら走っていた。

幾多の男達と共に灼熱の炎天下、鬱蒼と茂る樹海、凍える氷雨の下で血と汗と涙に塗れた隊旗だ。

落下傘と金剛石、そして髑髏を記した空挺レンジャー隊旗はボロボ

ロに擦り切れ、向こう側が透けて見える程である。

「我ら!!？」

「精強!!？」

「精鋭!!？」

「空挺!!？」

「レンジャー!!？」

「日本一の!!？」

「空挺!!？レンジャー!!？」

「いやいや!!？」

「世界一の!!？」

「空挺!!？レンジャー!!？」

「れんどくほちよう！ちよう、ちよう、ちよう…かぞえ!!？」

声は枯れ、全身の筋繊維はズタボロであり、大量の汗を吸って重くなった戦闘服は殊更に不快だった。

叫びながら清田は、ただ時が過ぎるのを切に願ったが、非情なるホイッスルの鮮烈な響きが、やけに鈍い脳髓の中に響いた。

「おら!!？走れ!!？走らんかい!!？おせーぞゴリア!!？」

鬼の助教達の怒号が飛び交い、汗水漬くの学生達に容赦なく浴びせられる。

ホイッスルは全力疾走の合図であり、それが鳴った瞬間、学生達は限界を超えて下半身へと命令を下さなければならぬ。

その中でも旗手である清田は特に走らなければならぬ。

旗手に選ばれる隊員は体力に秀でているというのもあるが、部隊の団結の象徴である隊旗を任されるといふのは大変な名誉と責任がある。仰せつかったならばやり通すのが男としての矜持だろう。

そして旗手は常に先頭を走らなければならないので、たとえどんなことがあっても落伍してはならないし、他の学生に追い抜かされてはならない。

肺は焼けつくように痛み、もはや酸素を取り入れはくれない。視界が徐々にぼやけ、ブラックアウトする寸前まで意識が朦朧としていく。

不意に清田の横から誰かのごつい手が伸び、掲げる旗竿をむんずと掴んだ。

清田は白目混じりの視線を、その手の主に向けた。

「辞めるか？辞めるんか？」

学生達に並走する助教の一人だった。元ラグビー部出身のその助教は、衰弱した今の清田から旗を奪い取るなど造作もない事だろう。

清田が先頭を駆ける間、隊列から遅れだした最後尾の学生は、助教に襟首を掴まれて引きずり回されるようにしてよろよろと歩いている。

その学生にもはや意識はなく、白目を剥いており、頭はガクガクと前後左右に揺れている。助教は殴り、蹴り、その学生を無理矢理で



も走らせた。

出来るならば清田もその学生のように意識を手放してしまいたかった。

「レ、レンジャー!!？」

だが、息も絶え絶えの清田だが、気力を振り絞り、助教の手から旗竿を取り戻し、再び疾駆する。

体を突き動かすものもはや自分の意思であるのかすらわからない。

わからないものの為に肉体と精神は限界を超えてなおその先へと至ろうとしていた。

だが、このわからないものが、途轍もなく巨大で恐ろしいもののように思え、清田は脅迫されているかのように肉体を駆動させた。

走れ、足を止めるな、旗を持って、助教なんか無視しろ、腕が痛い、足も痛い、身体中が痛い、喉がカラカラだ、目が見えない、くそ、五月蠅え、耳元で怒鳴るな、俺はまだやれるー混濁した頭の中、思考が取り留めも無く流れていく。

畜生、まだいけるだろ、ああ、くそ、くそ、誰だ。

お前は誰だー閉じかかった視線の先、薄闇の中、誰かが立っている。

そこを退いてくれ、俺は走り続けなきゃいけないんだ、頼む、退いてくれ、退けよー刹那、疲労で泥のように蕩けていた思考が凍り付き、急速に清田に現実を提示した。

いや、それは現実などではなかったが、夢現つの清田の思考を停止させるには充分だった。

それは見慣れたあの少女だった。

†††

「ああああああああああ!!？」

トランシーバーから流れてくるのは、およそあの冷静な戦士である筈の清田とは思えないほど、猛り狂った男の声だった。

その声的車内は一瞬、凍り付くーまさかあの清田が餌食となってしまうのだろうか。

そんな清田の異変にいち早く気が付いたのは、冴子と京子だった。後部座席に座る生存者達も、幌の透明なビニル製の採光窓から清田の動向を見守っていたが、前席に座る彼女達は彼らよりも視界が開けており、彼の詳細な様子を見る事が出来た。

初め、冴子は余りにも清田らしからぬ危険な闘い方に疑念を抱いた。重火器で武装しているのだから、ある程度距離を置いて正確な射撃で〈奴ら〉の群れを減らせれば突破は容易な筈だろう。

しかし、彼は射撃しながら群れとの距離を詰め、在ろう事か群れに飛び込んで重火器を乱射するという戦法を展開した。

勿論、瞬く間に彼は取り囲まれたが、散弾銃に持ち替えると恐るべき弾幕で〈奴ら〉の殆どを挽肉に変えた。それからだ、清田が恐慌状態に陥ったのは。

遠目から彼に何が起きたのかを知る術はないが、只ならぬ出来事があつたのは察せられた。

鍛え抜かれた兵士をあそこまで混乱させる何かがあつたのだ。

冴子は隣の京子や、後部座席を振り返るが、皆一様に硬直している。リーグループのリーダーであり、庇護者であり、守護神である清田の豹変は少なからぬ衝撃を齎していた。

どうする。どうしたらいい？ 呼吸を落ち着け、冴子は前方の混沌とした惨劇を見遣った。

清田は未だ暴れ狂っており、驚くべき事に、素手で何体かの〈奴ら〉を瞬く間に始末していた。

鬱憤を晴らすかのように猛烈なスタンピングで踏み躪り、次なる獲物を定めると駆け出し、前蹴りで蹴倒すと同様にして息の根を止めていた。

体術の心得のある冴子だが、膂力は成人男性に比べるも無く、ましてや大柄な清田には遠く及ばない。あのような力任せに蹂躪する事など出きるものではない。

そして次に清田は腰のポーチから何かを取り出し、投擲した。

刹那、爆音が轟き、高機動車のフロントウインドウがビリビリと震える。橋上で起こった爆発は、何体かの〈奴ら〉を纏めて吹き飛ば

し、死血と肉片を周囲にぶち撒け、それらの焼け焦げた幾つかはボンネットの上に落ちてきた。

爆煙にけぶるその向こう、清田は健在だったが、頭から〈奴ら〉の腐った血と臓物を被った姿はまさに狂戦士そのものであり、獣じみていた。

全身はどす黒く染まり、装備や武装の全てが死血と脂肪に塗れている。まるで地獄<sup>ポコルゲツベ</sup>の兵士だ。

だが、そのまま戦い続ければ、やがて彼も本物の獣になるだろうー〈奴ら〉と同じ、死してなお血肉を求め不浄の獣に。

それは駄目だ、今、彼を失うわけには行かないー冴子は手早く矢筒やその他の必要のないものを身体から取り外し、木刀一本を携えた身軽な格好となった。

「平野君。君は此処から援護してくれ」

ドアノブに手を掛け、後席の耕太を振り返りながら冴子は言った。

「毒島さん？」

「今の彼は非常に危うい。私が何とか正気に戻させる」

「それだったら僕も行きます！」

耕太はH&K G28からモロトVEPRセミオートマチック・ショットガンに持ち替え、後部扉から降りようとしていた。

「いや、君は此処に残った方がいい。今は機動力が重要だ。私の方が身軽で素早いし、二人だと囲まれやすい」

銃器の扱いには長けているが、鈍重な耕太では暗に足手纏いだと冴子は言外に含ませた。

「それだったら尚更、銃火器による援護が必要じゃないですか。囲まれたらショットガンで蹴散らせばいい！」

それに反発するかのようにつれ見よがしに耕太は弾倉をモロトに差し込み、槓桿を引いてショットシエルを装填したー自覚はないだろうが、その顔には凶暴な笑みが浮かんでいたが、冴子は敢えて気付かないふりをした。

「そうではないんだ、平野君。君が此処から狙撃してくれた方が都合がいいし、何よりも私が不在の間は君がグループを指揮してくれた方

が適任だろう」

今、このグループで戦力として期待されているのは冴子と耕太のみであり、その他のメンバーは一応は銃器の扱いを教わったとはいえ、彼らほどの戦闘力は発揮できないだろう。

そこでこの両名が不在となるのは些か分の悪い博打じみており、残された者達の安全が危ぶまれる。

「なによ、私らだけじゃ不安だって言うの？…と、言いたいところだけど、確かにねえ」

沙耶は自らを含めた居残り組の顔ぶれを見て素直に現状を認めた。「銃を持つてるとはいえ、私達みたいな素人軍団じゃ、ゾンビ映画でよくあるヤラレ役の軍隊以下だし…」

その発言に異論を差し挟む者は誰もいなかったー耕太は周囲を省みない行動を危うく起こしそうになった自分に対し、ばつが悪そうだ。

「という訳で平野、あんたのことは頼りにしてるわよ」

「え？」

「え？じゃないわよ。あんたねえ、冷静に考えなさいよ。あんたはちんちくりんのどうしようもない軍ヲタだけど、今はその知識と技術が必要なのよ。それは今までに十分発揮されてたでしょ？」

思いがけない沙耶の言葉に、耕太はしばしポカンとしてしまう。

確かに、今まで耕太はその能力を遺憾なく発揮してきたが、こうやって沙耶から自身を認めるような発言はされていなかった。

それだけに思いがけない彼女の言葉は、彼に戸惑いをもたらしていた。

「この天才があんたを認めるって言うてんの。それにあんたは男の子なんだから、か弱い女子を守る義務があるでしょ」

「え、あー……」

「分かったら返事！」

「イエス！マーム！」

有無を言わさぬ沙耶の雰囲気、耕太は姿勢を正して敬礼した。

「そういう訳で私らは可能な限り此処から援護するわ。といっても、

平野ぐらいしか当てにはならないだろうけど…ほら、あんたはちやつちやと準備なさい！」

「はい…」

沙耶に促され、耕太は天井の幌布を捲り上げ、ライフルを手に屋根へ身を乗り出した。

二人のやり取りに、冴子は思わず苦笑した。

「フフ…それでは、頼りにしているよ」

そうして後顧の憂いがなくなったところでドアを開けようとした冴子だったが、不意に呼び止められた。

「毒島さん」

「何でしようか？ 林先生」

運転席に座る京子が、おずおずとライトウエイトを差し出した。

「役立つかは分からないけど、これを持って行って」

「いえ、銃は私の性に合いませんので」

しかし冴子はその厚意は謹んで辞退しようとする。少しでも身を守る火器が此処にある方がいいだろうと考えてだ。

「でも…木刀が折れてしまったらどうするつもり？」

「う…」

流石の冴子も、京子その指摘には反論できなかった。

しかし、かといって銃など撃つたことはない。試した事もない武器に信頼を置く事は出来なかった。

こんな事なら他の得物を探しておけばよかったと冴子は後悔した。

「毒島さん、これならどうかしら」

そこへ静香が、エアウエイトと共に入手した特殊警棒を冴子へ差し出した。

今の今まで、静香はあれから護身用に持ち歩いていたのだが、この場にあつては冴子にこそ相応しいだろう。

「これなら使えるでしょ？」

「確かにこれならば予備の武器としては申し分ないですが…よろしいのですか？」

「大丈夫よ。鉄砲はたくさんあるし、平野君もいるし…それに、少し位役に立たせて欲しいわ」

静香がにこりと微笑んで見せると、冴子は渋々ながら警棒を受け取り、制服のポケットに差し込んだ。

彼女のその微笑みは己の無力さを自嘲するかのような陰影を湛えていたが、これから死地に赴かんとする冴子には構っていられる問題ではない。

「それでは…行って参ります」

ドアを開け、冴子はそつと地面に降り立つと、音を立てないように閉めた。

前方を見据えると、未だ清田は暴れ狂い、今度は小銃の銃床で〈奴ら〉を殴り付け、蹂躪していた。

一刻も早く彼を正気に戻さなければならぬ…今は〈奴ら〉の数も大分減り、一体ずつ白兵戦で仕留める事も可能だが、大橋の対岸からぞろぞろと集まり始めている。

あの集団が到達するまでになんとかしなければ、理性を失って暴れる清田は一瞬で飲み込まれ喰られてしまうだろう。

冴子は木刀を握り締め、深呼吸を一つすると、羚羊のように駆け出した。

それと同時に、耕太の援護射撃が始まった…超音速の銃弾が傍を掠め飛ぶ破裂音がしたかと思うと、冴子の進路上に立ち塞がる三体の〈奴ら〉が瞬く間に頭部を爆裂させ、崩折れる。

しなやかに躍動する冴子はそれらが地面に倒れ伏す前にその脇を駆け抜け、清田へと距離を縮めていく。

ゆらりと、と一体が危うげな足取りで眼前に躍り出てくる…耕太の援護が来るかと逡巡したが、それを待つよりも自らが排除した方が早いと判断し、駆け抜けざまに脇構えからの逆袈裟斬りを一閃する。

充分に体重の乗った一撃は狙い誤す、その腐りかけた頭部の顎から上を削ぎ飛ばした。腐りかけの頭はNFLのプレイヤーが投げた鋭いパス並の速度で、橋の欄干を越え川面に落ちた。

仕留めたのをわざわざ確認する必要はない。

木刀を打ち込んだ瞬間に伝わる手応えのみで、今の冴子はその有無を判断できるほどに経験を積んでいた。

そして続け様に跳躍、速度エネルギーと位置エネルギーを載せた真つ向からの振り下ろしが、新たな一体の脳天を唐竹割り、というよりも熟れ過ぎた西瓜のように割った。

着地し、猫科動物のように低い姿勢のまま油断なく周囲に視線を走らせ、清田への最適な経路を探る――刹那、頭上を銃弾が飛び越え、数体の〈奴ら〉を撃ち倒して道を切り開いてくれた。

ありがたい！――止まったのもほんの一瞬、冴子は再びトップスピードで走り出す。

立ち塞がる〈奴ら〉は冴子を認識する前には、既に破壊的な運動エネルギーを秘めた木刀の切っ先がその腐敗し始めた頭を刈り取っている。

その姿を濁りきった目が捉えたとしても、鈍い腕では疾風のように駆ける体を掠め取る事もできない。

目の前のその一体を倒すと、もはや清田との間を遮るものはなく、冴子は彼に駆け寄った。

「清田さんー！」

清田は〈奴ら〉の一体に馬乗りになり、ぐちゃぐちゃに潰れたその頭に銃床を突き立てたまま、獣のように荒い息を吐いていた。

間近で見るとその有様は酷いものだ――腐臭を漂わす人間の臍物を頭から被り、精神強度の低い者であれば嘔吐は確実であっただろう。古代の蛮族の戦士ですらここまで野蠻ではない。

今の彼に本来の分別があるのか分からない。

もしかしたら、不用意に近付けば、即座にその丸太のような腕で殴り倒されるかもしれない。〈奴ら〉をボロ布のように屠る大男に襲われては、流石の冴子もひとたまりもなかった。

しかし、今は躊躇うのすら時間が惜しい。

〈奴ら〉の大群はそこまで迫っているのだ。

「清田さん…私が分かりますか？」

眼前に屈みこみ、正面から清田と相對する——視線を合わせるが、そのゴーグルは元々がスモークがかかっているのに更に油脂に塗れて透過性が失われ、その下の瞳を窺う事はできない。

冴子は手を伸ばし、慎重にゴーグルに触れ、頭上へと跳ね上げてやった。今の清田は燃え続けるタンカーみたいなものだが、とうに燃え尽きたのかそれとも新たな発火源が爆発する前なのかは不明だが、不思議と彼女にされるがままだった。

ゴーグルの下から現れたのは、死人のように虚ろで、落ち窪んだ瞳だった。とても数分前まで何事もなく会話をしていた人物とは思えないし、まともな精神状態でないのはあの蛮行を見れば一目瞭然だったが、全く生気の失せた瞳には動揺を禁じ得なかった。

一体何があったのか——冴子は周囲を見回したが、転がるのは腐敗臭を漂わす死体とその血腥い部品ばかりであり、彼をこのような精神状態に至らしめた原因はついで分からなかった。

ただ、原形を留めぬほど踏み砕かれた一盛り小さな腐肉の塊が、冴子に不穩の直観をもたらしめた。

だが、兎も角、今の彼は重火器とケブラーを纏っただけの案山子であり、可能であれば戦闘に復帰させ、無理であるならば立ち上がって移動できるようにしてやらなければならない。

二人揃って豚の内臓が腐ったような臭いそのまま死ぬ未来は御免蒙る。

冴子は懸命に清田に声をかけ続けた。

「清田さん！ どうしたんですか！ 立って下さい！ 立って戦って下さい！」

肩を掴み、前後に揺さぶっても反応は皆無だ。

微かに、獣が唸るような低い声が声帯から漏れ聞こえる程度だ——冴子は清田を揺さぶりつつ、周囲に視線を走らせる。

〈奴ら〉の集団はもはや目と鼻の先にまで迫っている。

清田を再び戦士として奮い立たせる時間はない。冴子は彼を背後に庇うように立ち上がり、木刀を構えた。

肺腑の底から空気を絞り出し、一拍間を置き、呼吸と精神を落



ち着ける。

頼りにしていた清田は案山子以下であり、耕太による援護があるとはいえ、状況は最悪だ。このまま清田が正気に戻らなければ彼を車両まで運ぶ方法を考えねばなるまい。

もしくは、車両にこちらまで来てもらうべきか——冴子は今後の展開を考えつつ、テーピングの巻かれた手で木刀を握り直して八双に構え、地面を蹴った。

「はあっ！」

裂帛の気合いと共に木刀を振るい、瞬く間に二つの頭を刈り取り、返す刀で更に三つの脳天を叩き潰す。

軽快なステップを刻みながら、次なる獲物を忙しなく選定する——体重を乗せた効果的な一撃でなければ、木刀によるゾンビの撲殺は困難を極める。

仮にも相手は屍体とはいえ人体であり、人智を超えた論理により駆動するその身体を行動不能となるようにするには、その腐った神経系を破壊しなければならぬのはこれまでの戦闘で嫌というほど身に染みている。

普通の人間であれば撲殺可能な一撃であっても、へ奴ら〜に対しては、木刀で頭部を切断しなければならぬとなれば並大抵ではない。一振りでも誤れば命取りになるのは、重火器を操る清田以上に精神力を削られていく。

腐臭を漂わす膿汁を白妙の顔に浴びながら、冴子はまるで一陣の旋風となって亡者の最中を駆けた——もはやどす黒い木刀を握る手に感覚はなく、肺は焼きつき、足は今にも纏れてしまいそうだ。

激動と興奮によって紅潮した頬を伝う汗を拭う暇はなく、髪が張り付いている様は扇情的ですらあった。

瑞々しく活力に満ちた肉体はもはや限界へと近付いていたが、分泌される脳内麻薬が冴子に嘗てない多幸福感を齎し、死地の中にあっても込み上げる愉悦を、汗と血と膿に汚れた頬に浮かぶのを抑えられなかった。

時折、思い出したかのように飛来する耕太の狙撃は意識の外で

あった。超音速の銃弾が奏でる、身の毛もよだつ擦過音は蠅の羽音以下の耳障りさしか感じない。

身体中の筋繊維が疲労よりも斬り伏せる快感に酔い痴れていた――清田の存在は既に忘却の彼方である。今は少しでもこの悦楽に浸っていたいと、冴子は心底から望んだ。

目の前に佇む腐肉の群れは、ただの巻藁以下だ。冴子が望むままに陵辱が許されている。

限りなく込み上げる破壊衝動を満たしてくれるへ奴らへは、まさしく愛おしくさえある――だが、刹那の油断が思わぬ事態を招いた瞬間、昂ぶっていた神経は氷水を浴びせられたかのように一気に冷え込んだ。

一体のへ奴らへの頭を横に薙いだが、打ち込み角度が悪かったのか、はたまた耐久の限界に達していたのか、木刀の半分から切っ先までが折れ飛んで行った。

戸惑うのは一瞬、冴子は用を成さない木刀の残骸を放り捨て、ポケットから伸縮ロッドを取り出し、振るった。

木刀に比べれば心許ないロッドが伸び、正眼に構える――刀身は短く、握りが甘い警棒では、痛覚の遮断された死体を葬るのは正直かなり厳しいだろう。

だが、やるしかない。

今までの興奮が嘘のように覚めきり、神経を冷たく研ぎ澄ませる。

ロッドの全長は約60cmほどであり、脇差と同じぐらいだが重量は合金製で軽く作られており、人体の中枢を破壊するほどの威力を有する打撃武器として用いるには不安が残る。

上段からの唐竹割り、眼球などの脆弱部を狙った刺突でなければ一撃死とはいかないだろう――迷っている暇はない。既に第二波が眼前に迫っていた。

冴子は手近な一体の懐に飛び込み、伸ばされた腕を掻い潜り、寸分違わず眼球部に踏み込んだ刺突を叩き込む。

腐った眼球を押し潰し、眼窩の底の薄い蝶形骨を突き破って大脳皮質はもとより、脳幹もが破壊され、瞬時に行動を停止する――その腐

り始めた身体が弛緩するよりも早くロッドを引き抜きに掛かった。  
「!?」

だが、弛緩し始めたとばかり思っていた肉体が動き、なんと眼窩に突き刺さったロッドを掴んだ。

浅かった、迂闊な！――瞬間、寒気に背筋が粟立つ。

亡者はそのままりミッターの切れた怪力を以ってして冴子に食らい付かんと迫るが、眼窩に突き刺したままのロッドをつつかえ棒にしてなんとか堪える。

このまま押し合いへし合いしている訳にもいかない。新手が直ぐ傍まで迫っていた。

冴子は咄嗟にロッドを手放し、最小限の動作でかつ最大限の力で踏み込む。

「はあっ！」

中国武術に於いては震脚、日本武道に於いては踏鳴と呼ばれる強力な踏み込み動作から放たれたのは、背面による激烈な体当たり、鉄山靠だった。

体重が軽く、筋力の低い冴子でも正しく技が発揮されれば、下手な大男を吹き飛ばすのも容易い――鉄山靠によって、組み合っていた亡者はロッドが眼窩に刺さったまま大きく体勢を崩して吹き飛ばされた。

更にバックステップで距離を空け、次の脅威を索敵する。もはや冴子に武器はなく、あるのは父より教えられた徒手空拳のみである。

力任せの素人相手ならば素手でも遅れをとることは無い冴子だが、今は相手が悪過ぎる。素手でゾンビを容易く破壊する人間など現実には数えるほどもないだろう。

状況はもはや絶望的であり、先程までの昂揚感が信じられなかった。

下腹部に力を込め、淀みない動作で呼吸に集中する――空手の息吹に代表される丹田呼吸により、肉体と精神の緊張を和らげ、少しでも体勢を立て直す。

雲霞の如く押し寄せる亡者を一体ずつ捌いていくのは、まさに薄氷を渡るが如くだ。

徒手空拳で戦いを余儀なくされるのは想像を絶した死闘であり、一挙一動のミスすら許されない。

横合いから掴みかかってきたのは、咄嗟にその突き出された腕を掴み、巧みな体裁きと体重移動による合気で投げ飛ばし、倒れた所を空かさず全体重をかけた踏みつけにより脊椎を踏み砕く。

次は前方ばかりか左右からも襲いかかり、無理と判断した冴子は最も迫っていた一体の胸を軽く小突いて大勢を崩れさせ、離脱の暇を少しでも稼ぐ。

だがそうやって討ち取りが可能となるような目標を選んで戦っていても、数を頼みに群がる亡者にとっては焼け石に水であり、瞬く間に後退を余儀なくされる。

とうとう、未だに彫像のように固まっている清田を背後にして追い詰められてしまったアーだが、諦めずに死ぬ冴子ではない。

肩で息をしながら、冴子は酸素濃度の低下した頭で必死に考え、咄嗟に清田の傍に駆け寄った。

銃火器の素人である自分にも何か使える武器はないかと、彫像のように座り込む清田の身体を躊躇なくまさぐった。

清田が身体の前に下げている小銃や散弾銃を彼から奪い、更に新たな弾薬を装填している暇はない。太腿のレッグホルスターに収まっている拳銃はどうだろうかー幸い、脱落防止用のランヤードの長さに余裕はある。

冴子は膝立ちの姿勢で慣れない拳銃を両手で構え、安全装置を解除し、トリチウムサイトで狙いを付ける。へ奴らへの揺れる頭部に狙いを定めるのは意外と難しかったが、冴子は構わず引き金を引いた。

刹那、手の中で拳銃が生き物のように暴れ、危うく取り落としそうになった。

勿論、銃弾は何も掠る事無く、中空に消えた。気を持ち直し、再度射撃するが、結果は同じだった。

もはや素人の冴子が拳銃を手にしたところで状況が好転する

筈もなく、時間稼ぎ程度にすらならない。

半ばヤケクソ気味に引き金を引き続け、あつと言う間に弾倉を撃ち尽くすと命中弾こそあれ、一体すら仕留めるには至らなかつた。

自分の絶望的な射撃センスを嘆く暇はなく、次なる武器を清田から物色すると、タクティカルベストの胸ポケットから丸い金属製の物体が出てきたーそれが映画などで見る手榴弾であるのは冴子にも分かつた。

自衛隊が採用している手榴弾は米軍のM26手榴弾にジャングルクリップを追加したM61手榴弾だが、特戦は直ぐ起爆できるよう予めクリップを外していた。

よつて映画での見よう見まねで冴子は安全ピンを外すだけで済み、間近に迫つた先頭集団の足元に向けて放り投げた。

手榴弾の行く末を見届ける事なく、冴子は清田の頭を胸に掻き抱き、押し倒した。

直後、間近で爆音が轟き、熱い爆風が叩きつけられるのを感じるよりも早く、冴子の身体は枯れ葉のように吹き飛ばされた。

吹き飛ばされた勢いはそのままに、冴子の華奢な身体は何度かバウンドしながら固いアスファルト上を転がったー全身を強かに打ち、余りの激痛に呼吸さえ忘れた。

至近での爆発により耳鳴りがする。頭も打つた為か、意識は朦朧とし、四肢に力が入らない。冴子はなんとか歯を食い縛って腕に力を込め、うつ伏せから上半身を少しだけ起こす事が出来た。

霞む視界に映るのは爆煙にけぶる惨状であり、金属と火薬と腐肉の焼ける不快な臭いが鼻を衝いたー手榴弾を放り投げた集団はあらかた吹き飛ばされていたが、後続は爆発を意に介する事無く、のろのろとこちらに向かつてくる。

清田は冴子が押し倒した所に身体を投げ出したままだった。彼が生きているのか死んでいるのか分からないが、もうこうなつてしまつては二人とも駄目だろうか…

氣力が削がれていた。肉体に負つた痛みが回復して立ち上がれるようになる前に、亡者の餌食だ。

冴子は痛む身体に鞭を打ち、清田の傍まで這っていった。どうせ死ぬなら二人一緒がいい、などという軟弱な考えからではない。

厳格な父に徹頭徹尾叩き込まれた、毒島家の女としての生き方が、心身ともに疲弊している冴子突き動かしていた。

清田はまだ手榴弾を持っているだろうか。まだあるのであれば、ありつたけ投擲し、更に時間を稼ぎ、トランシーバーで耕太達に救援を求めるしか生き延びる方法は無い。

既に車両で待機する耕太達は動き始めているかもしれないが、今はとにかく戦い続けなければいけない。

身体に至る所に打撲や擦過傷、更には手榴弾の破片を幾らか受けた血塗れのぼろ布の如く、散々な状態で冴子はアスファルトに爪を立てて這い進んだ。

漸く清田の傍に辿り着いた頃には、冴子は疲弊の極みにあり、全てを投げ出してしまいたかった。

最後の気力を振り絞って、清田の胸の上に崩れ落ちた。装備で嵩張る彼の胸が、この場にあつては驚くほど穏やかに上下していた。

冴子は、清田に再び立ち上がって欲しかった。あんなにも体験を共有し、死線を潜り抜け、特別な絆で繋がったのに。感傷に浸りながら、指先をタクティカルベストのポーチに滑り込ませた。

だが、冴子が新たな武器を手にする必要はなかった。

タクティカルグローブに包まれたゴツイ手が、彼女の手首を掴んでいた。

## #2nd day⑥

誰かが、身体を弄っていた。

それは別に如何わしい意味ではなく、自分の身体から追い剥ぎが物色するような手付きであり、清田はごく自然に止めさせるべく、その手を掴んだ。

ぼんやりと焦点の定まらぬ目で見上げれば、果たしてそこには、白い顔（かんばせ）を血や汗、硝煙やら煤やらで戦化粧を施された少女の、はっと驚きに見開いた双眸がこちらを覗き込んでいた。

瞬間、今までの僅かな時間に起こった出来事が脳裏に蘇り、靄が掛かったようにはつきりとしなかった脳神経の回路が正常に接続されたかのような、明確な思考回路に復帰した。

「清田さん？」

驚く冴子を他所に、清田はガバツと身を起こすと、周囲を素早く一瞥し、自分が取るべき最適の行動を選択した。

感染者の一団が、目前まで迫っている。身に帯びた火器類は全て撃ち尽くし、弾薬を再装填しなければならぬ。拳銃はホルスターから抜かれ、ランヤードに繋がれたまますぐ傍に落ちていた。

無論のことながら、冴子によって撃ち尽くされた拳銃は遊底が後退したままで、弾薬が込められていない薬室を晒していた。清田は冴子を背後に庇うように立ち上がると、拳銃を手にして弾倉交換ボタンを押して空弾倉を抜き取り、新たに十五発の9mmパラベラム弾が装填された弾倉を叩き込み、デコッキングレバーを押すと遊底が前進し薬室に弾薬が押し込まれた。

薬室に弾薬を送り込む小気味良い金属音が、清田に再び戦士としての再起を促す。

悪い気分では無い。

俺はまだ充分に戦える。一先程の獣じみた姿からは想像出来ないほど、滑らかな動作で清田は拳銃を構えた。

瞬く間に、水が流れるかのように淀みなく、迫り来る都合七体の感染者の頭部に、外科手術の如く正確さで二発ずつ撃ち込み、無力

化する。

薬室に一発だけ装填された拳銃の弾倉を再び交換し、レッグホルスターに戻すと、小銃も再装填し、更に強力な火力を以って周囲を圧倒する。

清田の足元に、硝煙を燻らす熱い葉莖が次々と零れ落ち、感染者の血だまりでジュツという音を立てた。血や肉片が焦げる臭気には慣れ過ぎて、もはや鼻腔内にこびりついて麻痺している。

清田の、あまりにも唐突な豹変ぶりに、冴子は呆然としていた。今の今までの振る舞いが信じられない。彼は本格的に狂っているのだろうか？

冴子は困惑と猜疑の瞳で、何事もなかったかのように素早い動作で弾倉を交換し、周囲を警戒する清田を見上げた。

当の清田は、戸惑う冴子に構わず、辺りを見回し、新たな脅威がまだ距離を置いて屯しているのを確認して嘆息を漏らし、取り敢えず銃口を下げた。

「立てるかいい？」

ごく自然に差し伸べられた、タクティカルグローブに覆われたゴツイ手は、血脂に塗れ、ギトギトした光を陽光の中で浮かび上がらせた。

陽を背後にする清田は、全身から腐肉の臭気を放つ凄まじい様相を呈しており、これで正気である方が狂っているとしたか言い様が無い。

だが、酷い格好なのはお互い様だろう。正気か狂気かの是非を問う場面ではない事ぐらい、冴子には分別があった。

「え、ええ。何とか」

血脂に滑る手を握ると、予想に反して柔らかな力で握り返され、立ち上がるのを助けてくれた。

「あそこにあるモノが見える？」

清田が指差す方角には、果たして土木工事で使用される、四輪駆動の大型建設機械。ホイールローダーが鎮座していた。

恐らく、橋上にバリケードを築くのに用いられそのまま放棄さ



れたのだらう。一段高い場所にある運転席の扉は開け放たれたままだ。

「あれに乗り込む。走れる?」

冴子は自分の状態をざっと確認した。身体の至る所が痛むが、大きな怪我はない。至近で爆発した手榴弾の破片が幾らか左腕に食い込んでいるが、これも静香ならば手当て出来るほどの浅手だ。

大丈夫、異常はないー冴子は頷いた。

「では、俺が先を進む。ついてきて」

清田が先に立ち、その背後を小走りで付いて行く。目的の建設機械は、橋上の片隅に放置されており、距離はそれほどもなく、また脅威もまだ橋向こう付近で屯しているだけだ。

今の今まで血みどろの奮戦が嘘のように、あつさりと辿り着いた。

「先に俺が乗るから、ちょっと待ってて」

清田は機械の側面に据え付けられた梯子を登り、運転席に収まった。

「乗っていいよ」

促されるまま、何処が痛むのやら分からない傷に顔を顰め、冴子も梯子を登って乗り込み、扉を閉めた。

この類の機械に乗るのは初めてだが、意外と運転席は広く、操縦席の左隣には小さいながらも補助席が据え付けられていた。この手の機械は操作性を考慮してか、高所に設けられた運転席からは見晴らしが良く、非常に頑丈そうであり、感染者の群れを相手にするのは造作もなさそうだ。

操縦席に座る清田は、運転の邪魔になる散弾銃や小銃を身体から外し、席の後に置き、座席の位置を調節したり、座り心地を確認していた。

完全武装の兵士が、建設用重機に乗るのは何ともミスマッチな組み合わせのように思えるが、清田は手慣れた様子である。

エンジンキーを捻ると、パワー溢れるエンジン音が低く唸り、油圧が供給され、バケット部が作動可能となった。清田は、右のハン

ドレスト付近にあるレバーを操作し、バケットを地面スレスレまで上げると、ギアをバックに入れて車体を後退させた。

バックブザーが鳴り、車体が滑るように動く。四輪駆動の巨大なタイヤは、腐りかけた人体のパーツを物ともせず踏み砕く。

広いフロントウィンドウの向こう、亡者の群れが犇めいている。

冴子は、思わず清田を見た。彼もこちらを見つめており、頷いてみせた。

「行くよ。しっかりと掴まって」

そう言うや否や、清田はアクセルが床に接するぐらい深く踏み込んだ。

大重量の車体が見るみる加速していく。エンジンは不気味な咆哮を上げ、回転計の針はレッドゾーンを振り切っている。

清田が操るホイールローダーは一般的な中型クラスに分類されるが、それでも車体重量は30トンを超え、エンジン出力は軍用戦闘車両並みだ。タイヤの大きさは成人男性ほどもあり、目の前の全てを何の造作もなく踏み潰した。

バリケードを超えて何体かが橋路上を進んでくる。相変わらず鈍重な動きであり、正面から30トンの鉄塊が迫っているというのに何の危機感も見当たらない。

清田はレバーを操作し、バケット部の位置を微調整した。バケットには採掘用の頑丈な爪が装着されており、それが今では丁度人間の上半身ほどの高さにある。

見る間に亡者と距離を縮めるホイールローダーの運転席で、冴子は思わず傍の清田の腕を掴んだ。清田は一切動じることなく、運転に集中していた。

鈍い音と共に亡者の群れは、道路の端に生える雑草のように一瞬で薙ぎ倒されていった。充分に加速した30トンの鉄塊の前には人間十体程度の肉壁は障子戸以下でしかなく、バケットが上半身を刈り取り、残った下半身をタイヤが踏み砕いて進んだ。

群れに突っ込んだ瞬間、大した衝撃は感じなかった。余りにも

ホイールローダーの運動エネルギーが強大過ぎたのだろう。肉片混じりの血飛沫が飛散し、フロントウインドウにこびり付いたが、清田はウインドウオツシャーを淡々と操作して汚れを拭い落とした。

清田の隣に座る冴子は、何体もの人間だったものが巨大な機械によつて一瞬で肉片に変わる様を見せつけられ、流石に動揺を隠せなかった。が、清田の手前もあり、ぐつと唇を噛んで堪えた。

「さあ、問題はこれからー」

群れを薙ぎ倒し、ホイールローダーはバリケードとの距離を詰める。対岸を封鎖している護岸工事用のコンクリートブロックは分厚く頑丈そうで、乗用車程度の侵入なら許さないだろう。しかし、この重機を止めるには些か心許ない。

50m、40m、30m、20m――決して加速をやめない鋼鉄の牛馬は咆哮を上げて容赦なく突っ込む。冴子は、目の前に迫るブロックの山に胃がきゅつと窄まるのを感じたが、相変わらず清田は彫像のように表情を変えない。

衝突の瞬間、冴子は咄嗟に目を瞑った。鍛え抜かれた武闘者とはいえ、30トンを超す鉄塊に乗って山ほど積まれたコンクリートブロックに突っ込むなどという経験はない。至極真つ当な反応といえるだろう。

刹那、先程とは比較にもならない衝撃が運転席にまで響いた。大量の車体は、岩山をも掘削するバケット部にその威力を集約してブロック群を容易く粉碎していたが、流石に脆い人体とは異なり反動もそれなりにあった。粉碎されたブロックの巨大な破片が、駄賃だとも言わんばかりに、砲弾の如き勢いで弾け飛び、何体もの亡者の腐りかけた身体を熟した果実のように抉っていった。

だが、バケットローダーはブロックを粉碎しても止まらず、そのままその向こうに雲霞の如く屯する亡者の群れを轢き潰していた。続いて運転席に伝わってきたのは、何十という人体を踏み潰す不気味な振動と、骨を砕く生木のような音だ。

金属を引き裂く不協和音が耳朶を打つ。加速を乗せすぎた車体は、更に何台かの乗用車をひっくり返したり、ボンネットをぐちゃぐ

ちやに踏み潰してようやく停車した。冴子が恐る恐る目を開けると、ホイールローダーは放棄された警察車両のボンネットに乗り上げており、少し傾きながら停車していた。

傍らの清田を伺う。やはり彼は全く動じている様子がなく、ギアをバックに入れると車体を後退させた。大口径ホイールが遺棄されたパトカーを更に痛めつけ、完全に廃車にする。

どすん、と音を立ててホイールローダーが道路に降りる。周辺はこの上ないほどの惨状であり、滅茶苦茶に引き裂かれた車の部品や、腐臭を漂わす人体のパーツ、瓦礫が散乱しており、まるで爆撃後のようだ。

清田はやけに慣れた手つきで車体を操り続ける。左手でハンドルを握り、右手は油圧レバーを巧みに操作していた。バケット部も含めれば全長9メートル近くにもなる車体が、滑らかに従う。

「……一体どこで運転を習ったんですか？」

落ち着いた声音で、冴子は尋ねた。

「実家が雪国でね。自家用の小型ホイールローダーがあるんだ。親父の手伝いで中学の頃から無理やり乗せられたのさ」

成程、だから彼の腕前は熟練者のそれだったのか——冴子の疑問の氷解を余所に、清田は周囲を見回して次の作業工程をぎっと考えた。

群れる感染者たちの数は十や二十どころの数ではない。何百体も亡者が、エンジン音を轟かせ続けるホイールローダーを目指して群がってくる。

このまま対岸で待機している高機動車組を呼び寄せても、すぐに包囲されて身動きが取れなくなるのが目に見えている。そうならないように障害は排除しなければならない。

「久し振りに乗ったと思ったら、雪じゃなくてゾンビの除雪とは……たまには実家に帰りたかね」

清田は小声でうんざりそうに呟くと、ギアを入れ替え、正面を見据えた。ぞろぞろと押し寄せる腐肉の群れは、とてもではないが雪の深く積もった郷里の景色とは懸け離れ過ぎている。

「さて、いつちよやりますか」

ハンドル、アクセル、油圧を同時に操り、清田はゾンビの蠢く山の片づけに取り掛かった。

†††

対岸からホイールローダーの活躍を見守っていた京子らは、瞬く間に鋼鉄の牛馬が犇めく亡者を蹂躪し、攪拌し、理路整然と土手に向かって排除されていく様子を眺めていた。

亡者が百単位の集団で押し寄せようとも高馬力の重機の前には全くの無力であり、見る見るうちにその数を減らしていき、遂には道路上にこれといった障害となるほどでもなくなった。

やがてホイールローダーが動きを止めると、程なくしてトランシーバーから清田の声が聞こえてきた。

「林先生、障害はあらかじめ排除しました。そのままこちらへ来てください」

先程まで暴風のように暴れまわっていた人物とは思えないほど、彼の声は落ち着いており、それが逆に不安を煽る。

「わかりました。今、こちらへ向かいます」

いや、今、彼の精神状態について邪推するのはやめよう——京子はキーを捻り、エンジンを始動させると、高機動車を移動させた。

路面に転がる人体のパーツをなるべく踏まないように橋路上を進ませ、粉碎されたバリケードの間から対岸へと渡り切る。

周囲の路面は、耐え難い腐臭を放つ血肉と骨片によりどす黒く光り、陽光を浴びて脂のギトギトとした光沢を放っていた。窓を閉め切っただけでも凄まじい臭気であり、思わず眉を顰め、口元を抑えた。

散々、凄惨な場面は見てきたが、まるで歴史に記されている虐殺現場の後を目の当たりにしているかのようだ。当然のように原形を留めぬほど踏み拉かれた人体部品が転がり、上半身だけとなって呻き続けている亡者の姿は悪夢としか言いようがない。

今もはや死してなお徘徊するゾンビでしかないが、それでも何百人もの人間だったものが巨大な重機によって機械的に播り潰されて排除されたという現場はこうまで震撼とするのだろう——土手の下方に目を転じれば、堆く積みあがった死体の山が蠢いている。完全

に破壊されたものよりも、半身を乱暴に分断されて捕食能力を失った状態のものが大半であり、腐敗するがままに放置されている。

一体、何トンの人肉が、ああして完全に朽ち果てるまで呻き、芋虫のように這い回るのだろうか——これ以上、それらについて考えるのはよそう。朝食が食道を逆流しそうだ。

京子は堤防上の道路に停車しているホイールローダーの後ろに高機動車をつけた。それと同時に清田と冴子が降り、こちらへやってきた。

高機動車の後部扉が開かれ、冴子が乗り込んできた。彼女の衣服はボロボロであり、所々が血に塗れて手酷く負傷している様子だ。

「毒島さん、大丈夫？」

すぐに静香が救急品が詰まったバッグを手に、乗り込んできた彼女の傷の様子を診察する。

「傷はそれほど酷くはありません。多分……」

静香は、冴子の左袖をそつと捲り、手榴弾の破片が幾らか食い込んでいる彼女の腕の具合を診る。白磁の肌に食い込んだ刺々しい破片が見るからに痛々しかった。

「今は破片を抜く訳にもいかないから、消毒と包帯しか巻けなくてごめんなさいね」

ざつと診た様子では破片による負傷はそれほどでもなさそうだ。重要な血管や神経を傷つけるほど深く食い込んでいる訳ではなく、表皮に刺さっている程度だ。

手早く消毒液を振り掛け、清潔な包帯を巻いて創傷の保護をするのが現在では可能な処置だ。消毒液を掛けられても特に痛がる素振りを冴子は見せないが、恐らくアドレナリンがまだ作用しているのだろう。

しかし、医療の心得のある静香としては、早く安全な場所で彼女により的確な処置を施してやりたかった。食い込んだ破片をそのままにしておけば敗血症などの重篤な症状へ発展しかねない。医療機関が軒並み機能停止しているであろう現状では、たとえ現代日本であれば十分に救命可能な感染症ですら命取りになりかねない。

「……よく、無事だったわね。流石平成の巴御前ね」

沙耶は、持っていたハンカチで冴子の顔を労わるように優しく拭ってやった。学園で一二を争う美貌が、血脂や膿で酷く汚れており、安っぽいホラー映画の女幽霊のような有様だったのが同年代の少女としては可哀想でならなかった。

「巴御前はよしてくれ。私は怪力無双のメスゴリラではないよ」

沙耶に顔を拭われる冴子は、漸く安堵の表情を幾らか浮かべていた。

「取り込み中のところ申し訳ないけど…」

高機動車の後部に立つ清田が、遣り取りを続ける沙耶に声を掛け、彼女は彼を振り返った。

そして思わずぎよつとした。いや、彼の姿を見て肝を潰したのは沙耶だけではなく、冴子を除いた生存者一同も同様だ。

頭から腐臭を漂わす血肉を浴びているその姿は、地獄の血の池から上がったばかりのようであり、凄まじい臭気を放っている。ゴグルは血脂によってその機能を阻害され、衣服や装備ばかりではなく、小銃の銃床にも肉片がこびりつき、今は既に乾いていた。

彼と今まで行動を共にしてきたメンバーは兎も角、まだ出会って間も無い希里母子は、ジェイソンやフレディですら裸足で逃げ出しかねないスプラッターなその出で立ちに怯えきっていた。ありすに至っては母の胸に顔を埋めて彼の姿を視界に納めないようにしている。

「高城さん。俺と一緒にホイールローダーに乗ってくれるかい？ 君の実家まで案内してほしい」

この辺りの地理に疎い清田の頼みは至極当然のものだが、強烈な腐臭を放つ彼と狭い密室で一緒になるのは正直躊躇われた。が、そんな事を言っている場合ではないのも承知している。

「も、勿論よ」

沙耶はなるべく嫌悪の感情を表に出さないように答えた。自分の為の為に戦ってくれている彼の心を徒らに傷つけてしまったのは、流石に申し訳が立たない。

「それじゃあ、俺は先に乗ってるから」

沙耶は、高機動車を降り、清田の後に続いてホイールローダーに乗り込んだ。

目指すは、父母やその他大勢の構成員の待つ我が家だ。

†††

端的に言ってもはや障害は無かった。

どの家も大きく、広い庭や何台も駐車できそうなガレージを備えているような高級住宅街の道路を、地響きを立てて進むホイールローダーは亡者たちを引き寄せたが、たとえ立ち塞がっても呆気なく轢き潰されるだけである。

バケットが薙ぎ倒し、タイヤが踏み砕く単調な処理作業と化したそれは、人間だったものを挽肉にしている。間違いなく平時であれば気が狂いそうな所業だろう。

いや、もう既に気が狂っているのかもしれない。でなければ突然取り乱し、リミッターの外れた歩く死体を相手に白兵戦を仕掛けるという愚行を犯す事などしない筈だ。

己の変化に否応なくウンザリさせられる。一体、俺はどうすればいい——清田は悶々としながら沙耶の指示に従って運転を続けた。

「ちよつと停まって」

突然の停止命令だが、従う他ない。ホイールローダーを停車させ、訝しげに前方に目を凝らす。

よく見ると、道路を封鎖するようにワイヤーが張り巡らされていた。明らかに亡者の侵入を防ぐ為だろう。ワイヤーは建設用の太く頑丈そうな代物で、正常な知性を喪失していない人間ならば潜り抜けられるように工夫して張られている。

障害は敵の侵入を防いだり、遅滞させるのを目的として設置される。

恐らく、ワイヤーはここ以外にもあるのだろう。でなければ障害としての効果は薄まる。それがどの程度の範囲に設置されているかは不明だが、流石に単独でこれだけの障害を、しかも短期間で作り



上げるのは不可能だ。この非常事態が発生してから、血肉を食らう死体で溢れる危険な市街地から資材を調達し、誰の援護もなしに作れるはずが無い。

それなりの規模の集団と思われるが、なんとか着の身着のまま生き残った烏合の集団の仕業とも考えられない。普通のサラリーマンによつて構成された営利を旨とする会社集団ではなく、普段から厳格な規律によつて行動する組織によるものと見做すべきだ。

行政機能の麻痺した、ほぼ戦時下のような状況下でも規律と統制を失わない組織は、警察、消防、海上保安庁長、そして自衛隊ぐらいいしか考えられない。もしくは、暴力団やそれに近い性質の集団だろうか。

ふと、清田は傍らに座る沙耶を見た。聡明な彼女も同様の事を考えているのだろう。

「多分、同じ事を考えているのかもしれないけど」

沙耶は、やおらそう切り出し、清田の目を見た。

「まだそうと決まったわけじゃ無いんだから、安心するのは早いわ」

しかし、その瞳には希望を見出した光が宿っていた。

「取り敢えず、此処で降りるしかないだろう」

彼女の言葉は尤もだ。安心するのは早い。清田は鉄帽の顎紐を締め直し、銃器類に新たな弾薬を装填した。

「引き続き道案内を頼むよ」

清田の言葉に頷いた沙耶は、ホイールローダーを降り、ワイヤーを潜り抜けていった。

ホイールローダーのエンジンを切ると、清田も後に続いて降り、待機する高機動車組に事情を説明した。

ワイヤーにより亡者の侵入はある程度は防いでいるかもしれないが、何があるか分からない。

清田を先頭に、一行は再び歩き始めた。

＋＋＋

住宅街は静まり返っていた。いや、不自然な程の静けさといつても過言ではない。

道中の其処彼処に血溜まりや争いの形跡は見られたが、歩く死体どころか歩かない死体すら無かった。明らかに誰かが無力化し、丁寧に片付けられている。

統率の取れた行動と共に、死者の弔い、或いは疫病予防も忘れないとは恐れ入る。予想以上にこの周辺は安全化されているのだろう。

ふと、何かの香りが鼻腔を擦った。フェイスマスクを口元まで下ろし、鼻で深呼吸をしてよく確かめると、それは昨夜の深夜に嗅いだばかりのものだった。

そして忌まわしい記憶がフラッシュバックしそうになり、冷や汗が背中を伝い落ちる。清田は自身の動揺を他の生存者達に悟られぬよう、平静に努めた。

それは線香の香りだった——勝手に蘇りそうになる記憶を振じ伏せようとするが、乾いた口中で舌が張り付く。足元が危うい。手が使い慣れた武器の重みに負けそうだ。

急激に体調が悪化してきた。清田は、今にも息が詰まりそうで、座り込みたい衝動に駆られたが、何とか生来の忍耐力を持って我慢した。

幾つ目かの角を曲がると、今まで見た中でも最大級の豪邸が現れた。敷地面積はそこらのセレブどころの話ではない。周囲の建屋が藁の家の群れだとすれば、あの邸宅は城塞といった所か。

事実、高い塀と深い堀に囲まれている造りは外敵への対策とか思えない。高台に造られた要塞のような豪邸は、この高級住宅街では明らかに浮いていた。あのような造りは、外部の敵によって常に脅かされている為だろう。対立する組織が過激だからこそその備えなのだ。

清田は曲がり角で停止し、低い姿勢を取ると、バットパックから双眼鏡を取り出し、具に観察した。

豪邸の巨大な正門前には警備らしき人間が立っている。黒い特攻服に身を包んだ厳つい雰囲気のある二人組の男だ。どちらも猟銃や日本刀で武装し、丸刈りやオールバックに青々とした剃り込みの、や

けに気合いの入った髪型をしている。

着ている特攻服の胸や背中には、憂国一心会と金糸で刺繍されている——何処に出しても恥ずかしくないぐらい、コテコテの右翼団体構成員だった。

彼らの主義主張や政治信条は兎も角として、明白に感染者ではないと分かる。久し振りに別のまともな人間に遭遇した気分だが、よりによって右翼とは何という皮肉だろうか。

体調不良に加え、更にこれから右翼の親玉と話をしなければならぬという事実には頭が痛くなる。現役特殊部隊員と国粋右翼首魁の組み合わせは想像するだけでも悪い冗談としか思えない。

「高城さん、どうやら君の実家は無事のようにだ。正門前に警備が立っている」

沙耶を手招きし、双眼鏡を渡してやる。レンズを覗き込んだ沙耶は、あつ、と小さく声を漏らした。

「安岡さんと田辺さんだわ！ 無事だったんだ！」

父親の、見知った部下なのだろう。双眼鏡を降ろしたその顔には自然と安堵の笑顔が浮かんでいた。

「ここからは君が頼りだ。俺は現役の自衛官。君の実家は、まあ、アレな団体だから……そういう訳だ」

「任せて！ あんたやみんなの身柄の安全は私が保証する！」

沙耶は、傲然と胸を反らして自信満々そうに言った。

生存者達は安全な拠点を目前にしてか、ほっと胸を撫で下ろしていた。唯一緊張が張りつめたままなのは清田ぐらいだろう。

沙耶を先頭に、一行は高城邸正門へ向かう。警備の二人組は道路の角から現れた一行の存在にすぐ気が付き、武器を構えようとしたが、沙耶の姿を認めるなり慌てて居住まいを正した。

「お嬢様！ よくぞご無事で！」

オールバックの男が、沙耶にそう声を掛ける。が、背後に控える清田を視界に納めた瞬間、後退りしていた。

自分より二回り以上の体格に重装備を纏い、全身から腐臭を漂わすぞす黒い兵士に対する反応としては、正常な範疇だろう。

「この人や、みんなが助けてくれたの」

男は、清田の頭から爪先まで観察すると、沙耶に向き直った。

「もしかして米軍ですか？」

「違うわよ、田辺さん。日本国民の味方、自衛隊に決まってるじゃない」

沙耶の言葉に再び驚いた様子の田辺は、改めて清田をジロジロと観察した。

「それにしても装備がゴツくないですか？ 自衛隊はもつとこう、垢抜けない感じのような…」

「取り敢えず、米軍だろうが自衛隊だろうが、助けてくれたのは事実なの！……で、パパとママは無事？」

少し不安そうに声のトーンが落ちた沙耶に対し、田辺は安心させるように言った。

「会長や奥様はご無事です。会長は何人が引き連れて外に出ています。が、奥様はお屋敷におります」

田辺の言葉に、沙耶は一先ず安心した様子だ。

「そう。良かった…貴方達も無事で本当に良かった」

思わず安堵からか、目尻に浮かんだ涙を拭い、沙耶は二人を労った。

「いえ、これも全て会長が持つ人望が為せる業です。会長がいたからこそ、大勢救われました」

途中のバリケードを見れば、沙耶の父親の能力に疑いはない。訓練された自衛官なら兎も角、素人を率いてあれだけの事をやってのけたのだ。

しかし、清田はそれよりも気になる事があった。

「…あれは？」

今まで彫像のように沙耶の背後に控えていた清田は、高城邸の正面を顎でしゃくった。

「ああ、あれは犠牲者の墓だよ。可能な限り、動かなくなった死者は弔うように…とね」

高城邸の正面に建つ、別の邸宅の庭には幾つもの土盛りや、供え

ている花や線香が見えた。

あとで手を合わせに行こう——清田はそう心に決め、沙耶に続いて邸宅内に足を踏み入れた。

＋＋＋

高城邸の広大な敷地には、災害用で使われるようなテントが幾つも建てられていた。

規模からして、百人程度ならば問題なく収容できそうだ。衛生環境を保つ為の仮説トイレや、炊き出しの設備も見られる。避難所としては十分な備えはあるだろう。

何人かの避難者が清田らの存在に気が付いていたが、余り他の人間と接触したくはない。

程なくして、幹線道路ほどの幅広のアプローチの向こうから、一人の女性が此方に近づいてきた。門番の二人から連絡を受けたのだろう。

シンプルなデザインの、紫紺のイブニングドレスが場違いに思えたが、華やかながら落ち着いた色香を漂わす妙齡の美女にはよく似合っていた。肩から掛けた透ける程に薄いシヨールや、身に付けた装飾品の価値はよく分からないが、恐らく、清田の戦闘装備一式より高価だろう。

「ママー」

女性の姿を認めるなり、沙耶は駆け出すと、その豊満な胸に飛び込んだ。

彼女が沙耶の母親、高城百合子なのだろう——周囲の目があるのに母親の胸に顔を埋めて甘える沙耶は、たとえ才女とはいえ年頃の少女だ。無事に母親に再会できた喜びを我慢できるほど大人でもないし、冷めてもいない。

「無事で良かったわ…御免なさい、助けに行けなくて」

娘の頭を撫でながら、百合子は謝罪の言葉を口にする。今、この場で誰も彼女を責める事など出来はしない。このような状況下と、組織を纏める夫の妻という立場から私情を挟む余地はないだろう。でなければ部下に示しはつかない。

「貴方が娘を助けてくださったの？」

清田に向き直った百合子は、彼の姿を見ても怯んだ様子はない。可憐な容姿からは懸け離れた胆力の持ち主らしい。

「ご想像にお任せします」

清田の口からはそうとしか言いようがない。あくまで忠実に職務を遂行しただけだ。清田にとってはそれ以上でもそれ以下でもない。

「ただ、自分一人の力ではありません。全員が協力したからこそ生き延びる事が出来ました。事実はそのだけです」

その言葉に偽りは無い。全員が生存の為に協力したからこそその結果だ。自分一人で彼らを助けてきたと嘯けるほど傲慢ではない。

「皆さん、娘を助けていただき、なんとお礼を申し上げれば……大したもてなしは出来ませんが、今日はゆつくりお休みになられて下さい」

そう言っただけ百合子はクタクタになった生存者達を屋敷まで案内する。しかし、彼女の申し出は嬉しいが、清田にはまだやる事があった。今すぐにも休養を取りたいが、目先の安らぎに眼を奪われるほど彼は軟弱ではなかった。

「耕太くん、頼みがある」

清田は、百合子に案内されて邸宅へ向かう生存者達の中から、耕太を呼び止め、傍まで来るよう手招きした。

「なんででしょうか？」

「俺は周辺の様子を探ってくる。君はこの屋敷をある程度調べておいてくれ」

「その必要はあるんでしょうか……此処はかなりしっかりしてると思いますが」

「……耕太くん。SASのモットーは知ってるかい」

「〃危険に敢然と挑む者が勝つ〃……ですか？」

「〃チェックとテスト、チェックとテスト〃だ。覚えておいて損はない。何事も絶対はないんだぜ」

それじゃ頼んだ、と清田は耕太の肩を叩き、踵を返して元来た道を歩き出した。

早朝から行動を開始してから数時間が経過していた。蓄積した疲労と相まって、耕太は疲れ果てていたが、彼とは対照的にそんなのは微塵も感じさせずに遠去かる清田の背中は、余りにも遠くに感じた。